

ROAD

Annual Report
2020



2021年3月 第9号

国立大学法人 愛知教育大学
国立大学法人 静岡大学

2020 年度報告書



2020 年度
合同ガイダンス

Annual Report 2020

2020 年 4 月 5 日 (日)
於：愛知教育大学 教育未来館
静岡大学 教育学部G棟 202



2020 年度
最終試験 (9 月修了生)

Annual Report 2020

2020 年 7 月 19 日 (日)
於：愛知教育大学 教育未来館
静岡大学 教育学部G棟 202

百瀬 容美子



森 慶恵



田村 知子



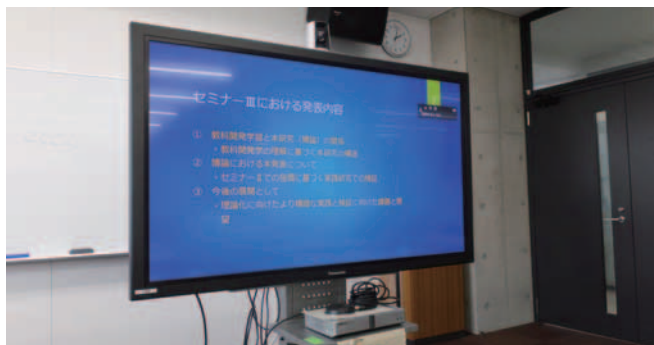
名倉 一美



2020 年度
教科開発学セミナーⅢ

Annual Report 2020

2020 年 8 月 23 日 (日)
Zoom を用いて開催



2020 年度
最終試験 (3 月修了生)

Annual Report 2020

2021 年 1 月 24 日 (日)
於：愛知教育大学 教育未来館
静岡大学 教育学部G棟 202

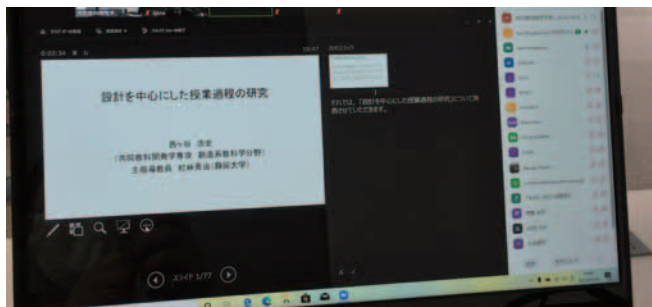
ママチャンセン



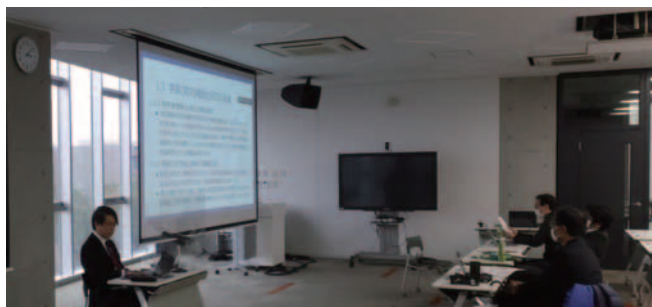
荒谷 航平



西ヶ谷 浩史



小池 嘉志



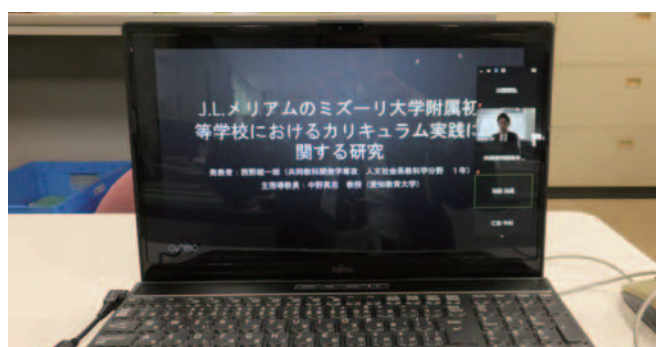
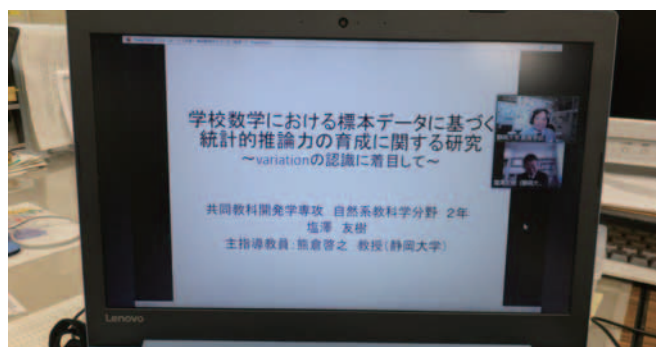
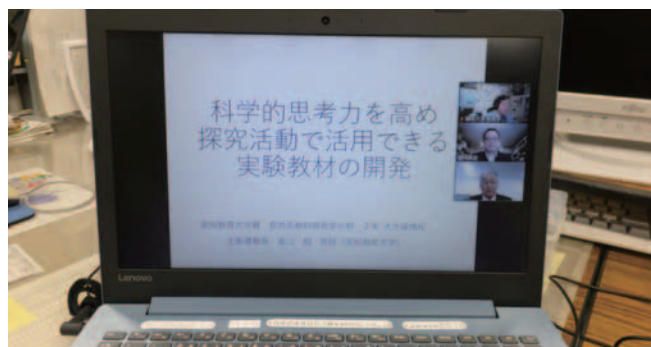
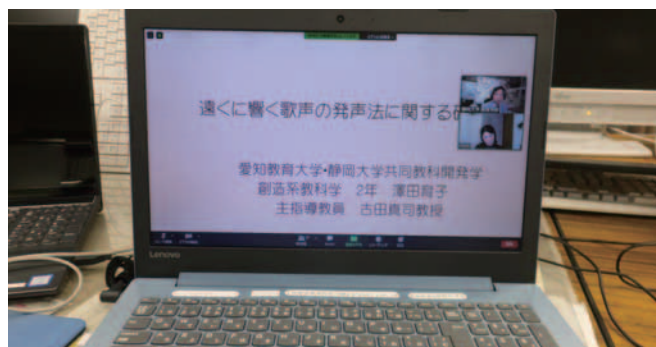
2020 年度

教科開発学セミナー I・II

Annual Report 2020

2021 年 2 月 13 日 (土)・14 日 (日)

Zoom を用いて開催



2020 年度

修了式

Annual Report 2020

2021 年 3 月 23 日 (火)



CONTENTS

目 次



巻頭言

I. 共同教科開発学専攻の概要	1
II. 共同教科開発学専攻連絡協議会議長年次報告	23
III. 学生の研究題目と指導体制	35
IV. 学生の研究計画と研究活動	43
V. 修了生一覧と論文要旨	83
VI. 教科開発学研究会	109
VII. 教員の教育・研究活動	113
VIII. 諸資料	151

巻 頭 言



2020 年度、コロナ禍の中での共同教科開発学専攻

共同教科開発学専攻

副議長 白畑知彦

まず、世界中の大惨事となった新型コロナウイルス（COVID-19）禍について書き記しておきたい。2019（令和元）年 11 月に、中国河北省で発生した新型コロナウイルスによる新型肺炎は、2020 年に入ると、収束するどころか、拡大の一途をたどり、世界各地に広がった。2020 年 1 月 16 日には、日本国内で感染者が初めて確認された。中国・武漢から帰国した男性であった。そして、2 月 5 日、大型クルーズ船ダイヤモンド・プリンセス号の乗客乗員のうち 10 人が新型コロナウイルスに感染したことが確認された。

2020 年 1 月後半になると、これまでには一度としてありえないことであったが、店頭にはマスクがなくなってしまったのである。ほかにも除菌スプレーや除菌シートなどの衛生用品にも影響が出た。インターネット上では高額転売とみられるマスクの出品が目立ち、政府は 3 月にマスクの転売を禁じることを閣議決定したほどである。3 月 24 日、安倍晋三首相と国際オリンピック委員会（IOC）のバッハ会長が電話で協議し、2020 年 7 月からの東京オリンピック・パラリンピックを 1 年程度延期することで合意した。

4 月 7 日、安倍首相は東京、神奈川、埼玉、千葉、大阪、兵庫、福岡の 7 都府県を対象に、特別措置法に基づく緊急事態宣言を発出した。さらに、16 日には対象区域を全国に拡大した。新型コロナウイルスの感染拡大で、週末の外出自粛要請がされたデパートや飲食店では臨時休業が目立ち、買い物に訪れる客もまばらになった。スーパーやコンビニのレジでは一定間隔を空け、密閉空間を避ける工夫を施した（3 密の回避）。我々は、マスクの着用、手洗い、うがい、そしてテレワークなど、新しい生活様式をせざるを得ない状況になり、学校（特に大学）もその対処に苦慮し、2020 年度は全国でほとんどの講義がオンラインとなってしまう。

このような状況のもと、2020 年度、新型コロナウイルスの影響を本共同大学院ももろに受けた。まずは、4 月 5 日（日）の合同ガイダンス。本来ならば愛知教育大学にて院生、教職員が一堂に会し、顔を合わせ自己紹介し、授業内容を紹介し、夕べには親交を深める会が設けられる予定であったが、取りやめとなった（ただし、1 年生には無理を言って各大学に集合していただいた）。

その後も、コロナ禍は続き、通常の授業はもちろんのこと、7 月 19 日（日）の博士最終口述試験（前期用）、8 月 22 日（土）の教科開発学会（2021 年 3 月 7 日にリモート開催として変更）、23 日のセミナー III、翌年 1 月 24 日（日）の博士最終口述試験（後期用）なども

相次いでオンラインで実施することになった。唯一、10月31日（土）の大学院入学試験は対面でおこなうことができた。これは我々にとって初めての経験であり、運営として大変であったが、関係者全員の協力のお陰で、難局を乗り切ることができた。

一方で、探せばプラス面もあったと言えよう。本共同大学院は元々「遠隔教育」的な色彩の強い大学院である。今回の新型コロナウイルス禍によって、この遠隔教育を Zoom 等の方法を使って、進めていけることがかなり明確になったのである。これまでの遠隔教育システムよりも容易な方法である。この収穫は不幸中の幸いである。新しいリモートでの利便性は今後の授業方法、行事の運営に活かしていくべきだ。ただし、私などは対面の良さも改めて感じた次第である。Zoom でも相手の顔は見られるが、顔と顔を突き合わせて話をする、討論することの大切さもしみじみと感じている。

この原稿を書いている現在も相変わらずコロナ禍は続いているし、コロナが収束しても、おそらく、今後はコロナ以前の世の中の状態には 100% 戻らないだろう。とは言え、政府の繰り返し唱える「安全・安心」な世の中になり、教育・研究が何の心配もなくできるよう切に願う。

コロナ禍が続いているとは言え、早いもので、本共同大学院も 2021 年度には開設 10 年目を迎える。10 年を節目にここらあたりで、これまでの運営方針を見直し、改善点の修正することで次の 10 年につなげるよう、お互い建設的な意見を忌憚なく出し合っていく時だと感じる。

I．共同教科開発学専攻の概要

1. 専攻の趣旨・目的

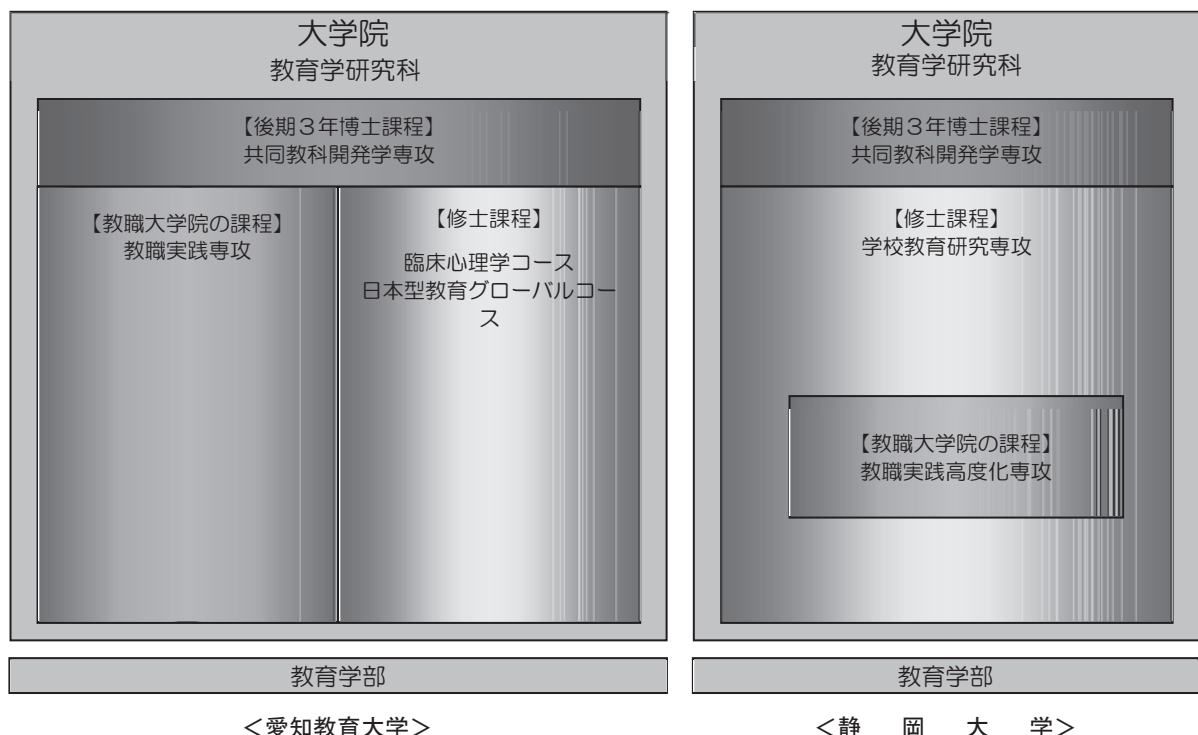
共同教科開発学専攻（以下「本共同専攻」という。）は、共同教育課程制度を活用し、愛知教育大学と静岡大学の教育学研究科に設置された、後期3年のみの博士課程です。

本共同専攻の設置は、教育を取り巻く社会状況や学校教育が抱える課題が複雑化し、学校教育現場の教員に高い資質能力が求められていく一方で、教員養成カリキュラムの目的性や科目の体系性の欠如等の課題が浮き彫りになってきていること、それに加え、中央教育審議会においても、教員の資質能力の向上のための教員養成システムにおける修士レベル化が検討されることとなり、これらに対応するための体系的な教員養成カリキュラムの編成及び専門科目の体系化、また、それを可能とする大学教員の養成が喫緊の課題となっていること、などが背景となっています。これらの課題に応えるため、愛知教育大学及び静岡大学教育学部は、国立の教員養成系大学学部としてこれまで取り組んできた実績を活かし、大学教員養成のための博士課程を設置しました。

専攻名称ともなっている「教科開発学」は、教科専門・教科教育・教職専門の枠を越えて、子どもたちを取り巻く環境を視野に入れ、教科との関わりの中で学校教育が抱える複雑・多様化した諸課題に対応した研究を遂行していくため、教科専門と教科教育を融合・発展させた「教科学」と、教職専門を発展させた「教育環境学」とをあわせて体系化することを目指す新たな学問領域です。

本共同専攻は、「教科開発学」の究明を通じて、教科内容の構成原理等を明らかにしながら「教科学」と「教育環境学」の融合・体系化に熱意を持って取り組む大学教員を養成していくこと、また、「教科開発学」を専門とする大学教員を養成し、その教員が「教科開発学」に関する教育研究に基づいた教員養成カリキュラムを編成して学部、あるいは修士課程等で指導を行うことによって、優れた学校教育現場の教員を輩出するという教員養成系大学・学部ならではのサイクルを確立することを目指しています。

共同教科開発学専攻が置かれる環境



2. 専攻の内容・特色

「教科開発学」は、教科専門・教科教育・教職専門の専門性の枠を越えて、子どもたちを取り巻く環境を視野に入れ、教科との関わりの中で学校教育が抱える複雑・多様化した諸課題に対応した研究を遂行していくものです。「教科開発学」は、主に、教育環境に適した教育内容構成の研究（教科学）、教科内容として構成されたものを実践するための教育環境の研究（教育環境学）から構成されます。教科専門と教科教育を融合・発展させた「教科学」と、教職専門を発展させた「教育環境学」が「教科開発学」を構成します。そして、本共同専攻は、「教科学」あるいは「教育環境学」のいずれかを基軸としつつ、もう一方の学問分野の研究を進めていくというところに特色があります。

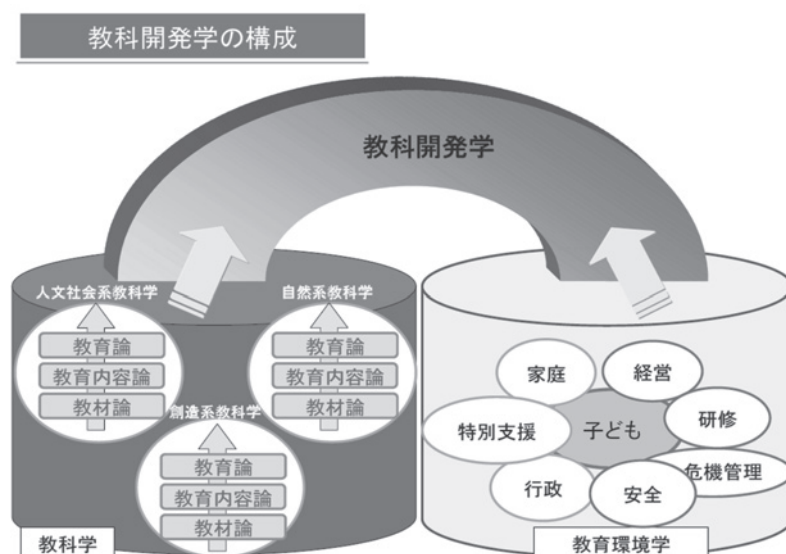
専攻の分野として「教育環境学」、「教科学」（人文社会系教科学、自然系教科学、創造系教科学）という4つの分野を設置しています。

教科学研究のアプローチとして、教育論・教育内容論・教材論という3つの基本軸からのアプローチを行うことも本共同専攻のもう一つの特徴です。「教育論」は、児童生徒の発達のために、どのような教育目標のもとに、どのような内容をどのように教え（教師）・どのように学ぶか（学習者）を論じるもので、従来の「教科教育科目」で検討してきた目標論、指導論、学習過程論をも含みます。

「教育内容論」は、それぞれの学術（学問・芸術）分野を基盤として持ちながら、その全体像から個々の学問分野の必須部分を抽出し、個々の専門分野がどのように関連しながら「教科」の内容がいかなるものから構成されているかを追究するものです。「教材論」は、教科が、それぞれの学術（学問・芸術）分野を基盤としながら構成されている教材の在り方を論究し、教材の開発をすることにより教科内容の構成あるいは教材配列等を実践的に考察・検証するものです。これらの3つのアプローチにより、3つの系を超えて教育論・教育内容論・教材論を集約し、教科内容構成を追究していきます。

教育関係等の仕事に従事しながら、入学して修学することができるよう、講義は、原則的に土曜日、日曜日に実施し、夏期や冬期における集中講義も導入するなど、時間割や学修プログラムを作成している点も本共同専攻の特色です。

（専攻名）	（分野）
共同教科開発学専攻	教育環境学 人文社会系教科学 自然系教科学 創造系教科学



教育環境学分野

子どもたちが主体的に働きかけ、働きかけられる自然・社会・文化・日常生活等のあらゆる過程を子どもの発達の視座から教育環境を捉える学問。確かな学力・豊かな心・健やかな体の調和を重視して「生きる力」を育む場合、家庭、学校、地域、社会といった学校を取り巻く環境との関連を常に視野に入れておくことが重要です。「教育環境学」においては、従来の教職専門領域で扱ってきた内容を発展させ、子ども、学校、地域、社会を含めた幅広い学校教育を取り巻く多様な環境領域を体系的に研究し、教科の土台や基盤を追究します。

教科学分野

従来の教員養成カリキュラムでは、「教科」の学問的内容を「教科専門」、「教科」の指導法を「教科教育」として編成されていますが、両者の体系化はまだ進んでいません。そのため、教員養成における「教科」の研究を本格的に確立するために「教科学」を創設します。「教科学」は、従来の教科専門と教科教育を融合し、教科がどのような構成原理で成り立っているのか等を中心に教科内容の構成原理を探究するものです。教科を「人文社会系」、「自然系」、「創造系」という3つの分野に分類し、教科における学習内容の構成がいかなる原理からなっているか、その編成の仕方はどうあるべきか等を探究します。以下、3つの分野について紹介します。

① 人文社会系教科学分野

地域社会における言語、文学、歴史、文化、自然にかかわる人文社会的な課題に対して、自らが実際にかかわることにより主体的に考察を進め、地域に密着した教育方法や教材を作り上げていく必要があります。この分野では、誰かが集めた史資料（二次史資料）や既存の結論で考察を進めるのではなく、史資料読解やフィールドワーク（参加、体験、観察、インタビュー、収集など）により自らが積極的に対象にかかわることで得られた一次史資料や知見によって地域研究を進め、その研究成果をもとにした教科開発をめざします。具体的には、言語学、歴史学、地理学、民俗学の立場からアプローチして、それらの研究領域から得られた高度な地域研究の成果をふまえた教育論、教育内容の構成原理や教育方法、教材を開発します。

② 自然系教科学分野

社会が複雑化し、自然環境が変化し、従来の価値観が変わる中で、科学的リテラシー、数学的リテラシー（科学的、数学的に思考するための基本となる能力）の育成が求められています。観察、仮説の立案（モデルの構築）、検証（論理的説明、実証）などの活動を通して自然系教科における教育論、教科内容の構成原理や教育方法、教材を開発します。具体的には、（ア）地球環境という視点からみた新たな理数教育カリキュラムや日常生活及び先端科学技術とリンクした理数教育カリキュラムの構築、（イ）最先端の研究成果から様々なトピックの提案を「教科学」の立場から行い、情報教育・情報科学の知識を活用して、教材化及び必要なデジタルコンテンツ化を図る、（ウ）電子黒板やPDA端末などのICT環境が整備された教室における教育内容・教育方法のあり方、あるいは学習集団の特性・行動パターンを反映しうる動的な教材を開発します。

③ 創造系教科学分野

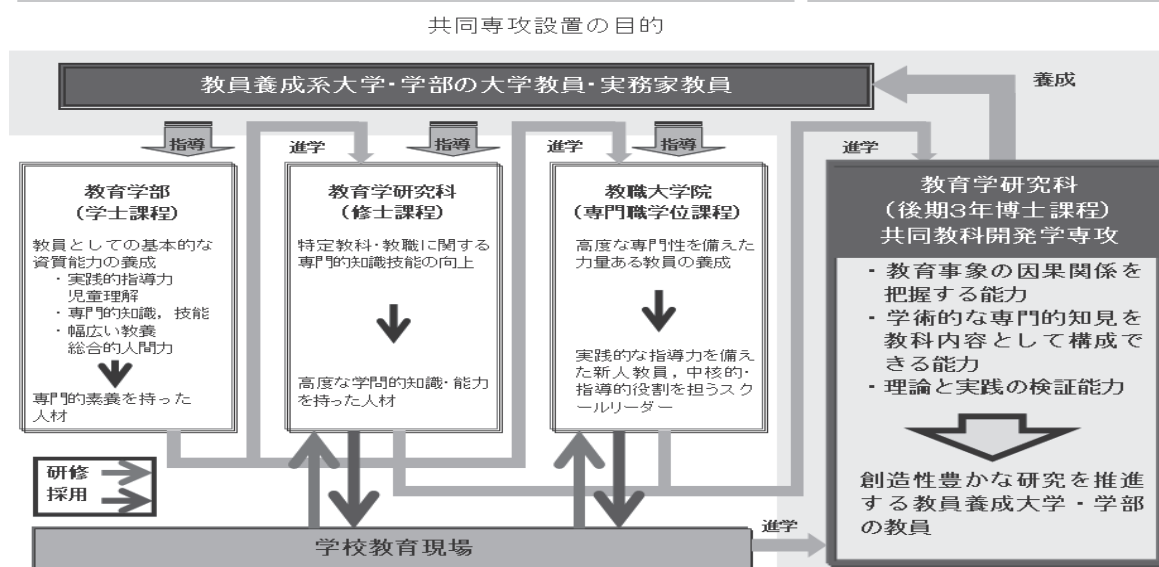
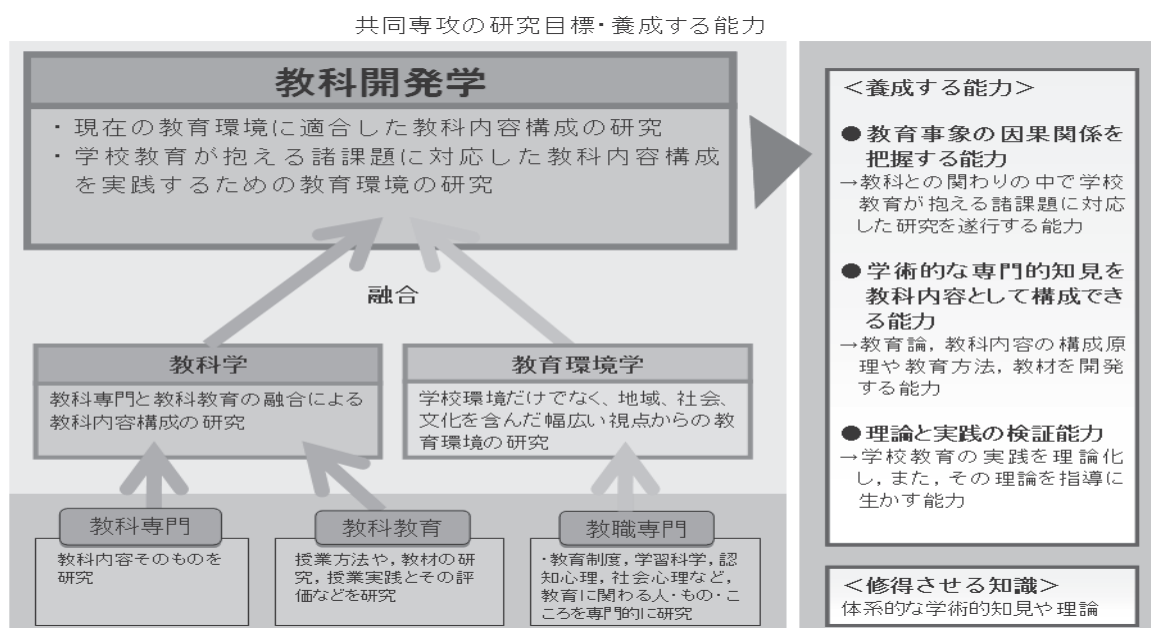
音楽科・美術科・体育科・家庭科・技術科等では、子どもたちの潜在的能力や感性を引き出し、これらを育てる活動を支援する方法を組織的・系統的に開発していく必要があります。この分野において「生きていく上で基礎となる幅広い生活力や、健康あるいは体力を備え、豊かな表現力を発揮できる人間の育成」を目指し、「生活力」、「身体力」、「表現力」を中心とした教育論、教科内容の構成原理や教育方法、教材を開発します。具体的には「生活力」の周辺領域として、異世代との共感力、自らの生活課題の発見、生活課題を解決する知識・技術、ものづくり教材開発、ものづくり教材の授業実践等があります。「身体力」の周辺領域として、保健情報の収集と分析、体育教師教育論、運動学習、運動に対する動機づけ等があります。「表現力」の周辺領域として、観賞とリテラシー、思考プロセスと表現技法、音楽と身体の動き、発想支援等があります。

3. 養成する人材像

本共同専攻は、「教科開発学」による教育研究を通して、子どもたちを取り巻く環境を視野に入れ、教科との関わりの中で学校教育が抱える複雑・多様化した諸課題に対応した研究を遂行する能力（「教育事象の因果関係を把握する能力」）や、教育論、教科内容の構成原理や教育方法の研究、教材を開発する能力（「学術的な専門的知見を教科内容として構成できる能力」）といった学術的な専門的知見を教科内容として構成できる力を養成します。

本共同専攻の入学者は、修士課程修了者、教職大学院修了者、教育現場を熟知した現職教員などを想定していますが、これらの多様な経験を持つ学生が交流することにより、学校教育の実践を理論化し、また、その理論を指導に生かす能力（「理論と実践の検証能力」）を身につけることもねらいとしています。

このような能力を身につけることによって、今日の学校教育が抱える諸課題に対応可能な現場教員を育てる教員養成系大学・学部、教員として、広く教育界に貢献する大学教員を養成します。



4. 修了要件・学位

<修了の要件>

標準修業年限は3年ですが、特に優れた研究業績をあげた者にあつては修了年限の短縮も可能です。修了に必要な取得単位数は20単位以上とし、基礎科目は6単位以上、分野科目は10単位以上、応用科目は4単位以上です。なお、分野科目は選択科目から10単位以上を取得する必要がありますが、「教育環境学」の分野科目のうちから2単位及び教育環境学分野以外の3分野の選択科目のうちから2単位の計4単位は必ず履修します。

本共同専攻は、必要な研究指導を受けた上に、学位論文の審査及び論文の内容や専門分野に関する口述ないし筆記試験等に合格することを修了要件として課します。なお、学位論文の提出要件は、本共同専攻内の申し合わせに基づくものとします。

単位履修表

専攻 科目	基礎科目		分野科目				応用 科目	合計
			教育環境学 分 野	人文社会系 教科学分野	自 然 系 教科学分野	創 造 系 教科学分野		
	必修	選択	選択	選択	選択	選択	必修	
共同教科 開発学専攻	3	3	10				4	20
合計	6		10				4	20

<学位論文と学位の授与>

学位論文は、本共同専攻の目標とするところに従い、「教科開発学」を主領域として「教育環境学」及び「教科学」にかかわる実証的な内容とするものとなります。

本共同専攻の課程を修了した者に対しては、愛知教育大学及び静岡大学から博士の学位を授与します。学位記には愛知教育大学及び静岡大学の大学名が記載されます。

博士の学位を授与するにあたって付記する専攻分野の名称は、「博士（教育学）」とします。

なお、学位を授与された方が、学位の名称を用いるときは、両大学名を付記するものとします。

「博士（教育学、愛知教育大学及び静岡大学）」

5. 研究指導体制

本共同専攻における教育は、授業科目の履修と学位論文の作成に関する指導によって行います。学生の希望等を踏まえて決定した本籍を置く大学の研究指導教員を主指導教員とし、主指導教員は学位論文の指導のみならず、履修指導も行います。本共同専攻では、主指導教員の他に、両方の大学から少なくとも1名以上の副指導教員を配置し、3名以上の教員で指導します。このように共同大学院の特色を活かした指導体制を整え、様々な研究分野を包含する指導体制の充実を図ります。

本共同専攻の学生は、主指導教員の指導の下に科目の履修方針を決めます。講義は、履修登録に沿って履修します。入学時に合同オリエンテーション等を行い、主指導教員、副指導教員等と学生の信頼関係を作り、3年間共に学び、研究していく関係を構築するために両大学の教員と学生、あるいは学生同士が直接対面して密に交流する機会を設けます。

講義や研究指導に関して、遠隔教育システムを取り入れて、教員及び学生の大学間の移動に配慮しています。

セミナー方式で開催する演習等においては、両大学で毎年交互に行います。

6. カリキュラム

本共同専攻の教育課程は、博士後期課程が担う科目群として「教科開発学」に関する「基礎科目」、各分野の専門的な「分野科目」、各分野の総合的な「応用科目」の3つの科目で構成されています。

基礎科目の「教科開発学原論（2単位）」では、「教科開発学」の原理的諸課題や「教科開発学」の研究方法論を習得し、「教科開発学実践論（1単位）」では、大学教員としての教育実践力、教員FD等、実践的諸課題を探究します。これら2科目は、必修です。その他も含めて基礎科目群からは、必修科目の2科目3単位を含め選択科目のうちから3単位、計6単位以上を選定して履修します。

分野科目は、「教育環境学」と「教科学」の先進的かつ多様な知見を習得するとともに各教員の研究活動に基づく最先端の科目を「教科開発学」の分野科目として開講します。教育環境学分野ではマネジメント領域、教育方法領域、環境領域から科目を構成し、学校を取り巻く諸環境や利点を把握し、これらの知見を教科の開発研究に活用することを追究します。

学校教育を取り巻く諸環境の特性や利点を把握し、 それらを取り入れて教育に有効に活用する能力を育成する。		
<u>マネジメント領域</u> 学校危機管理論研究	<u>方法領域</u> 教育哲学・思想論研究 教育工学論研究 教育方法内容論研究	<u>環境領域</u> 遊び文化環境論研究 学校適応論研究 養護実践教育学論研究 保育・幼児教育学研究

教育環境学分野における分野科目

「教科学」は、「人文社会系」、「自然系」、「創造系」という三つの分野に分類し、「教育論」、「教育内容論」、「教材論」の三つの基本軸から科目を構成します。「教科学」では、教科内容を構成する学問の構築をめざし、教科のあり方・枠組そのものを検討し、人文社会系教科学、自然系教科学、創造系教科学の各分野の先端的な知識を修得します。

人文社会系教科学分野では、言語・多文化領域、歴史領域、風土領域から科目を構成し、教育方法・教材開発を行います。

言語に関する「教科学」の開発 地理学・民俗学・歴史学における教材の開発		
<u>言語・多文化領域</u> 言語教育内容論研究 外国語教育内容論研究 外国語教育論研究 国語科教育教材論研究 生活科教育内容論研究 国語教育論研究	<u>歴史領域</u> 歴史教材論研究	<u>風土領域</u> 地理学教材論研究 民俗学教材論研究

人文社会系教科学分野における分野科目

自然系教科学では、先端科学と教科内容領域、教材開発と学習支援領域、教育方法の開発領域から科目を構成し、先端科学技術と関連した自然系教科のカリキュラムを構築し、教育の情報化に対応した教育方法・教材開発を行います。

先端科学技術とリンクした理科教育カリキュラムの構築 教育の情報化に対応した教育方法・教材開発		
<u>先端科学と教育内容領域</u> 理科教育内容論研究 生物教育内容論研究	<u>教材開発と学習支援領域</u> 数学教材論研究 物理教材論研究	<u>教育方法の開発領域</u> 数学教育論研究 理科教育論研究 数学教育内容論研究

自然系教科学分野における分野科目

創造系教科学分野では、生活力領域、身体力領域、表現力領域から科目を構成し、基礎的な生活力や健康・体力を備え、豊かな表現力を発揮できるような教育方法・教材開発を行います。

基本的な生活力や健康・体力を備え、豊かな表現力を発揮できる 人間の育成をめざす教科学を構想できる力量の形成		
<u>生活力領域</u> 家政教育内容論研究 技術教育内容論研究 家庭科教材論研究 技術教育教材論研究	<u>身体力領域</u> 体育教育論研究 保健教育内容論研究 体育・課外活動教材論研究	<u>表現力領域</u> 美術教材論研究

創造系教科学分野における分野科目

なお、分野科目は選択科目から 10 単位以上を取得する必要があるが、「教育環境学」の分野科目のうちから 2 単位及び教育環境学分野以外の 3 分野の選択科目のうちから 2 単位の計 4 単位は必ず履修します。

応用科目では、全教員と全学生が一堂に会し、(1) 教員がそれぞれの研究課題を提示し、学生と討議する、(2) 学生自身が、「教科開発学とは何か」、「その研究方法論と課題」について問いながら自己の研究課題を追究し、その成果をまとめて発表します。「教科開発学セミナーⅠ(2 単位)」と「教科開発学セミナーⅡ(2 単位)」は、必修です。応用科目群では、必修科目の 2 科目 4 単位以上を選定して履修します。

開設予定授業科目・担当教員及び講義開講場所等（2020年度）

科目区分		授業科目	単位数	担当教員	愛知教育大学 キャンパス (刈谷市)	静岡大学 キャンパス (静岡市)
専攻基礎科目	必修科目	教科開発学原論	2	石川 恭 野平 慎二 中野 真志 高橋美由紀 坂口 京子 郡司 賀透 香野 毅 村山 功	○	○
		教科開発学実践論	1	稲葉みどり 竹川 慎哉 寺本 圭輔 杉山 康司 鎌塚 優子	○	○
	選択科目	文化資源活用論	1	伊藤 貴啓 丹藤 博文	○	
		科学技術活用論	1	稲毛 正彦 飯島 康之 小谷 健司	○	
		教育評価実証方法論	1	古田 真司 石田 靖彦	○	
		教育プログラム開発論	1	塩田 真吾 中村 美智太郎		○
		表現・鑑賞論	1	伊藤 文彦 長谷川 真		○
		教育フィールド調査	1	村越 真 郡司 賀透		○
		教育プレゼンテーション論	1	白畑 知彦 小南 陽亮		○
専攻分野科目	教育環境学分野	遊び文化環境論研究	2	石川 恭	○	
		学校適応論研究	2	石田 靖彦	○	
		教育哲学・思想論研究	2	野平 慎二	○	
		保育・幼児教育学研究	2	新井美保子	○	
		教育方法・内容論研究	2	竹川 慎哉	○	
		学校危機管理論研究	2	村越 真		○
		教育工学論研究	2	村山 功		
		養護実践教育学論研究	2	鎌塚 優子		
		特別支援教育学研究	2	香野 毅		○
		情報教育学研究	2	塩田 真吾		

専攻分野科目	人文社会系教科学分野	言語教育内容論研究	2	稲葉 みどり	○	
		民俗学教材論研究	2	野地 恒有		
		地理学教材論研究	2	伊藤 貴啓	○	
		国語科教育教材論研究	2	丹藤 博文	○	
		生活科教育内容論研究	2	中野 真志	○	
		外国語教育内容論研究	2	高橋美由紀	○	
		外国語教育論研究	2	白畑 知彦		○
		歴史教材論研究	2	黒川みどり		○
		国語教育論研究	2	坂口 京子		○
	自然系教科学分野	数学教材論研究	2	飯島 康之	○	
		物理教材論研究	2	岩山 勉	○	
		理科教育内容論研究	2	稲毛 正彦	○	
		数学教育内容論研究	2	小谷 健司	○	
		数学教育論研究	2	熊倉 啓之		○
		生物教育内容論研究	2	小南 陽亮		○
		理科教育論研究	2	郡司 賀透		○
	創造系教科学分野	保健教育内容論研究	2	古田 真司	○	
		保健体育内容論研究	2	寺本 圭輔	○	
		美術教材論研究	2	伊藤 文彦		○
		体育教育論研究	2	新保 淳		○
		技術教育内容論研究	2	松永 泰弘		○
		家政教育内容論研究	2	小川 裕子		○
		技術教育教材論研究	2	紅林 秀治		○
		体育・課外活動教材論研究	2	杉山 康司		
		家庭科教材論研究	2	村上 陽子		○
専攻応用科目	必修	教科開発学セミナーⅠ	2	全教員	○	○
		教科開発学セミナーⅡ	2	全教員	○	○
	選択	教科開発学セミナーⅢ	2	全教員	○	○

7. 教員一覧

(愛知教育大学)

分野	氏名	職名・学位	現在の主たる研究テーマ
教育環境学	石川 恭	教授 博士（教育学）	遊び文化環境論 教育社会論 余暇教育論 遊戯文化論 生涯スポーツ論 子どもと遊び論
	野平 慎二	教授 博士（教育学）	教育哲学 教育思想史 物語論的人間形成論 美的人間形成論 システム理論と教育 道德教育論
	石田 靖彦	准教授 博士（心理学）	教育・社会心理学 学校・学級への適応過程 関係の親密化 自己評価維持機制
	竹川 慎哉	准教授 博士（教育学）	教育方法学 教育課程論 批判的リテラシー教育 授業研究
人文社会系教科学	野地 恒有	教授 博士（文学）	社会科教育内容論 日本民俗論 近現代庶民生活史論 歴史民俗博物館論 博物館教育論 フィールドワーク調査論 郷土研究方法論
	稲葉 みどり	教授 博士（学術）	英語科教育論 英語科教育方法論 英語教授法 異文化理解教育 日本語教授法 日本語教育実践研究 留学生教育 第一言語習得及び第二言語習得

人文社会系教科学	伊藤 貴啓	教授 博士（理学）	地理学教材論 農業地理論 経済地理論 地誌論 教師の力量形成と地域教材開発 農業地域の自立的発展とその条件 ヨーロッパ 国境地帯の空間動態 ヨーロッパ におけるルーラルツーリズムと農村の持続的発展
	中野 真志	教授 博士（文学）	生活科教育論 総合的な学習の理論と実践 社会科教育論 カリキュラム論 教育方法論 ジョン・デューイの教育論
	丹藤 博文	教授 教育学修士	言語教育方法論 文芸批評理論 文学教育論 文学教材研究論 国語科授業方法論 物語理論研究
	高橋 美由紀	教授 博士（地域研究）	小学校英語教育論（早期英語教育論） 小学校英語教育の理論と実践 小学校英語科授業方法論 小学校・中学校英語における教材開発論 諸外国の言語政策と外国語（英語）教育研究 児童の多言語多文化教育研究
自然系教科学	岩山 勉	教授 博士（理学）	理科教材開発論 理科（物理）教育論 理科におけるものづくり教育 先端科学技術の活用と還元 自然エネルギー利用技術 半導体光物性 ビーム（イオン、レーザー）物性
	稲毛 正彦	教授 理学博士	理科教育内容論 環境科学による教科開発 無機化学 錯体化学 生物無機化学
	飯島 康之	教授 教育学修士	数学教育論 教材開発論 学習環境開発論 コンテンツ開発論 授業研究 図形指導 数学的問題解決
	小谷 健司	教授 博士（理学）	数学教材開発 常微分方程式論

創造系教科学	古田 真司	教授 博士（医学）	学校保健論 保健教育内容論 学校疾病予防論 健康情報リテラシー 保健分野の批判的思考力 養護教諭が行う保健指導 児童・生徒の不定愁訴への対応
	寺本 圭輔	准教授 博士（人間環境学）	運動生理学 身体組成 発育発達 水泳

(静岡大学)

分野	氏名	職名・学位	現在の主たる研究テーマ
教育環境学	村越 真	教授 博士 (心理学)	学校の危機管理 空間認知と地図理解の認知過程 自然体験活動のリスクマネジメント リスク認知 安全教育
	村山 功	教授 教育学修士	認知心理学 理科教育 情報教育 I C T 校内研修 授業研究
	鎌塚 優子	教授 博士 (教育学)	養護教諭の実践に関わる教育 健康相談論 学校保健学 特別な教育的支援を要する子どもの健康教育 養護教諭養成教育
	香野 毅	教授 博士 (心理学)	特別支援教育からだを窓口とした援助 障害領域における心理支援動作法 子育て支援
	塩田 真吾	准教授 博士 (学術)	情報教育 I C T キャリア教育遠隔教育
	中村 美智太郎	准教授 博士 (学術)	教育哲学 教育思想 道徳教育 情報倫理 キャリア教育
人文社会系教科学	黒川みどり	教授 博士 (文学)	日本近現代史 日本近現代思想史 歴史教育 近代日本のマイノリティ 近代日本のアジア認識
	白畑 知彦	教授 博士 (文学)	第二言語としての英語習得研究 第二言語としての日本語習得研究 外国語としての英語教授法 外国語学習論 児童英語教育論 教室における第二言語習得 外国語学習評価論 英語教育課程論

人文社会系教科学	坂口 京子	教授 博士（教育学）	国語・国語科（言語教育）カリキュラム論 国語科目的・目標論 国語科授業研究 国語科教材開発論 国語科教師教育 戦後国語教育史
自然系教科学	小南 陽亮	教授 理学博士	生物多様性教育のための教材開発 生態系教育内容論 生態系における生物種間相互作用 里山における生物多様性の保全 生物の共存メカニズム 生物群集の動態 絶滅危惧種の保全 植物の繁殖戦略
	熊倉 啓之	教授 理学修士	算数教育論 数学教育論 算数・数学教育課程論 算数・数学授業研究 算数・数学教材開発論 算数・数学教育の目的論 小・中・高接続カリキュラム論 数学教育の国際比較研究
	郡司 賀透	准教授 博士（教育学）	理科カリキュラム論 理科カリキュラム史研究 理科教材論 理科教育内容選択論 理科授業研究
創造系教科学	新保 淳	教授 博士（教育学）	身体教育論 授業研究論 教員養成論 教師教育論 理論と実践の関係 スポーツ科学論 体育哲学
	松永 泰弘	教授 博士（工学）	熱弾性論 材料強度学 機能性材料応用開発 ものづくり教材開発 ものづくり教材の授業実践 動くおもちゃのデザインとメカニズム 地域におけるものづくり交流 ものづくり教室の評価基準

創造系教科学	小川 裕子	教授 博士（工学）	学校行事等から繋げる家庭科の授業 住生活学習の教材開発 住生活学習で育つ能力 家庭科教育論 家庭科内容論
	伊藤 文彦	教授 学術修士	美術教育論 デザイン教育論 デザインリテラシー教育論 デザインプロセス論 鑑賞方法 発想支援方法 コミュニケーションデザイン論
	紅林 秀治	教授 博士（学校教育学）	技術教育論 技術教育教材開発 設計を主体とした技術教育 システム概念の形成過程
	杉山 康司	教授 博士（スポーツ健康科学）	身体運動学 体力科学 体育・スポーツ科学 発育発達の科学 加齢と健康科学 スポーツ指導論
	村上 陽子	教授 博士（学術）	食文化 食品・料理色彩学 食品物性学 調理学 家庭科におけるものづくり教育 教科連携
	長谷川 慎	准教授 修士（音楽）	音楽教育学 日本音楽 地歌箏曲演奏

8. 教育方法

1 教育・研究指導

大学院の教育は、専攻に応じて教育上必要なものとして開設する授業科目の履修及び博士論文の作成等に対する指導によって行われます。

(1) 主指導教員

学位論文及び修学その他学生生活上の指導・助言を行うため、専攻に属する専任教員（大学院設置基準第9条に定める教員）のうちから主指導教員を定めます。主指導教員は、入学試験の出願に際して出された第1希望、または第2希望の教員であり、合格発表の際に通知された教員です。

(2) 副指導教員等の届

主指導教員とは別に、専攻に属する専任教員の中から、2名以上の副指導教員と、研究上の必要性に応じて指導補佐教員を定め、研究指導を受けます。副指導教員については、各大学から1名以上を選ぶものとします。学生は、原則として、授業開始日（合同ガイダンス実施日）から10日以内に、主指導教員の助言を得て副指導教員および指導補佐教員を選び、所定の様式による「副指導教員等申請書」により、研究科長あてに提出しなければなりません。

(3) 副指導教員等の決定

研究科長は、学生から提出のあった副指導教員等申請書に基づき、共同専攻連絡協議会の議を経て、それぞれの副指導教員および指導補佐教員を決定します。

2 単 位

各授業科目の単位数は、授業内及び授業外を合わせて、45時間の学修をもって1単位とします。多くの授業が、1時限（1コマ）を2時間（実際は90分）として、16回（定期試験を含む）で2単位としているのは、1時限の教室内の授業に対して、2時限分の教室外での事前学習及び事後学習（以下「自習学習」という。）を行って2単位という意味です（8回では1単位となります）。

3 授 業

(1) 学 期（授業期間）

学期を前期（4月1日～9月30日）、後期（10月1日～翌年3月31日）の2学期に区分し、さらに、開講する授業の日程によって、前期をおおよそA週（4月から5月）、B週（6月から7月）、C週（7月から8月）、後期をD週（10月）、E週（11月から1月）、F週（1月から2月）に分けて授業を実施します。

●詳細については、「時間割および授業カレンダー」を参照してください。

(2) 授業方法

授業の方法は、講義、演習のいずれかにより行います。

(3) 授業時間

授業は、原則として土曜日と日曜日の各5時限（計10時限）で実施します。

◎ 授業時間（土曜日および日曜日）

時 限	授業開始 ・ 終了時刻
1 時 限	9 : 0 0 ~ 1 0 : 3 0
2 時 限	1 0 : 4 0 ~ 1 2 : 1 0
3 時 限	1 3 : 0 0 ~ 1 4 : 3 0
4 時 限	1 4 : 4 0 ~ 1 6 : 1 0
5 時 限	1 6 : 2 0 ~ 1 7 : 5 0

(4) 履修方法

学生は、原則として土曜日と日曜日に愛知教育大学・静岡大学の両キャンパスで開講される授業及び夏季・冬季の休業等の長期休業期間に集中講義で開講される授業を履修します。また、これらの他に浜松等で開講される授業もあります。

4 履修登録

(1) 履修手続き

学生は、主指導教員と相談の上、授業開始日（合同ガイダンス実施日）から10日以内に、その年度に履修しようとする全ての授業科目を愛知教育大学では教務企画課、静岡大学では教育学部学務係に提出します。その際、前期の履修科目については4月中に開講される科目を除き、4月末までに各事務に届け出れば変更は可能です。後期の履修科目については、9月末までに各事務に変更を届け出てください。それぞれの届け出期限以降の変更は、原則として認められません。なお、いずれの変更も主指導教員と相談の上、その許可を得て届け出をしてください。

(2) 講義室（集合場所）

講義等の初回の集合場所は、原則として本籍を置く大学の共同大学院講義室とします。ただし、掲示や合同ガイダンス等により指示ある場合には、指定場所へ集合してください。

5 成績および単位について

(1) 成績の評価は、筆記試験、口答試問、報告書等（以下「筆記試験等」）により行います。

(2) 成績評価のための条件

成績の評価には、その授業時間の3分の2以上の出席を必要とします。

(3) 成績評価の基準

成績の評価は、その授業の構成単位をS秀・A優・B良・C可又はD不可の評語にて判定し、C可以上を合格、D不可は不合格とし、合格した単位は取り消すことができません。ただし、下記の単位は認定しません。

- ① 合格した授業科目を再度受講して修得した単位
- ② その他、定められた履修方法以外の方法により修得した単位

成績評価の基準

評価		評価基準（100点満点の場合）	
S	秀	90点以上	合 格
A	優	80点～89点	
B	良	70点～79点	
C	可	60点～69点	
D	不可	0～59点	不合格

(4) 単位の授与

本学は、履修登録した授業科目の授業を履修し、当該授業の筆記試験等に合格した学生に対し、所定の単位を授与します。

(5) 再・追試験

- 再試験は行いません。
- 追試験は、病気・災害等の特別の事情がある場合、愛知教育大学では教務企画課、静岡大学では教育学部学務係に願い出ることによって許可されることがあります。この願い出については、指導教員を通じて提出します。

(6) 不正行為

- 筆記試験等で不正と認められる行為があったときは、当該科目を不合格とします。
- 不正行為の内容によっては、その学期に修得したすべての単位を削除します。場合によっては、学則の規定により処分します。

6 学位論文の提出

学位論文及び学位授与は、指導教員の指導を受けて作成し、大学院研究科の審査を受けなければなりません。その詳細については、別途、お知らせします。

7 長期履修学生制度について

この制度は、原則として、職業を有している方や、育児・介護等の事由により通常期間での就学が困難であると認められる方の大学院での進学環境を改善するためのものです。現在のところ、両大学での取り扱いが異なるため、その詳細は、別途お知らせします。

8 修学上の注意事項

- 休学や退学の手続き等は、必要に応じて、各大学で指導を受けて下さい。
- 気象警報発令時・交通機関運休時・東海地震注意情報発令時等における休講の取扱いについては、両大学で異なるので、別途お知らせします。
- 両大学で利用できる情報ネットサービスの内容については、大学ごとに、別途お知らせします。

愛知教育大学と静岡大学の共同教科開発学専攻連絡協議会規程

2011年12月14日
規 程 第 142 号

（目的）

第1条 この規程は、愛知教育大学学則（2004年学則第1号）第25条第3項及び静岡大学大学院規則（昭和39年4月27日）第5条に定める共同教科開発学専攻（以下「共同専攻」という。）に係る教育，研究等に関する重要な事項を協議し，円滑な管理運営を行うため設置する共同教科開発学専攻連絡協議会（以下「連絡協議会」という。）の組織及び運営に関し，必要な事項を定める。

（連絡協議会）

第2条 連絡協議会は，次の各号に掲げる委員で組織する。

- (1) 愛知教育大学及び静岡大学（以下「構成大学」という。）の共同専攻の専任教員
- (2) 構成大学の研究科長が特に必要と認めた者若干名
- 2 連絡協議会に議長を置き，連絡協議会の業務を掌理する。
- 3 議長は，連絡協議会を招集し，その議長となる。
- 4 議長の任期は，1年とし，委員の互選により選出し，構成大学間で隔年交代とする。
- 5 連絡協議会に副議長を置き，副議長は，議長を補佐し，議長に事故があるときは，その職務を代行する。
- 6 副議長の任期は，1年とし，議長が所属する大学と異なる大学の委員のうちから委員の互選により選出する。

（協議事項）

第3条 連絡協議会は，共同専攻に係る次の各号に掲げる事項を協議する。

- (1) 構成大学において開設する授業科目及びこれに係る教員の配置などカリキュラムの編成及び実施に関する基本的事項
- (2) 研究指導教員の選定に関する事項
- (3) 入学者選抜の方針及び実施計画に関する事項
- (4) 学生の身分取扱及び厚生補導に関する事項
- (5) 成績評価の方針に関する事項
- (6) 学位審査委員会の設置に関する事項
- (7) 学位の授与及び課程修了の認定に関する事項
- (8) 教育研究活動等の状況の評価に関する事項
- (9) 予算に関する事項
- (10) 広報に関する事項
- (11) 自己点検・評価に関する事項
- (12) FD推進に関する事項
- (13) 共同専攻の設置に関する協定書の改正及び廃止並びに運用に関する事項
- (14) その他構成大学が必要と認めた事項

2 協議内容は、構成大学の教授会若しくは研究科委員会又は教育研究評議会（以下「会議等」という。）に報告し、必要に応じて承認を得るものとする。

3 前項の承認を得るものについては、同項の会議等の議を経て、連絡協議会が別に定める。（専門委員会）

第4条 連絡協議会の円滑な運営を図るため、連絡協議会の下に次の各号に掲げる専門委員会を置く。

- (1) 運営委員会
- (2) 学務委員会
- (3) 入試委員会
- (4) 学位審査委員会
- (5) 教員人事選考委員会
- (6) 紀要編集委員会
- (7) その他連絡協議会が必要と認めた委員会

2 専門委員会に関する事項は、別に定める。（議事及び運営）

第5条 連絡協議会は、構成委員の3分の2以上の出席をもって成立する。ただし、次の各号に掲げる者は、構成委員の総数に算入しない。

- (1) 休職又は停職中の者
- (2) 育児休業中の者
- (3) 30日以上にわたる連続した休暇を取得中の者

2 連絡協議会の議事は、出席委員の過半数の賛成をもって決し、可否同数の場合は議長が決する。ただし、連絡協議会が特に重要と認めた事項については、出席委員の3分の2以上の賛成により決する。

3 連絡協議会が必要と認めたときは、委員以外の者の出席を求め、その意見を聴くことができる。

4 この規程に定めるもののほか、連絡協議会の議事及び運営について必要な事項は、連絡協議会が定める。

（事務局）

第6条 この規程に定める事務を取り扱うために事務局を置く。

2 事務局は、愛知教育大学事務局及び静岡大学教育学部事務部が担当する。

附 則

この規程は、2012年4月1日から施行する。

附 則（2014年規程第39号）

この規程は、2014年12月17日から施行する。

附 則（2015年規程第58号）

この規程は、2015年6月3日から施行する。

Ⅱ．共同教科開発学専攻連絡協議会 議長年次報告

教科開発学連絡協議会 議長年次報告

1 入学試験及び入学者について

2021年度入学試験は、2020年10月31日（土）に愛知教育大学を会場に実施されました。合格発表は11月16日（月）に行い、9名（愛教大籍5名、静大籍4名）の合格者をだすことができました。

なお、2022年度入学試験は2021年11月6日（土）、合格発表は11月16日（火）を予定しています。詳しくは、共同教科開発学専攻専用のウェブページを参照下さい。

2 2020年度新入生ガイダンスについて

本年度は、愛知県下に緊急事態宣言が発令され、県外移動自粛を求められたことから、2020年4月5日（日）愛教大籍の新入生は愛知教育大学教育未来館、静大籍の新入生は静岡大学教育学部G棟202に集合しテレビ会議システムを用いて13時00分からガイダンスを実施しました。例年は同日に2年生以上の学生対象のガイダンスが行われますが、集合形式では行わず資料配付のみとしました。

3 2020年度教科開発学研究会および教科開発学セミナーⅠ、Ⅱ、Ⅲについて

教科開発学研究会は、2021年3月7日（日）にZoomを用いて開催しました。研究発表5件、学位取得者および学位取得予定者による博士論文発表が9件行われました。

教科開発学セミナーⅠ、Ⅱは2021年2月13、14（土・日）の2日間にわたってZoomを用いて開催されました。セミナーⅠは1年生が、セミナーⅡは2年生が対象で、それまでに自身が研究してきた成果を報告します。1、2年生や全教員が参加して、各報告に対して活発な議論が展開されました。

セミナーⅢは、2020年8月23日（日）にZoomを用いて開催しました。これは、博士論文の概要の準備ができ、提出が目前の3年生が対象で、その報告をもとに、全教員が参加し議論や助言行い、博士論文提出に向けた最終準備を行う場でもあります。他の学生や今後提出する予定の学生の聴講も多数ありました。

4 共同教科開発学専攻連絡協議会と各委員会委員名簿

基本的に、毎月1回、全教員が集まり専攻連絡協議会が開催されます。この会議は愛教大と静大の全教員による会議のため、テレビ会議システムを使用して実施されています。この会議のために、各大学では専攻会議というものを開催し、連絡協議会で審議する議題について、それぞれの大学の意見を集約します。

5 共同教科開発学専攻指導体制

それぞれの大学に在籍する学生に対し、主指導教員1名の他に、複数名の副指導教員、指導補佐教員が指導にあたります。そして、副指導教員の中には、必ず他方の大学の教員が少なくとも1名加わることになっています。様々に異なる研究領域を専門とする教員が指導に加わることで、院生が近視眼的思考に陥らないように努めています。このような指導体制は本専攻の特色の一つでもあります。

6 その他

本文には掲げていませんが、論文審査会（最終試験）が2020年7月19日（日）と2021年1月24日（日）に愛知教育大学及び静岡大学とでテレビ会議システムを用いて開催しました。審査会は公開で実施され、8名が臨み、博士論文に対して忌憚のない質問に対し、明確な回答が行われました。その結果、8名の合格が連絡協議会で認められました。その内容に関しては、「V修了生一覧と論文要旨」に博士論文執筆談とともに掲載されていますので、ご参照下さい。

愛知教育大学大学院・静岡大学大学院 教育学研究科共同教科開発学専攻(後期3年のみの博士課程)

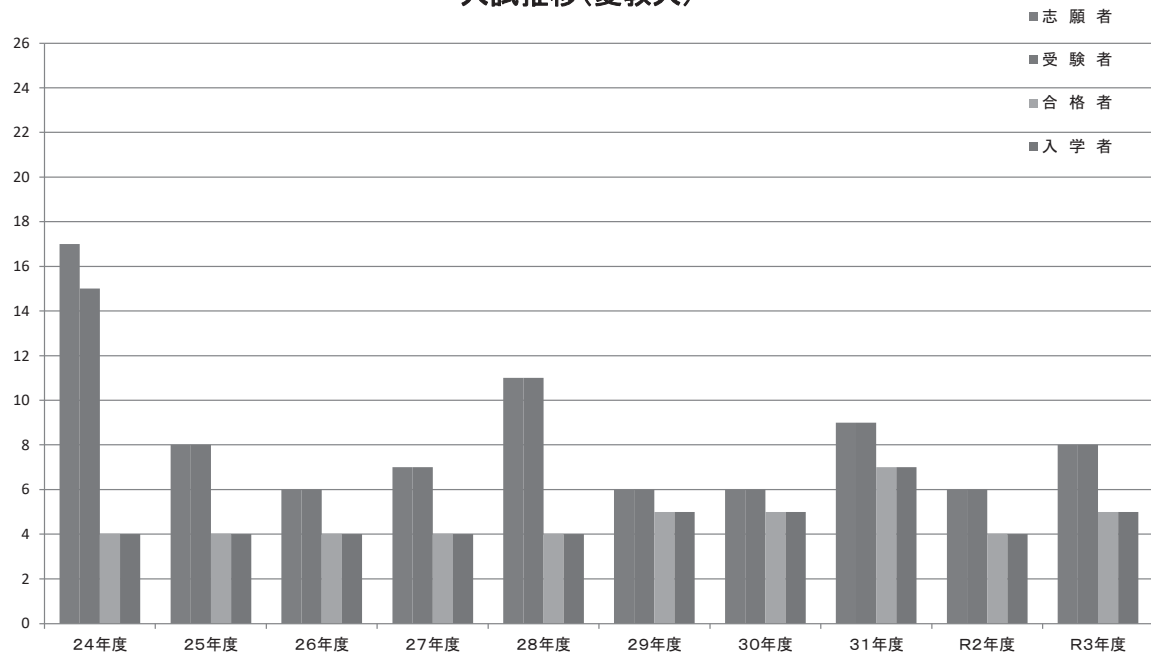
入学試験実施状況

愛知教育大学															
年 度	区 分	定員	志 願 者			受 験 者			合 格 者			入 学 者			合格率
			男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	
24年度		4	8	9	17	7	8	15	1	3	4	1	3	4	26.67%
25年度		4	4	4	8	4	4	8	1	3	4	1	3	4	50.00%
26年度		4	3	3	6	3	3	6	3	1	4	3	1	4	66.67%
27年度		4	3	4	7	3	4	7	1	3	4	1	3	4	57.14%
28年度		4	5	6	11	5	6	11	3	1	4	3	1	4	36.36%
29年度		4	3	3	6	3	3	6	3	2	5	3	2	5	83.33%
30年度		4	5	1	6	5	1	6	5	0	5	5	0	5	83.33%
31年度		4	5	4	9	5	4	9	4	3	7	4	3	7	77.78%
R2年度		4	6	0	6	6	0	6	4	0	4	4	0	4	66.67%
R3年度		4	4	4	8	4	4	8	2	3	5	2	3	5	62.50%

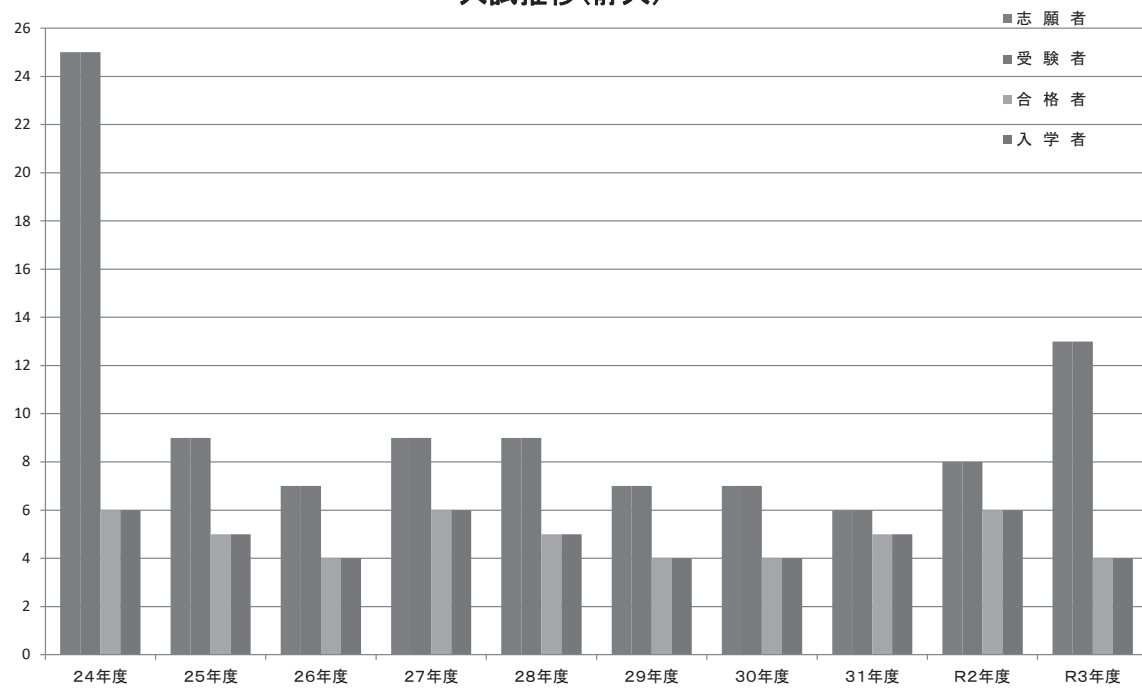
静岡大学															
年 度	区 分	定員	志 願 者			受 験 者			合 格 者			入 学 者			合格率
			男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	
24年度		4	21	4	25	21	4	25	5	1	6	5	1	6	24.00%
25年度		4	8	1	9	8	1	9	4	1	5	4	1	5	55.56%
26年度		4	5	2	7	5	2	7	3	1	4	3	1	4	57.14%
27年度		4	5	4	9	5	4	9	4	2	6	4	2	6	66.67%
28年度		4	5	4	9	5	4	9	2	3	5	2	3	5	55.56%
29年度		4	4	3	7	4	3	7	3	1	4	3	1	4	57.14%
30年度		4	4	3	7	4	3	7	3	1	4	3	1	4	57.14%
31年度		4	5	1	6	5	1	6	4	1	5	4	1	5	83.33%
R2年度		4	5	3	8	5	3	8	3	3	6	3	3	6	75.00%
R3年度		4	12	1	13	12	1	13	4	0	4	4	0	4	30.77%

合 計															
年 度	区 分	定員	志 願 者			受 験 者			合 格 者			入 学 者			合格率
			男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	
24年度		8	29	13	42	28	12	40	6	4	10	6	4	10	25.00%
25年度		8	12	5	17	12	5	17	5	4	9	5	4	9	52.94%
26年度		8	8	5	13	8	5	13	6	2	8	6	2	8	61.54%
27年度		8	8	8	16	8	8	16	5	5	10	5	5	10	62.50%
28年度		8	10	10	20	10	10	20	5	4	9	5	4	9	45.00%
29年度		8	7	6	13	7	6	13	6	3	9	6	3	9	69.23%
30年度		8	9	4	13	9	4	13	8	1	9	8	1	9	69.23%
31年度		8	10	5	15	10	5	15	8	4	12	8	4	12	80.00%
R2年度		8	11	3	14	11	3	14	7	3	10	7	3	10	71.43%
R3年度		8	16	5	21	16	5	21	6	3	9	6	3	9	42.86%

入試推移(愛教大)



入試推移(静大)



愛知教育大学大学院・静岡大学大学院 共同教科開発学専攻
2020年度 合同ガイダンス

日 時：2020年4月5日（日） 13時00分～17時00分（予定）
新入生受付開始12時30分～ 3C G202

場 所：愛知教育大学に籍をおく新入生
愛知教育大学 教育未来館
（愛知県刈谷市井ヶ谷町広沢1）
静岡大学に籍をおく新入生
静岡大学 G202
（静岡県静岡市駿河区大谷836）
※テレビ会議システムを介して行います。

◎新入生向け 13時00分～14時00分 3C講義室 G202
出席者：共同教科開発学専攻連絡協議会 正副議長、学務委員長（愛教大）
2020年度新入学生
愛教大籍 4名 静大籍 6名
両大学事務職員 3名

[プログラム]

- 1 挨拶（正副議長）
- 2 出席者紹介 ※所属・氏名等のみ
- 3 専攻の概要（議長）
- 4 教育方法について（学務委員長）
- 5 副指導教員の申請について（学務委員長）
- 6 研究紀要について（議長）
- 7 履修登録、各大学での手続、学生生活および図書館利用等について（事務職員）

●ガイダンスでの配付資料

- 1 副指導教員等申請書
- 2 学生証等
- 3 授業シラバス
- 4 その他、関係資料

- ・相談終了後は、学生は自由解散となります。
- ・指導教員、副指導教員以外は、授業に関する問い合わせがなければ、解散となります。
- ・学生の相談が終了すれば、教員も各自解散となります。
- ・会場は午前中から使用できます。
午前中に相談・指導なさるご予定の先生は、事前に学務委員に申し出てください。
- ・すべての打合わせは、17時までに終わるようお願いします。

※新型コロナウイルスの影響により、学生主催の懇親会は行いません。

**愛知教育大学大学院・静岡大学大学院 共同教科開発学専攻
2020年度 教科開発学セミナーⅢ 開催要項**

日時：2020年8月23日（日） 13時00分～

場所：静岡大学教育学部G棟202室 愛知教育大学教育未来館3C（Zoomを用いて開催）

出席者：2020年度3年生4名（静大2名、愛教大2名）

共同専攻専任教員

発表者以外の当専攻学生（聴講のみ全学年対象）

○教科開発学セミナー（Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ）の概要

本教科開発学セミナーは、院生が教科開発学とは何かを問いながら、それまでに研究してきた成果を、他の院生ならびに全教員の前で口頭発表する場である。他分野の教員も加わり、異なる専門性の観点から研究成果について論評する授業形態は、本専攻の特色の1つである。このセミナーでの研究発表の積み重ねが、博士論文となって実を結ぶことが期待される。さらに、「教科開発学という学問領域とは何か」について、全員で議論することにより、教員と院生の共通理解を深めて行く。

○教科開発学セミナーⅢの概要（シラバスより）

博士論文の目次構成を確定し、博士論文の草稿を基に、その内容を発表する。

※3年生対象の選択科目であるが、学位論文を提出する年度に履修することが望ましい。

○セミナーⅢの前後の研究指導

セミナーⅢは、事前および事後の研究指導の時間を含めて、1科目2単位として認定している。

学生は、事前に主指導教員や他の指導教員による個別の研究指導を受けて、発表内容を検討しておくとともに、事後はセミナーⅢの参加者の意見や議論を踏まえて、指導教員の指導の下に博士論文完成に向けて検討することが必要である。

○発表の概要

- ・1演題、発表25分、質疑応答25分の計50分とする。
- ・1会場で実施する。（2020年度はZoomを用いて開催）
- ・座長は、副指導教員のうち学生が籍を置かない側の教員が担当する。

○発表要旨の事前提出

PDF形式の発表要旨を、2020年8月14日（金）までに下記までメールで提出する。発表要旨はA4サイズで6枚以内（原稿作成要領は別紙とおとり）とし、当日使用するパワーポイントは、当日各自で持参すること。（データの互換性が心配な場合はノートパソコンも持参することが望ましい。）

提出先：静岡大学教育学部学務係 小澤 宛 ozawa.masumi@shizuoka.ac.jp

○当日のスケジュール 進行：学務委員

- 1 開会の挨拶 共同専攻連絡協議会 議長（13時00分～13時05分）
- 2 発表 4本（13時05分～16時40分）
- 3 全体の講評 共同専攻連絡協議会 副議長（16時40分～16時45分）

○自由発表時間

10時00分～12時00分を、セミナーⅢの単位を既修得の院生が再度発表できる時間枠（自由発表時間）とする。自由発表時間については、学務委員会は会場及び設備を提供するが、運営には関与しないので、発表を希望する院生とその指導教員で連携して実施すること。なお、聴講については、院生、教員とも任意とする。

2020年度 教科開発学セミナーⅢ スケジュール

会場：静岡大学教育学部G棟202 愛知教育大学教育未来館（Zoomを用いて開催）

開催日：2020年8月23日（日）

日程

10:00～12:00 自由発表時間

13:00～13:05 開会挨拶（共同教科開発学専攻連絡協議会議長）

13:05～15:45 セミナーⅢ発表

自	至	分野	学籍番号	氏名	主指導教員	副指導教員	副指導教員 (座長)	研究主題
13:05	13:55	教育環境学	30540006	二見 隆亮	村越 真	新保 淳	野地 恒有	生き方としての走教育の研究
14:00	14:50	人文社会系教科学	217D004	永井 弘人	野地 恒有	伊藤 貴啓	黒川みどり	民俗学（民芸・工芸）を中心とした特別支援教育における教材開発
14:55	15:45	自然系教科学	218D004	新鶴田道也	岩山 勉	稲毛 正彦	熊倉 啓之	先端科学技術を活用した授業の開発 ー電子黒板による次代の理科授業を創造するー
15:50	16:40	自然系教科学	30840001	荒谷 航平	郡司 賀透	丹沢 哲郎	岩山 勉	米国の科学カリキュラムにおける科学技術社会論的内容の変遷ー物理学分野に着目してー

16:40～16:45 全体の講評（共同教科開発学専攻連絡協議会副議長）

愛知教育大学大学院・静岡大学大学院 共同教科開発学専攻

2020年度 教科開発学セミナーⅠ・Ⅱ 開催要項

日時：2021年2月13日（土）10:00～14:05 セミナーⅡ

2021年2月14日（日） 9:00～15:20 セミナーⅠ

場所：Zoomを用いて開催（担当校：愛知教育大学）

出席者：セミナーⅠ 9名（愛教大4名、静大4名）セミナーⅡ 8名（愛教大4名、静大4名）
共同専攻専任教員、発表者以外の当専攻学生

○教科開発学セミナー（Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ）の概要

本教科開発学セミナーは、大学院生が教科開発学とは何かを問いながら、それまでに研究してきた成果を、他の院生ならびに全教員の前で口頭発表する場である。他分野の教員も加わり、異なる専門性の観点から研究成果について論評する授業形態は、本専攻の特色の1つである。このセミナーでの研究発表の積み重ねが、博士論文となって実を結ぶことが期待される。さらに、「教科開発学という学問領域とは何か」について、全員で議論することにより、教員と院生の共通理解を深めて行く。

○教科開発学セミナーⅠおよびⅡの位置づけ

セミナーⅠは、博士論文の構想発表会として、セミナーⅡは、博士論文の中間発表会として位置づけられている。

○発表の概要

- ・1演題につき、次の通りとする。

セミナーⅠ：発表15分、質疑応答15分 計15分

セミナーⅡ：発表20分、質疑応答20分 計20分

- ・座長は、副指導教員のうち学生が籍を置かない側の教員が担当する。

○発表要旨の事前提出

PDF形式の発表要旨を、2021年2月5日（金）までに下記までメールで提出する。発表要旨はA4サイズで4枚（原稿作成要領は別紙のとおり）とする。

提出先：愛知教育大学教務企画課大学院係 川瀬宛 ykawase@aeu.ac.jp

○当日のスケジュール 進行：学務委員

<2月13日> セミナーⅡ

- 1 開会の挨拶 共同専攻連絡協議会 議長（10:00～10:05）
- 2 午前の発表 6本（10:05～12:15）
- 3 午後の発表 2本（13:20～14:00）
- 4 全体の講評 共同専攻連絡協議会 副議長（14:00～14:05）

<2月14日> セミナーⅠ

- 1 開会の挨拶 共同専攻連絡協議会 副議長（9:00～9:05）
- 2 午前の発表 5本（9:05～11:55）
- 3 午後の発表 4本（13:00～15:15）
- 4 全体の講評 共同専攻連絡協議会 議長（15:15～15:20）

2020年度 教科開発学セミナーⅠ・Ⅱ スケジュール

会場：オンライン（Z o o m利用、担当校：愛知教育大学）

開催日：2021年2月13日（土）・14日（日）

日程

2月13日（土）セミナーⅡ

10:00～10:05 開会挨拶（共同教科開発学専攻連絡協議会議長）

10:10～14:00 セミナーⅡ発表

会場1 進行：紅林 秀治

自	至	分野	学籍番号	氏名	主指導教員	座長
10:10	10:50	創造系教科学	219D006	澤田 育子	古田 真司	紅林 秀治
10:55	11:35	創造系教科学	30940001	青木麟太郎	紅林 秀治	飯島 康之
11:40	12:20	自然系教科学	219D005	大久保博和	岩山 勉	郡司 賀透
休 憩						
13:20	14:00	自然系教科学	30940003	塩澤 友樹	熊倉 啓之	飯島 康之

会場2 進行：野平 慎二

自	至	分野	学籍番号	氏名	主指導教員	司会
10:10	10:50	教育環境学	219D002	杉山 立	野平 慎二	村越 真
10:55	11:35	教育環境学	30940005	望月 大	村越 真	伊藤 貴啓
11:40	12:20	教育環境学	30840006	満下 健太	村越 真	古田 真司
休 憩						
13:20	14:00	人文社会系教科学	219D004	中村 仁志	中野 真志	白畑 知彦

14:00～14:05 講評（共同教科開発学専攻連絡協議会副議長）

2月14日（日）セミナーⅠ

9:00～9:05 開会挨拶（共同教科開発学専攻連絡協議会副議長）

9:05～15:15 セミナーⅠ発表

進行：野平 慎二

自	至	分野	学籍番号	氏名	主指導教員	司会
9:05	9:35	人文社会系教科学	220D001	西野雄一郎	中野 真志	白畑 知彦
9:40	10:10	人文社会系教科学	220D002	行田 臣	中野 真志	坂口 京子
10:15	10:45	自然系教科学	220D003	胡 石帆	飯島 康之	紅林 秀治
10:50	11:20	自然系教科学	220D004	露木 隆	岩山 勉	郡司 賀透
11:25	11:55	教育環境学	30040003	山元 薫	村山 功	中野 真志
休 憩						
13:00	13:30	人文社会系教科学	30040004	岡村 明夢	白畑 知彦	石川 恭
13:35	14:05	創造系教科学	30040005	高根 信吾	新保 淳	石川 恭
14:10	14:40	創造系教科学	30040006	古田このみ	松永 泰弘	野地 恒有
14:45	15:15	創造系教科学	30940002	黒須 雅弘	杉山 康司	石川 恭

15:15～15:20 講評（共同教科開発学専攻連絡協議会議長）

2020年度 共同教科開発学専攻 連絡協議会等 開催日

	専攻会議（静大） 【研究科教授会後～】	専攻会議（愛教大） 【16：40～】	合同連絡会議 【16：45～】
4月	4/9(木)	4/13(月)	4/11(土) 臨時 4/16(木) 4/21(火) 臨時
5月	5/14(木)	5/18(月)	5/21(木)
6月	6/11(木)	6/15(月)	6/18(木) 6/25(木) 臨時
7月	7/9(木)	7/20(月)	7/15(水) 臨時 7/22(水)
8月			
9月	9/3(木)	9/14(月)	9/17(木) 9/30(水) 臨時
10月	10/8(木)	10/12(月)	10/15(木) 臨時 10/22(木) 10/31(土) 入試合否判定
11月	11/12(木)	11/16(月)	11/19(木)
12月	12/10(木)	12/14(月)	12/17(木)
1月	1/14(木)	1/18(月)	1/21(木)
2月	2/12(金)	2/15(月)	2/18(木)
3月	3/13(土)	3/15(月)	3/18(木)

2020年度愛知教育大学・静岡大学共同教科開発学専攻 各委員会委員名簿

委員会・部会名	静岡大学			愛知教育大学		
	分野	R 2	氏名	分野	R 2	氏名
運営委員会・部会	教育環境学		村越 真	自然系教科学		岩山 勉
	教育環境学		村山 功	人文社会系教科学		野地 恒有
	人文社会系教科学	○	白畑 知彦	人文社会系教科学	◎	伊藤 貴啓
	人文社会系教科学		黒川みどり	自然系教科学		飯島 康之
	自然系教科学		熊倉 啓之	教育環境学		野平 慎二
	自然系教科学		小南 陽亮	人文社会系教科学		中野 真志
	創造系教科学		新保 淳	人文社会系教科学		丹藤 博文
	創造系教科学		小川 裕子	創造系教科学		古田 真司
	創造系教科学		紅林 秀治	自然系教科学		稲毛 正彦
	自然系教科学		郡司 賀透			
	創造系教科学		伊藤 文彦			
	創造系教科学		松永 泰弘			
学務委員会・部会	教育環境学		村山 功	創造系教科学	◎	野平 慎二
	自然系教科学		熊倉 啓之	創造系教科学		竹川 慎哉
	創造系教科学		小川 裕子	創造系教科学		石川 恭
	創造系教科学	○	紅林 秀治			
	教育環境学		中村美智太郎			
	人文社会系教科学		坂口 京子			
	創造系教科学		松永 泰弘			
入・試委員会・部会	人文社会系教科学		白畑 知彦	人文社会系教科学	◎	中野 真志
	創造系教科学	○	新保 淳	創造系教科学		石田 靖彦
	教育環境学		鎌塚 優子	自然系教科学		小谷 健司
	教育環境学		塩田 真吾			
	自然系教科学		郡司 賀透			
	創造系教科学		松永 泰弘			
学位審査委員会・部会	教育環境学		村越 真	人文社会系教科学	◎	丹藤 博文
	人文社会系教科学		黒川みどり	自然系教科学		飯島 康之
	自然系教科学	○	小南 陽亮	人文社会系教科学		伊藤 貴啓
紀要編集委員会・部会	教育環境学		香野 毅	創造系教科学	◎	古田 真司
	創造系教科学	○	村上 陽子	人文社会系教科学		高橋美由紀
				創造系教科学		石川 恭
広報部会	創造系教科学	◎	伊藤 文彦			
	創造系教科学		長谷川 慎			
教員人事委員会・部会	教育環境学		村越 真	自然系教科学	◎	稲毛 正彦
	教育環境学		村山 功	人文社会系教科学		伊藤 貴啓
	人文社会系教科学	○	白畑 知彦	自然系教科学		飯島 康之
	人文社会系教科学		黒川みどり			
	自然系教科学		熊倉 啓之			
	自然系教科学		小南 陽亮			
	創造系教科学		新保 淳			
	創造系教科学		小川 裕子			
	創造系教科学		紅林 秀治			
	自然系教科学		郡司 賀透			
	創造系教科学		伊藤 文彦			
	創造系教科学		松永 泰弘			

* ◎は委員長，○は副委員長

* 将来構想，カリキュラム改革等の対応は，運営委員会が行う。

Ⅲ. 学生の研究題目と指導体制

平成25年度入学生 共同教科開発学専攻 指導体制

(愛知教育大学に籍を置く学生)

分野	学籍番号	氏名	ふりがな	主指導教員 (主査)	副指導教員 (副査)	副指導教員 (副査)	副指導教員 (副査)	指導補佐教員	研究主題
創造系教科学	213D002	名倉 一美	なぐら かずみ	古田 真司	石川 恭	村越 真			幼稚園の「人間関係」領域における発達障害児の支援に関する研究

平成26年度入学生 共同教科開発学専攻 指導体制

(静岡大学に籍を置く学生)

分野	学籍番号	氏名	ふりがな	主指導教員 (主査)	副指導教員 (副査)	副指導教員 (副査)	副指導教員 (副査)	指導補佐教員	研究主題
人文社会科学	30440001	石川 芳恵	いしかわ よしえ	白畑 知彦	村越 真	稲葉みどり	野地 恒有		英語学習における語彙の指導方法
創造系教科学	30440003	大村 基将	おおむら もとまさ	紅林 秀治	小南 陽亮	岩山 勉		松永 泰弘	プログラミング初学者に対し、プログラミング教育を行う上での初学者が学ぶべきソフトウェア設計要素および開発プロセスの検討・評価

(愛知教育大学に籍を置く学生)

分野	学籍番号	氏名	ふりがな	主指導教員 (主査)	副指導教員 (副査)	副指導教員 (副査)	副指導教員 (副査)	指導補佐教員	研究主題
自然系教科学	214D004	小池 嘉志	こいけ よしゆき	飯島 康之	岩山 勉	熊倉 啓之	稲毛 正彦		算数科における創造性を育てる指導法の研究

平成27年度入学生 共同教科開発学専攻 指導体制

(静岡大学に籍を置く学生)

分野	学籍番号	氏名	ふりがな	主指導教員 (主査)	副指導教員 (副査)	副指導教員 (副査)	副指導教員 (副査)	指導補佐教員	研究主題
自然系教科学	30540003	佐藤 一	さとう はじめ	熊倉 啓之	小南 陽亮	岩山 勉		飯島 康之	高等学校数学科における「経済数学」リテラシー
教育環境学	30540004	杉山 元洋	すぎやま もとひろ	村山 功	村越 真	中野 真志			科学的概念の理解における学習者の問いの意義
教育環境学	30540006	二見 隆亮	ふたみ たかあき	村越 真	新保 淳	野地 恒有			生き方教育としての走教育の研究

平成28年度入学生 共同教科開発学専攻 指導体制

(静岡大学に籍を置く学生)

分野	学籍番号	氏名	ふりがな	主指導教員 (主査)	副指導教員 (副査)	副指導教員 (副査)	指導補佐教員	指導補佐教員	研究主題
人文社会科学	30640002	大西 洋	おおにし ひろし	黒川みどり	白畑 知彦	野地 恒有	伊藤 貴啓		旧徳川幕府から明治政府への条約改正に関する継承性—社会科教材開発における単元の核の社会的事象設定についての考察—
創造系教科学	30640003	室 雅子	むろ まさこ	小川 裕子	村山 功	石川 恭			生活力育成のための家庭科のあり方
人文社会科学	30640004	渡邊 明彦	わたなべ あきひこ	黒川みどり	白畑 知彦	野地 恒有			日本近現代における歴史教育の成立と教員養成に関する研究
教育環境学	30640005	渡邊 千佳	わたなべ ちか	村山 功	村越 真	倉本 哲男			「楽しい授業、わかる授業」の実現をめざす校内研修ファシリテーターの育成

(愛知教育大学に籍を置く学生)

分野	学籍番号	氏名	ふりがな	主指導教員 (主査)	副指導教員 (副査)	副指導教員 (副査)	指導補佐教員	指導補佐教員	研究主題
人文社会科学	216D001	中川 右也	なかがわ ゆうや	稲葉みどり	野地 恒有	村越 真			句動詞修得における認知言語学的アプローチ
人文社会科学	216D002	渡辺 芳朗	わたなべ よしろう	稲葉みどり	伊藤 貴啓	村越 真			新たな英語教育の実現のための教師養成支援システムの構築
創造系教科学	216D004	森 慶恵	もり よしえ	古田 真司	石川 恭	小川 裕子			学校における健康情報リテラシー育成の理論と方法に関する研究

平成29年度入学生 共同教科開発学専攻 指導体制

(静岡大学に籍を置く学生)

分野	学籍番号	氏名	ふりがな	主指導教員 (主査)	副指導教員 (副査)	副指導教員 (副査)	副指導教員 (副査)	副指導教員 (副査)	指導補佐教員	研究主題
教育環境学	30740001	磯崎 雄三	いそざき ゆうぞう	村越 真	村山 功	伊藤 貴啓				社会科地理的分野における読図を通しての思考力育成の手立て
人文社会系数科学	30740002	下田 実	しもだ みのる	黒川みどり	新保 淳	丹藤 博文			坂口 京子	「個」を「場」に導く指導に関する研究
人文社会系数科学	30740004	箱崎 雄子	はこざき ゆうこ	白畑 知彦	村越 真	伊藤 貴啓	村山 功	新保 淳		小学校英語教育における音声指導—超文節素的音声現象の習得を目指して—

(愛知教育大学に籍を置く学生)

分野	学籍番号	氏名	ふりがな	主指導教員 (主査)	副指導教員 (副査)	副指導教員 (副査)	副指導教員 (副査)	副指導教員 (副査)	指導補佐教員	研究主題
人文社会系数科学	217D002	市川 裕理	いちかわ ゆり	稲葉みどり	石川 恭	白畑 知彦				英語授業におけるLearning Communityの構築に関する研究
人文社会系数科学	217D003	神谷 裕子	かみや ひろこ	中野 真志	野地 恒有	小川 裕子				幼保小接続期カリキュラムに関する研究
人文社会系数科学	217D004	永井 弘人	ながい ひろひと	野地 恒有	伊藤 貴啓	黒川みどり				民俗学（民芸・工芸）を中心とした特別支援教育における教材開発
創造系数科学	217D005	田中 滉至	たなか こうじ	古田 真司	石川 恭	小川 裕子				単元「健康の社会的決定要因」の開発に関する研究

平成30年度入学生 共同教科開発学専攻 指導体制

(静岡大学に籍を置く学生)

分野	学籍番号	氏名	ふりがな	主指導教員 (主査)	副指導教員 (副査)	副指導教員 (副査)	指導補佐教員	指導補佐教員	研究主題
自然系教科学	30840001	荒谷 航平	あらや こうへい	小南 陽亮	丹沢 哲郎	岩山 勉	郡司 賀透		米国の科学カリキュラムにおける科学技術社会論的内容の変遷—物理学分野に着目して—
創造系教科学	30840002	河合 紳和	かわい のぶかず	新保 淳	紅林 秀治	伊藤 貴啓			音楽表現の補助装置としての身体運動 音楽的ニュアンスを伝達する指揮のメカニズムについて
人文社会系教科学	30840003	児玉 恵太	こだま けいた	白畑 知彦	黒川みどり	野地 恒有			文学教材の読解を通しての語い指導
創造系教科学	30840004	谷川 ゆり	たにかわ ゆり	新保 淳	紅林 秀治	野地 恒有	杉山 康司		運動習慣や生まれ月による体力差および性差を考慮した体育 授業についての研究
人文社会系教科学	30840005	中山 敬司	なかやま けいじ	黒川みどり	白畑 知彦	野地 恒有	伊藤 貴啓		静岡県小笠地域における被差別部落の研究—井上良一を事例 に—
教育環境学	30840006	満下 健太	みつした けんた	村越 真	村山 功	古田 真司	鎌塚 優子		学校のリスク認知から見る学校の安全の在り方の研究
創造系教科学	30840007	百瀬 容美子	ももせ ゆみこ	新保 淳	村越 真	野地 恒有			視覚障害児童・生徒の運動学習に寄与するイメージ生成指導 法の開発

(愛知教育大学に籍を置く学生)

分野	学籍番号	氏名	ふりがな	主指導教員 (主査)	副指導教員 (副査)	副指導教員 (副査)	指導補佐教員	指導補佐教員	研究主題
創造系教科学	218D001	酒井 達哉	さかい たつや	石川 恭	古田 真司	村越 真			体育授業場面におけるの教示「勇気づけ」に関する研究
人文社会系教科学	218D002	加藤 智	かとう さとし	中野 真志	野平 慎二	小川 裕子	坂口 京子		米国におけるサービス・ラーニングの理論と実践に関する研 究
人文社会系教科学	218D003	檜垣 栄慈	ひがき えいじ	野地 恒有	稲葉みどり	白畑 知彦			聴覚障害児の作文力に関する言語発達心理学的研究
自然系教科学	218D004	新鶴田道也	しんつるた みちや	岩山 勉	稲毛 正彦	熊倉 啓之			先端科学技術を活用した授業の開発—電子黒板による次代の 理科授業を創造する—
自然系教科学	218D005	マム チャンセン	まむ ちゃんせん	岩山 勉	稲毛 正彦	小南 陽亮			カンボジアの生物教育における物理的アプローチによる新規 教材の開発

平成31(令和元)年度入学生 共同教科開発学専攻 指導体制

(静岡大学に籍を置く学生)

分野	学籍番号	氏名	ふりがな	主指導教員 (主査)	副指導教員 (副査)	副指導教員 (副査)	指導補佐教員	指導補佐教員	研究主題
創造系教科学	30940001	青木 麟太郎	あおき りんたろう	紅林 秀治	飯島 康之	郡司 賀透			簡易手指動作分析システムを活用した手先の器用さと手指動作との関係に関する研究
創造系教科学	30940002	黒須 雅弘	くろす まさひろ	新保 淳		石川 恭			学校体育の短距離走における指導方法の開発に関する研究
自然系教科学	30940003	塩澤 友樹	しおざわ ゆうき	熊倉 啓之	村山 功	飯島 康之			学校数学における標本データに基づく統計的推論力の育成に関する研究：variationの認識に着目して
人文社会系教科学	30940004	島崎 治子	しまざき はるこ	白畑 知彦	村山 功	野地 恒有			大学英語リーディング授業において誤解力を高める指導方法の検証
教育環境学	30940005	望月 大	もちつき だい	村越 真	杉山 康司	伊藤 貴啓			社会科地理的分野の豪雨災害に関する防災授業の開発

(愛知教育大学に籍を置く学生)

分野	学籍番号	氏名	ふりがな	主指導教員 (主査)	副指導教員 (副査)	副指導教員 (副査)	指導補佐教員	指導補佐教員	研究主題
教育環境学	219D001	片岡 佑衣	かたおか ゆい	石川 恭	稲葉みどり	新保 淳	寺本 圭輔		幼児期における調整力の発達と体力向上に向けた運動遊びプログラムの開発
教育環境学	219D002	杉山 立	すぎやま りゆう	野平 慎二	高橋美由紀	村越 真			教育目標の共有に関する研究 MBB論を用いたカリキュラムマネジメント論の構想と実践
人文社会系教科学	219D004	中村 仁志	なかむら ひとし	中野 真志	野地 恒有	白畑 知彦			デューイ実験学校の歴史科教育論の構造とその形成基盤に関する研究
自然系教科学	219D005	大久保 博和	おおくぼ ひろかず	岩山 勉	稲毛 正彦	郡司 賀透			カンボジアの教科書との比較から探る科学的思考力を高める実験教材の開発－物理力学分野を中心として－
創造系教科学	219D006	澤田 育子	さわだ いくこ	古田 真司	飯島 康之	紅林 秀治			少人数の合唱で、遠くまで響く声を生み出す方法
教育環境学	219D007	武市 裕子	たけいち ゆうこ	野平 慎二	中野 真志	村越 真			子どもの心身の変化を視覚化するアセスメントツールの開発

令和2年度入学生 共同教科開発学専攻 指導体制

(静岡大学に籍を置く学生)

分野	学籍番号	氏名	ふりがな	主指導教員 (主査)	副指導教員 (副査)	副指導教員 (副査)	指導補佐教員	指導補佐教員	研究主題
教育環境学	3004001	筒井 昌博	つつい まさひろ	村山 功					校内研修の学校文化が維持されていく条件
教育環境学	30040002	三宅 昂子	みやけ たかこ	村山 功	鎌塚 優子	野平 慎二	村越 真		養護教諭のキャリアアステージ別の養護診断プロセスにおける思考の相違点およびプログラム開発
教育環境学	30040003	山元 薫	やまもと かおる	村山 功		中野 真志			知的障害教育における授業力を高めるツールの開発
人文社会系教科学	30040004	岡村 明夢	おかむら ひろむ	白畑 知彦		石川 恭			日本語を母語とする英語学習者の動詞の低位範疇化の習得
創造系教科学	30040005	高根 信吾	たかね しんご	新保 淳	杉山 康司	石川 恭			バレーボールにおけるシチュエーショントレーニングを導入した学習プログラムの開発とその学習効果
創造系教科学	30040006	古田 このみ	ふるた このみ	松永 泰弘		野地 恒有			受動歩行模型を用いた幼稚園から大学を対象とした教育プログラムの開発

(愛知教育大学に籍を置く学生)

分野	学籍番号	氏名	ふりがな	主指導教員 (主査)	副指導教員 (副査)	副指導教員 (副査)	指導補佐教員	指導補佐教員	研究主題
人文社会系教科学	220D001	西野 雄一郎	にしの ゆういちろう	中野 真志	野平 慎二	白畑 知彦			ユニウス・ラストロツプ・メリアムのミズーリ大学附属初等学校におけるカリキュラム開発に関する研究
人文社会系教科学	220D002	行田 臣	ゆくた じん	中野 真志	野地 恒有	坂口 京子			戦後新教育期における愛知県三河地域の教育――実験学校に着目して――
自然系教科学	220D003	胡 石帆	こ せきはん	飯島 康之	小谷 健司	紅林 秀治			小学校でのプログラミング教育におけるプログラミング的思考能力の測定と授業方法の影響
自然系教科学	220D004	露木 隆	つゆき たかし	岩山 勉	稲毛 正彦	郡司 賀透			自己調整学習を促す物理教材の開発と実践に関する研究

IV. 学生の研究計画と研究活動

西野 雄一郎

(学籍：愛知教育大学)

○研究テーマ

J.L.メリアムのミズーリ大学附属初等学校におけるカリキュラム実践に関する研究

○研究ポイント

米国の教育学者であり、ミズーリ大学附属初等学校の校長だった J.L.メリアム (Junius. L. Meriam) は、1905 年から 1924 年にかけて、現時点における子どもたちの学校外での生活を豊かにすることを初等教育の目的として、従来の教科を廃止し、「観察」、「遊び」、「物語」、「手仕事」の 4 つの学科で組織されるカリキュラムを開発して実験に着手した。本研究は、メリアムの特徴的なカリキュラム実践とその影響について明らかにすること、また、それによって当時の教育改革の実態解明の一助とすることを目的とする。

○キーワード

J.L.メリアム、ミズーリ大学附属初等学校 進歩主義教育

1 博士論文の計画

本研究では、上記の研究目的を達成するために、以下の 4 つの作業課題を設定する。第 1 はメリアムが特徴的なカリキュラム開発に至る問題意識について明らかにすることであり、第 2 はメリアムのカリキュラム実践とその成果を明らかにすることであり、第 3 はメリアムのアメリカの史的文脈における位置付けや影響について明らかにすることであり、第 4 はメリアムのカリキュラム実践が我が国の教育実践に与えた影響について明らかにすることである。博士課程 1 年次の研究活動は以下の通りである。博士課程 2 年次においては、研究主題に関連する学会誌への論文投稿を目指して論文執筆 を中心に取り組む予定である。

2 本年度の研究活動

(1) 論文

西野雄一郎「ミズーリ大学附属初等学校における J.L.メリアムの実験に至る問題意識」『愛知教育大学研究報告 (教育科学編)』第 70 輯、愛知教育大学、2021 年。

西野雄一郎「J.L.メリアムによる伝統的カリキュラムへの批判」『愛知教育大学教育実践センター紀要』第 6 号、愛知教育大学、2021 年。

西野雄一郎「幼児期における『協同性』の生活科学習への接続に関する研究—プロジェクト・アプローチにおける『協同性』からの示唆を生かして—」『せいかつ&そうごう』第 28 号、日本生活科・総合的学習教育学会、2021 年。

(2) 学会発表

西野雄一郎「J.L.メリアムによるミズーリ大学附属初等学校の学科『観察』に関する研究」第 31 回日本カリキュラム学会 (琉球大学 WEB 大会)、2020 年。

西野雄一郎「J.L.メリアムによるミズーリ大学附属初等学校におけるカリキュラム実践 —学科『物語』に着目して—」アメリカ教育学会第 32 回大会 (誌上及びオンライン大会)、2020 年。

西野雄一郎「幼児期の探究的な活動を促進する環境構成に関する研究」日本生活科・総合的学習教育学会全国大会第 28 回大会、2020 年。

行 田 臣

(学籍：愛知教育大学)

○研究テーマ

戦後新教育期における愛知県三河地域の教育—実験学校に着目して—

○研究ポイント

戦後新教育期における愛知県三河地域における教育の特色を実験学校の取り組みを通して明らかにすることを目的とする。

○キーワード

戦後新教育期 実験学校 愛知県三河地域

1 博士論文の計画

博士論文の構成として以下のように考えている。

①愛知県における軍政部の行った教育改革について行政側の視点から明らかにする。

- ・「愛知県実験学校協議会」（全3回：1947年6月・7月・9月）での指導内容の分析
- ・地区実験学校協議会の取り組みを、岡崎市立六名小学校『トライ・アウト・スクール協議会記録』、春日井市立勝川小学校『トライ・アウト・スクール協議会記録』をもとに分析

②軍政部、県からの指導を受け、愛知県の実験学校がどのような実践を展開したのか、プランを単元レベルで分析し、その特色を明らかにする。また、地域全体の傾向を明らかにする。そのために、三河地域と尾張地域の特色も比較する。取り上げる学校は以下の通りである。

- ・三河地区6校

豊川市立八南小学校、蒲郡市立塩津小学校、岡崎市立六名小学校、愛知教育大学附属岡崎小学校、新城市立千郷小学校、西尾市立西野町小学校

- ・尾張地区3校

名古屋市立幅下小学校、名古屋市立平和小学校、愛知学芸大学愛知第一師範学校春日井附属小学校

③実験学校の地域に与えた影響を明らかにし、その成果を検証する。

- ・愛知県三河地域で活動を行っている教育団体「三河教育研究会」に着目し、実験学校で実践された教育が、現在へと継承されているのかという視点から分析を行う。

2 本年度の研究活動

本年度は、学会発表を2件行った。具体的には以下の通りである。

- ・行田 臣（2020）「戦後新教育期における生活教育実践の特色—愛知教育大学附属岡崎小学校の分析—」日本生活科・総合的学習教育学会第29回大会
- ・行田 臣（2020）「愛知県南設楽郡千郷小学校の『生活学習の構想』—愛知学芸大学第一師範学校春日井附属小学校からの影響—」日本社会科教育学会第70回大会

胡 石帆

(学籍：愛知教育大学)

○研究テーマ

Scratch を利用したプログラミング初期教育補助教材の開発

○研究ポイント

Scratch 授業の中プログラミングデザイン意識を加え、学習者がプログラミングを学習する時の知らないコマンドの学習や発想の手助けできる補助教材を開発するを目的としている。

○キーワード

Scratch、プログラミング教育、補助教材開発

1 博士論文の計画

- 1) 2021年4月から2021年6月まで：2021年2-3月で開発した教材を使用した授業で収集したデータの整理分析と授業内容や補助教材改良の検討
- 2) 2021年10月まで：2021年2-3月実践授業の分析論文を完成と発表
- 3) 2021年12月まで：補助教材の改善とオンラインバージョンの開発
- 4) 2022年4月まで：第二回補助教材を利用した実践授業を実行、補助教材の有効性を確認
- 5) 2022年10月まで：二回の実践授業データと開発した補助教材を博士論文を完成と発表

2 本年度の研究活動

- 1) プログラミング授業と Scratch 授業関連の論文・教材の収集と研究。
- 2) オンライン授業の特徴・問題点に関する論文の収集。
- 3) プログラミング (Scratch) 初期教育補助教材の作成。
- 4) プログラミングのオンライン授業の授業計画を作成。
- 4) 2021年2月から3月まで8回のプログラミングオンライン形式授業で、教育補助教材を利用し、プログラミング未経験者二名を対象として、プログラミング授業を行い。

露 木 隆

(学籍：愛知教育大学)

○研究テーマ

電磁気学分野の概念形成を促す教材開発とその実践

○研究ポイント

本研究では,高等学校の電気と磁気の分野において導電性粘土を用いて科学概念を形成する指導プログラムを作成し,その実践を通して効果の検証を行うことを目的とする。

○キーワード

導電性粘土, 電磁気学, 電気抵抗, ホール効果, 固体電池

1 博士論文の計画

(1) 導電性粘土の機械的特性について

導電性粘土の教材としての可能性を検証するため,導電性粘土の機械的特性を明らかにする。具体的には,食塩の配合率と抵抗率の関係,断面積と抵抗値の関係,長さとの抵抗値の関係,ホール定数,電気のキャリア,固体電池使用時の陽極と陰極での化学反応等を明らかにし,論文にまとめる。

(2) 電気抵抗に関する概念形成を促す授業の開発

電気抵抗に関する誤概念について,その抽出と実験を通して生徒が誤概念に気づき,修正を行うための教材の開発及び指導プログラムの検討を行い,実践した。電気抵抗に関する事前調査から,「電気抵抗の体積が大きくなるほど抵抗値は大きくなる」「抵抗値は電気抵抗の長さが長いほど大きくなり,断面積には依存しない」といった誤概念が明らかになった。次に,導電性粘土を用いた実験,及び班討議を通して生徒は科学的に正しい概念を導き出すとともに,科学概念と誤概念の差異の対照を行い,誤概念の獲得過程を明確化した。また,事後調査,遅延調査によって電気抵抗に関する誤概念が修正され,形成された科学概念は維持されることが確認し論文にまとめた。

(3) ホール効果に関する概念形成を促す授業の開発

導電性粘土を用いてホール効果を観察する実験を行う。実験を通し,キャリアの正負の判定や,単位体積当たりのキャリアの数やキャリアの速さを測定し,ホール効果に関する科学概念の形成を行い,指導プログラムの有効性を検証し論文にまとめる。

(4) 導電性粘土を用いた固体電池の探究活動に関する研究

導電性粘土を用いて固体電池を製作し,実験を行う。実験を通し,導電性粘土内で起こる化学反応についてそのメカニズムの解明を行い,論文にまとめる。

2 本年度の研究活動

- ・「導電性粘土を用いた電磁気学における自己調整学習－「電気と磁気」新教材の開発と活用－」日本理科教育学会 第70回全国大会 (2020)
- ・「電気抵抗に関する素朴概念の抽出 電気抵抗に関する概念形成を促す授業の開発に向けて」日本理科教育学会 北海道支部大会 (2020)
- ・「生徒の理科学習とキャリア形成を支援する ICT 活用の実践」日本科学教育学会 日本科学教育学会年会論文集 44(0), 619-620, 2020

筒井 昌博

(学籍：静岡大学)

○研究テーマ

校内研修の学校文化が維持されていく条件

○研究ポイント

学校において学力向上や授業改善などの取組を始めても、長期に渡って継続されずに終わってしまうことがよくある。なぜ必要な取組が継続されず、明確な理由もないまま自然消滅してしまうのか。どうしたら始めた取組を継続させることができるのか。これを学校文化の形成・維持の問題と捉え、それを実現する条件を明らかにする。

○キーワード

校内研修、学校文化、ツール、学習観

1 博士論文の計画

(1) 研究が依拠する仮説

先行研究において、校内研修の効果や教員の成長については扱われているが、校内研修を学校文化の一部と捉えてそれが維持されていく条件に触れたものはない。そこで、学習理論の社会実装について論じた研究（飯窪，2016）から、実装の条件についての3つの仮説を援用し、それに自ら考案した仮説を加えた。これらの仮説を直接検証するのではなく、それに基づいて校内研修へ介入を行うことにより、実践の指針としての仮説の有効性を検討する。

仮説1 実践と理論を媒介として、教室の文脈に合わせて実践者自身が実践を修正したり、教材を開発したりすることを促すような教材の型やツールを提供すること。

仮説2 基礎となる学習理論と異なる学習観を持った実践者に対しても、学習理論のエッセンスが了解され、学習観の変容を支えるための仕組みを備えること。

仮説3 実践と省察のサイクルを実践者と研究者が協調的に回し続けることによって、研究に参加する個々の実践者・研究者が「人はいかに学ぶか」についての考えを見直し、それに基づいて個々の授業デザインや共通の授業の型、ツール、さらにはシステムそれ自体も見直し、実践を継続的に改善させることのできる場を設けるための試みを続けること。

仮説4 児童生徒も学校を構成するメンバーであり、児童生徒の信念と行動が教員の信念と行動に影響し、その相互作用で学校文化が維持・発展されること。

(2) 研究の方法

研究対象校の校内研修へ介入を行い、その前後で教員の信念や行動がどう変化するかを見ることにより、4つの仮説に依拠した介入の効果を検証する。

研究対象校は、既に学習科学に基づいた学習観と授業スタイルを導入して授業改善の取組を行っているY市立O中学校である。学習観は、「人は対話を通して自分の学びをよりよく創造することができる」というもので、対話による知識の創造を意味している。観察対象者としては、4月に赴任してきた教員及び昨年度からの留任者の中で学習観や授業スタイルが学校の方針と一致していない教師主導の授業を行う教員とする。この両者において学校文化の影響が見えやすいと判断した。研究期間は、平成元年度から2年度の2年間である。

(3) 博士論文の構成案

第1章 問題関心と研究の概要、第2章 実践の理論を媒介するツールの有効性（仮説1）

第3章 学習観の変容を支える仕組みのあり方（仮説2）、第4章 外部講師の与える影響（仮説3）

第5章 生徒の変容が教師に与える影響（仮説4）、第6章 周辺参加者から十全参加者へ

第7章 総合考察

2 研究活動

今後、得られたデータを詳細に分析して、仮説1から仮説3までの検証、及び仮説4の傍証を行いたいと考える。また、校内研修の学校文化が維持・継続される条件の中で、逆に阻害要因としてどのようなものが考えられるかも検討していきたい。

山元 薫

(学籍：静岡大学)

○研究テーマ

知的障害教育における授業力を高めるツールの開発

○研究ポイント

- ① 知的障害教育における基盤的な課題として整理している
- ② 知的障害教育における教科の内容をと発達段階との関係を明確にしている
- ③ 開発したツールは、「特性」「発達」「教科」の3側面を持ち合わせ、知的障害教育における専門性と授業力の両面に効果をもたらすことが期待される

○キーワード

知的障害教育、特性、発達、授業づくり

1 博士論文の計画

論文に関する研究計画を図1に示す。

第1章では、知的障害特別支援学校における規模の拡大による授業づくりに関する課題と教育課程の構造上の課題を明らかにする。

第2章では、知的障害のある児童生徒を対象とした教科の内容について、発達指標に照合して整理することで、知的障害教育における授業づくりに必要な実態把握、目標と内容の設定、教材化を可能にするツールの開発を行う。

第3章では、開発したツールの有効性について授業づくりプロセスに沿って検証し、知的障害特別支援学校教員によるツールの可能性について検証する。

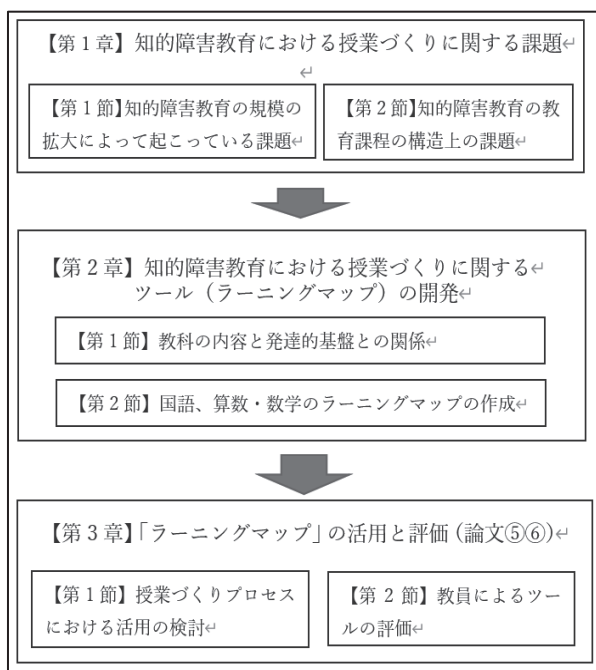


図1 研究構想図

2 本年度の研究活動

これまでの研究活動として、第1章第1節「知的障害教育の規模の拡大によって起こっている課題」、第2節「知的障害教育の教育課程の構造上の課題」については、論文にまとめ投稿した。

本年度は、第58回日本特殊教育学会（WEB開催）にて、シンポジウム「知的障害教育における国語、算数・数学科の指導Ⅰ」を企画開催し、ツールの有効性について実践例（附属特別支援学校、県立特別支援学校所属教諭の実践）を基に報告し、指定討論者である東京学芸大学名誉教授菅野敦氏より学習指導要領（平成29年告示）との関連、知的障害教育の歴史的文脈における本研究の価値について言及があった。また、同学会にて、シンポジウム「知的障害教育における授業づくり」にて、学習指導要領（平成29年告示）改訂の視点から指定討論を行った。第2章第1節「教科の内容と発達の基盤との関係」について、教材学研究第32巻に投稿し採択となった。

岡村 明夢

(学籍：静岡大学)

1 博士論文の計画

(1) 研究テーマ 日本語母語話者の英語非対格動詞の過剰受動化の誤り

(2) 研究の目的

英語を第二言語として学ぶ学習者が自動詞である非対格動詞を過剰受動化して産出する誤りが観察されている。この現象に対しこれまでの研究では以下の3つの要因が提案されている。

- a) 主語の有生性の影響：主語が無生物の場合、有生物よりも過剰受動化が起こりやすい。
- b) 連想される動作主や外的な要因の有無：動作主が連想される文脈では、動作主が存在しない文脈よりも過剰受動化が起こりやすい。
- c) 動詞の完結性の影響：動詞の完結性が強い動詞ほど過剰受動化が起こりやすい。

しかし、これら複数の要因を比較した研究はあまり行われておらず、どの要因が最も強く影響するのか分かっていない。そこで、本研究では以下のリサーチクエストンを立てた。

リサーチクエストン：

上に挙げた3つの要因のうち、どの要因が過剰受動化の誤りに最も強く影響するのか。

(3) 研究の計画

上のリサーチクエストンについて明らかにするために、本研究では以下の3つの実験を想定している。

実験1

目的：主語の有生性と連想される動作主のうち、どちらがより強く過剰受動化に影響するのかを調査する。

方法：実験では4タイプの実験文を用意し、実験参加者にはそれぞれのタイプにおいて、自動詞用法と受動態のどちらが適切かを判断してもらう。

タイプ1：主語が無生物+動作主が連想される文、タイプ2：主語が無生物+動作主が連想されない文、タイプ3：主語の有生物+動作主が連想される文、タイプ4：主語の有生物+動作主が連想されない文。

実験2

目的：主語の有生性と動詞の完結性のうち、どちらがより強く影響過剰受動化に影響するのかを調査する。

方法：次の4タイプの実験文を用いる。タイプ1：主語が無生物+完結性が強い動詞、タイプ2：主語の無生物+完結性が弱い動詞、タイプ3：主語が有生物+完結性が強い動詞、タイプ4：主語が有生物+完結性が弱い動詞。

実験3

目的：連想される動作主と完結性のうち、どちらがより強く過剰受動化に影響するのを調査する。

方法：次の4タイプの実験文を用いる。タイプ1：動作主が連想される+完結性が強い動詞、タイプ2：動作主が連想される+完結性が弱い動詞、タイプ3：動作主が連想されない文+完結性が強い動詞、タイプ4：動作主が連想されない文+完結性が弱い動詞。

2 研究の経過及び今後の展開

2020年度では実験1の実験文を作成し、2021年度に実験1を実施した。現在は実験1に関する論文を執筆している。また、実験2の実験文の作成も進めている。2022年度7月までに全ての実験を実施し、2020年8月以降は博士論文の執筆に努める予定である。

高 根 信 吾

(学籍：静岡大学)

○研究テーマ

バレーボールにおけるシチュエーショントレーニングを導入した学習プログラムの開発とその学習効果

○研究ポイント

バレーボールを教材とした授業において学習目標に合致したゲームを生起させるための学習プログラムを開発する研究である。そのために、バレーボールの特性を明確にすること、有効なパス練習などのメニューを開発すること、それを授業において実践すること、その学習効果を検証することを企図している。

○キーワード

バレーボール、学習プログラム、シチュエーショントレーニング、状況判断

1 博士論文の計画

論文の主旨：バレーボールの本質的な概念的検討により競技特性を明らかにする。そして、その競技特性を体現化しうる学習プログラムを開発し、それらを高等学校での授業において実践する。その際、学習効果の有効性や主体的・対話的で深い学びの実現を検証する。具体的には、ゲームにおける状況判断の様子や不利益の視点からの主体的な取り組みの様子について生徒の思考や判断過程を探る。

論文の構成：序章

第1章 バレーボールの競技特性

第2章 バレーボールの特性を体現化する教材化

第3章 学習プログラムの開発と学習効果の検証

第4章 学習プログラムの再開発と学習効果の再検証

結章

研究計画：第1章は教科専門（スポーツ哲学）として、競技としてのバレーボールを対象とした考察を行う。続く第2章は教科教育（体育科教育学）として、教材としてのバレーボールに着目し、第1章で明らかとなった競技特性を体現化させる教材化を試みる。そして、第3章は教科学および教育環境学、教科開発学として、学習プログラムの開発とその学習効果を検証する。さらに、第4章では第3章で実践したそれまでの成果をフィードバックして、学習プログラムの再開発とその学習効果を再検証する。今年度は、第1章に関しては教材開発の前提としての概念的検討を下記①の研究で進め、第2章に関しては授業における練習とゲームの間の隔たりについての考察を下記②の研究で進めた。次年度には、第1章および第2章についてさらに研究を進めるとともに、第3章については開発した学習プログラムを高等学校で授業実践し、その有効性と学習効果を検証する。また、第4章については第3章の成果を受けて、改善した学習プログラムを授業において再度実践し、再開発と再検証を行う。

2 本年度の研究活動

【研究論文】

- ① 高根信吾「バレーボールの競技特性に関する研究—差異論的アプローチによる定義化の試み—」

『バレーボール研究』第23巻第1号（2021年6月発行予定）投稿中

- ② 高根信吾・塚本博之「授業における練習とゲームの現状把握および両者間にみられる隔たりの指摘—女子大学生の授業におけるバレーボールのゲームでのボール移動に着目して—」

『バレーボール研究』第23巻第1号（2021年6月発行予定）投稿中

古田 このみ

(学籍：静岡大学)

○研究テーマ

受動歩行模型教材を用いた幼稚園から大学を対象とした教育プログラムの開発

○研究ポイント

受動歩行模型教材を用いた探究活動による科学的探究の力の育成

○キーワード

受動歩行，科学的探究，問題解決，探究活動，ものづくり

1 博士論文の計画

近年，科学的探究の力の育成が強く求められている。本研究では，改良実験や歩行原理の探究などの科学的な探究を含む受動歩行模型を取り上げる。受動歩行は，位置エネルギーを運動エネルギーに変換して斜面を移動する歩行であり，歩行ロボットの機構としても研究が進められている。本研究で開発した教材は，幼稚園から大学の学習内容を含み，幼稚園から大学を対象とした実践の分析から，全ての学習過程において興味・関心や自発的な探究を引き出すことを明らかにした。次年度は，幼稚園から大学を対象とした科学的探究の力の評価項目の作成を行い，幼稚園から大学を対象として本教材を用いた探究活動を実施する。実践の分析から，本教材を用いた活動による科学的探究の力の育成へのつながりを明らかにする。

2 本年度の研究活動

[論文]

- 1) 松永泰弘・古田このみ：紙製4足受動歩行模型を用いた小学生対象の授業実践，日本産業技術教育学会誌(印刷中)
- 2) 松永泰弘・古田このみ：たわみ変形により歩行する4足受動歩行模型の材料と大きさに関する研究，日本産業技術教育学会誌(査読中)

[国際会議]

- 1) Konomi FURUTA & Yasuhiro MATSUNAGA : Influence of the Material and Size on the Walking Motion of the Quadrupedal Passive Walking Toy, International Conference on Technology Education in Asia-Pacific Region (2021)
- 2) Yasuhiro MATSUNAGA, Konomi FURUTA & Miyu Adachi : Web support for make-play-inquiry activities during long-time closure of school because of COVID-19; 'Unity in Diversity' in learning group by use of moving toys, International Conference on Technology Education in Asia-Pacific Region (2021)

[学会発表]

- 1) 古田このみ・松永泰弘：紙製4足受動歩行模型教材を用いた幼児教育におけるものづくり活動，日本産業技術教育学会第63回全国大会 講演要旨集，p.17(2020)
- 2) 古田このみ・松永泰弘：こども園における動くおもちゃのものづくり探究活動－紙製4足受動歩行模型と紐を伝う木製模型－，第38回日本産業技術教育学会東海支部大会 講演論文集，pp.1・4(2020)

(他2件)

片岡佑衣

(学籍：愛知教育大学)

○研究テーマ

幼児期における運動遊びの習慣化に向けた方略

～運動遊びによる調整力の向上を目指して～

○研究ポイント

本研究は、幼児期における調整力の発達について調査し、遊具を取り入れることが調整力向上のための運動遊びとしての効果があるのか、そして子どもたちが自発的に運動遊びに取り組むことに結びついていくのかを明らかにすることを目的としている。

○キーワード

調整力、幼児期、運動遊び、体力・運動能力の向上

1 博士論文の計画

①幼児期における調整力の発達について

幼児を対象として全身反応時間（T4）を動作開始時間（T1）、抜重時間（T2）、動作時間（T3）の局面別に分けて年齢差の比較を行ったところ、T1とT4に年齢間で有意な差がみられた。このことから、視覚刺激を受容してから動作を開始するまでの時間である動作開始時間を測定することは、脳・神経系の発育・発達の評価につながる可能性があり、全身反応時間を測定することは、発育・発達の差だけでなく、運動経験の違いも結果に関わる可能性がある。これは、幼児期が神経系機能の発達が著しく、タイミングよく動いたり力の加減をコントロールしたりするなど、運動を調整する能力が顕著に向上する時期であるという報告を裏付ける結果となった。

②【実験1】遊具（ホッピングマット）を取り入れることが調整力向上のための運動遊びとしての効果があるのか

遊具を取り入れる園（5歳児）60名と遊具を取り入れない園（5歳児）60名を対象として、遊具を取り入れることが調整力向上のための運動遊びとして効果があるのかを検証する。来年度、幼稚園で1ヶ月程度の予備実験を行い、その結果を分析後、期間を延ばして半年での実験を実施する。

③【実験2】園に遊具を取り入れることは子どもたちが自発的な運動遊びをすることに結びついていくのか（子どもたちの行動変容をみる）

ホッピングマットを設置し、園内での運動遊びへの取り組み（活発度）の変化について、全身反応時間の測定やGPS付きの活動量計等での測定（移動距離、移動矩形面積、停滞時間等）を実施する。

2 本年度の研究活動

【投稿論文】

片岡佑衣・寺本圭輔・村松愛梨奈「幼児期における全身反応時間の年齢差の検討および脚伸展筋力との関係」、発育発達研究, 87, 1-9, 2020.5

杉 山 立

(学籍：愛知教育大大学)

○研究テーマ

問題解決学習のカリキュラムマネジメントの構想と実践

○研究ポイント

問題解決学習のカリキュラムマネジメントがどのように組織され、運営されるべきかを愛知県の三河教育研究会の「子どもありきの問題解決学習論の実践校からカリキュラムマネジメントの実際を調査し、問題解決学習のカリキュラムマネジメントモデルを構想し、実践する。

○キーワード

カリキュラムマネジメント 問題解決学習 組織文化論

1 博士論文の計画

問題解決学習が組織文化として影響をもっている学校において、教育課程はどのような思考様式によって組織されるのか。また、問題解決学習は学校にどのような組織構造をもたらすのかアンケート調査やインタビュー調査によって明らかにし、問題解決学習のカリキュラムマネジメントをモデル図化する調査を行う。

そのために教育課程の構成因子を先行研究から整理し、アンケート調査の質問項目を構成する。そのアンケートの質問紙を用い、問題解決学習を視点に分析することによって、問題解決学習のカリキュラムマネジメントにおける教育課程構想の思考様式を調査する。

2 本年度の研究活動

6月 日本カリキュラム学会 自由発表
「カリキュラムマネジメントの「理論と実践」の再検討」

12月 学校改善学会紀要第3号論文投稿

1月 学校改善学会 自由発表
「教育の地域性がカリキュラムマネジメントに与える影響に関する研究」

第一章 研究の背景と目的

- 1 日本のカリキュラムマネジメント論の史的展開
- 2 「効果的学校」の研究の展開に見る、学校改善の仕組みと定義

第二章

問題解決学習論のカリキュラムマネジメントの先行研究の総括

- 1 問題解決学習論の史的展開
- 2 問題解決学習の定義と実践手法
- 3 問題解決学習のカリキュラムマネジメント

第三章

「教育の地域性がカリキュラムマネジメントに与える影響に関する研究—愛知県三河地区の問題解決学習と学校の組織文化に関する事例的検討」(調査1)

第四章

問題解決学習のカリキュラムマネジメントにおける教育課程構想の思考様式に関する調査(調査2)

第五章

問題解決学習のカリキュラム・マネジメントモデルを導入した実践と評価

第六章 研究の成果と課題

- 1 研究の成果
- 2 研究の課題

中 村 仁 志

(学籍：愛知教育大学)

○研究テーマ

「デューイ実験学校の歴史科教育論の構造とその形成基盤に関する研究」

○研究ポイント

米国の教育学者・哲学者ジョン・デューイ (John Dewey) は、シカゴ大学附属小学校、通称「デューイ実験学校 (Dewey's Laboratory School)」の開設・運営に携わったことで知られている。デューイ実験学校の歴史科は理科とともにカリキュラム統合の基盤となった教科であり、子どもの興味や知的発達に配慮され、子どもの生活や他教科との「相関」が図られた。

本研究では、デューイ実験学校の教師の歴史科教育論を主たる分析対象とし、その構造と形成基盤を解明することを目的とする。

○キーワード

ジョン・デューイ、デューイ実験学校、歴史教育

1 博士論文の計画

本研究では、上記の研究目的を達成するために、次の4点の作業課題を設定し、研究を進めてゆく。第一に、20世紀への転換期米国における初等歴史科教育論の展開とその課題の分析、第二に、デューイ実験学校の教師の歴史科教育論形成の基盤となった諸学問の理論の分析、第三に、デューイ実験学校の教師の歴史科教育論の構造と実践の具体の分析、第四に、デューイ実験学校における歴史科と他教科等の「相関」の論理と教師の協働の分析である。

博士課程1年次は、研究主題に関連する学会において、合計3本の研究発表を行った。また、日本デューイ学会の学会誌に投稿した論文が掲載されることとなった。

博士課程2年次である今年度は、アメリカ教育学会第32回大会で「シカゴ大学時代のデューイの教授過程論の構造とその思想的基盤」と題する研究発表を行い、『生活科・総合的学習研究』に「シカゴ大学時代のデューイの教育論における『適応』の過程とその心理学的基盤」と題する論文を投稿した。

博士課程3年次である来年度は、研究主題に関連する全国レベルの学会の学会誌への論文投稿を目指し、論文執筆を中心に取り組む予定である。

2 本年度の研究活動

(1) 論文

中村仁志 (2021) 「シカゴ大学時代のデューイの教育論における『適応』の過程とその心理学的基盤」愛知教育大学生活科教育講座『生活科・総合的学習研究』(印刷中)。

(2) 学会発表

中村仁志 (2020) 「シカゴ大学時代のデューイの教授過程論の構造とその思想的基盤」アメリカ教育学会第32回大会。

大 久 保 博 和

(学籍：愛知教育大学)

○研究テーマ

科学的概念の定着を促す実験教材の開発と指導方法の検討

○研究ポイント

誤概念の改善を目的とした葛藤場面で活用できる実験教材の開発と指導方法を提案し、その効果と課題を検討する。

○キーワード

誤概念、葛藤場面、科学的概念、教材開発

1 博士論文の計画

物理分野での誤概念は力学・電磁気分野で多く報告されている。本研究では、高等学校「物理基礎」における「運動の法則」と「電気」の学習内容の中から「運動の第二法則 ($ma=F$)」と「ジュール熱の発生」の二つの項目を取り上げる。それぞれの項目で、誤概念の改善に向けた葛藤場面を設定した教材を開発し、内容の異なった二つの項目に共通する指導法を用いて授業実践し、その効果を検証することを目的としている。

1 年次は「運動の法則」に関する教材を作成した。2 年次は開発した電磁気分野における教材を用いて授業実践を行った。実践ではデータの収集には至ったが、事前の実態調査、検証の方法が不十分であることがわかった。3 年次は、再度二つの項目について、先行研究における実態調査の結果、教材の開発や指導(授業)方法、誤概念の改善を評価する指標を分析・検証する予定である。さらに、研究目的に沿った調査問題を作成し、試行調査を実施して実態の調査と調査問題の妥当性を検証する。これらの調査結果を基に、1, 2 年次に開発した教材を誤概念の改善に向けた葛藤場面を設定した実験教材として再構成し、その指導方法を提案する。その後、開発した教材と指導法を用いて研究目的に沿った調査、実践を実施し、その効果と問題点を検討する。発展的課題として、海外の国との比較調査も考えている。子どもの持つ素朴概念(誤概念)は、自然環境、社会環境、言語、文化によって異なることが知られている。環境の異なる国(カンボジア、モンゴル)で調査、実践し、共通点や相違点を分析し、広く活用することができる教材、指導方法として改善を進めたい。論文は3 年次の研究過程に沿って構成しまとめる予定である。

2 本年度の研究活動

・論文

探究活動「新たな課題を発見する経験」に向けた教材

ー理数探究でカーボン・ペーパーを電気抵抗の教材として活用した実践からー

教科開発学論集 第9号 2021 45-55

澤 田 育 子

(学籍：愛知教育大学)

○研究テーマ

遠くに響く歌声の発声法に関する研究

○研究ポイント

シンガーズ・フォルマントを増強させるための指導方法の検討とその有効性の実証実験

○キーワード

Singer's formant(シンガーズ・フォルマント)、発声指導、共鳴腔、呼吸法

1 博士論文の計画

本研究の目的は、「遠くに響く歌声」の音響的特徴であるシンガーズ・フォルマント*を増強する歌唱指導法を探究し、新たな視点で歌唱指導することを提案することである。遠くに響く声を科学的に分析すると、シンガーズ・フォルマントと呼ばれる音響特徴がみられる。多くの研究者がこのシンガーズ・フォルマントについての解明や実験・分析を行っているが、どのように具体的指導をすればシンガーズ・フォルマントが増強されるか、いまだ明確になっていない。そこで、共鳴腔の指導と呼吸法の指導を行い、シンガーズ・フォルマントの増加率を比較する実験を実施した。この実験結果をもとに、共鳴腔による指導の有効性を実証したい。

※シンガーズ・フォルマントとは、「よく共鳴する」歌唱に見られ、2,500～3,200Hzの領域に見られる山形の音響スペクトルのこと。

論文構成は以下のとおりである。

序章 本研究の目的及び論文構成

第1章 遠くに響く歌声についての文献調査

第1節 解剖学・生理学の分野

第2節 音声学の分野

第3節 音響学の分野

第4節 独唱・合唱発声について

第2章 高等学校の教師へのアンケート調査

第1節 全体集計と自由記述について

第2節 教師の属性と独唱・合唱の発声

第3章 高校生の歌声の周波数測定による実験

第1節 予備実験

第2節 実験

第4章 研究成果と今後の課題

2 本年度の研究活動

(1)レビューの投稿

「合唱で、遠くに響く声に関する文献的考察」を日本声楽発声学会に投稿し、研究報告として掲載。

日本声楽発声学会『声楽発声研究』No.11, pp.16～26

(2)質問紙調査研究論文の投稿

「高等学校の音楽教師の歌唱指導に関する調査研究」(2021)を教科開発学論集, 9(査読有)に掲載。

(3)実験研究論文の投稿

「シンガーズ・フォルマントを増強する発声法に関する実験研究」を音楽教育系の学会誌に投稿予定。

発声指導とグラフの変化の因果関係を明確にして、指導の有効性を実証する。

武 市 裕 子

(学籍：愛知教育大学)

○研究テーマ

子どもの心身の変化を視覚化するアセスメントツールの開発

○研究ポイント

本研究では、子どもの変化を捉えるツールとして養護教諭が成長曲線を用いることの有効性を測る。さらに、子どもの変化を見取ることができるアセスメントシートを作成し、成長曲線と併用することで、学級担任が行う教育相談の支援となるのか、教員と子ども双方からの効果を測定する。

○キーワード

成長曲線、養護教諭のアセスメント、教育相談

1 博士論文の計画

いじめ自殺が社会問題化し、事故が起こるたびに「学校は気付いていたのか」という議論が持ち上がる。早期発見のためには、訴えだけでなく身体化・行動化される「子どものサイン」を見逃さないことが大切とされる。そこで、私は成長曲線に着目した。小児医療の臨床現場では成長曲線をもとにした心因性疾患や虐待の早期発見について報告されており、不登校などの心の健康問題や小児慢性疲労症候群と成長曲線の関連についても事例から検証され、その有用性が確立されている。折しも、学校保健安全法施行規則の改訂に伴い、定期健康診断において、成長曲線を積極的に活用することが重要となった。よって、学校現場においても子どもたちの心の問題の早期発見に成長曲線を活用できる可能性が高いと考えられる。成長曲線の変動から子どもの心身の変化を捉えることは、客観的な資料から子どもを注意深く観察するための手掛かりとなり得る。成長曲線と日常的な観察等による「養護教諭のアセスメント」を教育相談に活用する本研究によって、教員が子どもの変化に早期に気付くきっかけを得ることが可能となり、組織的な早期対応につながると考える。その結果、子どもの学校適応感が上がり、不登校傾向や頻回来室などの不適応行動に対する予防的介入となるかを検証したい。研究1では、養護教諭が子どもを観察する視点を検討する。先行文献及び経験豊富な養護教諭への聞き取りを分析し、日常的にどのような視点から子どもの状態を捉えているのかを明らかにする。その上で、児童生徒理解に必要なアセスメントの視点を挙げ、整理する。研究2では、成長曲線の変動が見られる要因について検討する。成長曲線の変動の分類と事例の分析を行うことによって、成長曲線の変動から子どもの変化が見取れるかを明らかにし、養護教諭が成長曲線の変動を抽出する基準を示す。それらを踏まえ、研究3として、アセスメントシートを開発し、介入研究を行う。子どもの変化を見取る視点を生かしたアセスメントシートを作成し、教育相談に活用することで教員と子ども双方に効果があるかを検証する。

2 本年度の研究活動

2020年10月から休学中

青 木 麟 太 郎

(学籍：静岡大学)

○研究テーマ

簡易手指動作分析システムを活用した手指の巧緻性と手指動作との関係についての研究

○研究ポイント

非接触で手指動作の位置データを計測できるシステムの活用

○キーワード

Leap Motion, 簡易手指動作分析システム, 手指動作, ドライバ操作, 並縫い

1 博士論文の計画

本研究の目的は、私が開発した手指のモーションキャプチャシステム（以後、簡易手指動作分析システム）を用い、ドライバ操作における手指動作と並縫いをする手指動作をそれぞれ分析し、各作業における手指の巧緻性を手指の位置や形、動かし方から明らかにし、今後の実技指導に生かしたいと考えている。

2 本年度の研究活動

(1) 論文

- ・ 青木麟太郎, 紅林秀治：中等教育プログラムに整合した LED ランタン製作教材の開発の試み, 静岡大学教育学部研究報告, 教科教育学篇, 第 52 巻, pp.83-98 (2020)
- ・ 青木麟太郎, 紅林秀治：ドライバ操作時の押圧力測定装置の開発, 教科開発学論集, 第 9 号 (2021) 掲載予定
- ・ 青木麟太郎, 紅林秀治：ドライバ操作における手指動作の大学生と中学生の比較, 日本産業技術教育学会誌, 第 63 巻, 第 1 号 (2021) 掲載予定

(2) 学会発表

- ・ 青木麟太郎, 紅林秀治：エネルギー変換機器を適切に選択する能力育成のための OPP シート活用授業の検討, 日本産業技術教育学会第 63 回全国大会講演要旨集 (千葉), p.128 (2020)
- ・ 青木麟太郎, 紅林秀治：簡易手指動作分析システムを用いたドライバ操作技能の分析, 日本産業技術教育学会第 63 回全国大会講演要旨集 (千葉), p.191 (2020)
- ・ 青木麟太郎, 紅林秀治：ドライバ操作時の押圧力測定装置を用いた実態調査, 日本産業技術教育学会第 38 回東海支部大会講演要旨集 (オンライン開催), pp.23, 24 (2020)
- ・ 青木麟太郎, 紅林秀治：ループリックを活用した銅鏡製作の試み, 日本産業技術教育学会技術教育分科会 2020 年度研究発表会講演要旨集 (オンライン開催), pp.29, 30 (2020)

(3) その他

- ・ 青木麟太郎：電子工作実習があるオンライン授業で聴こえてきたもの, 技術教育研究会会報「技術と教育」, 第 562 号, pp.10-13 (2020)
- ・ 青木麟太郎：ドライバ操作時の押圧力測定装置, 第 15 回技術教育創造の世界 (大学生版) 発明・工夫コンテスト, 優秀奨励賞 (教材開発部門) 受賞

黒 須 雅 弘

(学籍：静岡大学)

○テーマ：走り方指導 ○研究ポイント：スキップ、発育発達に応じた走能力の向上
○キーワード：ピッチ、ストライド

1 博士論文の計画

本研究は、小中学校の体育授業で単元の一つとして扱われる陸上運動における短距離走の能力の改善に役立つ簡易な指導方法の開発を目的としている。その手立てとして、運動遊びでもあり、気軽にできるスキップを用いた指導方法の効果を検証する。本研究は大きく分けて 2 つの研究から成り立っている。1 つは、スキップと走能力との関係を様々な年齢で運動学的に明らかにすること。もう 1 つは、それらのデータを基に各年齢で各自の走能力(動作)を改善するためのスキップドリルを作成し、その効果を検証する。

2 本年度の研究活動

2020 年度は、子どもの走能力とスキップの関係性について検証するための基礎的情報を収集した。【研究方法】(1) 対象者・課題運動：小学 5 年生の児童 31 名(男子 14 名、女子 17 名)を対象にスキップドリルを体育授業の前半約 7 分間で 5 時間(コマ)実施し、ドリル実施前後の 50m 走タイムとピッチを比較した。また、ドリルは、「動作を大きく、速く」の口頭指示の下、実施した。(2) 測定項目：50m 走タイム測定に加え、疾走中の動作容態を観察するために、スタートから前半 6m(前半区間)とフィニッシュ地点付近の 6m(後半区間)を対象に撮影した映像からピッチを算出した。同じくスキップ中の動作を観察するために、スキップを 23m 実施した際の間 6m 区間のピッチを算出した。【結果・分析】ドリル実施後の 50m 走タイムは改善された(図 1)。そして、映像データを取得できた 11 名を対象にタイムの速い群(Fast)と遅い群(Slow)に群分けし、各測定項目間で比較した。スキップドリル実施前後の 50m タイムは、両群間で有意な変化は見られなかったが、Slow 群内ではドリル実施後に若干タイムの変化が見られた(図 2)。Fast 群のピッチは Slow 群よりも高いという結果は、発育発達期の子どもの走能力にはピッチの重要性が指摘されている先行研究を支持するものであった(図 2, 3)。ドリル実施後は、若干であるが Slow 群の前半区間のピッチが改善された(図 3)。

【参考文献】

尾縣貢, 生田香明, 猪熊真, 関岡康雄, 大山良徳, 近藤潤(1988) スキッピングトレーニングが体力, 疾走能力, 疾走動作に与える効果. 体育学研究, 33: 69-78.

星川佳広, 飯田朝美, 古森政作, 中馬健太郎, 澁川賢一, 菊池忍, 井伊希美, 村松正隆, 中嶋由晴(2012) ジュニアサッカー選手のスプリントタイムの縦断変化. トレーニング科学, 24(2): 138-149

星川佳広, 黒須雅弘, 中田有紀, 天野雅斗(2017) 身長スパート期にあるジュニアサッカー選手のスプリント加速期におけるステップ長とピッチ: 2 年間の縦断調査. 日本体育学会第 68 回大会予稿集.

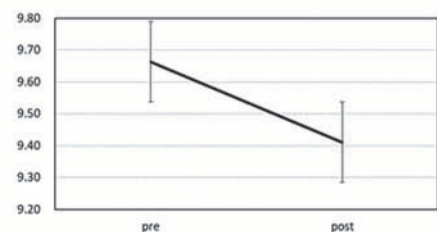


図1: スキップドリル実施前後の50m走タイム(秒)

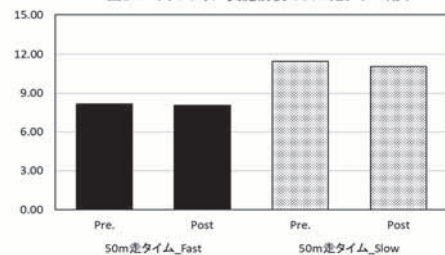


図2: スキップドリル前後の50m走タイム(秒)

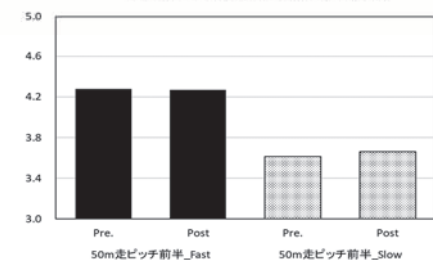


図3: スキップドリル前後の50m走前半のピッチ(回/秒)

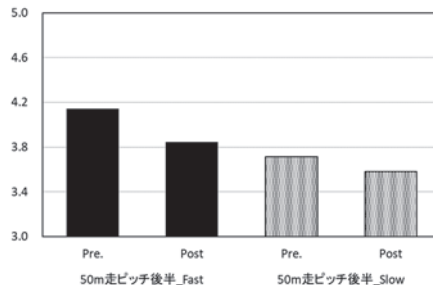


図4: スキップドリル前後の50m走後半のピッチ(回/秒)

塩澤友樹

(学籍：静岡大学)

研究テーマ

学校数学における標本データに基づく統計的推論力の育成に関する研究：variation の認識に着目して

研究のポイント

平成 29 年、30 年告示学習指導要領では、小中高を通じて統計内容が充実した。しかし、日本の算数・数学カリキュラムの中で、標本調査の位置づけは統計教育先進国に比べ同学年あるいは遅く、課題があるといえる。そこで、本研究では、variation の認識に着目し、標本データに基づく統計的推論力を捉える枠組みを構築しその実態について明らかにすることで、算数・数学カリキュラム改善及び統計的推論力を促進するための指導への方策を導出する。

キーワード

算数・数学、カリキュラム、標本調査、統計的推論力、variation

1 博士論文の計画

本研究では、上記の研究目的を達成するために、次の 4 つの研究課題を設定し、研究を進める。まず、1 つ目として統計教育先進国の国家カリキュラムにおける標本調査の位置づけを文献により調査し、日本の算数・数学カリキュラムにおける標本調査内容の位置づけ方の特徴について明らかにする。次に 2 つ目として、標本データに基づく統計的推論力について概念規定し、variation の認識に着目した際の特質とは何かを明確にする。次に 3 つ目として、日本の児童生徒が現行カリキュラムで、どの程度標本データに基づく統計的推論力を有しているか、枠組みに基づき調査問題を開発・実施し、学年横断的な実態を明らかにする。最後に 4 つ目として、学年横断的な調査結果を踏まえ、日本の算数・数学カリキュラムにおける標本調査内容の位置づけについて検証するとともに、標本データに基づく統計的推論力を促進するための指導への方策を得る。

今年度は、2 つ目の研究課題に取り組み、3 つ目の研究課題に向けた枠組みを整理した。来年度は学年横断的な調査を実施・分析し、3 つ目の研究課題に取り組む予定である。

2 本年度の研究活動

- 1) 塩澤友樹，松元新一郎，川上貴，久保良宏，藤原大樹，原欣嗣，細矢和博，内田大貴(2020)．初等中等教育段階における児童・生徒の統計に関わる批判的思考の学年横断的な調査研究．日本数学教育学会誌 102(9),4-16.
- 2) 松元新一郎，塩澤友樹，川上貴，久保良宏，藤原大樹，原欣嗣，細矢和博，内田大貴(2020)．中高生の統計に関わる批判的思考の学年横断的な考察．日本数学教育学会第 53 回秋期研究大会発表集録, 325-328. (口頭発表)
- 3) 塩澤友樹(2020)．新学習指導要領における条件付き確率の扱いーアメリカ・ニュージーランドの国家カリキュラムと比較してー．2020 年度統計関連学会連合大会．(口頭発表)

島崎 治子

(学籍：静岡大学)

○研究テーマ

大学の全学共通教育科目としての英語授業における効果的なリーディング指導方法を探索する。

○研究ポイント

- 米国の McGrawHill 社から刊行されている'SRA Reading Laboratory'という英語リーディング教材は主として英語母語話者のためのリーディング教材として開発されたものだが、1957年に最初に出版されて以降、母語話者だけでなく英語を外国語または第二言語等として学ぶ世界中の学習者にも広く利用されている。この教材の持つ教育効果についての検証を行う。
- 研究課題は、「英文読解力」とはどのような能力を指し、どのように測定できるか、どのように指導することにより「英文読解力」を伸ばすことができるか、探索することを含む。

○キーワード

第二言語習得，リーディング，授業研究，教材開発，言語評価

1 博士論文の計画

- 'SRA Reading Laboratory 2a' (Parker, 2004) を使用して 2019 年度前期に実験を行った。異なる教材を用いて授業を行い、実験の事前・事後のリーディングテストの得点を測定した。
- 実験方法に改良を加え、実験を継続することを計画しているが、コロナ禍により、実施できていない。SRA 教材は対面授業のみ使用することが可能なため、実験を中断している状態である。
- 今後の計画は未定だが、検討しているテーマは次の通りである。SRA 教材に限らず遠隔授業でも使用可能な他教材を使用した教材分析、遠隔授業（あるいは対面授業との混合型）におけるリーディング指導、教材分析とは異なるリーディング指導方法に着目した研究等。

2 本年度の研究活動

「全学共通教育英語プログラムにおける統一カリキュラムの功罪」実践報告，中部地区英語教育学会，第 49 回石川大会，2019 年 6 月 22 日

「英語教育の質保証について」共同発表，静岡大学・名古屋大学・三重大学とともに英語教育を考える討論会，岐阜大学教育推進・学生支援機構，2019 年 7 月 1 日

「授業内多読プログラムを通して自立的行動力と豊かなコミュニケーション力を育む（全学共通教育科目英語リーディング）」活性化経費教育実践報告，岐阜大学，2020 年 2 月 18 日

「SRA 教材が英語読解力に与える効果の検証」実践報告，岐阜大学教育推進・学生支援機構年報(6)，2020 年 12 月

「対面授業に負けないインタラクティブな遠隔英語授業」令和 2 年度岐阜大学基盤教育センター第 3 回 FD・SD 講師，2020 年 12 月 18 日

「インタラクティブな遠隔英語授業に必要な要素とは」実践報告，JACET 中部支部 2020 年度春季定例研究会，2021 年 3 月 6 日

「SRA 教材が英語読解力向上に与える効果の検証」学生ワークショップ，第 21 回日本第二言語習得学会国際年次大会，2021 年 3 月 27 日

望月 大

(学籍：静岡大学)

○研究テーマ

「社会科地理的分野の豪雨災害に関する防災授業の開発」

○研究ポイント

①地理的な見方・考え方を働かせて、②リスク認知、自己効力感を高め、③避難行動意図を促進する授業の開発

○キーワード

防災教育 地理的な見方・考え方 地形図 リスク認知 自己効力感

1 博士論文の計画

(1) 論文の概要

本研究の目的は、社会科において地理的な見方・考え方を働かせる活動により「リスク認知」と防災に対する「自己効力感」を高め、結果として豪雨災害時の「避難行動意図」を高める防災授業の開発である。

「社会的な見方・考え方」のうち、本研究において身につけていくべき「地理的な見方・考え方」を次のように定義する。「地理的な見方」は「災害の危険地域」や「浸水想定区域」の空間分布に着目する、危険のある地域の地形に注目することである。「地理的な考え方」は、なぜその地形で災害が起こる危険性があるのか、浸水する恐れがあるのか、危険性のある地域とない地域の差異を生んでいる理由は何か、どこが比較的安全なのか、思考し、判断することである。

先行研究により「避難行動意図」を高める要因として、「リスク認知」「自己効力感」があげられている。本研究では、地理的な見方や考え方を、現実の災害の危機が高まったときに活用して「リスクを認知」し、自分や家族の身を守るために活用できる自信を持つことで「自己効力感」を高め、結果として「避難行動意図」を高めるような授業の開発をめざす。実際に開発した授業を実践し、授業前後に行なった調査票調査の結果を分析することにより授業効果を検証していく。

(2) 2020年度の成果

- ①研究Ⅰ（中学校実践1）の論文化…2019年度に行なった授業実践を論文にまとめ投稿
- ②研究Ⅱ（小学校実践1）の実施と論文化…小学生を対象とした授業を開発実施し、その結果を論文にまとめ投稿

(3) 2021年度の計画

- ①先行文献の検討…「地形図の読図指導」「発達段階別の地理的な見方・考え方」について検討
- ②研究Ⅲ（中学校実践2）…6月に研究Ⅰの課題を修正した授業実践を実施予定
- ③研究Ⅳ（小学校実践2）…5月、6月に研究Ⅱの課題を修正した授業実践を実施予定
- ④研究Ⅰ～Ⅳを踏まえて、「避難行動意図」を促進する授業のあり方について考察

2 本年度の研究活動

- ・望月 大(2020)「社会科地理的分野の豪雨災害に関する防災授業の開発—授業実践から考察する防災の授業を開発する上での課題—」日本社会科教育学会 全国大会発表論文集 第16号 pp.104-105.
- ・研究Ⅰ、研究Ⅱについての論文を現在、投稿中

加 藤 智

(学籍：愛知教育大学)

○研究テーマ

非認知的スキルの育成に資する「サービス・ラーニング型」総合的な学習の時間に関する研究

○研究ポイント

近年国際的に注目を集めている「非認知的スキル(non-cognitive skills)」の育成に資する総合的な学習の時間の在り方について、理論的かつ実証的に明らかにし、総合的な学習の一層の充実と発展につなげる。

○キーワード

非認知的スキル、総合的な学習の時間、サービス・ラーニング

1 博士論文の計画

2020 年度は、我が国における非認知的スキルの育成に関する動向と展望について、総合的な学習の時間を中心に検討し、「サービス・ラーニング型」総合的な探究の時間の可能性を探った。総合的な学習の時間が育成する資質・能力が認知的な能力の育成にどのように寄与するのか、その理論的根拠や枠組みに関する研究が不足している課題が明らかとなった。2021 年度は、サービス・ラーニング型総合的な学習の時間が育成する非認知的スキルおよび認知的スキル・能力について検討し、それぞれの関係性について明らかにすることを目指す。研究方法としては、アクション・リサーチによる介入的研究を目指していたが、感染症の影響を踏まえ、文献調査を中心にエビデンスを収集するとともに、既に実施している質問紙調査を丁寧に分析する予定である。

2 本年度の研究活動

(1) 論文

加藤智(2021)「総合的な学習(探究)の時間における『整理・分析』の改善と充実」愛知淑徳大学教育学会『学び舎－教職課程研究－』第 16 号

加藤智(2021)「総合的な学習の時間が育成を目指す資質・能力の動向と展望」愛知淑徳大学文学部『愛知淑徳大学論集－文学部篇－』第 46 号

(2) 学会発表

加藤智(2020)「総合的な学習の時間が育成する非認知的スキルに関する実証的研究」日本生活科・総合的な学習教育学会第 29 回全国大会(オンライン)

加藤智(2020)「『サービス・ラーニング型』総合的な学習の時間が育成する非認知的スキルに関する研究」日本教科教育学会第 46 回全国大会(紙面発表)

(3) その他

加藤智(2020)「生活科・総合的な学習の時間で育成される『非認知的スキル』」生活科教育研究会『生活科の探究』秋季号 No. 121

檜垣 栄 慈

(学籍：愛知教育大学)

○研究テーマ

聴覚障害児を対象とした書き言葉の明確化を促すための指導方法に関する研究

○研究ポイント

教科開発学の研究として、本研究に関連する学問分野・領域（特別支援教育、教育心理学、言語心理学、国語科教育）の知見から聾学校小学部に在籍する聴覚障害児の書き言葉の明確化を促すための視覚的情報を活用した指導方法を開発し、指導の効果を明らかにする。

○キーワード

聴覚障害 描画活動 書き言葉 指導方法

1 博士論文の計画

博士論文は、次の7章から構成される。1章では、教科開発学としての研究の意義や本研究に関連する学問分野・領域における先行研究をまとめる。2章では、本研究における問題と目的、方法、全体構成を示し、研究の全体像を明らかにする。3章では、学齢期における話し言葉から書き言葉の発達過程の規則性について述べる。さらに、聴覚障害児の言語発達における特徴と諸問題を指摘する。4章では、聴覚障害児を対象とした話し言葉の実践研究を取り上げる。ここでは、修士論文とこれまでの投稿論文の内容を書き直す予定である。5章では、書き言葉における発達過程の規則性と聴覚障害児の書き言葉の特徴と諸問題を明らかにする。さらに、聴覚障害児を対象とした作文の指導に関する研究の動向からみえる作文指導の実際と課題を明らかにする。この内容の一部は、教科開発学論集第7号に掲載した。6章では、通常の小学校と聾学校に在籍する児童を対象として、作文前に出来事の複数場面を絵に描かせることによる作文指導の効果を述べる。さらに、聴覚障害児の言語発達には個人差が大きいことから、その効果がある学習者の条件についても述べる。7章では、本研究における結果のまとめと総合考察、結論を述べる。最後に、教科開発学への寄与について述べる。

2 本年度の研究活動

新鶴田 道 也

(学籍：愛知教育大学)

○研究テーマ

理科物理分野における電気に関する教材及び指導法の開発

○研究ポイント

カーボン・ナノチューブ・ペーパーを用いた視覚的理解が可能な新規教材開発とその応用

○キーワード

教材開発，電気抵抗，カーボン・ナノチューブ・ペーパー，中学校理科，高等学校物理，理数探究

1 博士論文の計画

理科物理分野において，電気に関する教材と指導法の開発を行っている．具体的には，カーボン・ナノチューブ・ペーパーを用いた視覚的理解が可能な新規教材開発とその応用可能性の検討である．カーボン・ナノチューブ・ペーパーは形状加工が容易で，形状変化の視覚的理解が可能である．電気抵抗の学習において教材化することで，電気抵抗値の形状依存性を視覚的に理解できる定量的な実験が，授業時間内で実施可能となる．本年度は中学校理科及び高等学校物理基礎において実践した結果を分析し，開発教材及び指導法の改善を行った．また，改善した指導法を他の中学校において実践し，その教育効果を検証した．

中学校理科「電流とその利用」単元において本指導法を実施することで，現在は発展的内容として扱われている「電気抵抗値の形状依存性」を実験的に理解させることが可能であり，電気抵抗の基本的な概念形成や合成抵抗の理解を促すことが明らかとなった．今後は，本教材及び指導法の効果をより詳細に分析し，実践に基づいて検証を進める．

2 本年度の研究活動

(1) 論文

- ・ Michiya Shintsuruta, Hirokazu Okubo and Tsutomu Iwayama (2021) Electrical resistor and capacitor using carbon-based papers for creative thinking to deepen and extend learning, *Physics Education* **56** 035006.
- ・ 大久保博和，新鶴田道也，岩山勉 (2021) 探究活動「新たな課題を発見する経験」に向けた教材 ―理数探究でカーボン・ペーパーを電気抵抗の教材として活用した実践から―，教科開発学論集，第9号，45-55.

(2) 学会発表

- ・ 新鶴田道也，大久保博和，岩山勉 (2020) 高等学校物理「電気と磁気」単元におけるコンデンサー教材の開発，第10回日本科学教育学会研究会(東海支部開催)，日本科学教育学会研究会研究報告，第34巻，第10号，1-4.
- ・ 大久保博和，新鶴田道也，岩山勉 (2020) 探究活動「新たな課題を発見する経験」に向けた教材の開発 ―カーボン・ペーパーの電気抵抗での活用―，日本理科教育学会第70回全国大会.

河合 紳 和

(学籍：静岡大学)

○研究テーマ

学校音楽教育における指揮学習の必要性と方法に関する研究

○研究ポイント

本研究では、学校音楽教育における「表現」の学習の一環として行われる合唱や合奏での児童生徒の学びの質を高める上で、指揮（指揮者）の存在が不可欠であること、そして、学習活動がより効果的に行われるためには、児童生徒が基礎的な指揮技能を習得することが必要であることを明らかにする。また、指揮技能の習得がテンポ感、拍感（拍子感）、リズム感などの音楽表現の諸技能を向上させるとともに、「音楽を形づくっている要素」の知覚とその働きの感受を促し、「鑑賞」の学習においても学びの質を高めることを実証する。

○キーワード

指揮、指揮技能、指揮的表現、テンポ感、拍感（拍子感）、リズム感、主体的な音楽表現

1 博士論文の計画

令和3年度から完全実施される新しい中学校学習指導要領の解説（音楽編）に述べられている「指揮をするための基礎的な技能」が何を指すのか、そして「指揮法の専門的な技能を習得するような活動にならないよう留意しなければならない」という指摘によって、どのような制限が生じるのかを具体的に示すとともに、それらを両立させる指揮技能の指導のあり方について検討する。

新型コロナウイルス感染症の感染拡大抑止の観点から、全国の小学校・中学校・高等学校において歌唱や器楽の活動が制限される中、指揮を含めた身体表現によって「サイレントの音楽表現」を授業に積極的に導入する傾向が見られる。こうした学習の効果については、これまでのところ精緻な研究はされておらず、科学的なデータによる検証が待たれるところである。本研究において、指揮による音楽表現が、歌唱や器楽で学習すべき内容をどこまで代替あるいは補完することができるのかについて検討することは、指揮学習の意味付けにも繋がるものとする。

2 本年度の研究活動

(1) 研究論文

高橋美由紀、河合紳和、澤田育子、柳 義和「外国語教育・音楽教育における「英語の歌」の指導—教科間の連携と「音韻構造」に焦点をあてて」令和3年3月、愛知教育大学大学院・静岡大学大学院教科開発学論集第8号

高橋美由紀、河合紳和、澤田育子、柳 義和、山内優佳「外国語活動・外国語科と音楽科の教科横断的な指導—「英語の歌」を活用した英語音声教育」令和3年3月、愛知教育大学研究報告第70輯

(2) 雑誌等の記事

河合紳和「中学校音楽科における学習指導と学習評価の工夫改善」令和2年7月、『中等教育資料』令和2年7月号（学事出版）

河合紳和「児童生徒の学習改善と教師の指導改善につながる音楽科の学習評価の在り方」令和2年7月、季刊『音楽鑑賞教育』Vol. 42（音楽鑑賞振興財団）

橋詰 ゆり

(学籍：静岡大学)

○研究テーマ

GPS 情報と心拍数からみる児童の体力差を考慮した体育授業の開発

○研究ポイント

子供の体力課題に対し、学校の担う役割が大きくなっている一方、教育現場は大きな変革の時を迎えている。体育授業の中で、一定の活動量を確保することは、子供の体力向上および健康の保持増進の視点において、非常に価値がある。本研究では、生まれ月により生じる子供の体力差をふまえ、GPS を用いた位置情報と心拍メモリ計で得られた強度変化を基準とした、体育科教材としての鬼ごっこ導入について検討するとともに GPS を活用した授業の取組についてその可能性について探求し、子供の体力課題と教職員の教材研究の新たな指針および提言を得る。

○キーワード

GPS 情報、心拍数、鬼ごっこ

1 博士論文の計画

- 1) 1HzGPS 活用可能性の検討(教科開発学論集第7号, 日本コーチング学会第30回学会大会, 2019)

子供の複雑な運動の測定/評価に 1HzGPS が活用できるのではないかと考え、子供の総力や方向転換スキルを考慮した動きのシミュレーションを 1HzGPS と HR メモリー計を装着した成人で行った。その結果、低学年児童および低体力児童の運動は 1HzGPS でも十分補足可能と示された。

- 2) 公立小学校における鬼ごっこの実態調査(セミナーⅡで途中経過報告 2020.2.)

公立小学校の小学校4年生に対し、体育授業における鬼ごっこのデータ測定を行った。GPS 情報と心拍数から低体力児と高体力児の運動を比較、検討した。

- 3) 体力テストからみる生まれ期および運動習慣が及ぼす体力差(教科開発学論集第9号, 2021)

発育発達の著しい小学生期において、生まれ期およびスポーツ活動が同学年内に生じる体力差に及ぼす影響について検討した。静岡県の小学生に対し、体力テストの結果とともに個人基本情報(身長、体重、性別、生年月日)を調査した。その結果、生まれ期およびスポーツ活動が子供の体力差を生じさせる要因となることが示された。

- 4) 鬼ごっこの教材化

公立小学校における体育授業で鬼ごっこを実施し、GPS 情報および心拍数より運動強度を測定する。また、GPS を体育授業に導入した新たな体育科教授法について具体的な方法と今後の指針について言及する。

2 本年度の研究活動

- 1) 橋詰ゆり, 牧野ユリアン, 長津恒輝, 土屋亮太, 鈴木健, 杉山康司(2021)「小学生の体力テストからみる生まれ期およびスポーツ活動が及ぼす体力差」, 教科開発学論集第9号(印刷中)
- 2) 橋詰ゆり「小学校低学年の『表現リズムあそび』における「ふりかえり」の現状と自己調整力の育成を目指した「ふりかえり」の提案」, 第11回教科開発学研究会, 2021

中山敬司

(学籍：静岡大学)

○研究テーマ

静岡県小笠地域における融和運動家井上良一の行動と思想

○研究ポイント

井上家所蔵史料の活用

○キーワード

井上良一 被差別部落 小笠地域 融和運動

1 博士論文の計画

小笠地域に生きた融和運動家井上良一の活動を通して静岡県の部落史を明らかにする。

本論文で研究対象とする静岡県では被差別部落は50地区余り存在し、水平運動が展開されたがそれは大衆的基盤を持ち得なかったため融和運動が一定の影響を持った。戦後も差別事象はあったわけだが、同和教育や運動が活発でなかったため水面下での問題になりやすい。そのため静岡県部落史や水平運動史・融和運動史の研究をさらに深める必要がある。井上良一の研究は皆無であり、静岡県部落史を検討する上では必要不可欠な研究課題といえよう。井上の戦前から戦後の活動をみたときに、彼は静岡県の融和運動を牽引したことは明らかである。井上の活動は融和運動、水平運動の枠にあてはまらない地域における部落解放を目指したといえよう。また、教科開発学の視点では井上をどう授業化していくかを検討していきたい。

2 本年度の研究活動

本年度の主な研究活動は、1929年以後の世界恐慌とそれにともなう昭和恐慌以後の深刻な経済不況の中で国家が推奨する満洲移民にたいして融和運動家の井上良一が地域の被差別部落にどう対応していったのかを明らかにしようと試みたものである。部落史における満洲移民研究の蓄積はうすく、特に地域の実態に即した研究は今後より深める必要がある。小笠地域の融和運動家としての井上は静岡県からも期待され、被差別部落の移民推奨を推進することになる。井上のこうした動きは『静岡県史』『中川根町史』及び『更生』からも垣間見ることができる。井上の移民推進は国策に基づいたものであり、一方で部落の経済困窮を打開するものと井上自身も考えていたものといえよう。また常に部落擁護を念頭に生きた井上が移民自体をいかに考えていたのかを探ることで当該期の被差別部落の満洲移民の実態を明らかにできよう。本研究では、静岡県の社会事業主事であった安藤寛がいかに推進を考えていたかを検討した上でその影響下での井上の思想を追うことを主眼とした。井上の思想を探るために必要な視点として彼の村（以下、A区と呼ぶ）の経済的状況を検討する必要があり、A区及び本村である南山村の実態を調査した。史料としては主に菊川市所蔵の『南山村村勢調査』（1925～40）、そしてA区の史料としては「融和事業関係地区調査二関スル件」（1937）を活用した。この史料から明らかにできたことは他の被差別部落と比べても貧困であり、こうした状況下において移民自体を推奨することはむしろ困難ではないかと考えられる。そして、井上家の所蔵史料からも井上自身の上記の公けの史料とは異なる見解が披瀝されている。今年度の研究では井上部落民のためには移民推奨の立場ではなかったことが明らかであることを実証できた。今後は教科開発学の視点で当該研究の実践を計画している。

〈投稿論文〉「静岡県小笠地域における融和運動としての「満洲」移民—融和運動家井上良一の事例—」

全国部落史研究会『部落史研究』第6号掲載予定

満下健太

(学籍：静岡大学)

○研究テーマ

教育的意義の認知が教員のリスク認知に及ぼす影響の研究

○研究ポイント

学校における負傷疾病事故の発生実態は殆ど改善されていない。その要因として、近年、教育的意義によるリスクの見逃しが注目されるようになった。しかし、実際に教育的意義の認知が教員のリスク認知に影響を及ぼすかは明らかにされていない。こうした問題意識の下、本研究では教育的意義とリスク認知の関係を検証することで、教育活動という特殊性が学校のリスクマネジメントをどう特殊化させているかを明らかにし、学校の日常的活動における事故発生の要因を心理学的観点から解明する。

○キーワード

学校安全，リスク認知，教育的意義，体育的活動

1 博士論文の計画

博士論文は全三部で構成する。第一部では、先行研究の整理から、これまでの学校における事故発生の現状を整理する(序論)。次に、これまでの学校事故研究を整理し、現状と課題を指摘することで本研究の位置付けを明確にする(研究 1)。そして、問題を解決する方法の測定の枠組みを考案する(研究 2)。第二部では、これまでの学校事故研究からは指摘されてこなかったリスクと教育的意義の関わりを検討する。まず、リスク認知研究の課題を指摘し、それを修正した枠組みにおいて大学生を対象にリスク認知と教育的意義の関わりについて基礎的検討を行う(研究 3)。また、その傾向が教員にも見られるか及び大学生と比較した教員の傾向を明らかにする(研究 4)。これらの知見から、教育的意義が事故発生に関わる・関わらない活動場面を焦点化し、質的検討によってその関わりを具体化する(研究 5)。第三部では、総合考察として、学校における安全文化の醸成に向けた課題を議論する。

2 本年度の研究活動

2. 1. 著書等

満下健太 (2021) スポーツ・インテグリティをどのように測定するか. 藤井基貴・村越真・中村美智太郎・塩田真吾・満下健太・安永太地(編) 教育の現代的課題シリーズ 自律的思考を促すスポーツ・インテグリティ教育:理論と実践の構築を目指して, 株式会社 I T S C 静岡学術出版事業部.

2. 2. 論文等

満下健太・酒井郷平・西尾勇気・半田剛一・塩田真吾 (2020) 子どもの情報機器活用に関わるトラブルのリスクアセスメント. 日本教育工学会論文誌, 44(1), 75-84.

村越真・満下健太・小山真人 (in press) リスクはハザードマップから適切に読み取れているか?:地図リテラシーの視点からの検討. 地図.

2. 3. 学会発表等

村越真・満下健太 (2020) 人は自然の危険をどう見ているか:経験によるリスクイメージの変化. 日本認知科学会第 37 回大会.

満下健太・村越真・鎌塚優子 (2020) 小学校の活動場面別に見た負傷・疾病事故発生率の年次比較. 日本安全教育学会第 21 回静岡大会.

市 川 裕 理

(学籍：愛知教育大学)

1 博士論文の計画

(1) 論文テーマ

英語授業における協働学習のプロセス分析

(2) 研究の目的

本研究は英語授業に協働学習 (Collaborative learning) を取り入れた際の、学習プロセスを質的に分析し、新しい学びのあり方を、実践事例を通して提案するものである。ここでいう「新しい学び」とは、授業を知識教授の場としてだけでなく、協働を核にした知識創出の場とすることを指す。

その上で、2つの観点から考察する。まず、協働学習を成功させるためには「場」の構築が必要であることを先行研究からまとめ、本実践においてどのように実現されているかを質的に分析する。2つめは、英語学習に協働学習を取り入れる意義についてである。学習のプロセスに着目し、協働で行うランゲージングについて、談話分析を行う。ランゲージングの質を明らかにした上で、それが英語学習においてどのような意味を持つのか、可能性を探る。

2 研究活動

(1) 協働学習で形成される学習集団

協働学習に必要な「場」の構築として、英語劇を行った際に、どのような学習集団が形成されているかについて、学習者に対するアンケート (自由記述) から得られた文字データについてテキストマイニングを行い、ジョンソンら (2010) の基本原則に照らし合わせ、帰納的手法で分析を試みた。自由記述は統計的に処理しづらく、客観的な評価が困難とされるが、学習者が活動をどのように理解しているのか質的な解釈を行う (Croker, 2012) ことを目的として分析の対象とした。

(2) 英語劇活動におけるランゲージングの検証

英語学習に協働学習を取り入れる意義について、英語劇作成プロセスに注目し、原稿を作成する際のランゲージングを分析対象とした。協働対話型のランゲージングにおいて、対話分析を行い、何を話しているのか (語彙、文法、意味) について、また学習者自身がどのように理解を深めているのかを考察した。さらに、アンケートを行い、学習者がどのように認識していたのかを調査した。

神 谷 裕 子

(学籍：愛知教育大学)

○研究テーマ

幼児教育から小学校教育への学びの接続-スタートカリキュラムの開発と検証-

○研究ポイント

幼児期の学びの芽生えから小学校での学びの自覚化について生活科を中心としたスタートカリキュラムの研究開発を通して明らかにしていく。また、同時に生活科における児童の非認知能力の向上についても授業や評価指標の開発を行い、明らかにしたいと考える。

○キーワード

スタートカリキュラム、生活科、非認知能力

1 博士論文の計画

H28年度から本研究に取り組んでおり、すでに刈谷市の幼保小学校での調査活動やスタートカリキュラムの構築・実践・検証は行っている。博士論文の構成としては主に以下のように考えている。

①はじめに

- ・研究の背景
- ・研究の目的と方法

②小1プロブレム

- ・小1プロブレムの予防とスタートカリキュラム (H22 新保真紀子)
- ・刈谷市小学校アンケート調査 (H28, 29)

③幼保小連携

- ・生活科の始まりと幼児教育のかかわり
- ・幼小連携・保幼小連携の理論と実践
- ・刈谷市の現状と課題 (H28 アンケート調査)

④接続期カリキュラム【H29・30】

- ・アプローチカリキュラムの理論と実践
- ・スタートカリキュラムの理論と実践
- ・刈谷市リンクカリキュラムの構築と実践

⑤学びの芽生えから自覚的な学びへ—スタートカリキュラムの検証—【R1】

- ・幼児期の遊びから小学校での学びの理論と実践
- ・刈谷市リンクカリキュラムによる実践と検証
- ・刈谷市立平成小学校1年生児童と担任への調査 (入学前後の行動観察記録分析・アンケート、インタビュー、ノート等ポートフォリオ)

⑥生活科による非認知能力の育成に関する研究

2 本年度の研究活動

2020年4月～2021年3月まで休学を申請

永井 弘人

(学籍：愛知教育大学)

1 博士論文の計画

(1) 論文のテーマ

特別支援教育の作業学習（窯業班）における職能形成
—「型」の視点でとらえる技能習得過程とその熟達化—

(2) 論文の主旨

本研究は、特別支援教育における知的障害生徒・肢体不自由生徒を対象として、①職能形成の現状に関する課題を明らかにしたうえで、②職能形成に大きく関わる「作業学習」における技能面での熟達化に焦点化し、その課題解決に向けて、実践を通し生徒の変容を促す教材開発を行うものである。なお、①②に共通する、「モノ」とその生産技術が論考の基軸となるために③民俗学（民具）・のとくに窯業における生産技術に注目した教材開発における地域的特色を検証することを合わせて行う。

(3) 本年度の博論に向けた取り組み

博論の中心的テーマである技能面における教材開発の実践研究を行った。知的障害特別支援学校では、窯業班が編成され、日常雑器を生産している。その日常雑器の装飾技法に印花（インカ）と言われる技法がある。陶器の表面に様々な形を押し付けてできる模様は、同じ形が繰り返すパターン化された「型にはまった作業」である。その窪みに入った釉薬の色彩や凹凸の印影が製品に個性や情趣を与える。同種の技法に縄文式土器の表面の縄目模様があり、技法は単純で古い、近世の民俗資料として伝承されるとともに、生徒にとって中学校（美術）教科書等においても紹介される身近な技法である。しかし、その印花（インカ）を押す力加減は極めて微妙な調整が必要となる。この押す力の調整に関する指示理解に関する有効な支援方法を開発し、その有効性の検証と結果の考察を実践研究としてまとめた。これは、大学美術教育学会「美術教育学研究」第53号に掲載された。

2 本年度の研究活動

投稿論文

単著

① 知的障害特別支援学校の作業学習における技能習得の実践研究 —視覚支援の有効性に着目して—

大学美術教育学会「美術教育学研究」第53号（査読あり） 2021年3月

＜要旨＞ 本研究は、窯業製品の加飾技能に焦点化した学習支援の実践研究である。知的障害特別支援学校では、教科領域を合わせた指導を行っており、美術や技術・家庭も合わせて指導し「作業学習」と呼ばれる。陶磁器生産はその一例である。本研究は、作業学習で行われた効率的な技能向上に寄与した支援方法について、その効果を成果物の変容を根拠として検証した。本研究の対象である知的障害・自閉症スペクトラムの不器用さについてはこれまでも指摘されているところであるが、その問題解決に貢献した先行研究として模倣と視覚支援がある。本研究も当初、同様の支援を行ったが、低迷した。そこでオノマトペ等の先行研究を援用するとともに、視覚支援の改良によって成果物は飛躍的に向上した。長期休暇前後の比較検討は、支援方法の有効性をより明確に示唆した。

② 幼稚園教諭の茶碗づくりにおける「表現」の一考察

名古屋文化学園保育専門学校 紀要 第8号 2020年9月 pp.22-32

＜要旨＞ 本研究は、陶器（茶碗）の成形過程におけるオノマトペ（擬声語・擬態語）の活用が、言語面で未熟な幼児を対象とした表現活動におけるイメージ作りや造形技法の伝達を支援する際に有効であることを、保育者による茶碗作りの体験に基づいて検証し、その結果について考察した。特に、触覚（例. 粘土の柔らかさを表すオノマトペ…モフモフ、グチャグチャ、カンカン）に関して視覚化することが、表現活動の指導に有効であることが示された。

田 中 滉 至

(学籍：愛知教育大学)

1 博士論文の計画

(1) 研究テーマ

高校生の健康の社会的決定要因の認知向上に関する研究—保健科を通して—

(2) 研究計画

1年次に先行研究の考証及び予備調査を行い、その結果を考察する。そのうえで、本調査への準備を行う。また、その結果は教科開発学論集に投稿する。2年次に本調査を行い、分析を開始する。3年次に博士論文の執筆及び本調査を学術雑誌に投稿する。

2 本年度の研究活動

2020年4月から休学中

箱 崎 雄 子

(学籍：静岡大学)

○研究テーマ

小学校英語教育における音声指導—超分節的特徴の教授に焦点を当てて—

○研究ポイント

小学校児童のための英語の超分節的特徴の習得のための音声指導法を提案する

○キーワード

小学校英語教育、音声指導、超分節的特徴、リズム（文強勢）、明瞭性

1 博士論文の計画

英語のコミュニケーションにおいて、語強勢、リズム（文強勢）、イントネーションなどの超分節的特徴は話し手の意味の伝達において重要な役割を果たすことから、学習者の明瞭性向上に重要な役割を果たすと言われている。本研究は、小学生児童を対象に英語の超分節的特徴に焦点を当てた音声指導を行い、客観的な方法でデータを収集・分析した上で、超分節的特徴の習得を目指した音声指導法を提案することを目指している。

2 本年度の研究活動

超分節的特徴の一つであるリズム（文強勢）の明示的な指導の有効性を探る目的で、以下の3つの調査を行った。

1) 絵本を用いた超分節的特徴の指導—提示方法による効果の違いの検証—：リズム指導における効果的な情報提示方法を探る目的で、絵本を用いて3種類の情報提示（聴覚情報、視覚情報、聴覚・視覚情報）を行い、提示方法の違いにより効果に差があるか、習熟度の違いにより提示方法の効果に差があるか、提示順序に因る差があるか探った。本調査については、日本第二言語習得学会20周年記念国際大会で口頭発表した。

2) 超分節的特徴の指導における強勢の表記法の効果研究：小学生児童にとって効果的なリズム表記法を探る目的で、複合名詞（compound noun）と句（phrase）について3種類の強勢表記法（①強勢が置かれる音節をカラー表記する方法、②強勢が置かれる音節の文字を拡大表記する方法、③強勢が置かれる音節に黒丸を付与する方法）を用いて提示し、児童の産出結果の違いを探った。

3) 小学生児童を対象とした超分節的特徴の指導における調査の遅延テスト：2018年1月から3月に実施した音声指導の調査対象者を対象に遅延テストを実施し、指導効果をさらに検証した。

論文

- ・小学校児童を対象とした超分節的特徴の指導における調査—アンケートに基づいた計量テキスト分析—（共著）『英語授業研究学会紀要』第28号（pp. 34-49）2020
- ・英語の音声指導における明瞭性の成績の伸びと児童の内省の特徴—自由記述回答に基づく計量テキスト分析—（共著）『教科開発学論集』第8号（pp. 39-48）2020
- ・Teaching Stress-timed Rhythm of English at the Japanese Elementary School Level: Focusing on the Effects of Using Chants（共著）『Asian EFL Journal』27(2.1)（pp.173-201）2020

口頭発表

- ・Effectiveness of Explicit Teaching of English Sentence Stress for Japanese Elementary School Students（共同）日本第二言語習得学会20周年記念国際大会（J-SLA2020）2020

中 川 右 也

(学籍：愛知教育大学)

○研究テーマ

認知言語学を援用した句動詞習得方法

○研究ポイント

動詞と不変化詞（前置詞/副詞）で構成される句動詞を効果的に学習する新たな方法を提案する研究

○キーワード

イメージ・スキーマ、句動詞、語彙習得、意味的動機付け、認知言語学

1 博士論文の計画

本研究は、理論言語学の1つである、認知言語学の知見を援用し、動詞と不変化詞（前置詞/副詞）で構成される句動詞を効果的に学習する新たな方法を提案するものである。認知言語学は、人間の経験主義的立場を重視し、身体運動や文化・社会環境などを通しての相互作用によって得られた経験が言語に反映されるという考え方を重視するパラダイムであることから、特に意味を伴う語彙学習に対して、意味の有縁性に着目した方法を提示するなど、その示唆が期待できる。なお、研究方法については以下の2つの観点から行う。1つ目は教授法の観点から、句動詞の種類と提示方法の組み合わせの違いによって効果が異なるという仮説を基に、提示方法の精緻化を行う。2つ目として学習法の観点から、教育現場において浸透しつつあるアクティブラーニングを取り入れた帰納的句動詞学習法を新たに提案する。

2 本年度の研究活動

本年度行った研究は、教材学的観点から先行研究の調査と、教科力を操作的に学力と定義した上で、学力と句動詞習得との相関関係を明らかにした。

（書籍）

・英語のしくみと教え方：ところ・ことば・学びの理論をもとにして 第6章「時を表す前置詞 AT・IN・ON のイメージ指導法」（共著編）くろしお出版 2020

・文部科学省検定済教科書中学校外国語科用 Here We Go! ENGLISH COURSE（共著編）光村図書出版 2020

（論文）

・英語の音声指導における明瞭性の成績の伸びと児童の内省の特徴（共著）『教科開発学論集』第8号 2020・
小学校児童を対象とした超分節の特徴の指導における調査（共著）『英語授業研究学会紀要』第28号 2020・
Teaching Stress-timed Rhythm of English at the Japanese Elementary School Level（共著）『Asian EFL Journal』27(2.1) 2020・認知言語学の知見を拠所とした教材・学習材の開発（単著）『日本認知言語学会論文集』第21巻 2021・Suitability of Peer-Assessment Methods for Testing Large-Class Oral Production（共著）『Journal of the Chubu English Language Education Society』50 2021・小学校児童のスピーキング力向上とコミュニケーションをしようとする意思の育成を目指したビデオ通話の実践（共著）『小学校英語教育学会誌』21 2021

渡 辺 芳 朗
(学籍：愛知教育大学)

1 博士論文の計画

(1) 論文テーマ

言語学習特性に注目した英語指導に関する研究 ―中学校における ICT 活用を通して

(2) 研究の目的

本研究の目的は、公立中学の生徒の言語学習特性に注目し、ICT 機能を活用した授業プログラムの構築・実践により、その効果や課題を明らかにするものである。中学3年生に対して領域別の検査を行い、「抽象言語型」、「バランス型」、「感覚運動型」の言語学習特性を有する生徒の英語学習に対する特徴を明らかにする。その上で、中学生を対象とした英語科 ICT 教材の開発と「中学校における ICT を用いた英語学習モデル」を作成し、広く提示し、汎用化を試みるものである。

(3) 2019 年度末における課題

- ・ ICT に関する外国の先行研究に取り組み、本研究の根拠となる学際論を明らかにする。
- ・ 中学生を対象とした「英語科における学習モデル」作成と ICT 教材の開発に取り組む。
- ・ 調査結果を科学的にするために、領域別検査と言語学習特性の統計処理について探る。

(4) 今年度の研究計画

- 4 ～ 5 月 2020 度に取り組んできた RStudio を用いた言語統計処理を参考に、本研究におけるデータの階層的線形モデルや因子分析、共分散構造分析など、中学校英語の領域別検査と言語学習特性の統計処理の方法を検討する。
- 6 ～ 7 月 2019 年度に取り組んできた「Language Teaching Methodology(Zamal, 1982) (Lapp,1990)」「Media Use in Language Learning and Teach」「Empowering Teachers for the Digital Future」「New Pedagogical Models」について集約する。
- 8 ～ 9 月 2020 年度に現場で指導してきた中学3年生の言語学習特性の特徴を明らかにするとともに、2021 年4月、5月、7月に行われた、領域別テスト結果に関する言語統計処理方法の検討と統計処理を行う。
- 10 ～ 11 月 学会発表準備
- 12 ～ 1 月 学会提出論文作成
- 2 ～ 3 月 学会提出論文作成

大 西 洋

(学籍：静岡大学)

○研究テーマ

幕末・明治維新时期及び明治期の不平等条約締結・改正史研究と小学校社会科授業開発

○研究ポイント

歴史学研究を基盤とし理論的研究と方法的・実証的研究を通じた教育実践研究の推進

○キーワード

不平等条約締結・改正及び交渉史研究，歴史教育，教科専門と教科教育，持続可能な社会の形成

1 博士論文の計画

(1) 研究の概要

幕末・明治維新时期及び明治期の不平等条約締結・改正及び交渉史の先行研究を，現在の到達点まで，外交史，政治史，自由民権運動史，思想史，軍事史など多面的・レビュー的に検討する。そして，それが明治維新时期・明治前期の喫緊の課題の中心的な位置付けにあったことを検証する。また，本研究を教科専門とし，小学校社会科教育の歴史単元（第6学年）において，効果的な単元構想・授業展開を提案する。

(2) 研究の経過

①明治維新・明治期の条約締結・改正やその交渉過程の研究

徳川幕府の日米和親条約・日米修好通商条約の締結過程，陸奥宗光を中心に明治期の各外務大臣による条約改正交渉の研究を整理，分析を進め，イギリス外交文書 Confidential Print：Japan(F.O.410)など海外史料の確認を通して補完する。

②小学校社会科歴史単元の構想・授業展開

「条約締結」「条約改正」を「単元の核」に設定・指導案作成・授業実践・授業後の学習者のアンケート集計・本授業実践ではない前年度のアンケート集計，集計結果の分析，その効果を検討し，現行学習指導要領に準拠した学習目標・評価規準を加え修正した指導案を作成した。今後は，これに基づいて再度授業実践し，アンケート集計，集計結果の分析，その効果を検討し，修正した指導案を提案する。また，持続可能な社会の形成の視点を通じた，学習者による社会的事象の意味理解を明確化する汎用的な小学校社会科授業実践方法を提唱する。

③学習指導要領及び解説の記述提案

学習指導要領第2章各教科第2節社会及び小学校学習指導要領解説社会編の本研究箇所の記述修正を提案する。

2 本年度の研究活動

- ・持続可能な社会の形成の視点を通じた，学習者による社会的事象の意味理解を明確化する小学校社会科授業実践方法を検討する研究授業及び小学第3学年全単元授業実践。
- ・大西洋「SDGs・持続可能な社会の形成と関わらせた，汎用的な小学校社会科授業展開－社会的な見方・考え方から社会的事象の意味理解，資質・能力の育成に繋げる－」，第69回全国社会科教育学会・第37回鳴門社会科教育学会合同全国研究大会，ウェブサイト上の資料掲示による発表（2020.10.24～11.30）

渡 邊 明 彦

(学籍：静岡大学)

○研究テーマ

「南北朝正閏問題」前後の史学論～田中義成と喜田貞吉～

○研究ポイント

「南北朝正閏問題」に対して歴史家がどのように対応し、歴史学と歴史教育の関係性がどのように変化していったのかを、田中義成と喜田貞吉を中心に分析する。

○キーワード

歴史 歴史教育 南北朝正閏問題 田中義成 喜田貞吉

1 博士論文の計画

本論文は、「南北朝正閏問題」が日本の歴史学にどのような影響を与えたのかを検討し、歴史学と歴史教育の関係、歴史学がその「有効性」をどのように考えていたのかを明らかにしたい。具体的には、歴史学と歴史教育の理論が完全に分断されたとされる 1911(明治 44)年の「南北朝正閏問題」前後の歴史家の著作を比較し、明治末～大正期の歴史学が実証主義の殻に閉じこもっていたとされるその内実を、喜田貞吉と田中義成に注目して分析する。「南北朝正閏問題」で問題とされた国定教科書を執筆した喜田貞吉は、問題化する前年に『国史之教育』(1910 年)と『韓国の併合と国史』(1910 年)を出版し、歴史学の成果を積極的に時事問題や歴史教育に活用しようと模索した。喜田は同事件により文部省を休職処分となった後も、日本民族論や部落問題など、当時の社会的課題を歴史的に分析する論考を執筆し、歴史学者のあるべき姿を示し続けてきた。喜田の活動を通じて、明治末期から大正期にかけての史学論の一端を明らかにする。同時に、同じく「南北朝正閏問題」発生時に南北朝時代を研究対象とし、東京帝国大学で教鞭を執り、史料編纂所を中心に活動し「実証主義歴史学」の典型例とされる田中義成を分析したい。田中は明治後期から大正時代にかけての帝国大学史料編纂所に勤め、帝大史科教授としての講義録である『南北朝時代史』(1922 年)に見られるように、学問の独立を守ったと評価されると同時に、「実証主義歴史学」の枠にこもっていたという見方もされる。しかし実際の田中は「南北朝正閏問題」後、歴史家が時事問題に積極的に関わる必要性を述べている。喜田と田中の分析を通じて、歴史学と歴史教育のあるべき姿と課題を模索する。

2 本年度の研究活動

本年度は投稿論文執筆を目指し、喜田貞吉の著作の分析を行った。喜田貞吉が 1896 年の帝大卒業後歴史教育に関わり、1901 年から文部省図書審査官を務め、1902 年の教科書疑獄事件を機に教科書が国定化されると、最初の国定教科書『小学日本歴史』(1903 年)を執筆した。次いで 1909 年に第二期国定教科書『改訂小学日本歴史』執筆し、翌年、私撰の解説書として『国史の教育』を発刊している。喜田は『国史の教育』上で、歴史教育を通じて「万世一系の天皇」の国体観念を育て、日本が「完全なる国家」であること、「日本国民に生まれたことの幸福」を教授することが歴史教育の目的であると主張している。同時に、日本民族が多様な民族から形成され、「国民」が区別無く「同化融合」する過程を描いている。同年 10 月に発刊された『韓国の併合と国史』と合わせ、韓国併合などの現代史的課題に対し、歴史学の立場からその課題に対峙した喜田の思想を明らかにしようとする取り組みだ。

杉 山 元 洋

(学籍：静岡大学)

1 博士論文の計画

(1) 論文テーマ

理科(科学)固有の「学ぶために読むこと」の指導法の開発

(2) 計画

本研究では、理科(科学)固有の学ぶために読むことの指導の必要性を示し、その指導のために必要な要件を明らかにする。要件を実験研究で検証した上で科学領域固有の指導法を開発する。

①理科(科学)固有の学ぶために読むことの指導はなぜ必要か： 科学的テキストを読むことによって理科を学ぶことにおける汎用的ストラテジー指導の限界を明らかにする。

杉山元洋. (2018). 理科(科学)固有の「学ぶために読むこと (read to learn)」の指導はなぜ必要か—テキスト理解 (text comprehension) 研究に基づいて. *科学教育研究*, **42**(3), 242-254.

②理科(科学)固有の学ぶために読むことの指導の開発に向けて： 上記 1 の限界を克服すべく、理科教育分野における指導法や理科固有の読むことの研究をレビューした上で、歴史分野で先行する領域固有リテラシー指導がどのように上記の限界を克服しているか明らかにする。(実施中)

③理科(科学)固有の学ぶために読むことの指導法のフレームワークとして、指導原理としてのアプローチと授業のアウトラインを開発して、提案する。

④実験

目的：③の指導フレームワークに基づいた授業を計画、実施してその効果を検証する。

方法：小学校高学年向けの科学テキストに、国語の読解指導を付けたものと科学者の読むことのアプローチによる理科的な教科指導を付けたものを読むクラスを各々設定し、読解後にテキストベースと状況モデルの課題に答えてもらう。

仮説：国語指導のクラスはテキストベース課題には答えられるが状況モデル課題には困難を示す。理科指導のクラスは、両方の課題に答えられる。

2 本年度の研究活動

杉山元洋. (修正中). 歴史教育分野における学ぶために読むことの指導法—理科(科学)固有の学ぶために読むことの指導法の開発に向けて—. *科学教育研究*.

以上

二 見 隆 亮

(学籍：静岡大学)

- 研究テーマ：「自己の探究を目的としたランニング学習に関する実践と考察」(仮)
- 研究ポイント：「自分をひもとくこと」を目的に据えた段階的なランニング学習の意義を明らかにする。
- キーワード：ウォーキング、ランニング、総合学習、内省、自己評価、人間教育

1 博士論文の計画

(1) 研究の経過

2020年度は博士論文の全体のバランスを整えながら、教科開発学セミナーⅢを経て、中学校総合学習での実践に臨む期間となった。受講した教育プログラム開発論、遊び文化環境論研究、外国語教育方法論、言語教育論研究では、いずれも体育以外の専門の先生方からアドバイスを頂き、実践と執筆の参考にさせて頂いた。また、他の受講生との議論においては自身の研究において仮説が不明確である点を指摘した頂き、その点を整理していく機会となった。大学におけるランニング授業の内容をまとめ考察した「大学におけるランニング学習の意義に関する一試論」は教科開発学論集(研究ノート)に、ウォーキング研究に掲載された論文の続報にあたる「ウォーキングとランニングの研究動向比較緒論(2)」はランニング学研究(解説・紹介)に掲載が決まったものの、いずれも論文水準には満たなかったため、提出要件を揃えることができず、2020年度中の博士論文提出は見送る形となった。博士論文題目は「…論考と試行」から「…実践と考察」に変更し、論考ではなく実践を主軸に構成し直すことにした。

(2) 今後の展開

この先は、博士論文の全文をまとめながら、授業実践の分析と考察を投稿論文として仕上げ、提出要件が揃った時点で、事前審査に臨みたい。他には分析の完了していないインタビュー調査のまとめ、総合学習に取り入れるための基礎研究、体系的な授業を開発するための事例研究を行う。2020年度は新たに日本生涯スポーツ学会、日本人間教育学会、日本健康心理学会に入会した。それぞれの学会からも自身の研究のヒントをもらい、独自の博士論文にまとめあげたいと考えている。

2 本年度の研究活動

(1) 社会活動

1. 走生塾(ランナーを対象とした勉強会) 2020年5月~2021年3月
2. 走生 Jr(小学生を対象としたランニング指導) 2020年5月~2021年3月

(2) 学会活動

日本人間教育学会、生涯スポーツ学会、日本健康心理学会入会

第24回日本ウォーキング学会ポスター発表『ウォーキングとランニングの研究動向比較緒論(第2報)』

第22回日本生涯スポーツ学会口頭発表『大学におけるランニング学習の意義に関する論考』

(3) 投稿論文

教科開発学論集『大学におけるランニング学習の意義に関する一試論—3 大学の授業実践を手掛かりとして—』(研究ノート)

ランニング学研究『ウォーキングとランニングの研究動向比較試論(2)—研究発表の学問的分類を手がかりとして—』(解説・生涯)

石川 芳 恵

(学籍：静岡大学)

○研究テーマ

日本人学習者の語彙の習得

○研究ポイント

語彙学習における母語、音声および文脈が果たす役割について実証的な研究を行い、効果的な指導法について考察する。また、高等学校での教師の語彙指導、生徒の語彙学習の実態について調査する。

さらに、大学生の語彙知識を調べることで、中学校・高等学校における語彙学習の成果を検証し、効果的な指導法について提案を行う。

○キーワード

語彙学習、明示的指導、長期的研究、受容的知識、産出的知識、文脈使用、チャンク学習

1 博士論文の計画

英語学習における語彙の効果的な指導法について実験を行い、その結果について考察する。また、高校生の語彙の学習法及び教師の指導法の実態を調査し、そこから明らかになる課題について考察する。さらに、大学生の語彙知識について調査を行う。以上の調査研究結果を基に、小・中・高等学校において、どのような指導法を用いるべきかを提案し、指導改善に資することを目的とする。そのために、特に次のような要因を考慮する。

1. 文脈が果たす役割

文章を読んだり聞いたりする中で暗示的に語彙を学習する方法と、文脈から切り離して単独で意図的に学習する方法の効果について調査し、考察する。

2. 単語の音声果たす役割

語彙を学習する際、言語情報は必ず音韻化され、情報の処理・記憶システムに保存されるという研究が報告されている。実際に、タスクにおいて音声の利用はどの程度効果的であるかを検証する。

3. 母語が果たす役割

母語が確立した後に L2 を学ぶ学習者の場合、L2 習得に際しての母語の仲介の有効性を主張する研究が報告されている。英語の授業で日本語を取り入れて行う語彙学習の効果を検討する。

2 本年度の研究活動

大学生の語彙知識調査を計画し、実験材料となる単語テストを作成した。調査の概要を以下に示す。

1. 目的：大学生の語彙知識の実態を明らかにし、中学校、高等学校、大学での語彙指導の効果について考察する。また、学習者が意味を容易に習得できる単語とそうでない単語について分析する。以上の結果を踏まえ、中学校、高校、大学での語彙指導について提案を行う。
2. 研究方法：大学生を対象として「新 JACET8000」に含まれている動詞 1,043 語について、日本語の意味を選択肢の中から選ぶ形式のテストを実施する。大学生が実際に意味を理解している単語と、中学校、高校で学習した単語及び「新 JACET8000」に示された単語を比較し、習得した単語とその頻度との間にどの程度の相関があるかを調べる。さらに、単語の長さ、意味、動詞の種類に着目しながら、単語の意味を容易に習得できる動詞とそうでない動詞について分析する。

V. 修了生一覧と論文要旨

愛知教育大学		年度	
杉野 裕子	プログラミングを活用した図形概念形成についての研究 －教材コンテンツ開発と授業実践を通して－	H27	課程修了
今井 隆夫	感覚英文法による言語表現の意味づけ指導の効果	H28	課程修了
原 郁水	小学生のレジリエンスを高めることを目的とした保健教育プログラムの開発	H28	課程修了
山田 丈美	言語を基盤とした教科等横断的指導による思考力と表現力の相互育成に関する研究	H30	課程修了
伊藤佐奈美	軽度知的障害生徒における自己理解の支援に関する実証的研究	H30	課程修了
内田 智子	幼児期の運動指導が体力・運動能力向上につながる運動プログラムに関する研究	R1	課程修了
大島 光代	発達障害幼児の音韻意識及び語彙の獲得を目的とした 言語指導プログラム開発に関する研究	R1	課程修了
名倉 一美	保育における幼児の「集団所属感」アセスメントツールの開発	R2	課程修了
森 慶恵	健康情報の判断と選択に着目した健康情報リテラシー教育に関する研究	R2	課程修了
小池 嘉志	算数・数学の問題解決型授業における精緻化を促進する指導法に関する研究	R2	課程修了
マムチャンセン	カンボジアの生物教育における物理的アプローチによる教材開発 Development of Teaching Materials through Integration of Physical Approach for Biology Education in Cambodia	R2	課程修了
静岡大学			
鈴木 正行	近代民衆思想史研究から教科内容開発への展開 －歴史研究を踏まえた教科開発学の構築をめざして－	H26	課程修了
松島 充	算数・数学教育における協朝敵問題解決を実現する学習に関する研究	H26	課程修了
加賀 恵子	中学校家庭科における社会資源の協働によるシティズンシップ育成に関する研究	H27	課程修了
長倉 守	中学校社会科世界地誌学習の授業実践力向上に関する教科開発学的研究	H28	課程修了
日高 翼	米国ハイスクールにおける「生物学」の成立過程に関する研究 －ヒトの身体の扱いに焦点を当てて－	H28	課程修了
大矢 隆二	投動作学習プログラムの開発とその学習効果	H29	課程修了
酒井 郷平	中学生のインターネット依存傾向の予防・改善を目的とした情報モラル教育に関する実践的研究	H29	課程修了
大瀧 綾乃	日本語母語話者による英語の動詞の自他動性の習得と指導の効果検証 －英語能格動に焦点をあてて－	H30	課程修了
百瀬 容美子	先天全盲児童・生徒の運動イメージ生成指導法と評価に関する研究	R2	課程修了
荒谷 航平	1821-1930年の米国ハイスクール「物理」の成立過程	R2	課程修了
一ノ瀬 敦幾	教師の資質能力能力向上および学校組織の活性化を図る評価システムに関する研究 －教科開発学を視野に入れた教師の資質能力と学校組織の往還－	H27	課程博 H27. 3. 31単位修得退学
山田 哲也	紙製受動歩行模型教材を使用した小学校設計学習に関する研究	H30	課程博 H30. 3. 31単位取得退学
田村 知子	日本語の母語発話者における英語の派生接辞の第二言語習得と明示的指導	R2	課程博 R3. 3. 31単位取得退学
西ヶ谷 浩史	設計を中心にした授業過程の研究	R2	課程博 R3. 3. 31 単位取得退学

学 位 論 文 要 旨

Summary of Doctoral Thesis

専 攻：共同教科開発学専攻

氏 名：百瀬 容美子

論文題目：先天全盲児童・生徒の運動イメージ生成指導法と評価に関する研究

論文要旨：

本研究の目的は、先天全盲児童・生徒の運動学習に寄与する運動イメージ生成指導法と評価法を開発し、視覚特別支援学校に実践導入することであった。

そのためのプロセスとして、第一段階で日本トップ水準の先天全盲選手の運動イメージ生成スキルと運動イメージ生成方略の実態を質問紙と面接により調査した上で、評価尺度の項目を作成した。第二段階では、実態調査結果に基づいた運動イメージ生成評価尺度の信頼性と妥当性、実用性の検証をした。第三段階では、作成した運動イメージ生成評価尺度を活用した運動イメージ生成指導法を考案して、視覚特別支援学校の先天全盲児童・生徒を対象に事例実践しその効果を検証した。なお、本研究での対象者は我が国で極めて僅かしか存在しておらず、量的データによる統計的分析を経て一般化させるのは限界が生じる。この限界に対し、事例性も扱いつつ、従来の研究手法（質問紙法、面接法、個人別イメージ構造分析、ノンパラメトリック統計解析法、テキストマイニング法、実験計画法、直接確率統計法）を駆使して、評価尺度の作成と実践効果の検証に挑戦した。

得られた知見は、以下の通りである。まず、研究 1 と研究 2 を経て、運動イメージ生成評価尺度：ブラインドサッカー版 ESMI-BS (Evaluation Scale of Movement Imagery : Blind Soccer version) の項目が作成された。この ESMI-BS は、日本トップ水準の先天全盲ブラインドサッカー選手の個人別イメージ構造分析（内藤，2002）で得られた知見に基づいて項目作成された。構成は、会場イメージ、空間イメージ、主観イメージ、俯瞰イメージの 4 領域、計 20 項目であった。評価は、実際の経験のようにイメージするのが「とてもむずかしい」から「とてもやさしい」までの 7 件法が採用された。

次に、研究 3 から研究 6 において、ESMI-BS の信頼性と妥当性、実用性の検討が事例的に繰り返された。再テスト法による信頼性の検討の結果、高い信頼性が確認された。基準関連妥当性の検討の結果、既存の鮮明性と統御性、運動の見え方の尺度との関連は認められなかった。しかし、内容妥当性の検討の結果、ブラインドサッカー学習に肝要な運動イメージ生成スキルを測定評価できると推測された。さらに、ESMI-BS の得点上昇とブラインドサッカー技能水準が随伴して高まり、日本トップ水準になると 4 領域で全て満点になる事例を確認した。こうしたことから、ESMI-BS は視覚特別支援学校で取り上げるブラインドサ

ッカー学習の認知的な最終目標像であり、教育指導の現場での実用可能性が高いと解釈された。さらに、触覚による運動イメージ生成の活用と人や物の認知のための姿勢制御の重要性が新たに見いだされた。

これらの研究過程を踏まえて、従来の視覚障害者のスポーツ指導（香田，2014）の基本的教授法に姿勢制御を通した臨床心理学的アプローチ技法である動作法（星野，2003；百瀬，1998）を取り入れ、さらに晴眼選手向けの運動イメージ生成指導法（Mizuguchi et al., 2015）も参照しながら新たな手法として運動イメージ生成指導法が考案された。運動イメージ生成指導法は、基礎課題と応用課題で構成された。基礎課題は、心理技法の動作法による姿勢確認（あぐら座位での左右前後の重心移動動作、膝立ち位での左右前後の重心移動動作、立位での左右前後の重心移動動作、側臥位での軀幹ひねり動作）を中心とするために、あらゆる学習段階にある者にも適用できる。一方の応用課題は、ESMI-BS の項目から学習段階に適した課題が選択設定された。

研究 7 から研究 11 において、新たに作成した運動イメージ生成指導法の効果検証を重ねた。事例実践の結果、先天的全盲児童・生徒の運動イメージ生成スキルと動作スキルの向上をもたらすことが示唆された。特に、中学生選手には技術スキル、練習意欲と有能感の向上に寄与し、初学児童には楽しくボール運動でただでなく他教科への汎化をももたらした。事例実践を通して、本指導法を実施する際には、視覚障害スポーツの基本的留意点を踏襲し、学習者 1 名につき実践指導者 1 名といった安全留意した上で、学習者の技術面と心理面の行動観察をしながら、学習者の実態に沿って指導を進めることが望ましいと考えられた。

今後の課題は、研究協力者数を累積させて、得られた知見の一般化を目指すことである。第一に ESMI-BS の基準関連妥当性の再検討がある。第二に、運動イメージ生成指導法の効果について、研究協力者数と実践回数、実践期間を累積すること、学習者の障害種別と学習習熟度などの個別性も考慮すること、および、運動イメージ生成スキルの変容に伴伴する動作スキル測度を追加して、より多面的な再検討を行うことが残された主な課題である。

博士論文執筆体験談

(百瀬 容美子 学籍：静岡大学)

1 博士論文テーマ

本研究は、先天全盲選手の運動イメージ生成様態を明らかにし、その実態に沿ったイメージトレーニングの方法論・可能性を検討する取り組みでした。具体的には、まず(1)我が国トップ水準の先天全盲選手の運動イメージ生成様態を解明し、次に(2)その実態調査に基づいて、運動イメージ生成評価するための尺度を作成し、そして(3)作成した運動イメージ生成評価尺度を活用させて、新たに考案したイメージトレーニング法の効果検証に関する一連の研究を行いました。

イメージ研究を始めてから長い歳月が経ちました。研究を進める中では、新たな問いが生まれ、その問いに向き合ってきました。この研究作業は尽きることがありませんので、博士論文としてここで一区切りといたしました。

2 今後の発展に向けて

この研究を通して得られた知見は、視覚障害選手の運動指導への貢献だけでなく、例えば、競泳選手がゴーグルに水が入ったり曇ったりした場面、スキー選手が悪天候で視界が遮られる場面、ゴルフのファーストショット場面など、晴眼選手が視覚を重視できない場面にも大きく貢献すると考えています。

したがって、将来的には、先天全盲選手から得られた知見を、晴眼選手に役立てることを目的としており、認知的観点から視覚機能の見直し、視覚を有効活用したイメージトレーニング法の理論と実践に関する新提案、従来の視覚重視の運動学習モデルの見直しに着手する予定です。

3 謝辞

博士論文は、一人で完成できるものではありません。本当に多くの方々のご指導とご協力によって成し遂げることができたのだと痛感し、感謝の気持ちでいっぱいです。

本研究を進めるに当たっては、新保淳先生(静岡大学、指導教員)、白畑知彦先生(静岡大学)、野地恒有先生(愛知教育大学)、村越真先生(静岡大学)、杉山康司先生(静岡大学)には、身体教育や運動学習に関する核心に迫る温かいご指導を賜りました。また伊藤宏先生(静岡大学名誉教授)、小坪昭仁先生(防衛大学校)、森川洋先生(帝京平成大学)には、共同研究者として博士論文を構成するいくつかの研究にお力添えを頂きました。畠山孝男先生(山形大学)、松岡和生先生(岩手大学)には、イメージ研究に関する専門的なご助言を頂きました。そして山本夏幹先生(筑波大学附属視覚特別支援学校)には、多大な研究協力と現場からのご意見を賜りました。厚く御礼を申し上げ、感謝の意を表します。

多くの方々への感謝に対して、今後の研究活動でお返ししていきたいと考えております。

学 位 論 文 要 旨

Summary of Doctoral Thesis

専攻： 共同教科開発学専攻 氏名： 森 慶恵

論文題目：健康情報の判断と選択に着目した健康情報リテラシー教育に関する研究

論文要旨：

本研究の目的は、情報化が進展する現代社会において、健康に関する情報を批判的に吟味、判断して、適切な情報を選択する健康情報リテラシー教育の方法を開発し、効果評価を行うことで、中学校における健康情報リテラシー教育を提案することである。

第1章では、健康情報リテラシーに関する先行研究から、ヘルスリテラシーをはじめとしたリテラシーとの関連、批判的思考、疑似科学信奉における認知バイアスとの関係を整理し、「健康情報リテラシー」を、「健康に関する情報を批判的に吟味して、科学的根拠をもとに信頼性を判断し、適切な情報を選択する能力」と定義した。そして、それらの分析から、2つの研究課題をあげた。研究課題1は、中学生の健康情報リテラシーに関する先行研究はほとんどみられないため、中学生の健康情報に対する態度や健康情報の批判的思考力の実態、ヘルスリテラシーとの関連、健康情報の判断に影響を及ぼしている要因など、健康情報リテラシーの実態を明らかにして、批判的思考と科学的根拠に基づく健康情報リテラシーの教育方法を開発、実践し、その効果と限界を明らかにすることである。そして、研究課題2は、明らかにした健康情報リテラシー育成における批判的思考欠如モデルの効果と限界をもとに、批判的思考と信念バイアスの回避と修正を考慮した健康情報リテラシー教育の方法を開発し、中学校で実践可能な教育方法と教材を提示することをあげた。

第2章では、第1章で挙げた研究課題1のうち、中学生の健康情報に対する態度や健康情報の批判的思考力の実態、ヘルスリテラシーとの関連、健康情報の判断に影響を及ぼしている要因など、中学生の健康情報リテラシーの実態を明らかにした。中学生対象の質問紙調査とその分析から、保健分野の批判的思考力は、年齢を経るにつれて自然に身に付くものではないこと、健康に対する態度や姿勢のうち、インターネットの活用力が批判的思考力に影響を及ぼしている可能性を明らかにした。そして、子どもたちに保健分野の批判的思考力を身に付けさせるためにはそのための教育の機会が必要であり、判断基準など批判的思考力を発揮させる方法やその教育内容を検討するとともに、批判的思考力を発揮させる方法や信念、情報処理の仕方を考慮した教育を検討する重要性を確認した。

第3章では、第1章で挙げた研究課題1について、批判的思考と科学的根拠に基づく健康情報リテ

ラシーの教育方法を開発、実践した。そして、健康情報リテラシー教育における、批判的思考欠如モデルの効果と適切な判断の阻害要因を明らかにし、中学生の健康情報の適切な判断に有効な教育方法を検討した。その結果、健康情報の信頼性を検討するための科学的根拠として「健康情報の見方」の活用した、健康情報の信頼性を批判的に吟味する学習活動を取り入れた保健授業を考案、実施して、健康情報判断力テストの得点が高めることができた。また、健康情報について疑問をもち、批判的に思考を働かせようとする始まりの行為を「健康情報についての質問を作ること」と考え、保健教育における批判的思考への質問生成の影響について検討し、質問の生成が批判的思考の促進につながる可能性を見出した。

第4章では、研究課題1で明らかにした健康情報リテラシー育成における批判的思考欠如モデルの効果と中学生の健康情報の適切な判断の阻害要因の分析をもとに、信念バイアスの回避と修正を考慮した改訂版健康情報リテラシー教育の方法を開発し、対照群を設けた実証研究を行った。その結果、健康情報リテラシー教育には健康情報の信頼性を吟味するための「批判的思考」が必要であるが、批判的思考欠如モデルには健康情報の判断には限界があること、健康情報の判断に影響を及ぼす信念バイアスの修正の条件を、健康情報リテラシー育成の保健教育モデルに取り入れることにより、信念バイアスの修正と健康情報の適切な判断に効果を与えることを明らかにした。

第5章では、本研究で得られた成果を整理して、本研究が目的とした「健康に関する情報を批判的に吟味、判断して、適切な情報を選択する健康情報リテラシー」の教育モデルを構造化して提案した。そして、今後の課題について、多様な健康情報に対応する健康情報リテラシー教育の検討と健康情報リテラシー教育を一般化するための教材の開発の必要性について論じた。

博士論文執筆体験談

(森 慶恵 学籍：愛知教育大学)

1 博士論文のテーマ

健康情報の判断と選択に着目した健康情報リテラシー教育に関する研究

2 研究の目的

情報化が進展する現代社会において、健康に関する情報を批判的に吟味、判断して、適切な情報を選択する健康情報リテラシー教育の方法を開発し、効果評価を行うことで、中学校における健康情報リテラシー教育モデルを提案することを目的に、研究を進めました。

3 研究の経過

私は、愛知教育大学附属中学校に勤務していた2016年4月に本専攻に入学させていただき、そのころ着手し始めていた健康情報リテラシー教育の研究に本格的に取り組むこととなりました。当初は、保健教育における批判的思考の視点から、健康情報リテラシー教育モデルを開発しようと考えました。しかし、講義やセミナー、面談など様々な機会に、主任指導教員の古田先生はじめ博士課程の先生方から、「本当に批判的思考だけで健康情報の正しい判断と選択ができるようになるのか」と何度も問い掛けていただいたことにより、多角的に研究を深めていくことができました。

博士課程在籍中に2つの職場を転勤し、さらに義務教育学校の養護教諭から念願の大学教員となって養護教諭養成に携わることになりました。環境の変化と日々の職務に追われ、博士論文の執筆が思うように進まず、悩んだ時もありました。しかし、定期的に主任指導教員の古田先生に面談を持っていただくことで、何とか研究のペースを保ち、論文執筆を継続することができました。博士論文提出までの最後の数か月は本当に時間との戦いでした。提出した暁には思いきり眠りたいと毎夜思いながらPCに向かう日々で、気力と体力が勝負だと思いつくづつ思ったものです。

4 謝辞

博士論文執筆は、決して平坦な道のりではありませんでしたが、その過程を経て研究者としての大切なことを学び、そのスタートラインに立つことができました。これまでの道のりを導き、支えてくださった博士課程の先生方には心から感謝申し上げます。特に、主任指導教員の古田先生の厳しくも温かく、粘り強いご指導のおかげで、研究を続けることが出来ました。この感謝の気持ちを、研究者として真摯に研究に立ち向かい続けることでお返しできるよう、今後一層研鑽を積んでまいりたいと思います。

学 位 論 文 要 旨

Summary of Doctoral Thesis

氏 名： 田村 知子 (共同教科開発学専攻 人文社会系教科学分野)

論文題目： **Japanese Speakers' L2 Acquisition and Explicit Instruction
on English Derivational Affixes**

(日本語の母語話者における英語の派生接辞の第二言語習得と明示的指導)

論文概要：

本博士論文は、英語の派生接辞の第二言語習得と指導の研究である。その目的は、日本語を母語とする大人の英語学習者(JLEs)が持つ派生接辞の受容知識と、彼らに対する派生接辞の明示的指導の効果を測り、接辞間に見られる差を明らかにするとともに、その差を生む要因を探ることである。本論文ではまた、教科開発学の観点から理論と研究成果を応用し、JLEs のための段階別指導法を提案する。

第1章では、本研究の意義と目的、及び教科開発学における本研究の位置づけを述べる。第2章では、本研究に関連する言語学と第二言語習得の理論について概説する。第3章では先行研究の知見と課題を明らかにする。

第4章と5章では実験の詳細とその結果を報告し、考察をおこなう。第4章(研究1)では、大人のJLEsが習得している派生接辞の受容知識の度合いを調査する。その結果、1) 3種類の接頭辞 **non-**, **hyper-**, **semi-** と接尾辞 **-ism** が、最も習得が容易であり、2) **inter-**, **circum-**を含む 10 種類の接頭辞と **-ary**, **-ify** を含む 30 種類の接尾辞が、最も困難な接辞であることが判明した。JLEs の困難度順序は、接頭辞、接尾辞いずれにおいても、すべての学習者を対象とした **Bauer and Nation (1993)** の順序とは必ずしも一致しなかった。しかし、JLEs を対象とした **Mochizuki and Aizawa (2000)** との比較では、JLEs に一定の困難度順序が存在する可能性が認められ、とりわけ接頭辞に関してそれが顕著であった。これらの結果に基づき、筆者は JLEs の接辞の習得困難度順序を新たに提案した。さらに、その順序に影響を及ぼす潜在的な主要因として、接頭辞については、母語からの転移と接頭辞の言語特性、接尾辞については、接尾辞が付加された派生形の品詞と接尾辞の意味素性を挙げた。

第5章(研究2)では、JLEs に対する派生接辞の明示的指導の効果を測定する。その結果、指導は全体として JLEs の接辞の理解度を引き上げることが判明した。接頭辞については高い上昇、接尾辞については緩やかな上昇が見られた。さらに、接頭辞では、1) **anti-**, **semi-** など8種類の習得が容易で指導しやすく、その効果も持続し、2) **ante-**, **circum-** など6種類の習得は困難だが指導により理解が促され、その効果が中程度に持続し、3) **bi-**, **fore-**, **inter-** の3種類も習得困難だが指導により理解が後押しされ、その効果も持続することが証明された。一方、接尾辞については、1) **-ally**, **-eer** など5種類の習得が容易で指導もしやすく、その効果も持続し、2) **-age**, **-ory** を含む 17 種類は習得困難だが指導により理解が進み、効果が中程度に持続し、3) **-ent**, **-hood** など6種類も習得困難で指導

により一時的に理解が促されるが、その効果が持続しないことが分かった。また、指導が全体として JLEs の派生接辞の理解を促すものの、習得困難度順序を変えることはないことも明らかとなった。

個々の接辞間において指導効果の差を生む要因については、接頭辞と接尾辞で完全に同じではないことを指摘した。接頭辞では、1) 接頭辞の意味素性、2) 母語からの転移、3) 第二言語学習者にとっての接辞の頻度が影響し、接尾辞では、1) 接尾辞の意味素性、2) 接尾辞が派生する品詞、3) 第二言語学習者にとっての接辞の頻度が指導効果を左右すると考えた。

第6章では、日本国内の教室環境で JLEs を教える英語教師のために、第2章の理論や第4章（研究1）の成果を応用した派生接辞の段階別指導案の作成を試みる。中学校低学年では、1) 語には内部構造があり、2) 日英語の語構造には類似点があることを指導する。指導の際には、母語である日本語の例をまず紹介し、それから **non-**と**-er** を含む英語の派生語の例へ進む。中学校高学年では、1) 語の中には接辞を含むものがあり、2) 接辞は接頭辞と接尾辞に分類できることを説明する。この段階でも日英語の比較により、学習者の言語への意識を高めることができる。指導する接辞は、**semi-**、**-ism** など習得が容易なものとする。高校では、接辞に屈折接辞と派生接辞の2種類があることを指導し、**neo-**、**-ful** など習得容易、あるいは中程度に習得しやすい接辞を範囲に含める。大学の教養課程では、中高で指導された言語理論を復習した後、接頭辞と接尾辞の違いをさらに詳しく教える。すなわち、接頭辞は主に基体の意味を変えるが、接尾辞は主に品詞（と意味）を変えるという違いである。指導範囲も、**inter-**、**-ent** などの習得困難な接辞にまで拡大する。

本博士論文に残された課題は以下の3点である。まず、第4章（研究1）と5章（研究2）で得られた結果、すなわち JLEs の習得困難度順序と明示的指導の効果の一般性を確かめるため、追実験をおこなう必要がある。次に、上記2つの研究で見られた個々の接辞の差について、その要因をより明確にし、理論的な説明を与えなければならない。最後に、第6章の段階別指導案は、今後の明示的指導に関する研究成果の適用により修正が求められる。

本研究で得られた知見が第二言語習得の研究者や英語教師に新たな視点を提供し、日本国内の教室における、より効果的かつ効率的な英語の語彙指導に結びつければ幸いである。

博士論文執筆体験談

(田村 知子 学籍：静岡大学)

1. 博士課程入学のきっかけ

私は学部で英語教育学を専攻し、修士課程で英語学（形態論）を学びました。その後、英語教員となり、また自らも学習者として英語を学び続けるうちに、第二言語習得論に対する関心が深まり、特に英語の語彙の習得を、関連領域を自由に架橋するかたちで研究したいと思うようになりました。

そんな折に、非常勤先の愛知教育大学が静岡大学と共同で博士課程を設立し、教科専門・教科教育・教職専門の枠を超えた「教科開発学」という学際分野の研究者の育成を始めました。また、所属教員のおひとりでいらした静大の白畑先生が、語彙項目、とりわけ派生接辞で私がやってみたいと思い描いていたような習得や指導の研究を、文法項目でなさっていることを知り、迷わず入学してご指導を仰ぐことにしました。

2. 入学後の研究活動と博論執筆

私の博士課程での研究は、1)派生接辞の習得、2)派生接辞の指導、3)中高大での派生接辞の段階別指導案の3要素から成り立っています。入学1年目は(1)と(2)の実験をまとめておこない、(1)の学会発表と投稿論文執筆に着手しました。2年目は、(1)に加えて(2)の学会発表及び投稿論文執筆をおこないました。3年目からは博論執筆を開始し、同時に(2)の考察を深めつつ、これまでの研究成果と形態論の知見に基づいて(3)の指導案を立てました。

私の場合、最も苦勞したのは、統計分析とその英文記述です。博士で初めて量的研究に挑んだため、統計は一からのスタートでした。一般的な入門書と自分の専門分野に特化した入門書をそれぞれ数冊ずつ熟読し、統計の指導がある「教育フィールド調査」の授業を受け、統計に詳しい先生方から研究内容に合った分析手法をご指南いただきました。その後、同じ手法を用いた英語論文をいくつも読んで、英文記述の仕方を覚えました。

博論執筆の際には、ゼミや「教科開発学セミナー」での発表、また、学会発表や学会誌への投稿論文が、各章を形成する大きな土台となりました。これらの機会にいただいた多くのご助言やご指摘が、博論完成への羅針盤になったと実感しています。

無事、最後まで書き上げることができたのは、主査の白畑先生をはじめ、共同大学院の先生方から温かく熱意溢れるご指導を賜ったおかげです。大学院担当の事務職員の方々にも、入学時から、コロナ禍での博論審査や学位授与式に至るまで、一方ならぬご支援をいただきました。また、共に助け合い、知識や経験を惜しみなく分かち合ってくださいだったのは、同じ院生の方々です。皆様に心より感謝申し上げます。

3. 今後の抱負

博論を仕上げたとはいえ、私はまだ、卵からかえったばかりの雛鳥のようなものに過ぎません。共同大学院という学び舎で先生方のお力添えをいただき、ようやくひとつのテーマをひとつのアプローチで研究するすべを身につけたばかりです。成鳥のように自力で気流を選んで空を飛び、真の意味で独自性のある研究を構築できるようになるまで、長い時間がかかりそうですが、試行錯誤を繰り返しながら地道に模索を続けていきたいと思っています。

学 位 論 文 要 旨

専攻：共同教科開発学専攻

氏名：名倉 一美

論文題目：保育における幼児の「集団所属感」アセスメントツールの開発

論文要旨：

1. 研究の背景と目的

現在、日本では保育者不足が深刻な社会問題となっており¹⁾、量的補充が優先される一方、実践の質保障が疎かになっている²⁾。しかし保育実践の質的把握は、各施設や保育者の判断に委ねられており、統一アセスメントは存在しない²⁾。すべての保育の最低限の質を保障するためには、保育者間で共有できるアセスメントが必要である。保育実践の質を明らかにする視点の一つに、幼児の「居場所」の有無がある。家族以外の他者と集団生活を送る中で、幼児が自分の居場所があると感じているかどうかは、情緒の安定に大きな影響を与える。そこで本研究は、保育施設に通う幼児が、自分の所属するクラス集団の中に居場所があると主観的に感じることを「集団所属感^{注1)}」と定義し、その実態把握を行うために、友達との関わりが増加する幼児期後期の4、5歳児を対象としたアセスメントツールを開発することを目的とした。

2. 研究の概要（方法および結果）

本研究では、幼児の「集団所属感」を把握するための2つのツール（幼児質問用アセスメントと、保育者観察用アセスメント）を開発した。開発にあたって行った調査は、以下のとおりである。

第1章では、実際に保育者が行っているアセスメントの現状把握のため、5歳児集団保育の実践記録を分析した。保育者が捉えている5歳児の姿には多種多様な記述があり、保育者間で共通点はあるものの、共通言語化にまで至っていないことが明らかとなった。第2章では、4人の担任保育者の実践観察から、幼児と幼児の関係をつなぐような援助行動を抽出し、活動場面別比較を通して保育者のアセスメントの特徴分析を行った。保育者が幼児同士をつなぐような援助行動は、保育者から一斉に働きかける集団活動場面よりも、幼児が好きな遊びを自由に選択して遊ぶ「好きな遊び場面」で多様にみられ、幼児の他児との関係性のアセスメントを行うには、「好きな遊び場面」が適していることが示唆された。第3章では、幼児に直接質問を行う「集団所属感」のアセスメントツールを開発するため、卒園間近の5歳児を対象に口頭質問調査を行った。他児評価と保育者評価との相関から分析した

注1) R.F.Baumeister&M.R.Leary. (1995). The need to belong : Desire for interpersonal attachment as a fundamental human motivation. Psychological Bulletin, 117(3), 497-529.の理論から、心理的居場所を「所属 : belong」の欲求として位置付けた。

結果、「集団への信頼感」「集団への好意」「具体的活動」の 3 つの項目の妥当性が明らかとなり、これらに対応した 5 つの質問によるアセスメントツールを作成した。第 4 章では、保育者観察用アセスメントツールを作成するため、「集団所属感」の変化が把握しやすい転入児(4 歳児)の観察を行った。その結果、「他児」「保育者」「探索行動(関わりなし)」といった対象別で転入児の関わり行動に変化がみられた。中でも「他児」との関わりでは、「他児模倣」「気の合う特定の友達」「同じ興味を持つ友達との遊び」「友達との名前呼び合い」「友達とのトラブル」といった 5 つの視点で行動変化が抽出され、これらを項目に用いて保育者観察用アセスメントツールを作成した。第 5 章では、第 4 章で開発したツールの信頼性を検証するため、転入児の担任保育者 2 名にインタビュー調査を行った。保育者の回答から抽出された転入児の姿と、第 4 章の観察で抽出された行動変化との比較から、アセスメント項目の信頼性を明らかにした。

3. 結論

本研究で開発した 2 つのアセスメントツールの新規性は次の 4 点である。

1 つは、保育実践の最低限の質的保障として、幼児の「集団所属感」に焦点をあてた点である。幼児の「集団所属感」の保障は、集団の中での情緒の安定につながり、保育における養護機能を果たす。また同時に、幼児の「集団所属感」の保障は、対話的幼児集団の土台形成でもあり、保育における教育機能ともいえる。このことから、本研究では幼児の「集団所属感」の保障が、幼児期後期の保育実践における最低限の質的保障につながると捉え、そのアセスメントツールを開発した。2 つ目は、開発したツールの 1 つが、幼児に直接質問を行うという点である。これまで幼児のアセスメントは、幼児期の言語発達を踏まえ保育者(大人)による観察が中心であった。しかし本ツールは、質問内容を理解できる(おおよそ言語発達が 4 歳以上の)幼児であれば実施可能であり、担任保育者に限らず誰でも幼児本人から直接、内面を把握することができる。3 つ目は、保育者が日頃の観察で無意識に捉えていた視点を、保育者観察用アセスメントツールで具体的に言語化したことである。観察視点の明示化により、日常の保育の中で、幼児の「集団所属感」を迅速かつ的確に把握することができる。4 つ目は、幼児の「集団所属感」アセスメントが、発達や能力を測るものではない点である。そのため、発達障害児や外国人幼児といった発達や文化が異なる幼児であっても、集団の中に居場所があると感じていれば「集団所属感」は高くなる。このことから、幼児の「集団所属感」アセスメントは、インクルーシブ保育や多文化共生保育におけるアセスメントツールの一つにもなり得ると考える。

今後は、このアセスメントを多様な幼児に用いて妥当性を高めるとともに、保育実践の内容や方法との関連性を明らかにして具体的な実践の質改善につなげていくことが課題である。

引用文献

- 1) 厚生労働省.(2016). 保育所等関連状況取りまとめ(平成 28 年 4 月 1 日)及び『待機児童解消加速化プラン』集計結果を公表. 児童家庭局保育課, 9.
- 2) 池本美香(2018). 保育評価の展望—一元化評価の意義と可能性—. 保育学研究, 56(1), 11-20.

博士論文執筆体験談

(名倉 一美 学籍：愛知教育大学)

1 研究テーマの設定に至るまで

研究テーマを絞ること。これこそが、私にとって最も困難で時間を要する作業でした。入学当初のテーマは、端的に言うところ「いい保育実践とは何か」といった抽象的で曖昧なものでした。実践者が信念として抱くものではあっても、研究者であれば、一生をかけて挑むような壮大なテーマです。この漠然とした夢物語を、いかに具体的な方法で証明可能な実践研究テーマにまで落とし込むか、振り返ってみると私は、博士課程の在籍中ほとんどの時間をそのために費やし、ひたすら考え続けていたような気がします。最終的にたどりついた「幼児のアセスメント」は、実は保育者であれば誰もができて「当たり前」と思っていた視点でした。この当たり前の視点を、改めて問い直し言語化することが、私の博論のテーマとなりました。研究とは、巨大な山の頂上を見続けて曖昧な理想を語るのではなく、頂に辿り着くための最善ルートの入り口を探し出し、道具を集め、一步一步下から歩き出していく、そういった地道な作業の積み重ねであるとようやく理解できました。これに気付けたことこそが、私の博士論文執筆を通して得ることができた最高の宝物です。

2 研究で苦労した点

私の博士論文の調査は、全て保育施設で行いました。実は最も苦労をしたのが、この調査フィールドを探すことでした。保育者養成校に勤務しているため、顔見知りの保育者は多いのですが、いざ調査をお願いするとなると怖気づいてしまう自分がいました。研究テーマが定まらない中、手探りで調査をしていたため、自信のなさが背景にあったことも要因の1つです。私のせいでフィールドを荒らすことにならないか、調査をお願いすることで信頼関係を崩してしまわないか、中には実際に断られたケースもあり、いつも不安を感じながら調査をしていました。しかし、「これを乗り越えられないような研究であれば、そもそもやる価値はない」、そう自分に言い聞かせ、なんとかやり遂げることができました。こうした苦労は、今後も実践研究を行うかぎり常に付き纏うものです。研究にはそれを乗り越える勇気が必要だということも、博士論文執筆を通して学びました。

3 謝辞

休学期間2年を含めて7年半も在籍し、その間、少なくとも2回は本気で諦めようと思いました。けれども、多くの先生方の励ましとご指導のおかげで、何とかあきらめずに最後まで書き上げることができました。心から感謝申し上げます。特に、指導教官の古田先生には、何度もテーマがコロコロ変わる私に対し、最後まで根気強く「研究とは何か」という視点からご指導くださいました。本当にありがとうございました。

学 位 論 文 要 旨

Summary of Doctoral Thesis

専 攻 : 共同教科開発学専攻

氏 名 : マムチャンセン

Course : Join subject development major

Name : MAM CHANSEAN

論文題目 : カンボジアの生物教育における物理的アプローチによる教材開発

Title of dissertation : Development of Teaching Materials through Integration of Physical Approach for Biology Education in Cambodia

論文要旨 :

Summary :

This doctoral dissertation aims (1) to produce biological experimental apparatus with the integration of physical approaches and other teaching materials related to biological contents, and (2) to use experiments as a method to teach biology in high school level.

This dissertation consisted of 9 chapters which Chapter 1 described the situation of biological education in Cambodia, the research purposes, the research methodology, and so on. Chapter 2 described the school quality assurance framework and the main problem of science education in Cambodia; and the following chapters address the problem described in chapter 1 and chapter 2.

Chapter 3 described the methods to select plant seeds for biological experiments. The seeds of 25 lettuce cultivars, 18 carrot cultivars, 5 radish cultivars, and 11 other vegetative cultivars were searched for their germination phenomenon in the dark and far-red wavelength irradiation. Carrot and lettuce cultivars were selected for the experiments, and especially “Furiru lettuce” is only photoblastic seed germination cultivar.

Chapter 4 titled “Methods for teaching light wavelength dependencies on seed germination and seedling elongation applicable for high school experimental class in developing countries” aims to introduce the methods to produce light emitting diode (LED) attached-experimental apparatus, and the experimental methods using this apparatus. An experimental box (190mm(W) x 260mm(L) x 115mm(H)) attached with 11 LED bulbs of the same wavelength was introduced. Each box was attached with white LED (major peak: 485nm), blue LED (477nm), green LED (527nm), orange LED (607nm), red LED (618nm), and far-red LED (690nm). Carrot and lettuce seeds of 10 cultivars each were used as plant materials. The result showed that the seeds of all carrot and lettuce cultivars germinated in dark conditions, except “Furiru lettuce”. Continuously irradiation of far-red wavelength suppressed lettuce seed germination, but it did not suppress seed germination of all carrot cultivars. Seedlings of both carrot and lettuce cultivars elongated the longest in dark condition, but the seedling elongations were inhibited the most by blue light irradiation.

Chapter 5 titled “Development of an LED-attached box for phytochrome response experiments on lettuce seed germination in senior high school biology” aimed to introduce the methods to develop an apparatus specified for phytochrome response experiments and the experiments using this experimental apparatus. A smaller LED-attached box with the combination of red (624nm) and far-red (690nm) was developed, and Furiru lettuce seeds were used. The result showed that Furiru lettuce seeds did not germinate in dark conditions or the last irradiation of far-red light, and the high germination rates were observed in the last irradiation of red light. Gibberellic acid (GA) and Absciscic acid (ABA) solutions were treated on lettuce seed to explain to students about seed germination phenomena.

Chapter 6 titled “The use of dwarf tomato cultivar for genetic and physiology study applicable for school education” aimed to introduce the methods to conduct biological experiments in high school. GA does not affect only seed germination but also on plant physical growth. GA₃ of 1mg/L, 10mg/L and 100mg/L were applied exogenously to dwarf and normal stem tomatoes. Moreover, the dwarf type tomato was crossed with the normal type tomato. The results of the experiments showed that 100mg/L GA₃ enhanced stem elongation of both dwarf and normal type tomatoes. The result of the cross followed Mendel’s 1st and 2nd laws of inheritance. Normal stem was the dominant trait.

Chapter 7 titled “Genetics materials for experimental class of Mendel’s 3rd law using dihybrid crosses of lettuce cultivars in high school” aimed to introduce experimental methods and teaching materials for Mendel’s Law of Independent Assortment. In chapter 6, while dwarf tomato was used for the educational materials of Mendel’s 1st and 2nd laws, but using tomatoes to conduct experiments to study Mendel’s 3rd law was difficult because a big space is needed to keep approximately 100 tomato plants. Lettuce can be cultivated in small spaces. Reciprocal crosses between Furiru lettuce and Red sunstar, Sunny or Vitamin with red lobed leaf were performed. The segregation of F₂ populations was the same as the results of Mendel’s dihybrid crosses with the ratio: 9: 3: 3: 1.

Chapter 8 titled “Genetics of photoblastic seed germination and seed color using lettuce cultivars for biological experiments in high school” aimed to introduce the experimental methods used to trace Mendel’s law of inheritance. Furiru lettuce which is a photoblastic seed germination cultivar was crossed with 3 non-photoblastic seed germination cultivars. While the result indicated that violet flowers and black color seeds were dominant on yellow flowers and white seeds respectively, the genetics of photoblastic phenomena showed complicated inheritance.

Chapter 9 aimed to make a general discussion, conclusion and recommendation of the dissertation to contribute to development of biology education in Cambodia. The experimental apparatus developed in this study is useful for biological experiments in high schools. The experimental methods introduced in this study are suitable for the teachers and students. Teachers and relevant partners should consider developing this kind of experimental apparatus for their experimental classes in high schools.

博士論文執筆体験談

(マムチャンセン 学籍：愛知教育大学)

1 Introduction

My name is Mam Chansean, a biology trainer at the National Institute of Education in Cambodia. I entered the subject development doctoral course of the Cooperative Doctoral Course Aichi University of Education and Shizuoka University in April 2018. My doctoral thesis title was “Development of Teaching Materials through Integration of Physical Approach for Biology Education in Cambodia.”

2 Experience in the doctoral course

In this doctoral course, I received many experiences in subject development as following.

1. Through classroom study: Professors in each course had shared their best practices in their researches to develop their teaching in their own subject. Through the success learned from those professors, I recognized that education research is a unique method that teachers should use to develop their teaching. On the other hand, the students in this doctoral course were teachers or lecturers at the school or university level in Japan, so I had learned from their contribution to the class.

2. Through research: Supervisors and sub-supervisors had provided good advice to produce experimental equipment, develop science experimental methods, and write research manuscripts for dissertations. I had a good experience in producing experimental boxes with attaching Light-Emitting Diodes (LED) bulbs that I have never done before entering this doctoral course. I have done many biology experiments by using the LED-attached boxes and also the field works. From this experience, I recognized that science education research is a good method that science teachers should use to develop their teaching. Through my research in this doctoral course, I could produce many teaching resources for biology teaching in a developing country like Cambodia. Last but not least, I have good experiences in writing manuscripts for publishing in academic journals.

3 Contribution to biology teaching in Cambodia

In order to contribute my experience received from this doctoral course, I am writing a book titled “Biology Research, a reference for biology teaching in high school” in Khmer language. This book composes of 3 parts: Part I describes the education research and science education research methods and the translation of my research articles in the doctoral course; Part II describes how to use the experimental methods and materials produced to teach by following Scientific Methods, Inquiry-Based Lesson, and 5-E models of teaching; and Part III describes the methods to use my research products to implement STEM education and Project-Based Learning.

(課程博士・様式7) (Doctoral degree with coursework, Form 7)

学 位 論 文 要 旨

Summary of Doctoral Thesis

専 攻：共同教科開発学専攻 創造系教科学 氏 名：西ヶ谷浩史

Course： Name：

論文題目：設計を中心にした授業過程の研究

Title of dissertation：Research of Technology Education curriculum focused on Design

論文要旨：

Summary：

本研究の目的は、中学校技術・家庭(技術分野)(以降、技術科と呼ぶ)の授業において工学設計の手法を取り入れた授業過程を考案し実践することで、新たな価値やものを生み出すエンジニアの視点を生徒に身につけさせることが可能であることを、実践を通して明らかにすることである。

近年、新たな技術革新により社会が急速に変化し、その変化に対応できる人材を育成するための教育が必要である。特に、初等中等教育において産業との関わりを持ちながらもものづくり教育を行う教科は技術科のみである。そのため、中学生にとって最も必要なものづくりの資質・能力を単にものづくりに必要な知識・技能の習得やものづくりに関する関心・意欲を高めるということではなく、社会の要求や目的を意識しつつ、新たなアイデアの創出を目指しながらも現実問題に照らし合わせていくといった開発者の視点を学ばせることが重要であると考えた。したがって、筆者は、自ら課題に気付いたり新しいものや価値を生み出したりすることができるようにするために、開発者の思考や製品開発の過程を検討し、中学校技術科における学習過程に工学設計のプロセスを適用させることに焦点を絞って研究を行った。

ものづくりのプロセスで製品開発を重視する考え方は、工学設計の考え方である。つまり、製品開発を重視する授業とは、工学設計に基づいた授業になる。したがって、工学設計の手法を技術科の学習に取り入れることにより、工学設計で重視している視点を身につけることができ、製品開発に必要な能力「課題を見つけたり解決したりする能力」や「新しいものや価値を生み出す能力」を育てることができると考えた。

これまでの技術科の授業は、技術科の学習指導要領の変遷から知識・技能の習得を中心に行われてきたこと、また、設計の学習が製図学習中心に変化してきたことを明らかにした。そして、これからの技術科で扱うべき設計を工学設計とし、その定義やプロセス、手法を検討した。その結果、工学設計の4つの手法を取り入れた新しい授業過程を開発した。

そして、技術科で育てたいものづくり教育の視点を明らかにするために、職業分類から見た技術者と技能者の違いに着目し、国際的なエンジニアとテクニシヤンの枠組みに合わせて、その求められる能力の違いから、エンジニアとテクニシヤンの能力を整理した。そして、中学生のものづくりにおける視点が、技能を重視した教育が行われてきたことからテクニシヤン寄りの傾向があるのではないかと考え、アンケート調査を行った。その結果、テクニシヤン寄りの傾向を示した項目をエンジニア寄りにする教育方法として、製品開発の過程で用いられる試作品（模型）作りを取り入れた「金属パイプを利用した自立式ハンモック教材」を開発した。その結果、試作品（模型）を作ることにより、製作品の構造の強度を検討する際の参考にしたり、目的に合わせた工夫をおこなったり、学んだ技術を応用することができるようになったなどの効果が確認できた。

次に、新たに開発した工学設計の4つの手法を取り入れた授業を行いその効果を検証した。検証方法は、授業を行ったA中学校と他の3校とをアンケート調査を行い、それぞれの学年同士の比較を行った。その結果、工学設計の4つの手法を取り入れた授業を行うことにより、テクニシヤンの視点が減少しエンジニアの視点が増えることが明らかとなった。

従来の授業過程では、ものづくりの課題に沿って、知識・技能を重視する学習が行われ完成を目標に製作が行われる。その中で、設計の学習は、製作のための計画や完成を予想した構想を表すために行われていた。このような学習では、テクニシヤンとしての視点を身につけることができるが、新しいものや価値を生み出したり、課題を解決したりするエンジニアの視点を身につけることは難しい。本研究では、ものづくりの授業過程の中に工学設計の手法を取り入れ授業過程全体を製品開発の過程とすることによりエンジニアの視点を身につけさせることができることを明らかにした。このエンジニアの視点を身につけることができれば、エンジニアの思考を身につけることができると考えている。

世界では、初等中等教育に相当するものづくり教育の中で工学教育（エンジニアリング教育）は行われている。日本でも、STEM教育の一環としてエンジニアを育てる教育は行われているが、を初等中等教育に普通教育として。しかし、工学設計の手法を普通教育に取り入れた研究は行われてこなかった。そこで本研究で行った技術科の授業において工学設計の手法を導入することでエンジニアの視点を身につけさせることができることが明らかとなった。このことにより、技術科で開発者の視点を身に付けさせることは、日本の将来を担う子どもたちが新しい価値やものを生み出す思考力を身に付けることになり、自ら課題を見つけ最適解を導き出していく実践的な態度など変化の激しい先の見通せない社会に生きる力となり、さらにグローバル化社会にも対応できる人材の育成に寄与できると考えている。

博士論文執筆体験談

(西ヶ谷 浩史 学籍：静岡大学)

1 博士論文のテーマ

博士論文のテーマは、「設計を中心にした授業過程」です。私自身、中学校の技術科教員として生徒たちに技術を教えていることから、従来から行われている製作を重視した授業に疑問をもち、新しい価値やものを生み出すための能力育成を重視した授業にするべきだと考え、ものづくりで発想を生み出す段階にあたる設計に着目し、このテーマを設定しました。

2 論文執筆にあたって

中学校の教員ということもあり、論文執筆の時間をどのように捻出するかが一番の課題でした。そのため、自分の研究の進捗状況を日ごろから勤務校の校長に報告し、常に状況を理解してもらうように努め、校務に関して配慮をしていただきました。博士論文提出の1年は、中学校3年生の担任として、自分の学級の生徒の進路指導と自分の研究の両立に苦労しました。論文の執筆に集中する時間がないと書けないため、中学校の授業が終わってからできるだけ早く、大学の自習室や図書館に籠り執筆を進めるようにしました。しかし、コロナの影響で大学へ行くことも憚られるようになり自宅や勤務校で執筆を行うようになり、執筆に集中することが大変になりました。このような現職の教員としてのネガティブな面がある一方で、自分で考えた理論を自分で授業を行い、アンケートをもとに分析することができることや、研究対象が毎日、目の前にいてくれるので実践をもとに理論の再検討や修正がすぐにできること、また、長年技術科教員をやっていることもあり他校の技術科教員にもアンケートをお願いしやすくデータを集めやすいなどの利点もありました。研究テーマが授業過程ですので、その実践は1年がかりで行うものであり、時間がかかります。また、理論を検証するために開発した教材を学会誌に掲載していただくために1年6カ月かかりました。しかし、査読者の方には厳しいながらも最後まで粘り強くご指導をいただいたことは、その後の論文執筆に大きな力となりました。

3 最後に

研究をどのように進めたらよいか、その方向性に迷うときも多々ありました。しかし、「とにかく書く」という意識をもち、主指導教員の紅林先生からご指導、ご助言をいただき、教科開発学研究会や学会などの発表の場では、副指導教員の先生方をはじめ多くの先生方から多様な視点で研究を見ていただくことで、研究の弱いところや論点を明らかにすべき点、うまく研究の意図が伝わらないところなどが明確になり、修正を行うことを繰り返しながらようやく博士論文を書くことができました。この博士論文に関わって下さった方々に心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

学 位 論 文 要 旨

Summary of Doctoral Thesis

専 攻：共同教科開発学専攻

氏 名：荒谷航平

論文題目：1821-1930 年の米国ハイスクール「物理」の成立過程

論文要旨：

本研究の目的は、1821～1930 年の米国のハイスクールにおける「物理」の成立過程とその背景を明らかにした上で、目的の変遷について明らかにすることである。そこから、日本の高等学校における物理教育と米国のハイスクールにおける物理教育の存在意義についての示唆を得る。

本研究の方法は文献の分析であり、19 世紀～20 世紀初頭の米国の主要な委員会報告書、書籍、論文、当時の多くの学校で採択されていた教科書 17 冊等を対象とした。本学位論文は序章と終章を含めて 6 章から構成した。

第 1 章では、「物理」の成立過程を次の 3 期間に分けて解明した。第 1 期（1821～1885 年）は、「物理」の前駆的科目である「自然哲学」の隆盛期である。「自然哲学」は、1821 年のハイスクールの誕生当初から必修科目として設置されており、1870 年頃に最も多くの学校に設置されていた。他方で、「物理」は、1863 年に初めて誕生して以降、1870 年代から多くの学校に設置されるようになった。第 2 期（1886～1899 年）は、「自然哲学」から「物理」への転換期である。1880 年代後半以降、「自然哲学」を設置する学校数が減少する一方で、大学入学要件への認可を受けて、「物理」を設置する学校数が増加していった。第 3 期（1900～1930 年）は現代的な「物理」の成立期である。20 世紀に入ると、誕生以降必修科目であった「物理」は選択科目に変更され、履修率を低下させていった。「物理」は、1920 年に中等教育の目標を達成するための一科目として位置付けられ、その後 1930 年までに最終第 12 学年に設置されるようになり、「生物」、「化学」、そして「物理」の教授順序が成立し、現代的な「物理」が成立した。以上の 3 期間における学習内容の変遷を分析すると、熱領域や天文学領域などの学習内容の加除が見られた。

第 2 章では、「物理」の成立過程の背景として、中等学校の単位制度に着目してハイスクールの科学教育の成立過程を解明した。1893 年の『中等学校の教科に関する十人委員会報告』（NEA、1893）を受けて、1899 年に『大学入学要件に関する委員会報告』（NEA、1899、以降 NEA（1899）とする）において、大学入学要件に科学 1 単位の履修を含めることが提案された。ここで科学が大学入学要件に認可されたのは、NEA（1899）に至る過程で科学の精神訓練の価値が認められたためであり、当時「物理」はその価値を有する代表的科目とし

て認識されていた。NEA（1899）で1単位の履修が提案されたのは、同一の科学系科目を複数年履修させて生徒を特定の科学分野に特化させるためであった。さらに、この特定の科学分野への特化には、19世紀末の中等学校において複数の科学系科目を教師が担当することや複数の科学分野の実験室を設置することが難しいという背景があった。1911年には『ハイスクールと大学の接続に関する九人委員会報告』（Kingsley、1911）において、ハイスクールの卒業要件として科学系科目1単位または2単位の履修が提案された。この提案は、ハイスクールの教育目的である将来の一般市民の育成を達成するために生徒に科学系科目を含む多様な科目を履修させるためであった。これを受けて、1918年の『中等教育の主要原理』（NEA、1918）では中等教育の目標が示され、1920年の『中等学校における科学の再編』（NEA、1920）において、その目標を達成する科目として科学系科目が位置付けられ、現代的なハイスクールの科学教育の原型が完成した。

第3章では、科学の人材育成的価値の視点から「自然哲学」及び「物理」の目的の変遷を分析した。その結果、第1期の「自然哲学」は、将来の指導者層の市民の育成を目指していた。転じて、第2期の「物理」は、将来の専門家育成の目的を掲げるように変化していた。さらに、第3期の「物理」は、将来の一般市民育成の目的を掲げるように変化していた。このように第1期から第3期にかけて「物理」で育成を目指す人材像に動揺が見られた。

第4章では、科学の教育的価値の視点から「自然哲学」及び「物理」の目的の変遷を分析した。その結果、第1期の「自然哲学」は、自然を創造した神の意図を理解することを目的としていた。「自然哲学」に代わった第2期の「物理」は、精神の訓練という文化的価値に基づく目的を掲げていた。そして、第3期の「物理」は、物理学史の理解と科学的思考力の育成という文化的価値に基づく目的を掲げていた。このように当該期間に「自然哲学」及び「物理」の目的は、一貫して科学の文化的価値に基づいて論じられていた。

以上の第1章から第4章より、「物理」は、19世紀末と20世紀初頭にそれぞれの中等教育全般の動向に対応して、他の科目と同様に、将来の専門家の育成から、将来の一般市民の育成へと目的論を変化させていったと考えられる。そして、その育成を目指す人材に必要な能力を物理学の有する文化的な価値に基づいて主張していた。すなわち、「物理」の成立過程では、科目の目的は、育成を目指す人材像が明確にされた上で、その人材に必要な能力が親学問の有する固有の性質の観点から検討されていた。これより、日本の高等学校及び米国のハイスクールの物理教育に対する示唆として、育成を目指す人材が備えるべき能力を物理学の文化的な価値を含めた多様な視点から検討することを指摘した。

博士論文執筆体験談

(荒谷 航平 学籍：静岡大学)

1 博士論文のテーマと執筆について

私の博士論文のテーマは、19世紀～20世紀初頭のアメリカ合衆国のハイスクール物理教育の成立過程です。なぜ物理学を教えるのかという問いのもと、物理教育の存在意義や学ぶ意義についての示唆を得るために、当該期間のアメリカ合衆国に着目することにしました。本研究を通して、現在の日本の物理教育を社会文化的に、また、歴史的に相対化し、反省することができました。その成果のすべてを文章として記すことはできませんでしたが、博士課程を通して知的興奮を何度も味わい、また、自己の変容を感じることができました。

もちろん博士論文の執筆は入学当初考えていたよりも順調に進みませんでした。博士論文を執筆しつつ研究の分析も同時並行で進めていくなかで、立ち止まってこれまでの分析結果や解釈を見つめ直すことが何度もありました。多くの人の助けを借りながら、時には妥協、葛藤しながら、紆余曲折を経て何とか書き進めることができました。博士論文を執筆していく中で、研究上の今後の課題と研究者としての私自身の課題が明確になったので、それらについて取り組んでいきたいと思います。

2 謝辞

私がここまで研究を続けることができたのは、多くの方々の支えがあつてのことでした。ここに記して感謝の意を表します。指導教員をはじめ、共同教科開発学専攻の先生方には心よりお礼申し上げます。指導教員のお二人の先生には、未熟な私を受け入れ、遅々とした私の歩みを暖かく見守っていただいたことに感謝しております。共同教科開発学専攻の先生方には、様々な角度から建設的なご指摘をいただくだけでなく、勉強会等にお誘いいただくなど、狭窄した私の視野を広げる数多くの機会をいただきました。

同専攻の大学院生の方々には、本研究に対して専門領域の視点から様々なご意見をいただきました。私の声に耳を傾け、真摯に向き合っていただいたことにとても感謝しております。他大学や他の研究室の大学院生のみなさんには、学会などでお会いする度に多くの刺激と励ましの言葉をいただきました。修士・博士課程在学中に出会った友人や後輩のみなさんには、私自身を見つめ直す機会と励ましの言葉を何度もいただきました。感謝申し上げます。最後に、両親と家族に心から感謝いたします。博士課程への進学を快諾し、研究に専念する環境を与え、心身ともに支えていただきました。ありがとうございました。

学 位 論 文 要 旨

Summary of Doctoral Thesis

専 攻：教育学研究科(博士課程)共同教科開発学専攻 氏 名：小池 嘉志

論文題目：算数・数学の問題解決型授業における精緻化を促進する指導法に関する研究

論文要旨：序章 本研究の目的と方法

今教育界では、学習内容の理解の質に着目した深い学びが重視されている。このような学習内容の理解の質に着目したとき、認知心理学における精緻化の概念が注目されている。精緻化とは既有知識を利用して新しい情報を解釈し、理解に至るプロセスをいう。この精緻化が適切に成されることによって、学習内容の理解は深まり学習の質は向上する(北尾,1981)。

一方でわが国の算数・数学教育で主流となっている問題解決型授業には理解に関する多くの問題点が指摘されている(尾崎,2014 他)。そこで本研究の目的を「算数・数学の問題解決型授業の問題点を、精緻化の視点から捉えることによってその原因を明らかにし、改善策として算数・数学の問題解決型授業において、精緻化を促進する指導法を構築し、その効果を検証する。」と設定し研究を進めていくこととした。

第1章 記憶を促進し、学習の質を高める精緻化についての基礎研究

記憶研究に端を発する精緻化の概念は、人が情報を受け取り解釈することへと適用が広がり、複数の知識が結びついて理解が深まる認知的プロセス全体を指すようになった。現在ではそれが学校学習における理解に深く関わる概念として広がりを見せている(北尾,1981)。

精緻化にはいろいろな型がある。中でも効果的なのが「なぜ」と問う精緻的質問によって、学習すべき事柄に自己生成した情報を付加する自己生成精緻化である(豊田,1987)。自己生成精緻化を生起させるには、何らかの教師の働きかけ(手だて)が必要となる。また精緻化の効果を見るためには精緻化が生じたかどうかを計る指標がある。それについて精緻化研究からの知見を検討した結果、精緻化を促す手だてを講じた後の子どもの姿、学習内容の保持、転移の状況および理解時の満足度を見ることがより可能であることがわかった。

第2章 精緻化の視点から見た算数・数学の問題解決型授業の課題と先行研究の検討

算数・数学の問題解決型授業は、自力解決の段階だけですべての子どもが解決できるわけではなく、必ず未解決者が存在する(菊池,2006)。そのため通常は、解決できた子の解法を全体で理解する解法理解活動が行われる。ところがこの解法理解活動は解法の全体が提示された後に行われるため、どうしても表面的な浅い理解に陥りやすい(藤村,2018)。すなわち解法の全体を提示しての解法理解活動では解法の十分な精緻化が難しい(北尾, 1984)。

これまで算数・数学の学習に精緻化を取り入れた先行研究は少ない。Silver(1982 他)、松川(1992)、

高橋(1994)が、問題解決における問題の理解の場面に精緻化理論を適用しているが解法理解活動の抱える問題点を解決するには至っていない。また藤村(2012)は解法理解活動における協同的探究学習により精緻化を促進しようとしているがその汎用性に乏しい。したがって本研究により、解法理解場面に焦点を当て、精緻化理論を適用することによって解法の精緻化を促し理解を深める汎用性の高い指導法を提案する意義は大きいといえる。

第3章 算数・数学の学習における精緻化理論の応用と精緻化の促進

算数・数学教育では内在的数学観に基づき、知識を与えるのではなく気づかせる、見つけるという過程を重視する。そのためには第1章で検討した自己生成精緻化が生起することが望ましい。ところが自己生成精緻化を含めた精緻化を促すには何らかの手だてが必要となる。そこで第1章から得られた精緻化についての知見、第2章から得られた算数・数学の学習過程についての知見をもとに検討した結果、精緻的質問、外化活動、協同学習、部分提示された解法の続きを完成させるという4つが精緻化を促進する手だてとして効果的であることが期待でき、それを考案することができた。

第4章 算数・数学の問題解決型授業における精緻化を促進する指導法の構築

算数・数学の問題解決型授業が抱える精緻化に関する問題点の原因は、解法の全体提示に集約できる。したがってそれを改善するために第3章で考案した手だては、解法の部分提示を前提としている。解法を部分提示することによって、第3章で考案した手だてを講じることにより解法の精緻化を促す指導法を発見的追跡法と名付けている(小池,2015)。発見的追跡法は、解決者の解法を、未解決者を含めたクラス全体が、精緻的質問や協同学習など精緻化を促進させる手だてによって精緻化し、解決者の着想や解決の全体構造を推察することによって追跡し、解決者の問題解決過程を再体験することを通して理解する指導法である。

第5章 授業実践を通して見る発見的追跡法の精緻化の効果の検証

第4章で構築した発見的追跡法は、精緻化を促し学習の質を高める効果が期待される。それを実証するために、第1章で得られた精緻化を見る指標に基づき、授業実践を通してその検証を行った。方法は発見的追跡法(実験群)による授業と一般的な説明・受容型学習(統制群)による授業を行い、授業中に講じられた手だてとそれに対する子どもの姿の様相、授業後のアンケートによる学習内容の理解度および満足度の調査、授業から2週間後に行われた事後テストによる学習内容の保持率、転移率の調査の結果を比較した。その結果、実験群の方が、手だてを講じる回数が多く子どもたちの精緻化の姿も多く見られる、理解度は同程度だが解法理解時の満足度が有意に高い、保持率、転移率ともに有意に高いという結果が得られた。これにより発見的追跡法の精緻化効果が実証され理論の妥当性が検証された。

終章 本研究の成果と今後の課題

本研究の成果は、算数・数学の学習内容の理解について精緻化の視点から考察し、子どもたちの算数・数学の解法理解に精緻化の概念を適用できたこと、そして問題解決型授業の問題点に対する改善策として、発見的追跡法を提案し、その有効性を実証できたことである。また課題としては、まだまだ十分とはいえない、一人でも多くの未解決者の自力解決を保障するために発見的追跡法を改良していくことである。

博士論文執筆体験談

(小池 嘉志 学籍：愛知教育大学)

私は愛知教育大学数学科出身であり、大学を卒業してすぐに教師になり、愛知県下の小中学校で 33 年間教員一筋に頑張ってきた。したがって私は修士をもっていない。私たちの世代はよほどのことがない限り修士をとることなどなかった。その私が修士をとばして博士をとることになったのは、ある大学からの誘いがあり転職したのがきっかけだった。大学の方から博士の学位を取るよう進められたのだ。

当初私は実践の積み上げから得た授業に対する経験知は豊富にもち合わせていたのだが、確固たる研究テーマをもっていたわけではなかった。そればかりか学校現場で管理職の経験が長かった私は、研究とはほど遠い生活を送っていた。したがってその当時の私は、大学での研究など学校現場では何の役にも立たないとさえ思っていた。そのような経緯から私は、どうせやるなら学校現場で、実際の授業に役立つことをやろうと考えたのだった。

私はその当時、長年の算数の授業の経験の末に行き着いたある一つの指導法に手応えを感じていた。後に私が発見的追跡法と呼ぶことになった指導法である。この指導法の研究なら役に立つ。これをやろうと決めた。それからだった、私の苦勞が始まったのは。発見的追跡法は自分が実戦を通して考え出した指導法である。関連した先行研究は見当たらない。また発見的追跡法がなぜ効果的なのか、なぜ子どもたちの理解が進むのかがうまく説明できない。やれると思っていた自信がどんどん揺らいでいった。そしてようやく精緻化という概念に出会いその研究に没頭した。ところが今度は学会誌に通らない。いくら論文を書いても通らない。思いはあってもそれを論文の形式にまとめるだけの能力が不足していたのだ。

結局博士論文を仕上げるのに 7 年かかった。今思えば研究者として未熟だった。何もわかっていなかった。一人でもがいていた。いろいろな論文を読むたびに自分の無学さを痛感した。そして知識を得るために本を読めば読むほど疑問点が増え、それを解消するためにまた新しい本を読むということの繰り返しだった。しかし学修を続け、新しい知識を得るたびに見えてくるものが違った。同じ本や論文を読んでいてもそこから得られるもの、読み取る意味が違った。知識は新しい知識を得るための礎だということを改めて実感した。

Google Scholar のホームページに「巨人の肩の上に立つ」という言葉がある。今改めてこの言葉をかみしめている。私の博士論文は学位論文としては拙い出来である。しかし私が抱いていた「学校現場の役に立ちたい」という思いは実を結んだと思っている。途中で何度も諦めかけたが続けて来てよかった。7 年間にわたり指導教官として私を見捨てずに指導をしていただいた愛教大の飯島先生、またそれぞれの専門の立場から指導していただいた静岡大の村越先生、熊倉先生はじめ諸先生方に心から感謝し、私の執筆体験談としたい。

VI. 教科開発学研究会

愛知教育大学大学院・静岡大学大学院 共同教科開発学専攻
第11回教科開発学研究会

開催形式：オンライン（Zoomによるリアルタイム開催）

開催日：2021年3月7日（日）

日程

8：50 開会の挨拶 愛知教育大学副代表 飯島 康之

9：00～10：10 研究発表1 座長：飯島 康之（愛知教育大学）

1 黒須 雅弘

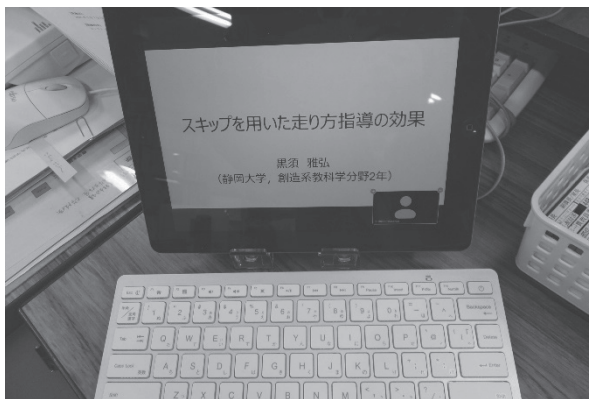
スキップを用いた走り方指導の効果

2 児玉 恵太・白畑 知彦

リーディング活動を通じた3つのL2語彙学習方法補効果比較

3 安達 美佑・松永 泰弘

斜面を球・円柱が転がり揺れながら移動するものづくり教材の開発と実践



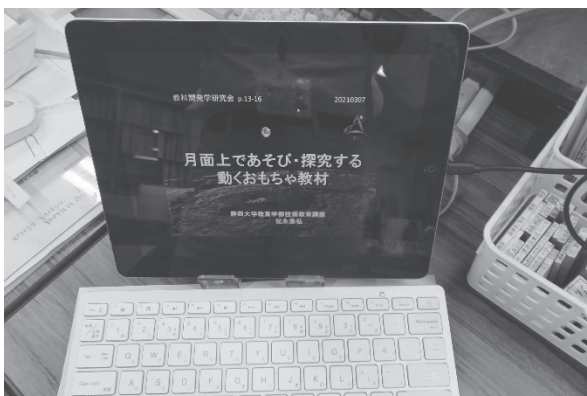
10：20～11：00 研究発表2 座長：新保 淳（静岡大学）

4 松永 泰弘

月面上であそび・探究する動くおもちゃ教材

5 橋詰 ゆり

小学校低学年の『表現リズムあそび』における「ふりかえり」の現状と自己調整力の育成を目指した「ふりかえり」の提案



11:15～12:15 博士論文報告1 座長：杉山 康司（静岡大学）

1 百瀬 容美子（静岡大学）

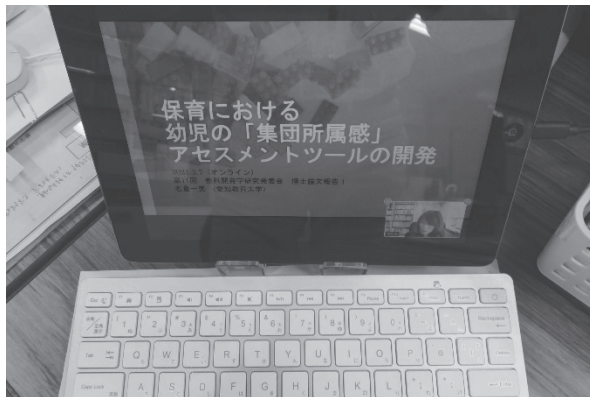
先天全盲児童・生徒の運動イメージ生成指導法と評価に関する研究

2 森 慶恵（愛知教育大学）

健康情報の判断と選択に注目した健康情報リテラシー教育に関する研究

3 名倉 一美（愛知教育大学）

保育における幼児の「集団所属感」アセスメントツールの開発



13:15～14:15 博士論文報告2 座長：野平 慎二（愛知教育大学）

4 田村 知子（静岡大学）

日本語の母語発話者における英語の派生接辞の第二言語習得と明示的指導

5 マム・チャンセン（愛知教育大学）

カンボジアの生物教育における物理的アプローチによる教材開発

6 荒谷 航平（静岡大学）

1821－1930年の米国ハイスクール「物理」の成立過程



14:30～15:30 博士論文報告3 座長：郡司 賀透（静岡大学）

7 小池 嘉志（愛知教育大学）

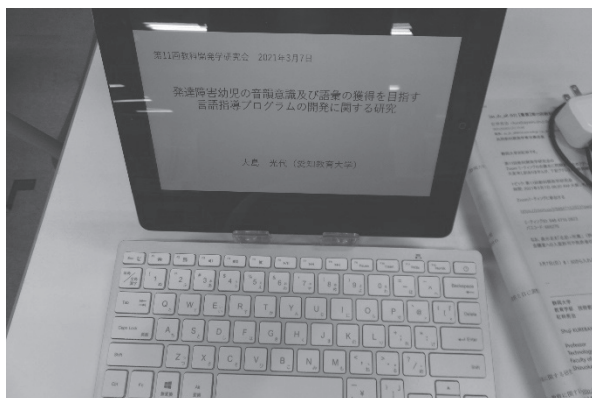
算数・数学の問題解決型授業における精緻化を促進する指導法に関する研究

8 大島 光代（愛知教育大学）

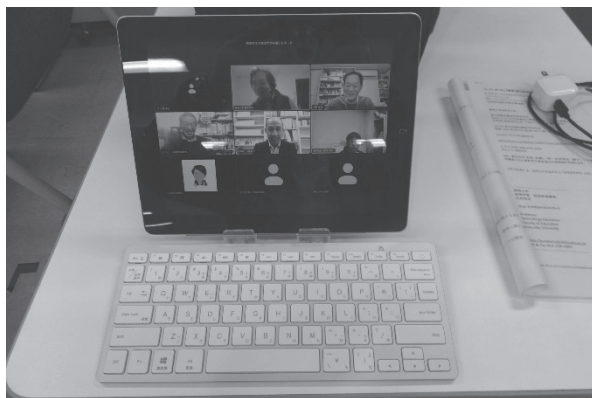
発達障害幼児の音韻意識及び語彙の獲得を目的とした言語指導プログラムの開発に関する研究

9 西ヶ谷 浩史（静岡大学）

設計を中心にした授業課程の研究（欠席のため、指導教員からの概要報告）



15:30 総評 共同教科開発学専攻連絡協議会副議長 白畑 知彦



VII. 教員の教育・研究活動

石 川 恭



所属 愛知教育大学教育学部保健体育講座
職位・学位 教授 博士（教育学）
博士課程分野 教育環境学
担当科目 教科開発学原論、遊び文化環境論、教科開発学セミナーⅠ，Ⅱ，Ⅲ
研究テーマ 遊び文化論、遊びと学び、ホイジングの思想研究

1. これまでの教育研究について

ヨハン・ホイジングの遊び文化論を現代社会との関りから、人生 100 年時代をよりよく生きるために、遊びと学びの関係について研究してきました。特に、今日の遊びが、子どもに及ぼす影響について焦点を当てて取り組んできました。研究の中で一貫している視点は、社会生活における遊びの重要性です。近代化が進むにつれて、社会生活における遊びの形態や内容はどのように変化したのか、それが人々にどのような影響を与えているのかといった観点です。そして、遊びこそが学びであることを主張してきました。

教育面では、授業を通して、人生 100 年時代の自由時間の過ごし方について、遊びと文化、自由時間と生きがいといった点から講義・演習を行ってきました。自由時間が増えている中で、どのような遊びが人々の生きがいと学びにつながるかを説いています。

2. 博士課程における教育研究について

博士課程においては、教育環境学と教科学を統合した教科開発学の視点から研究を行っています。具体的には、遊びをキーワードに、遊びと文化の融合や、現代社会における子どもの問題を、遊びによって解決する可能性を探ること、教科への伝承遊びの導入とその効果についてなど、理論的に構築し、その後、調査などを行い立証していく予定です。

3. 担当講義について

【教科開発学原論】

教育環境学と教科学を統合した学問としての背景と目的について理解を深めます。教育環境学は、学校環境だけでなく、地域・社会・文化を含んだ幅広い視点からの教育環境の発展を目指すものです。本講義では、子どもの遊びという視点から社会化との関わりについて説明しています。その上で、教科学への応用がどのような観点で可能かについて議論を行います。また、遊びと文化を機軸にして、特に、創造系と人文社会系の教科の現状と課題を捉えなおし、新たな教科観の開発・創造への可能性について検討します。

【遊び文化環境論研究】

現代社会における子どもの遊びは、昔と比べてかなり変化しています。この状況は、遊びそのものの変化に留まらず、様々な影響を子どもに与えています。講義では、現代に生きる子どもの問題を遊びとの関わりから考察します。また、遊びによって身につく社会を生き抜く力が、教育とどのような関わりをもつかについて、議論を交わします。その上で、遊びがもつ可能性について、グローバルな視点から文化の創造との関わりを考えます。

4. 主要研究業績

- 1) 教科学を創る, 第 1 集, 愛知教育大学出版会, 2014, 分担執筆。
- 2) 教科学を創る, 第 2 集, 愛知教育大学出版会, 2016, 分担執筆。
- 3) 子どもの問題に対する遊びの効果を取り入れた表現運動, 教科開発学論集第 1 号, 愛知教育大学大学院・静岡大学大学院教育学研究科, 2013. 3。
- 4) 教科開発学を創る, 第 2 集, 愛知教育大学出版会, 2018, 分担執筆。
- 5) 教科開発学を創る, 第 3 集, 愛知教育大学出版会, 2021, 分担執筆。

5. 主要社会活動

- 1) スポーツ指導者養成講習会「生涯スポーツ論」安城市 (2020. 8)
- 2) 安城市スポーツ推進審議会委員 (2020)
- 3) 豊明市スポーツ推進審議会会長 (2020)

野 平 慎 二



所属 愛知教育大学教育学部学校教育講座
職位・学位 教授 博士（教育学）
博士課程分野 教育環境学
担当科目 教科開発学原論、教育哲学・思想論研究、
教科開発学セミナーⅠ，Ⅱ，Ⅲ
研究テーマ ドイツ教育哲学・教育思想史の研究、物語論の人間形成論、
美的人間形成論

1. これまでの教育研究について

ドイツ教育哲学・教育思想史を主たるフィールドとしつつ、異質な他者といかに共存できるのか／共存できる主体を形成できるのか、をテーマとして研究を進めてきました。具体的には、人間形成における「美的なもの／崇高なもの」の意義に関する教育思想史的研究、コミュニケーション倫理学（J. ハーバーマース）に依拠した教育の公共性論や道德教育論などの研究を行ってきました。

2. 博士課程における教育研究について

物語論の知見に依拠しながら、伝統的な人間形成論（Bildungstheorie）と現代の経験的な人間形成研究（Bildungsforschung）をどのように媒介できるのかについて探究しています。特に、アイデンティティ形成や能力形成に還元されない人間形成の様相をいかに描き出せるか、主体と環境との相互作用としての人間形成の過程において、他者や共同体、構想力はどのような機能を果たすのかについて理論的、経験的に検討しています。

3. 担当講義について

【教科開発学原論】

教育哲学・教育思想史の観点から、教科指導と教科開発の考え方、ならびに人間形成にとって環境がもつ意義について検討します。教科を介した指導や、主体と環境との相互作用としての人間形成という考え方が成立した思想史的背景について考察し、同時に学校教育を取り巻く現代的な諸条件も勘案しながら、現代における人間形成のあり方をどのように描き出すことができるのかを探ります。

【教育哲学・思想論研究】

主としてドイツ教育哲学・教育思想史に依拠しながら、教育に対する現代的な考え方の歴史的、社会的な制約を問い直し、教育をめぐる倫理的に公正で公共的な語り方を探究することを目指します。特に近代の二元論的な世界観とそこから導かれる子どもに対する対象操作としての教育観を批判的に捉え直した上で、他者論や物語論の知見を踏まえながら、対象操作的でも弁証法的でもない人間形成の描き方を探ります。

4. 主要な研究業績

- 1) 野平慎二（2007）『ハーバーマースと教育』世織書房。
- 2) Shinji NOBIRA (2016) : Probleme der politischen Bildung im Zeitalter unübersichtlicher Wissenschaft und Technik. In : Gutjahr-Löser, P. / Schulz, D. (Hrsg.) : Der Egoismus unserer Tage. (Theodor Litt Jahrbuch 2016), Leipzig (Leipziger Universitätsverlag), S.123-134.
- 3) 野平慎二（2019）「共存と教育的関係 — J.L.ナンシーの共同体論にもとづく検討」、坂越正樹（監修）『教育的関係の解釈学』東信堂、113～125 頁。
- 4) 野平慎二（2021）「経験的な語りと人間形成論をつなぐ — ビオグラフィ・インタビューの意味形象の再構成を通じた反省的—規範的人間形成論の探究」、『愛知教育大学研究報告 教育科学編』70（印刷中）。

5. 主要な社会活動業績

- 1) 教育哲学会 理事（2016.9.～現在）
- 2) 教育思想史学会 理事（2009.10.～現在）
- 3) 一般社団法人 NGO インドネシア教育振興会 理事（2002.4.～現在）
- 4) 愛知県教育委員会生涯学習課 家庭教育企画委員会 委員長（2016.4.～現在）

石 田 靖 彦



所属 愛知教育大学教育学部学校教育講座
職位・学位 准教授 博士（心理学）
博士課程分野 教育環境学分野
担当科目 教育評価実証方法論，学校適応論研究，教科開発学セミナーⅠ・Ⅱ・Ⅲ
研究テーマ 児童生徒の学校への適応過程，学級内の人間関係が児童生徒に及ぼす影響

1. これまでの教育研究について

中学校新入生や大学新入生を対象として，児童生徒が新たな環境である学校に適応していく過程，及びそれに影響する個人差について研究してきました。また学級という環境は，児童生徒にとって学習する空間というだけでなく，1年を同じ児童生徒と生活をともにする生活空間でもあります。このような学級内の人間関係が，児童生徒の規範意識や授業態度，学習意欲などに及ぼす影響についても研究しています。

2. 博士課程における教育研究について

本博士課程では教育評価実証方法論，学校適応論研究ほかを担当しています。専門分野は，教育・社会心理学ですので，特定の教科に直接があるわけではありませんが，学生の皆さんの研究を聞かせていただきながら，教科開発学にどのような貢献ができるかを探っていきたいと思っています。

3. 担当講義について

【教育評価実証方法論（分担）】

この授業では，心理学におけるデータの収集法，相関的研究と実験的研究法，心理測定の必須としての尺度の信頼性と妥当性，因子分析などについて概説します。

【学校適応論研究】

学校への適応について，特に児童生徒の動機づけという観点から概観します。具体的には，「やる気を引き出す教師—学習動機づけの心理学（プロフィ著，中谷訳，金子書房）」を講読し，児童生徒の動機づけに関する理論や関連する要因，教育への応用について理解を深めたいと思います。

4. 主要な研究業績（2016.4 ～）

- 1) 親和欲求と拒否不安が仲間集団指向性とグループの所属・グループの特徴に及ぼす影響 愛知教育大学教育臨床総合センター紀要，10，10-19. 2020年（共著）
- 2) 小学校教師が重視する児童の特徴—教師の性格特性との関連と教員養成大学生との比較 愛知教育大学研究報告（教育科学編），69，93-98. 2020年（共著）
- 3) 教育社会心理学に関する研究の動向と展望 教育心理学年報，58，47-62. 2019年
- 4) 級友からの受容と教師からの受容に関連する性格特性—小学校と中学校の比較 愛知教育大学教育臨床総合センター紀要，8，18-25. 2019年（共著）
- 5) 教職志望の大学生が重視する児童の特徴—大学生の性格特性と児童の性格特性の重視度との関連 愛知教育大学研究報告（教育科学編），67，33-38. 2018年
- 6) 各学校段階におけるスクールカーストの認識とその要因—大学生を対象にした回想法による検討 愛知教育大学教育臨床総合センター紀要，7，17-23. 2017年
- 7) 級友との関係が協同的・個別的学習動機づけに及ぼす影響—小学生を対象とした検討 愛知教育大学研究報告（教育科学編），66，85-90. 2017年（共著）
- 8) 級友との関係が協同的・個別的学習動機づけに及ぼす影響—親和的な関係と競争的な関係に着目して—討 愛知教育大学研究報告（教育科学編），65，109-116. 2016年（共著）

5. 主要な社会活動業績（2016.4 ～）

- 1) 日本学校心理士会愛知支部支部長・中部甲信越地区幹事（2011.9-現在）
- 2) 愛知県教育職員免許法認定講習講師（2017.8，2019.8）
- 3) 教員免許状更新講習講師「教育の最新事情（必修）」（2016.8，2018.8，2019.8）

竹 川 慎 哉



所属 愛知教育大学教育学部学校教育講座
職位・学位 准教授 博士（教育学）
博士課程分野 教育環境学
担当科目 教科開発学実践論 教育方法・内容論研究
教科開発学セミナーⅠ，Ⅱ，Ⅲ
研究テーマ 教育方法学、教育課程論（特に、カリキュラムの政治学的研究、批判的リテラシー教育、授業づくり）

1. これまでの教育研究について

国内外の授業実践、理論を対象にしながら、学習者が自己と他者、社会との関係を（再）構築していく学びを保障するための授業づくりについて研究しています。特にアメリカ、オーストラリア、カナダで実践されている批判的リテラシー教育に注目しています。批判的＝異なる見方、別の見方を探り出す教授＝学習をどう創り出すかに関心があります。

2. 博士課程における教育研究について

教科内容研究、および教材・発問づくりへのポリティカルな視点の可能性と課題を検討しています。対話論、身体論、政治哲学と教科内容論、教材論、指導論との接点を探りつつ、公正、平等、多様性、ポリティクスなどをキーワードに、授業づくりの現状と課題を考えていきたいと思っています。

3. 担当講義について

【教科開発学実践論】

本科目では、各受講者のこれまでの研究を教科開発学の視点から再構成した発表と受講者・教員によるディスカッションを通して、教育事象を理論的検討課題として構想する方法論等を学ぶ。私の専門である教育方法学、教育課程論の観点から、教育実践の理論的研究と教育学理論の実践的研究の往還を提示していきます。

【教育方法・内容論研究】

教育実践におけるマクロとミクロのポリティクスを捉える理論枠組みを理解していきます。いわゆる「カリキュラム政治学」と呼ばれる研究群およびそれらの思想的基盤を形成している哲学、言語学、社会学の諸理論を取り上げ、検討します。その上で、授業における政治性の編み直し＝公正・平等な授業構造について、実践記録などをもとに検討を進めていきます。

4. 主要な研究業績

- 1) 竹川慎哉・木村裕（2020）「カリキュラムと教育評価」青木麻衣子・佐藤博志編著『オーストラリア・ニュージーランドの教育〔第三版〕－グローバル社会を生き抜く力の育成に向けて－』東信堂。
- 2) 木村裕・竹川慎哉編著（2019）『子どもの幸せを実現する学力と学校』学事出版。
- 3) 竹川慎哉（2019）「教育課程とカリキュラム」、吉田武男監修・根津朋実編著『MINERVA はじめて学ぶ教職 10 教育課程』、ミネルヴァ書房。
- 4) 竹川慎哉（2019）「授業研究と教師の力量形成」、子安潤編『教科と総合の教育方法・技術』、学文社。
- 5) Shinya Takekawa (2015). Effects of Globalized Assessment on Local Curricular: What Japanese Teachers Face and How They Challenge it. In D. Wyse, L Hayward & J. Pandya (Eds.). *The SAGE Handbook of Curriculum, Pedagogy and Assessment* (pp. 946-964). London: SAGE Publisher.
- 6) 竹川慎哉（2010）『批判的リテラシーの教育－オーストラリア・アメリカにおける現実と課題－』明石書店。

5. 主要な社会活動業績

- 1) 2015-2018 The Curriculum Journal, Editorial Board member
- 2) 2018-2019 日本教育大学協会企画・調査研究委員会「国立大学教員養成の将来像検討グループ～教員免許の国家資格化」ワーキング委員
- 3) 2018- 名古屋市立向陽高校 スーパー・サイエンス・スクール 運営指導委員 など

野 地 恒 有

所属 愛知教育大学
職位・学位 副学長・博士（文学）
博士課程分野 人文社会系教科学
博士課程担当科目 セミナーⅠ～Ⅲ
研究テーマ 日本民俗文化論、歴史民俗博物館論



1. これまでの教育・研究について

日本の文化や歴史を民俗学という分野から研究しています。主なテーマは日本の海洋文化論・都市文化論です。具体的には、近代以降に開拓・形成された集落（移住開拓島）の生活体系に関する研究や、金魚、菊、朝顔など都市で形成された観賞用動植物の飼育栽培文化に関する研究を進めています。

2. 博士課程における教育・研究について

教科開発学とは、基礎科学の成果を基軸としてその成果を社会的に還元させるための開発を図る応用科学の一つであり、基礎研究の成果を学校教育へ応用化するための開発を研究対象としてその体系化や理論化をめざすものである、と私は考えています。そして、基礎研究として民俗学の成果をふまえて、学校教育（とくに社会科歴史的分野）の場面に応用化を図るために開発する教材あるいは教材論の領域を「同時代生活誌」という形で提示することをめざしています。同時代生活誌は、現在の地域社会に内在する歴史や伝統を描き出すことにより地域の生活や生活に根ざした文化をとらえ、地域社会の未来を構想する内容構成になるとともに、基礎科学の民俗学研究にもインパクトを与えうるものと考えています（「教科開発学と大学教育の一貫性—民俗学＝同時代生活誌を基軸として—」『教科開発学を創る』2、愛知教育大学出版会[2018]参照）。

授業では、民俗学の調査法をふまえた地域の生活に根ざした伝統文化を題材として、教科開発学の構築について考えるとともに、受講者が自立的な研究の進め方や博士論文の書き方について理解を深め、身につけられることを目標としています。

3. 担当講義について

4. 主要な研究業績（2017.4 ～）

- 1) 「小学校社会科と民俗学教材論—高浜市吉浜地区における「同時代生活誌」の試みから—」『教科開発学を創る』1、愛知教育大学出版会（2017.3）
- 2) 「教科開発学と大学教育の一貫性—民俗学＝同時代生活誌を基軸として—」『教科開発学を創る』2、愛知教育大学出版会（2018.3）

5. 主要な社会活動業績

- 1) 愛知教育大学地域連携公開講座や市町村の市民大学講座などの講師：「暮らしの中の民俗学」・「松本清張から見た民俗学—「或る『小倉日記』伝」を題材として—」など
- 2) 岡崎市美術博物館博物資料収集委員会委員（2006～）、名古屋市博物館資料委員会委員（2013～）、鳥取県立博物館協議会委員（2014～）

稲葉 みどり



所属 愛知教育大学教育学部日本語教育講座
職位・学位 特別教授 博士（学術）
博士課程分野 人文社会系教科学
担当科目 教科開発学実践論、言語教育内容論研究
教科開発学セミナーⅠ，Ⅱ，Ⅲ
研究テーマ 言語教育に関する教科開発、外国語教育、言語習得、授業研究

1. これまでの教育研究について

研究テーマは第一言語習得、第二言語習得、外国語教育（日本語教育、英語教育）、異文化理解教育等です。外国語教育の授業研究、外国語教師の認知に関する研究も行っています。現在は、オンライン教育実習やオンライン日本語教育の方法等についての実践研究に取り組んでいます。学部では日本語教育学に関連した授業や実習、初等英語科教育、卒論等、教職大学院では英語教育（教材分析と授業実践開発・教材開発と編成・実践開発）に関する授業を担当しています。

2. 博士課程における教育研究について

ことばを柱とした研究や教育を創造していきたいと考えています。例えば、高等教育機関における日本語コミュニケーション能力の育成、小中高等学校における効果的な英語教育の方法、省察を通じた教師の成長等です。学位論文では、英語教育、日本語教育、国語教育、特別支援教育、幼児教育、保育等の分野の研究をしている指導生を担当しています。

3. 担当講義について

【教科開発学実践論】

新しい教育を創造開発するには、これまでの教育実践を省察し、問題点や課題を発見し、それと同時に実践を理論化して共有できるようにする必要があります。さらにその理論を指導に生かすための能力も求められます。授業では、高等教育機関での教育実践も射程に入れて、教科開発学における実践上の課題の把握、大学教員としての教育実践力、教員FD等、実践的諸課題を追究します。受講者は各自のこれまでの研究を、教科開発学の視点から構成しなおして発表し、具体的に議論を進めます。

【言語教育内容論研究】

「ことば」はどのような教科を学ぶにも基礎となります。教科を超えて、ことばを理解し、運用する能力を養成できるような教育の創造開発をめざします。さらに、世界に向けて発信力のある言語運用ができる能力や資質の養成を学校教育の中でどのように行うかを研究します。

4. 主要な研究業績

- 1) 稲葉みどり(2020). 「日本語模擬授業の自己評価ーこの実習で学生が学べなかったことー」『教養と教育』20, 7-14. 愛知教育大学共通科目専門委員会.
- 2) 稲葉みどり(2021)「物語文における4歳児・5歳児の発達に見られる特徴ーFrog Storyの分析からー」『教科開発学論集』9, 28-34. 国立大学法人愛知教育大学・国立大学法人静岡大学院教育学研究科共同教科開発学専攻（後期3年博士課程）.
- 3) 稲葉みどり.(2021). 「初等英語科教育の授業を創るー学部段階で養成すべき資質・能力ー」『教科開発学を創る』3, 69-88. 愛知教育大学大学院共同教科開発学専攻編.

5. 主要な社会活動業績

- 1) 一般社団法人大学女性協会国際奨学委員
- 2) 高校訪問出前授業、AUE日本語指導講習講師
- 3) 愛知教育大学公開講座開講（高校生向け講座、教員向け講座等）

伊 藤 貴 啓



所属 愛知教育大学教育学部社会科教育講座
職位・学位 教授 博士（理学）
博士課程分野 人文社会科学系教科学
担当科目 地理学教材研究論，文化資源活用論，教科開発学セミナーⅠ・Ⅱ・Ⅲ
研究テーマ 農業地域の自立的発展とその条件，ヨーロッパ国境地域の空間変動，
教員としての実践的指導力育成と地域教材開発（社会科地域学習および 防災教育）
教員養成における教科専門と教科教育の架橋に関する研究

1. これまでの教育研究について

地理学担当教員として，農業地理学および EU の国境地域や農村地域の研究を行ってきました。前者ではイノベーションを視点に農業地域の自立的発展を考え，他方でレジリエントな産地の条件を探っています。後者では主にオランダ国境地帯を対象に越境地域連携の展開と構造のほか，農村地域の持続的発展の方途を探る研究をオランダやルーマニアを対象に進めています。さらに，このような教科専門としての地理学をベースに教員養成段階における教員としての実践的指導力育成の方途を主に社会科と防災教育の分野で探っています。

2. 博士課程における教育研究について

本博士課程では地理学教材研究論ほかを担当しています。研究面では，自らの専門である地理学と社会科教育をフィールドに教科専門と教科教育の架橋に関わる方途を探りながら教科専門のおもしろさを伝えつつ，いかに教員としての実践的指導力を高められるのかを先達に学びながら考えるこの頃です。そのなかで，教員養成段階における教科専門と教科教育の架橋に関わる実践史研究に着手しています。

3. 担当講義について

【文化資源活用論】 文化資源としての地域資源について，そのとらえ方と地域形成・振興との関わりを愛知県におけるフードツーリズム，ルーラルツーリズムに事例を求めて，自然資源・景観・観光・人材育成などの観点から受講者とともに考えて学んでいます。

【地理学教材研究論】 本講義では地理学における野外調査の技法を座学とフィールドでの観察などから理解することで①「地域」を観る目を養い，②社会科の内容である地域社会の事象をフィールドで理解し，その仕組みを解き明かす能力とともに，③それらを構造的に把握して教材を開発する資質能力の育成を目的としています。

4. 研究業績（2017 年 4 月～ ）

- 1) ルーマニアのカルパチア山村における持続的発展. 矢ヶ崎典隆・菊地俊夫・丸山浩明編『シリーズ地誌トピックス 第2巻 ローカリゼーションー地域へのこだわり』朝倉書店，pp.100～109，2018 年 3 月
- 2) 愛知県三河地方における小学校社会科副読本の利用状況からみた社会科地域学習の課題. 地理学報告 119, pp.83～98，2017 年 12 月

5. 主要な社会活動業績

- 1) 愛知県防災教育マニュアル作成委員会（委員長）『あいちの防災教育マニュアル』（136p），2017 年 11 月
- 2) 豊田市史（現代部会）編さん執筆委員
- 3) 平成 31 年度教員免許状更新講習（総合的な学習の時間における国際理解教育）講師（共同開講）
- 4) 平成 31 年度 日本地理学会小林浩二研究助成審査委員会委員
- 5) 平成 31 年度 豊川市の未来を拓く教育推進懇談会（会長）
- 6) 安城市，岡崎市，高浜市，知立市，幸田町社会科副読本監修

中 野 真 志



所属 愛知教育大学生生活科教育講座
職位・学位 教授・博士（文学）
博士課程分野 人文社会系教科
担当科目 教科開発学原論、生活科教育内容論研究、教科開発学セミナーⅠ・Ⅱ・Ⅲ
研究テーマ ジョン・デューイの教育論、生活科及び総合的な学習の理論と実践

1. これまでの教育研究について

研究者として、当初、アメリカのカリキュラム理論及び社会科教育について研究していましたが、日本において生活科が誕生して以降、その研究対象を生活科、後に総合的な学習に広げ、カリキュラム理論だけでなく教育方法及び授業論の観点からも生活科、総合的な学習及び社会科の理論と実践について研究してきました。また、これらの研究とともに、ジョン・デューイの教育論、デューイ実験学校のカリキュラム理論と教育実践も研究しています。

2. 博士課程における教育研究について

本博士課程においては、これまでの研究成果に基づき、教科の内容構成のもととなる親学問が存在しない生活科及び総合的な学習を教えるのに必要な資質・能力とは何か、生活科と総合的な学習における体験と活動をどのように単元構想に位置づけ、それらを知識、技能の習得と活用及び態度の育成にどのように関連づけるのか、生活科と総合的な学習における素材とは何かについてカリキュラム理論、教育方法学および授業論の観点から考察すること、その考察を通して教科とは何かについてともに考えたいと思います。

3. 担当講義について

【生活科教育内容論研究】

生活科新設までの経緯、誕生した背景と要因について考察し、親学問をもたない生活科という教科の本質と独自性についての理解を深めます。そのために、まず、生活科の目標と内容、単元構想、年間指導計画の基本的な考え方について検討します。次に、生活科と総合的な学習の源流の一つであるデューイ実験学校のカリキュラム理論と教育実践について考察し、現在の生活科のカリキュラム及び授業実践を批判的に分析し、考察する能力の習得を目指します。

4. 主要な研究業績（2016.3～）

- 1) 「『民主主義と教育』における経験とリフレクシオン—探究・体験型学習の理論的基底—」（日本デューイ学会編『民主主義と教育の再創造—デューイ研究の未来へ—』、勁草書房、2020年、pp.188-196）
- 2) 「シカゴ大学時代のエラ・フラッグ・ヤング(Ella Flagg Young) (I)」『愛知教育大学研究報告』第69輯（教育科学編）2020年3月、pp.1-8
- 3) 『生活科・総合的な学習の系譜と展望』三恵社（加藤智との共編著）、2018年10月
- 4) 文部科学省、国立教育政策研究所、教育課程研究センター編著『発達や学びをつなぐスタートカリキュラム—スタートカリキュラム導入・実践の手引き—』学事出版、2018年4月（作成協力者・副主査）
- 5) キャサリン・キャンブ・メイヒュー、アンナ・キャンブ・エドワーズ著、小柳正司監訳『デューイ・スクール—シカゴ大学附属実験学校：1896年～1903年—』あいり出版、2017年（8章、18章、補遺1、補遺2の翻訳）
- 6) 「J. デューイ(John Dewey)のカリキュラム理論と教科観—デューイ実験学校のカリキュラム理論と相補的な歴史と地理を中心に—」『愛知教育大学研究報告』第66輯（教育科学編）2017年3月、pp.1-8
- 7) 「デューイ実験学校における探究的・協同的学習」『愛知教育大学研究報告』第65輯（教育科学編）2016年3月、pp.1-8
- 8) 『デューイ実験学校における統合的カリキュラム開発の研究』風間書房、2016年2月

5. 主要な社会活動業績（2021年3月）

- 1) 日本生活科・総合的な学習教育学会 常任理事（2002年度～現在）、副会長（2020年度～現在）
- 2) 日本デューイ学会、紀要編集委員（2019年度～現在）
- 3) 愛知県教育センター10年経験者研修（教科指導研修）小学校生活科 講師（2004年度～現在）
- 4) 社会福祉法人 愛知県社会福祉協議会 福祉読本『ともに生きる』編集委員長（2020年度～現在）

丹 藤 博 文

所属 愛知教育大学教育学部国語教育講座 教職大学院
職位・学位 教授・教育学修士
博士課程分野 人文社会系教科学
博士課程担当科目 文化資源活用論・国語科教育教材論研究
研究テーマ 言語論・文学理論・文学教育・物語研究（語り分析）



1. これまでの教育・研究について

ソシュールやウィトゲンシュタイン以降の言語論、記号論や構造主義による文学理論をベースとして、あるいは戦後文学教育の理論と歴史をふまえつつ、国語教科書に掲載される文学教材の読みについて研究しています。近年は、物語論（ナラトロジー）・フランスの国語教科書を研究することで、語りを日本の文学教育に導入すべく指導過程を提案し実践的な有効性を検討しています。

2. 博士課程における教育・研究について

高度情報化社会といわれ、子どもたちにもスマホが普及する中で、子どものリテラシーをどう育てていくか、文学的なテキストの果たすべき役割とは何かといったことを明らかにしていきたいと考えています。学校においても、電子黒板やデジタル教科書が導入されようとしています。メディア社会における文学の教育的な意味と役割を追究することが課題です。

3. 担当講義について

【文化資源活用論】

言語論・物語論について概説し、物語分析の手法を紹介します。そのうえで、小・中学校国語教科書に掲載される文学教材を分析し読みを問題としていきます。受講者には、自分で物語分析を行い、レポートとして提出してもらいます。

【国語科教育教材論研究】

戦後の文学教育の展開をたどることで、その成果と課題を明らかにします。20世紀の言語論・文学理論を参照しつつ、文学教育の在り方について考察します。そのうえで、小・中・高校の国語教科書における文学教材・説明文教材の読み直しを図り、教材価値について検討します。

4. 主要な研究業績（2018.4 ～）

1) 著書

〈単著〉

『ナラティブ・リテラシー—読書行為としての語り—』（溪水社 2018）

〈共著〉

『小学校国語科授業研究 第5版』（教育出版 2018）、『国語教育指導用語辞典 第4版』（教育出版 2018）、日本読書学会編『読書教育の未来』（ひつじ書房 2019）、全国大学国語教育学会編『新たな学びを創る 小学校国語科授業研究』（東洋館出版 2019）、『あまきみこハンドブック』（三省堂 2019）

2) 論文

「連載・語り講座①～⑦」『道標』（Vol. 33～39 教育出版 2016～2019）、「附属学校園ワンダーランド」愛知教育大学教職キャリアセンター 教科教育部門『SCOPEⅢ』（No. 9 2019. 3）「中学校における〈言語論的転回〉の授業」『愛知教育大学 教職キャリアセンター紀要』（第5号 2020. 3）、「抵抗のメソッド—主体的読みとは何か—」『国語国文学報』（第78号 2020. 3）、「新型コロナウィルス・ICT教育・言語活動」愛知教育大学教職キャリアセンター 教科教育部門『SCOPEⅢ』（No. 10 2020. 3）、「文学教育再考のための覚書—読書行為の視座から—」『国語国文学報』（第79号 2021. 3）

5. 主要な社会活動業績（2020）

- 1) 日本文学協会委員、日本読書学会理事・編集委員、全国大学国語教育学会理事・編集委員
- 2) 広島大学大学院客員教授、三重大学人文学部・教育学部非常勤講師
- 3) 国語教科書編集委員（『ひろがる言葉 小学国語1年～6年』教育出版、『伝え合う言葉 中学国語1年～3年』教育出版）
- 4) 日本教職員組合教育研究全国集会（日本語教育）共同研究者、教研集会愛知大会・岡崎市教育研究大会（国語）共同研究者
- 5) 愛知教育大学附属名古屋小学校・岡崎小学校・岡崎中学校（国語）共同研究者、附属名古屋中学校校長
- 6) 西春日井国語サークル講演

高 橋 美由紀



所属 愛知教育大学 外国語教育講座
職位・学位 教授・博士（地域研究）
博士課程分野 人文・社会学系教科学
博士課程担当科目 外国語教育内容論研究、教科開発学原論、教科開発学セミナーⅠ・Ⅱ・Ⅲ
研究テーマ 小・中学校外国語（英語）教育、アジア地域研究（言語教育政策、言語・文化等）

1. これまでの教育・研究について

「日本人の英語」についての研究課題は、商社勤務（三菱商事株式会社）で綿花輸入の業務に携わった時からであった。その後、教育現場で生徒に教える機会があり、日本の英語教育についても課題を持つこととなった。また、大学入試センター研究開発部の客員研究員として、バイリンガルの子も達や帰国子女が、どちらの言語も操れないという現実を知り、子ども達のバイリンガル教育についての研究も行った。そして、シンガポールの子も達も、母語と学校用語が異なる現状を調査し、かれらの言語使用や言語能力の影響について研究を始めた。

二つの大学院で、応用言語学（博士前期・後期課程）、及び、地域研究（博士一貫課程）分野の研究科で、英語教育や言語教育政策などについて、理論と実践、及び、フィールドワークを主軸にした研究を行った。どちらの大学院でも研究対象は「こどもの言語教育」であり、これらの研究は、「An Approach to the Early English Education in Public Elementary Schools in Japan」「公立小学校における英語教育導入」、及び、「シンガポール華人社会における児童とその母親に見る言語環境の動態の研究」の博士論文に集約される。また、「Issues and Aspects Surrounding English and the English Education of Children in Asian Countries」などのアジア地域の小学校英語関連の発表などは、これらの二つの大学と、客員研究員として National University of Singapore の Faculty of Arts and Social Sciences ; Chinese studies での研究成果である。

2002 年度小学校英語活動導入時、テキスト教材及び指導書、歌とチャンツの CD と指導法ビデオ等を作成した。高橋美由紀・山岡多美子(著)(2001)『Sunshine Kids Book 1/2』(2002)(開隆堂出版)。さらに、2011 年度の小学校外国語活動導入に伴い、テキスト教材などを作成した。高橋美由紀(代表著者)(2009)『Hello, Kids! Book 1/2』(開隆堂出版)。両教材とも、その後に文部科学省で作成された『英語ノート』(開隆堂出版)や『Hi, friends! Book 1/2』(東京書籍)の内容や指導方法などに類似点が多くみられることから、筆者らと文部科学省の方向性が一致していることが認識できた。

2. 博士課程における教育・研究について

博士課程の外国語教育内容論研究では、外国語教育の言語政策、言語教育、社会言語学などの分野、及び、英語教育（対象は初等教育と中等教育）についての教育・研究を行う。また、Doctor of Education (EdD)を視野にいれて、より実践的な方法による方法論の修得、すなわち、「事例研究」「フィールドワーク」など、及び、教育現場でのつながりを大切にしたい教育・研究を行う。なお、「外国語教育内容論研究」では、国際共通語である英語の役割と小学校英語教育について、理論と実践の視点から授業を行う。

3. 主要な研究業績

1) 【招待講演】

Миюки Такахаси (2018) "Традиционные символы Японии (цвета, цифры, цветы, животных), суеверия и традиционных обычаев" "The traditional symbols of Japan (colors, numbers, flowers, animals), superstitions and traditional customs". Kazan University in Russia

2) 【論文】

高橋美由紀、山内優佳、柳善和 (2020) 「小学校英語教育における「読むこと」「書くこと」に関する評価」『愛知教育大学研究報告』第 69 輯 pp. 1-8

高橋美由紀、河合紳和、澤田育子、柳善和 (2021) 「外国語教育・音楽教育における「英語の歌」の指導 ―教科間の連携と「音韻構造」に焦点をあてて―」愛知教育大学・静岡大学教育学部共同教科開発学専攻『教科開発学論集』第 9 号 pp.33-43

高橋美由紀 (2021) 「主体的・対話的で深い学び＝アクティブ・ラーニングの視点からの小学校外国語活動・外国語科の授業づくり」『外国語研究』第 54 号 pp.1-14

4) 【出版物】

Anthony RYAN、高橋美由紀 (2020) 『CLIL in Diverse Contexts 次期学習指導要領と CLIL を活用した英語の授業づくり』鳴海出版 全 237 頁「グローバル人材育成のための小学校外国語活動・小学校外国語教育―教科書教材にみられる CLIL」他担当
梶田徹一（編著）、高橋美由紀他 (2019) 『人間性の涵養』金子書房 全 198 頁「英語学習と人間性の涵養」担当
信田敏宏・加藤剛（編著）、高橋美由紀他 (2019) 『東南アジア文化事典』丸善出版 全 794 頁「シングリッシュ」担当
石塚等（編著）、高橋美由紀 (2020) 『最新教育課題解説ハンドブック 組織マネジメントから危機管理まで』ぎょうせい
「小学校における外国語活動・外国語科」担当

5) 【研究発表 シンポジウムパネリスト】

Takahashi, M. (2020) 「Initial Cross-Cultural Research: Lesson Study for Pre & In-Service Teacher Education -In-service teacher Education for Elementary & Junior School in Japan」 The World Association of Lesson Studies (WALS) 2020 Symposium

岩 山 勉

所属 愛知教育大学 理事・副学長（理科教育講座）
職位・学位 教授・博士（理学）
博士課程分野 自然系教科学
担当科目 科学技術活用論、物理教材論研究、教科開発学セミナーⅠ、Ⅱ、Ⅲ
研究テーマ 物理教材開発、理科におけるものづくり教育、半導体物理学



1. これまでの教育研究について

量子ビーム（イオン・レーザービーム等）を用いた半導体ナノ結晶の作製とその物性評価を中心とした研究を行っている。半導体物質を微細化することにより、固体の物性と著しく異なる半導体ナノ結晶特有な物性の発現が期待される。これは、量子サイズ効果や表面効果などによるものである。現在は、イオンビーム（イオン注入法）、レーザービーム（レーザーアブレーション法）、エキシマUVランプ、近赤外線ランプ、電子線等を用いることにより、微細構造の制御された半導体ナノ結晶、機能性薄膜を作製し、その物性の評価、さらには、その光電子機能デバイスとしての応用の可能性探索を行っている。

2. 博士課程における教育研究について

子どもたちの「理科離れ」が様々な場で叫ばれており、対応が急務となっている。これは、教育現場で「なぜ理科を学ぶ必要があるのか」という素朴な疑問に明確に答えていないことに原因の一端があるものと思われる。現実的には、科学技術の発展とともにブラックボックス化され、専門家以外はその原理を知らず、単にユーザとしてその恩恵を受けるのみの場合が多い。博士課程では、これまでの研究を基盤として、先端科学技術の原理をいかに簡素化・モデル化し、教育現場に定着させていけるのかという課題に取り組んでいる。また、先端科学技術を活用した教材開発や新規教材開発にも取り組んでいる。

3. 担当講義について

【科学技術活用論】

最新の化学技術研究の成果をふまえ、初等・中等教育の教科内容における広範な専門的知識の重要性の認識とその理解を深める授業を行う。博士課程における、共通的な科目であり、非専門の方々も多く履修することを考慮して基礎から学び、その知識を活かす方法や、その面白さについて学ぶ。

【物理教材論研究】

身の回りの物理現象や先端科学技術を概説しつつ、教材開発力を養い、その授業での活用法を検討する。特に、学習への動機付けや日常生活との関わりから、理科を学ぶ意義や目的、楽しさを伝える工夫として従来型の理科教材ではなく、先端科学技術を利用した「日常生活」と「理科学習」をつなげる新規の教材開発研究を行い、その有用性を検討する。

4. 主要な研究業績

- 1) 「小学校で理科を教えるための理科ミニマム ～小学校教員を目指す学生と理科の苦手な現職教員のために～」愛知教育大学出版会（2018）.
- 2) 「中学校理科研究（物理分野）」愛知教育大学出版会（2018）.
- 3) 「理数探究（物理分野）」愛知教育大学出版会（2019）.
- 4) 「電気抵抗の視覚的理解が可能な新規教材開発－中学校理科・高等学校物理・理数探究における活用－」教科開発学論集 8, 73-82 (2020).
- 5) "Electrical resistor and capacitor using carbon-based papers for creative thinking to deepen and extend learning", Physics Education (IOP Publishing), **56**, 35006 (2021).

5. 主要な社会活動業績

- 1) 刈谷市理数大好き推進協議会理事
- 2) 刈谷市立住吉小学校学校評議員
- 3) 愛知県立刈谷高等学校 SSH 運営指導委員・評価委員
- 4) 愛知県立豊田北高等学校学校評議員

稲 毛 正 彦

所属 愛知教育大学教育学部理科教育講座
職位・学位 教授・理学博士
博士課程分野 自然系教科学
担当科目 科学技術活用論, 理科教育内容論研究, 教科開発学セミナー
研究テーマ 無機化学, 環境科学分野での教科開発



1. これまでの教育研究について

学部および大学院において無機化学担当教員として教育と研究に携わっています。主な研究テーマは金属イオンの関与する電子移動反応, 光化学反応や配位子置換反応などの溶液内反応に関する研究です。金属ポルフィリン錯体などの特異な反応性を示す金属錯体を取り上げ, その動的挙動を各種の分光法を利用して明らかにするとともに, 高速レーザー分光の手法を駆使して, 光励起に伴って生じる不安定化学種の電子構造や反応性の解明をめざして研究を行っています。最近は無機ポルフィリン複合系における光誘起電子移動反応のダイナミックスの解明とその応用としての光エネルギーの化学的エネルギーへの変換にも取り組んでいます。

2. 博士課程における教育研究について

本博士課程においては, 近年注目されている地球環境問題を念頭におき, 自らの専門分野である化学を基盤として環境科学の研究成果を学校教育にいかに関与させるかという課題に取り組むと考えています。地球環境の保全と人類社会の持続可能性への展望の提示が現在の学術界に課せられた大きな課題であり, サステナビリティ学の学校教育への展開という観点から博士課程での教育研究に関わっていきたくと考えています。

3. 担当講義について

【科学技術活用論】

現代文明は最先端の科学的知見に基づいて作り上げられたさまざまな技術に依拠しています。学校教育においては, 科学技術の負の側面に留意しつつ, それらを適切に伝授し, その適正な活用に関する理解の増進を図る必要があります。このような観点で, 化学の分野における科学技術の活用について解説を行います。

【理科教育内容論研究】

近年, 地球環境が悪化の一途を辿っています。学校現場では次世代を担う人材の養成のために, このような地球環境問題への関心を喚起するとともに, 問題を正確に理解し, 持続可能な社会の構築のための処方箋を考える必要があります。本授業では温室効果や低炭素社会実現を目指した代替エネルギー開発などを題材として, 持続可能な社会の構築のための戦略の学校教育への展開を検討します。

4. 主要な研究業績 (2017 年 4 月以降)

- 1) Structure Dependence of Intramolecular Electron Transfer Reactions of Simple Dyads of Zinc(II) Porphyrin Complex Bearing a Peripheral Bipyridine Moiety, K. Sakakibara *et al.*, *Dalton Trans.* **2017**, 46, 12645-12654.
- 2) Behavior of Ionic Liquids Around Charged Metal Complexes: Investigation of Homogeneous Electron Transfer Reactions between Metal Complexes in Ionic Liquids, T. Mabe *et al.*, *J. Sol. Chem.* **2018**, 47, 993-1020.
- 3) Reactivity of Boronic Acids toward Catechols in Aqueous Solution, Y. Suzuki *et al.*, *J. Org. Chem.*, **2020**, 85, 5255-5264.
- 4) Intramolecular photoinduced electron transfer reactions of zinc(II) porphyrin dyads studied with a sub-ns time resolution, K. Sakakibara *et al.*, *Journal of Porphyrins and Phthalocyanines* **2020**, 24, 1099-1104.

5. 主要な社会活動業績

- 1) 愛知教育大学連携公開講座講師「環境科学と日常生活の関わり」
- 2) 名古屋市立向陽高等学校 SSH 運営指導委員会委員
- 3) 日本化学会東海支部幹事 (2018-2019 年度)

飯 島 康 之



所属 愛知教育大学教育学部数学教育講座
職位・学位 教授 教育学修士
博士課程分野 自然系教科学
担当科目 数学教材論研究
研究テーマ 動的幾何ソフトを中核とした教育用ソフト開発・コンテンツ
開発・授業研究, 数学教育

1. これまでの教育研究について

数学教育学に関する教育・研究を行っています。中核は、Geometric Constructor(GC)という動的幾何ソフト(作図ツール)です。DOS 版(1989-), Windows 版(1996-), Java 版(2000-), html5 版(2010-)を開発しました。附属学校その他さまざまな学校と連携して授業研究を行い、動的幾何ソフトが数学教育に及ぼす影響を、教材研究、カリキュラム研究、授業研究など幅広く、理論的かつ実践的に研究しています。

2. 博士課程における教育研究について

2010 年から開発に着手した GC/html5 は、いろいろな意味での先進性を研究する中核になっています。html5+JavaScript で開発することによって、次世代の教育用ソフトのあり方を具現化しています。複数の点を同時に動かせることなど、操作性と数学的活動との対応づけもできます。4 人 1 組での学習の場で利用することによって言語表現の活性化が期待されます。また附属学校・公立学校の実際の授業で検証し、理論的かつ実践的に明らかにすることに取り組んでいます。

3. 担当講義について

【数学教材論研究】

数学教育において、数学的問題解決に対して汎用のソフトを開発・利用することで、その改革を目指すさまざまな研究に注目します。ソフト開発、コンテンツ・教材開発、授業研究、認識論的研究などのさまざまな領域において、それらの研究がどのように行われているのかを文献で明らかにするとともに、GC に関する実際のコンテンツ・教材開発や授業研究に接し、理論的かつ実践的に研究します。今年からは STEM 教育の中での数学のあり方も模索してみたいと思っています。

4. 主要な研究業績 (2015.4 -)

Y. Iijima, Ch. 64 Teaching and Learning Mathematics and communication technology in Japan - the case of Geometric Constructor, Bharath Sriraman et al (eds), The First Sourcebook on Asian Research in Mathematics Education : China, Korea, Singapore, Japan, Malaysia, India (International Sourcebooks in Mathematics Education), 1437 - 1553, 2015

飯島康之, 作図ツール GC/html5 の開発—HTML5+JavaScript による教育用ソフト開発の可能性—, 科学教育研究 vol.39, pp.161-175, 2015

飯島康之, 作図ツール GC/html5 を用いた数学的探究における精度・誤差について - インターラクティブな探究に向けて -, 教科開発学論集 4, 111-121, 2016

飯島康之, ICT を利用した算数・数学での探究のサイクルについて - 完全数などについての探究事例を手がかりに -, イプシロン 59, 7-18, 2017

飯島 康之, GC を使った「学び合い」の授業のための教材研究の一例 -12/6 の GC 活用研究会(松元実践)に向けて-, イプシロン. 60, p. 7-16, 2018

飯島康之, GC を使った数学的探究における事実と問いのダイナミズム -対応表をもとに進める数学的探究に関するケーススタディを基にして-, イプシロン, 61, 9-24, 2019

小 谷 健 司

所属 愛知教育大学 教育学部 数学教育講座
職位・学位 教授・博士（理学）
博士課程分野 自然系教科学
担当科目 科学技術活用論, 数学教育内容論研究, 教科開発学セミナーI, II, III
研究テーマ 数学教材開発, 常微分方程式論



1. これまでの教育研究について

私の研究分野は常微分方程式論です。常微分方程式とは微分を含む方程式で、自然科学の研究に大いに役立っています。私は常微分方程式を幾何学的に考える問題に興味を持ち、長年研究を行ってきました。同時に、教育学部の学生たちと身近な事象に現れる数学的な問題についても研究してきました。このことについても、いくつかの結果を残しています。

2. 博士課程における教育研究について

私は長年、身近な事象に現れる私は数学について研究してきました。このことを生かし、学生のみならずと新たな数学教材を作り出したいと思っています。

3. 担当講義について

【科学技術活用論】

数学的な考え方・数学的な問題解決の仕方について、身近な事象に現れる数学を題材として授業したいと思います。内容は受講者の経歴等によって柔軟に変更します。

【数学教育内容論研究】

授業内容の1つめは、数学を教えるうえで知っておくべきことです。例えば、人類は実数を2千年以上のむかしから使ってきました。しかし、その正体について詳しく理解している人は少ないと思います。授業内容の2つめは、身近な事象に現れる数学についてです。内容は受講者の経歴等によって柔軟に変更します。

4. 主要な研究業績

- 1) 高校訪問授業の記録 15 ゲームを数学的に考える, イブシロン 61 (2019), 63-68.
- 2) Relations between two generalized pi's, 愛知教育大学研究報告, 自然科学編 68 (2019), 1-3. (Lucy Sokea 氏との共著)
- 3) ビー玉の数学, イブシロン 60 (2018), 51-58.

5. 主要な社会活動業績

- 1) 新城市教育委員会「数楽チャレンジ大会」実行委員会 顧問 (2001年～現在)
- 2) 愛知県立刈谷高等学校 SSH 運営指導委員会委員 (2014年～現在)
- 3) 国際協力事業団 短期専門家 (数学教育) (2001年7月31日～9月8日)
- 4) 国際協力事業団 短期専門家 (数学教育) (1999年3月28日～4月9日)

古 田 真 司



所属 愛知教育大学教育学部養護教育講座
職位・学位 教授 博士（医学）
博士課程分野 創造系教科学
担当科目 教育評価実証方法論、保健教育内容論研究、
教科開発学セミナーⅠ・Ⅱ・Ⅲ
研究テーマ 学校保健、養護教育、保健教育、健康情報リテラシー

1. これまでの教育研究について

これまで公衆衛生学、特に学校保健の分野を中心に研究を行ってきました。この分野におけるテーマは、「不定愁訴を持つ児童・生徒に対する教育保健学的研究」です。不定愁訴とは、器質的異常がないのに症状（頭痛やだるさ、腹痛など）が出現することで、学校の保健室に内科的な訴えで来室する児童・生徒の多くがこれに当てはまります。医学的な異常がなくても症状があるのは事実で、そのことを教員（あるいは養護教諭）や子ども自身が理解する手段として、生理学的指標を用いて、学校での対応方法を検討しています。

2. 博士課程における教育研究について

学校では日常的に、一般教員や養護教諭によって、児童・生徒の健康を守り健康を育んでいくための授業や指導（保健教育や保健指導）が行われていますが、残念ながら、その内容についてはきちんと吟味されていません。医学や保健の分野では、次々と新しい考え方や発見が発表されています。しかし、これらをそのまま鵜呑みにして安易に行動することはとても危険です。保健分野の様々な情報から、何が正しいかあるいは有用かを見分けて、自らの健康行動に結びつける能力を、私は「健康情報リテラシー」と呼んでいます。学校現場で、子どもたちにこのような能力を身につけさせる方法を研究しています。

3. 担当講義について

【教育評価実証方法論】

学校教育における児童・生徒へのさまざまな指導や教育方法について、その妥当性や効果を科学的に検証することは、教科開発の視点からも非常に大切です。ここでは、学校で行われる保健指導や保健教育に対する評価法をとりあげて、その概要を解説します。

【保健教育内容論研究】

保健教育には、限られた時間数の中で、子どもたちに生涯にわたって自らの健康を守る能力を身につけさせるという目標があります。そのため、まず保健教育が何をめざすべきかの議論を中心に、文献的な検討を行います。これを踏まえて、それぞれの学校にふさわしい保健教育案を作成する方法について検討していきます。

4. 主要な研究業績（2013.4 ～）

- 1) 保健教育における健康情報リテラシーの重要性に関する検討，教科開発学論集 第1号. 1-12, 2013年6月
- 2) 児童・生徒の合理的な「判断力」育成をめざして構想する保健教育の教科学，教科学を創る 第1集(愛知教育大学出版会) 125-141, 2013年9月
- 3) 中学生の健康情報リテラシーに関する基礎的検討，愛教大研究報告 63(教). 65-73, 2014年3月
- 4) 学校全体で取り組む体育・健康に関する指導の長期的影響に関する検証－「はだし教育」を受けた児童の約20年後の調査から－，教科開発学論集 第2号. 161-169, 2014年3月
- 5) 文献研究の方法－教育現場における研究のために－，学校保健研究 57(1). 41-45, 2015年4月
- 6) 中学生の保健分野における批判的思考力に関する基礎的検討，東海学校保健研究 39(1). 45-57, 2015年9月
- 7) 学生健康情報リテラシーを向上させるためのプログラム開発，愛教大研究報告 66(教). 55-61, 2017年3月
- 8) 保健教育の評価を目的とした健康情報判断力テストの開発，教科開発学論集 第5号. 1-11, 2017年3月
- 9) 教科開発学における教育評価の重要性－保健分野の教育評価論からの一考察－，教科開発学を創る 第1集(愛知教育大学出版会). 109-123, 2017年3月
- 10) 保健分野の教育実践を「論文」にするための視点－実践から科学的根拠（エビデンス）を抽出するために－，教科開発学を創る 第2集(愛知教育大学出版会). 103-116, 2018年3月

5. 主要な社会活動業績

- 1) 知立市・市民公開講座「役に立つ医学・健康情報の集め方」
- 2) 附属名古屋中学校教育研究発表会・学校保健情報交換会・指導助言者

寺 本 圭 輔

所属 愛知教育大学教育学部保健体育講座
職位・学位 准教授・博士（人間環境学）
博士課程分野 創造系教科学
博士課程担当科目 教科開発学実践論・保健体育内容論研究
研究テーマ 健康科学、発育発達、水泳



1. これまでの教育・研究について

私の研究分野は運動生理学及び水泳である。運動生理学的研究では、主に小児期の発育発達と生活習慣や運動習慣、エネルギー代謝をテーマとして研究を行っている。また、近年では発展途上国（カンボジア）の小児の発育調査や身体測定の普及にも取り組んでいる。水泳研究では、学校水泳や初心者の教授法や教材開発をテーマとして研究を行っている。

2. 博士課程における教育・研究について

子どもたちの体力低下やその下げ止まり、メタボリックシンドロームやロコモティブシンドロームの低年齢化は既知であるが、時代に即した適応ではないのか？とも考える。子どもたちの健全発育としての適切な動きやその巧みさとそれに関わる要因、悪とするならどのように学校教育や日常生活で改善できるのか、考えていきたい。また、水泳＝泳法として行われる水泳教育の弊害によって多くの水泳嫌いを招いている。水泳教育は本来どうあるべきか、考えていきたい。

3. 担当講義について

【教科開発学実践論】

授業参加者・担当教員が様々な専門領域を持っている中で自分の研究テーマを発表することは、多くの新たな気づきが得られる機会となると考える。当たり前と考えていたことが覆されたり、自分の専門領域のみでは大きな壁であったことが学際的視点により大きく進むこともある。本授業がそのきっかけとなればと考えている。

【保健体育内容論研究】

保健体育に関する課題を運動生理学及びバイオメカニクスの観点から提起し、議論していきたい。特に、子どもたちの発育や動きの現状、それを改善する策を教科開発学の観点から授業参加者で考えたい。また、水泳のみならずそれぞれの本来の運動についての系統的学びと学校教育の現状と課題についても議論したい。

4. 主要な研究業績（2020.4～）

1) 著書

〈単著〉

「水泳＝泳法」ではない水泳教育-水中環境における系統的学びの展開-。教科開発学を創る，第3集，愛知教育大学大学院共同教科開発学専攻篇，2021.3.

2) 論文

- ・短期間の中強度トレーニングが内臓脂肪蓄積及び筋肉脂肪に及ぼす影響. 人間と生活環境, 28 (1), 2021.5.
- ・児童における投動作の短期間学習が投能力の性差に及ぼす影響. 愛知教育大学愛知教育大学研究報告. 芸術・保健体育・家政・技術科学・創作編, 第69輯, 2021.3.
- ・入水時に発生する気泡が競泳スタート局面に与える効果. 愛知教育大学保健体育講座研究紀要, 45, 2021.3.
- ・ジュニア競泳選手におけるエネルギー不足の現状と不足要因の検討. 愛知教育大学保健体育講座研究紀要, 45, 2021.3.
- ・Physical Growth of Primary School Children in Cambodia. Int. J. School Health, 8 (1), 18-27, 2020.10.
- ・幼児期における全身反応時間の年齢差の検討および脚伸展筋力との関係. 発育発達研究, 87, 1-9, 2020.5.

5. 主要な社会活動業績（2020）

日本水泳連盟科学委員会委員、三重県水泳水泳連盟医科学委員会委員長、愛知県健康推進学校審査委員

村 越 真



所属 静岡大学大学院教育学領域
職位・学位 教授 博士（心理学）
博士課程分野 教育環境学
担当科目 学校危機管理論研究、教育フィールド調査論、教科開発学セミナーⅠ・Ⅱ
研究テーマ リスク認知、学校の危機管理、リスクマネジメント、空間認知、安全教育、

1. 研究ハイライト

- ①不確実性の高い環境の中で、人はどう賢く問題解決をしているのか？
- ②主体的、対話的な安全・防災教育の探求
- ③リスクの高い環境でのリスクマネジメントの知恵（実践知）

上記3テーマをここ20年間の研究の柱としてきた。①は主としてナビゲーション・空間認知のテーマで、成果としては、(村越、1991、1995；Murakoshi、1990、1994、Murakoshi、1997；村越、2004等)がある。2000年以後は、②③を主たるテーマとして、**子どもや教員・指導者がどのように危険を認知しているのか、そこにどのような安全上の課題があるのか**(村越、2004、2006、2008)、**危険を回避するスキルを育成する上で有効な教育方法はどのようなものか**を実践・実験の両面から検討した(2011、2015；村越・小山・河合、2016、村越、2020)。また、**自然体験・アウトドアスポーツでの事故の実態、活動者の危険認知や対処能力**についての研究も行った(村越、2010、2013、2016；村越ら、2014)。2016年からは、自然環境の中でリスクに気づき対処する認知プロセスの実証研究を進め、高齢者はリスク特定能力が低下することを示唆する結果を得た(村越、2017)。また、**過酷な自然環境のリスクに対する知識や実践知**の研究を行っている(満下・村越、2019)。国立登山研修所の専門調査委員や講師として、これらの成果を山岳遭難対策協議会、全国の登山団体への啓発活動、教育現場の研修などにも活用してきた。

2. 今後の研究の展開と博士課程における教育研究

最近の主要な研究成果は、①村越真(2017)登山者のリスク特定能力の実態：登山道を対象としたKYT図版による検討.野外教育研究,21(1),1-15、②村越真・満下健太(2020)過酷な自然環境でのリスクマネジメントの実践知.認知科学、27(1),23-43、③満下健太・村越真(2020)リスクに見出される教育的意義:3相因子分析法による小学校の体育的活動に対するリスク認知と教育的意義の関連の検討.体育学研究、28(1), p. 13-21.がある。

①では、登山道のKYT図版による登山者のリスクリテラシーの実態を明らかにした。②では、南極観測隊の安全管理隊員への聞き取りから質的研究法によってリスクの特性に応じたマネジメント方略の実践知を明らかにした。③では3相因子分析の手法によって、リスクに教育的意義が見いだされる可能性を定量的に示した。

2019～2021年の南極地域観測において、日本の南極観測で正式に採用される初の人文社会科学研究「リスク対応の実践知の把握に基づくフィールド安全教育プログラムの開発」の研究代表者を務め、2021年度には観測隊参加予定。幼少期の遊びや児童期の自然体験も「不確実性」という点では南極の過酷さと変わらない。見かけ上の過酷さの違いを超えた**挑戦的活動におけるリスクマネジメントの統一的な原理の発見・構築**が今後の課題である。これらの成果は、リスク社会と呼ばれる現代における**パーソナルなリスクマネジメントの理論構築とそれを踏まえた研修プログラムの開発**につながる事が期待される。また、教育の世界でリスクマネジメントやリスクコミュニケーションをどのように取り入れていくかといった政策的な視点も視座に入れ、研究を進めている。

村 山 功

所属 静岡大学大学院教育学研究科教育実践高度化専攻
職位・学位 教授 教育学修士
博士課程分野 教育環境学
担当科目 教科開発学原論（分担）、教育工学論研究
研究テーマ 認知心理学、学習科学



1. これまでの教育研究について

これまで、現行学習指導要領と全国学力・学習状況調査に基づく授業改善について、研究や助言を行ってきました。その成果の一部を『平成30年度調査 全国学力・学習状況調査における中学校理科と教科書の活用』として公表し、また2019年3月3日の教科開発学研究会において「全国学力・学習状況調査に見る中学校理科授業の実態」として発表しました。

また、新学習指導要領に対応した授業づくりについても研究を進めており、途中段階ではありますが「教育目標・内容、指導方法、学習評価の一体化に向けて ―新学習指導要領における『主体性』を中心に―」にまとめました。現在は、主体的に学習に取り組む態度の評価についての検討を行っており、本年度中には論文にまとめるつもりです。

昨年度はコロナウィルス対応のためにe-learning化を行いましたが、対面授業と比較して交流が不十分でした。これを改善していきたいと思います。

2. 博士課程における教育研究について

主指導教員として、院生が博士論文を書くことができるよう、計画的に働きかけていきます。特に、学術誌へ論文を掲載できるよう研究を支援していきます。昨年度から引き続き、教科開発学原論（分担）や教育工学論研究のe-learning化に取り組みます。昨年度は受講生のネットワーク環境を考慮して動画の使用を抑制してきましたが、本年度はテキストを動画教材に置き換えていく予定です。また、学習の質保証のため、確認テストやハンズオンの課題なども取り入れていきたいと考えています。

3. 担当講義について

【教科開発学原論（分担）】

本専攻の導入科目にあたり、博士論文執筆に向けて。

【教育工学論研究】

教育を再現可能な現象として捉え、工学的にアプローチする方法を紹介します。分野としては、インタラクショナル・デザイン（ID）に相当します。ただし、IDに関する教科書のほとんどは肝心のインタラクションの部分が不十分なため、この部分を学習科学の知見で補完しています。今後は、評価についても力点を置くつもりです。

4. 主要な研究業績（2017.4～）

- 1) 「附属静岡中学校の研究史と次期学習指導要領 ―共同研究者から見た姿―」，村山功，静岡大学教育学部研究報告（人文・社会・自然科学編），68，155-166，2018/03.
- 2) 「教員養成スタンダードから見た教育実習 ―静岡大学教育学部附属静岡中学校の場合―」，村山功，静岡大学教育実践総合センター紀要，No.28，335-341，2018/02/28.
- 3) 『平成30年度調査 全国学力・学習状況調査における中学校理科と教科書の活用』，大日本図書，全48ページ，2018/12
- 4) 「教育目標・内容、指導方法、学習評価の一体化に向けて ―新学習指導要領における『主体性』を中心に―」，村山功，静岡大学教育実践総合センター紀要，No.30，194-201，2020/03/31.

5. 主要な社会活動業績

- 1) 文部科学省「全国的な学力調査に関する専門家会議」委員
- 2) 静岡県学力向上推進協議会長
- 3) 公益社団法人全国学校図書館協議会理事

鎌 塚 優 子



所属 静岡大学教育学部養護教育専攻
職位・学位 教授・博士（教育学）
博士課程分野 創造系教科学
担当科目 教科開発学実践論, 養護実践教育学研究, 教科開発学セミナーⅠ・Ⅱ・Ⅲ
研究テーマ 学校保健学, 養護実践教育学, 健康相談・健康相談活動

1. これまでの教育研究について

23年間の養護教諭としての教育実践を基盤とし、主に養護教諭でなければ得られない独自の視点について「心の問題への気づき」という観点で探究してきました。世界に類をみない教育職である養護教諭の専門性とは何かを近接研究分野・領域と連携、協働し、かつさまざまな研究方法を模索することで、より創造的、発展的な研究結果を導き出していくことを重視しています。

2. 博士課程における教育研究について

本博士課程では、学校保健、養護教諭の教育実践研究について、未だ発展途上にある養護教諭に関わる学問構築に寄与する研究を行いたいと思います。養護教諭の専門性とは何か、養護とは何かについて、歴史的背景を踏まえ、現在の養護実践、今後予測される養護実践のあり方について探求していきます。また学校保健の視点から子供たちのさまざまな心身の健康課題解決のために、実践的観点を理論から考察し、今後の学校保健のあり方について考えて行きたいと思います。

3. 担当講義について

【養護実践教育学】養護の歴史や制度、養護の捉え方・養護教諭の実践、養護に関する近接領域の研究などに関する研究成果や文献をもとに、養護の目的・機能・方法についての文献を分析し議論を通じて理論構築を図ります。また養護実践、養護教育のあり方や方向性、学問構築について討議し、更に、養護教育のあり方と現職養護教諭の研修課題についてについて分析し考察します。

4. 主な研究業績（2019.4.～）

- 1) セクシュアルマイノリティ児童生徒へのスクールカウンセラーによる支援の現状と課題- 肯定的カウンセリングの自己効力感に注目して-井出智博,玉井紀子,鎌塚優子,山元薫,松尾由希子,細川知子,静岡大学教育学部研究報告(人文・社会・自然科学篇),70,79-93,2020
- 2) 学びの継続性を意識した小学校・中学校における保健教育に関する研究-学習内容の印象に関する実態調査を手がかりとして-深澤多恵,鎌塚優子,静岡大学教育実践総合センター紀要,272-279,2020
- 3) 学級担任と養護教諭の連携・協働のための学び-新しい教員養成カリキュラム・授業実践の取組み-,梅澤収,鎌塚優子,静岡大学教育実践総合センター紀要,18-27,2020
- 4) 実習指導を行う養護教諭のための「養護実習サポートガイド」の作成と評価,齋藤千景,竹鼻ゆかり,三森寧子,鎌塚優子,鹿野裕美,埼玉大学紀要教育学部,69(1)65-75,2020
- 5) 養護教諭における性的マイノリティ児童生徒への対応の自信に関わる要因の検討-小学校,中学校,高等学校の比較-鎌塚優子,玉井紀子,井出智博,松尾由希子,山元薫,細川知子,日本健康相談活動学会誌,15(1),41-51,2020
- 6) 技能系教科における「思考・判断・表現」の評価方法の研究-体育実践を事例として-,新保 淳,山崎朱音,鎌塚優子,教科開発学論集,愛知教育大学大学院・静岡大学大学院教育学研究科共同教科開発学専攻,8,153-157,2020
- 7) 女子高生における女性特有の健康障害の予防的介入プログラムの予備的検討,宮地美帆・山崎朱音・鎌塚優子,東海学校保健研究,44(1),81-91,2020
- 8) がんサバイバーが語る「がん教育」の実践に対する認識 ~養護教諭の役割を中心に~,鈴江 毅,鎌塚優子,矢野 潔子,谷 健二,日本学校保健研究,62(5),324-330,2020
- 9) 医療と教育の専門職養成における大学間専門職連携卒前教育の試み-合同ゼミナールの実践を通じて-,鎌塚優子,竹下温子,雪田聡,中村美智太郎,片山はるみ,坪見利香,宮城島恭子,佐藤直美,山本真実,静岡大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要,31,187-197,2021

5. 主な社会的活動業績

- 1) 日本養護教諭養成大学協議会 理事(2018年度～現在)
- 2) 日本健康相談活動学会 理事(2018年度～現在) 同学会編集委員会編集委員長(2021年～現在)
- 3) 日本健康相談活動学会第16回学術集会 学会長(2020年2月)
- 4) 日本学校保健学会 評議員(2019年度～現在)
- 5) 東海学校保健学会 理事・評議員(2013～現在)

香 野 毅



所属 静岡大学教育学部特別支援教育専攻
職位・学位 教授 博士（心理）
博士課程分野 教育環境学担当科目
教科開発学原論研究テーマ 特別支援教育 心理支援 動作法 子育て支援

1. これまでの教育研究について

特別支援教育専攻の教員として、障害をはじめとする支援ニーズのある人への支援教育について、主として心理学の立場から取り組んできました。障害種別としては、肢体不自由、知的障害、ASDをはじめとする発達障害、いわゆる情緒障害などが対象となりますが、障害種に特化した支援というよりも、生活や心理面の支援を前面に出すことで、あらゆる人を対象にできると考えています。支援の窓口としては「身体」や「動作」を得意としています。また家族支援や地域との連携などについて実践的な研究を進めてきました。

大学では、学部では肢体不自由児の心理や教育を、大学院では発達障害児の理解と対応を中心に授業を行っています。

2. 博士課程における教育研究について

障害をはじめとする支援ニーズのある人への支援教育について、エビデンスのある方法の開発に取り組んでいきたいと考えています。加えて、それを支える仕組みや制度、人的環境といった面からも、学校や支援の場をいかに機能させていくかについて考えてみたいと考えます。

3. 担当講義について

【教科開発学原論】

障害のある児者への支援について、アセスメントから実践、評価につながるサイクルについて、これまでの知見等を紹介しながら、一緒に考えていきたいと予定しています。

【特別支援教育研究】

障害のある人への指導支援の種々の方法や技法について深めていくとともに、その背景や構成等について理解を深めていきます。また学校や家庭といった関係機関がいかに機能していくのかについても考えてみたいと思います。

4. 主要な研究業績

- 1) 「緊張が高い子どもへの理解とアプローチ」 発達教育 2014年5月 Vol. 33 No. 5 pp. 4-11
- 2) 「発達障害のある子どもの姿勢と動き」 教育と医学 2015年3月 No. 741 pp. 58-64
- 3) 「肢体不自由者の持つニーズの年齢段階による変化 ―保護者への質問紙と聞き取りによる調査から―」 特殊教育学研究 第54巻2号 2016年7月 pp. 77-86
- 4) 「学齢児を持つ保護者の相談ニーズに関する調査研究」 静岡大学教育学部附属教育実践総合センター紀要 2017年3月 第26号 pp. 1-7 香野 毅・大石啓文・田代 篤・坂間多加志
- 5) 「『学習に向かうからだづくり』のためのアセスメントツールと指導プログラムの開発」 静岡大学教育学部附属教育実践総合センター紀要 2020年3月 第30号 pp. 1-9 山下憲市・香野 毅
- 6) 「Developing and Evaluating Teaching Material for Information Technology Moral Education for High School Students with Special Needs」 International Journal of Information and Education Technology, Vol. 10, No. 4, April 2020. Misaki Hashizume, Takeshi Kono, and Shingo Shiota
- 7) 「障害のある子どもたちの新たな学びの場としての放課後等デイサービス ―連携と専門性という課題に焦点をあてた調査と実践事例―」 教科開発学論集
- 8) 「肢体不自由者を中心とした障害者臨床・療育におけるアセスメント」 2020年5月 静岡学術出版

5. 主要な社会活動業績

- 1) 小中高等学校、特別支援学校、幼保こども園 等研修講師 多数
- 2) NPO 法人しずおか福祉の街づくり 理事

塩 田 真 吾



所属 静岡大学大学院教育学領域
職位・学位 准教授・博士（学術）
博士課程分野 教育環境学
担当科目 教育プログラム開発論，情報教育学研究
研究テーマ 教育工学，情報教育

1. これまでの教育研究について

主に情報教育の中の ICT 活用やプログラミング，情報モラル，情報セキュリティなどの教育内容・教材論，教育方法について，実践的に研究を進めています。特に，情報モラルの分野では，どうすれば自分のこととして考えられるかという「自覚」をテーマに研究しています。

2. 博士課程における教育研究について

情報教育をはじめとする現代的教育課題について，教科を超えた横断的な視点から研究を進めています。博士課程では，情報教育に関して教育環境学的な背景に基づいて指導することが可能です。

3. 担当講義について

「教育プログラム開発論」では，インストラクショナル・デザインについて扱い，博士論文で行う実験授業の効果的・効率的な実施について検討します。

「情報教育学研究」では，ICT 教育，情報モラル教育の学習内容構造，教育方法について包括的な理解を図るとともに，授業開発及び評価の方法論について扱います。

4. 主な研究業績（2018 年 4 月～）

- ・塩田真吾・高瀬和也・酒井郷平・小林溪太・藪内祥司（2018）「当事者意識を促す中学生向け情報セキュリティ教材の開発と評価 - 『あやしさ』を判断させるカード教材の開発 - 」，コンピュータ利用教育学会「コンピュータ & エデュケーション」Vol. 44, pp. 85-90
- ・高瀬和也・酒井郷平・塩田真吾（2018）「ヒューマンエラー対策手法を用いた個人情報漏洩を防ぐ教員研修教材の開発と評価 - 学校における情報セキュリティリスクに対する自覚意識の向上を目指して - 」，コンピュータ利用教育学会「コンピュータ & エデュケーション」Vol. 45, pp. 115-120
- ・酒井郷平・塩田真吾著（2018）『行動改善を目指した情報モラル教育—ネット依存傾向の予防・改善—』静岡学術出版
- ・酒井郷平・塩田真吾（2019）「中学生を対象とした LINE でのコミュニケーションにおけるリスク評価の分析」，日本教育工学会論文誌 43 巻 (Suppl.), pp. 153-156
- ・Kazuya Takase, Taichi Yasunaga, and Shingo Shiota (2020) "Development of Thinking Tools to Foster Creative Problem Solving Skills: A Trial in Programming Education," International Journal of Information and Education Technology, Vol. 10, No. 6, pp. 471-475
- ・満下健太・酒井郷平・西尾勇気・半田剛一・塩田真吾（2020）「子どもの情報機器活用に関わるトラブルのリスクアセスメント」日本教育工学会論文誌 44 巻 1 号, pp. 75-84
- ・塩田真吾・橋爪美咲・香野毅編著（2020）『特別な支援を要する子どものためのネット・スキル・トレーニング—子どもの情報モラルを育むために—』静岡学術出版

5. 主な社会的活動（現在）

- ・文部科学省「青少年を取り巻く有害環境対策の推進」技術審査委員会技術審査専門員
- ・文部科学省委託「情報モラル教育推進事業」検討委員会 副座長
- ・静岡県中山間地域の小規模校における ICT 活用推進事業検討会議 委員
- ・静岡市遠隔教育システム導入実証研究事業 委員 など

中 村 美智太郎



所属 静岡大学大学院教育学領域
職位・学位 准教授・博士（学術）
博士課程分野 教育環境学
博士課程担当科目 教育プログラム開発論
研究テーマ 美的教育思想、情報倫理、道德教育、キャリア教育

1. これまでの教育・研究について

倫理的なものと美的なものとは、どのように相互に関係し合うのかという関心から研究しています。最近、情報倫理・生命倫理・スポーツ倫理といったいわゆる応用倫理や、またマイノリティ・遊び（遊戯）・リスク・安全・市民性・討議方法等についても検討しています。研究のベースには、近代ドイツ教育思想についての関心があります。18世紀を中心とした特にドイツの教育思想の文脈での主な研究対象は、美的教育思想を展開したFr・シラーです。シラーは劇作家としても知られていますが、カント研究を行い、自ら思索した思想家でもあります。彼が大きく影響を受けた古代ギリシア思想との関係や「書簡」を媒介とした同時代の人びととの交流も含め、彼の思想の起源を明らかにしつつ、現代までの展開を跡付けるべく、研究を進めています。

2. 博士課程における教育・研究について

情報倫理・道德教育・キャリア教育が抱える現代的な諸課題を射程に入れつつ、学校を中心とした教育機関での学びにおいて、私たちはどのように人間形成を行うのかをテーマに研究しています。この視点から、最近特に道德教育とキャリア教育に研究関心を持っています。「学校とはなにか」「学びとはなにか」「教育とはなにか」といった根本的な、かつ一義的な解のない問いに対して応答しようと試みています。

3. 担当講義について

【教育プログラム開発論】

特にキャリア教育や道德教育の視点に立って理論・歴史と実践を往還しながら、教育プログラムの開発方法・検証等についての検討を行います。

4. 主要な研究業績

- ・中村美智太郎・竹内伸一・鎌塚優子（2021）『『ケースメソッド教授法に基づく道德教育』を再構築する試みーオンライン授業提供・学校外教育体制・教育NPO法人連携・教職課程学生参画の4アプローチに基づいて』、『静岡大学教育実践総合センター』第31号, pp. 41-54。
- ・酒井郷平・田中奈津子・大島安紀子・中村美智太郎（2020）「教員と教員養成系大学生を対象とした中学生の行動基準要因への認識に関する調査的研究ー考え、議論する『モラル教育』を实践できる教員の育成を目指して」、『静岡大学教育実践総合センター』第30号, pp. 28-38。
- ・中村美智太郎（2020）「情報環境における道德的行為者の『責任』と『答責性』」、『静岡大学教育学部研究報告（教科教育学篇）』第52号, pp. 43-55。
- ・中村美智太郎（2019）『『遊戯』の領域と『忘我』ーシラー『美的教育書簡』における美的差異の問題』、『唯物論』第93号, pp. 84-98。
- ・中村美智太郎（2018）「連帯可能性としてのリスク・コミュニティへの視座ー再帰的近代化と道德のリスクの問題」、『静岡大学教育学部研究報告（人文・社会・自然科学篇）』第69号, pp. 149-161。
- ・中村美智太郎・鎌塚優子・竹内伸一・岡田加奈子編著（2018）『とことん考え話し合う道德ーケースメソッド教育実践入門』, 学事出版。
- ・ギンター・ペルトナー, 渋谷治美（監訳）・中野裕考・中村美智太郎・馬場智一・大森万智子共訳（2017）『哲学としての美学ー〈美しい〉とはどういうことか』晃洋書房。
- ・平子友長・橋本直人・佐山圭司・鈴木宗徳・景井充編著（2016）『危機に対峙する思考』, 梓出版社。
- ・田中一嘉・中村美智太郎編著（2014）『ことばと文化の饗宴ー西洋古典の源流と芸術・思想・社会の視座』, 風間書房。

5. 主要な社会活動業績

- ・学校図書教科書編集委員（「小学校・中学校道德」）
- ・静岡県教育委員会道德教育推進協議会副会長
- ・御前崎市スクラム運営委員会委員
- ・静岡大学教育学部附属島田中学校研究評議員 他

黒川 みどり



所属 静岡大学教育学部社会科教育講座
職位・学位 教授 博士（文学）
博士課程分野 人文社会系教科学
担当科目 歴史教材論 教科開発学原論 教科開発学セミナーⅠ・Ⅱ・Ⅲ
研究テーマ 日本近現代史、思想史、歴史教育、マイノリティ、アジア認識、

1. これまでの教育研究について

静岡大学では、日本近現代史、教科内容指導論、日本文化論、人権教育論などの授業を担当してきました。日本近現代史、思想史を専門としています。大正デモクラシー研究から出発し、民本主義から出発し無産政党の指導者となった大山郁夫の思想、第一次世界大戦後の国民統合政策、さらには部落問題をレイシズムの枠組みのなかで捉え返す試みや、近現代の差別の諸相を描きだす研究などを行ってきました。近年は、丸山眞男や竹内好を中心にすえて戦後思想史、知識人論に向きあう一方、歴史教育のあり方についても研究を進めています。

2. 博士課程における教育研究について

本博士課程においては、人権論、思想史について検討を進めています。また、高校日本史の教科書執筆などをおして考えてきた、義務教育・後期中等教育から教員養成大学における歴史教育の問題などを考えていきたいと思っています。

3. 担当講義について

【歴史教材論】 歴史教育、社会科教育のありようを見据えながら、歴史の理解のために有用な歴史教材を提供できるように、歴史学の方法論についての理解を深め、歴史学の基礎的な力を身につけることをめざしていきます。当面は、受講者の関心をも鑑みながら、中学・高校の歴史教科書などの検討を行い、議論を深めていきたいと考えています。

4. 主要な研究業績（2019～）

- 1) “A History of Discriminated Buraku Communities in Japan” Teraki Nobuaki & Kurokawa Midori
Translated by Ian Neary 2019年12月 RENAISSANCE BOOKS
- 2) 黒川みどり・山田智『評伝 竹内好—その思想と生涯—』2020年2月、有志舎
- 3) 「「改造」の時代—社会主義・国家主義という経験—」 『歴史地理教育』No.913、2020年8月、
- 4) 北河賢三・黒川みどり編『戦中・戦後の経験と戦後思想』2020年9月、現代史料出版
- 5) 「「改造」の時代—社会主義・国家主義という経験—」 『歴史地理教育』No.913、2020年8月
- 6) 「歴史認識を育むために—歴史教育の現実を見つめて—」 『同時代史研究』第13号、2020年9月
- 7) 鄭在貞・外村大編『歴史和解のための韓日対話—歴史編』2020年12月、韓国東北アジア歴史財団
「第2部 解放/敗戦後の韓日関係 第8章 戦後思想の中の「生理的要求」としての朝鮮/「他者感覚—中野重治から竹内好・丸山眞男へ」（韓国語）
- 8) 『被差別部落認識の歴史—異化と同化の間』2021年2月 岩波現代文庫

5. 主要な社会活動業績

国立歴史民俗博物館展示委員
同時代史学会編集長、等

白 畑 知 彦



所属 静岡大学教育学研究科共同教科開発学専攻
職位・学位 教授 博士(文学)
博士課程分野 人文・社会学系教科学
担当科目 外国語教育論研究、教育プレゼンテーション論、
教科開発学セミナー I, II, III
研究テーマ 言語理論・言語習得理論に基づく外国語教育学の研究

1. これまでの教育研究について

大学院生の頃より、ずっと第二言語習得の研究をしてきました。第二言語習得には次のような特色があります：(a)母語からの転移がある（そして、上級者になってもしつこく残るものと、そうでないものがある）、(b)教室で教科書を使用しながら学習する場合であっても、体系的に習得が進んでいく（一方で個人差も生じる）、(c)特に成人学習者の場合、習得が不完全な状態で停滞してしまう場合が多い。このような現象は私にとってとても不思議で興味深い現象であり、理論的に説明したいと考えています。第二言語としての日本語習得研究にも興味があります。その他、習得研究成果の外国語教育への応用、外国語としての英語教授法、外国語学習論、児童英語教育論、外国語学習評価論、英語教育課程論などの領域にも興味を持って研究してきました。

2. 博士課程における教育研究について

基本的にはこれまでの研究の方向性と変わりませんが、「外国語教育学における教科開発学とは？」というテーマを常に念頭に置きながら、学生を指導し、自らも研究をおこなっていきたいと考えています。

3. 担当講義について

【教育プレゼンテーション論】

本講義は小南先生と二人で担当している科目です。学会発表でのプレゼンテーション技術だけではなく、教室での授業の工夫、人前で話をする際の態度や心構え、準備の仕方など考察していきます。

【外国語教育論研究】

ある教え方が「良い」と主張する場合、その教え方の何が良いのか、本当に効果があるのか、単にユニークな教え方に過ぎず効果は望めないのか、きちんと調べないとはいけません。そのためにも言語習得理論をしっかりと学習していきたいものです。

4. 主な研究業績（2020年度）

論文：

- 『英語のしくみと教え方——こころ・ことば・学びの理論をもとにして』 白畑知彦・中川右也（編著） 東京：くろしお出版 2020年9月20日
- 「第3章 日本語母語話者による英語 Wh 疑問文の発達過程の考察」『教科開発学を創る 第3集』愛知教育大学大学院共同教科開発学専攻篇 2021年3月 pp. 54-68. 愛知：愛知教育大学出版会

口頭発表：

- 「効果的な誤り訂正—第二言語習得の見地からの効果的な文法指導—」 Practical English Teaching Seminar C. 大阪教育センター 2020年9月11日（金）大阪府高等学校英語研修会
- 「第二言語習得における訂正フィードバック」第1回 横浜オンライン言語教育・言語科学セミナー 9月26日（土）Zoom開催（招待講演）
- 「ことばについて考えてみましょう」全要研 2020年10月17日（土）Zoom開催（招待講演）
- 「大学生への英語授業についての私的提案」JACET 中部地区大会 Zoom開催（招待講演）
- 「代名詞は侮れない—代名詞の教え方を考える」中部地区英語教育学会愛知地区大会 2021年2月27日（土）Zoom開催（招待講演）
- 「リーディング活動を通じた3つのL2 語彙学習方法の効果比較」児玉恵太・白畑知彦 教科開発学研究会（共同教科開発学専攻） 2021年3月7日（日）Zoom開催
- The influence of animacy of sentential subjects on overpassivization in L2 English. The 20th International Conference of the J-SLA. Kondo, T., Shirahata, T. Suda, K., Ogawa M. & Yokota, H. 2021年3月27日 Zoom開催

坂 口 京 子



所属 静岡大学教育学部国語教育講座
職位・学位 教授・博士（教育学）
博士課程分野 人文社会系教科学
担当科目 国語教育論研究、教科開発学実践論
研究テーマ 国語教育史、言語教育論、国語科授業研究、国語科教師教育

1. これまでの教育研究について

専門は国語教育史研究です。特に戦後新教育期における経験主義教育の摂取と実践的理解の過程に着目し、カリキュラムや授業構想について研究してきました。現在の国語・国語科教育に関する教材、指導法、カリキュラム開発に関する研究や、国語科教師教育研究にも取り組んでいます。ここ数年は、言語力や思考力（中でも選択力）の育成を視点として、国語教科書や先進的実践の調査・分析を行なっています。

2. 博士課程における教育研究について

以上に述べた教育研究を継続し、現在あるいは今後の国語教育実践を相対化し得る視点を歴史研究から学びつつ、それを常に再構築していくことに取り組んでいます。また、教育の現実を真摯に捉えようとする際、自ずと見えてくる新しい研究領域と研究方法を追究していきたいと考えています。

3. 担当講義について

【国語教育論研究】

国語・国語科教育について、教育課程・教育内容・教育方法の3点とその関連をどう図っていくかを軸に考察していきます。わが国の戦後国語教育史を概観した上で、現在の実践例を取り上げてその価値を考察します。受講者の関心も鑑みながら、教育実践の複合性とそのデザインについて論じます。

【教科開発学原論】

担当者のこれまでの研究について教科開発学の立場から再考し、それをもとに具体的な議論を進めます。教育の現実の捉え、研究領域と研究方法の妥当性、論構築の論理性について論議しつつ、教科開発学の内実と方法を追究します。

4. 主要な研究業績（2018～）

- 1) 「イスマニング・シュタイナー学校における言語力育成の実際」『静岡大学教育実践総合センター紀要』31号、2021
- 2) 分担執筆『ことばの授業づくりハンドブック 探究学習』浜本純逸監修、幸田国広編集、溪水社、2020.4
- 3) 公益財団法人教科書研究センター「授業における教科書の使い方に関する調査研究委員会」（ブレ研究：2018～2019年度、本研究2020～2021年度）国語部会委員
- 4) 「教師の選書を視点とした読書指導の改善」『早稲田大学国語教育研究』38号、早稲田大学国語教育学会、2019.3

5. 主要な社会活動業績

- 1) 静岡市学力向上家専門委員：静岡市立中島小学校研修講師（2020.7）
- 2) 駿東地区国語部研修推進委員会及び授業研修会講師（2019.10）
- 3) 裾野市教育委員会指定研究発表会講師：裾野市立富岡第二小学校「関わり合いの中で主体的に学ぶ子～学びをたのしむ～」（2019.11）
- 4) 駿東郡長泉町立長泉小学校校内研修講師（2019・2020）
- 5) 浜松市教育研究会（国語科研究部）講演「『言葉の力』を育てる魅力的な国語の授業の創造-新学習指導要領をふまえて-」（2018.8）

小 南 陽 亮



所属 静岡大学教育学部
職位・学位 教授 理学博士
博士課程分野 自然系教科学
担当科目 生物教育内容論研究、教科開発学実践論、教科開発学セミナー
研究テーマ 身近な自然を活用した生物教材と教育内容の発展

1. これまでの教育研究について

生物多様性の劣化は、気候変動と同様に、深刻な地球環境問題として国際的に認識されています。日本においても、生物多様性条約に基づいて、政府は生物多様性国家戦略、自治体は生物多様性地域戦略を策定し、その保全に取り組んでいます。その中で、生物多様性の意味、生物多様性を保全する理由についての教育が不可欠となり、生物多様性にふれる行動、生物多様性を守る行動、生物多様性を伝える行動を体感することが重要となっています。そのためには、理科などの各教科における環境教育を充実させ、児童生徒が生物多様性を含む環境を深く理解した上で環境を守る主体的な行動がとれるようになることが必要です。このようなことを背景として、長年にわたって続けてきた森林生態や生物間相互作用に関する基礎科学的な研究を活かし、生物多様性について学ぶことができる新たな教材の開発と教育内容の発展に資することを目的とした研究を行っています。

2. 博士課程における教育研究について

生物多様性の内容を効果的に教育するための新たな教材や指導法を開発する研究のフィールドとして、生物多様性の学習に適した環境のひとつである里山を選びました。この研究では、学校教育において生物多様性を学習するための教材として里山の生物や環境がどのように利用可能であるかを解明し、里山を利用した生物多様性教育の教材を開発することを目指しています。これまでの研究では、次のようなことを明らかにしてきました。

- 1) 里山において簡易な樹木センサスが作業量や方法の点では学校教育で実施可能なものであり、得られたデータを生徒自身が解析することで、生物多様性とは何か、生物多様性はなぜ劣化しているのか、生物多様性はなぜ保全する必要があるのかを学習することができることを示しました。
- 2) 学校教育で観察の対象となってきた生物は植物と昆虫がほとんどでしたが、身近な環境に多様な種が生息しているという点では、鳥類も観察したい生物です。そこで、鳥類を確実に観察する方法として、秋冬季に校庭の樹木につく果実を採食する鳥類を観察することを検証し、中学校・高校の探究活動で観察できる可能性が高いことを示しました。また、その観察によって、生態系における相互作用網の一端を知ることができ、生物同士のむすびつきを学習するきっかけになりうることを提言しました。

3. 主要な研究業績と活動 (2019.4 ～)

- 1) 中等教育における緑地の樹木を対象とした探求活動のモデル ―静岡大学教育学部附属浜松中学校の「天神森」における事例―, 教育実践総合センター研究紀要, 30: 89-96 (2020.3)
- 2) Do Coarser Gap Mosaics in Conifer Plantations Induce More Seed Dispersal by Birds? Temporal Changes during 12 Years after Gap Creation. forests 10: 165-175 (2019.10)
- 3) 静岡北中学校インセンティブ・レクチャー「木の分布から森の過去と未来を推定する」(2019.9)

熊倉啓之



所属 静岡大学教育学部数学教育講座
職位・学位 教授 理学修士
博士課程分野 自然系数科学
担当科目 数学教育論研究 教科開発学原論
研究テーマ 教材開発論, 小・中・高接続カリキュラム論

1. これまでの教育研究について

静岡大学に着任して以来、算数・数学科教育法等担当教員として、数学教育に関する教材、指導法、カリキュラムの開発に関する研究を行っています。これまでに、数学を学ぶ意義を実感させる指導法、数学的思考力・表現力を育成するための教材開発、小・中・高の接続カリキュラム、フィンランドと日本の数学教育との国際比較について、研究を深めています。また、最近では、長年にわたって教育課題とされている「割合の活用力」に関する研究を行っています。

2. 博士課程における教育研究について

本博士課程においては、これまでの教育研究で行ってきたことを基盤としながら、さらに、指導の対象である「数学」の本質や歴史を踏まえた上で、近年注目されている数学的リテラシーについて考察を加え、数学的リテラシーを育成するための指導の在り方についても追究していきたいと考えています。

3. 担当講義について

【数学教育論研究】

本授業では、算数・数学科の指導内容について、1) 小・中・高の算数・数学科のカリキュラム、2) 数学的な思考力・表現力の育成に焦点を当てた教材・指導法、3) 数学を学ぶ意義を実感させる教材・指導法、の3点を中心に分析・考察します。

4. 主要な研究業績 (2019.4～)

- 1) 「空間図形の理解に関する調査研究-小・中学生の見取図の理解に関して-」奈良教育大学紀要, 第68巻第1号(人文・社会), 2019.11, pp.147-156. 近藤裕・熊倉啓之・國宗進・藤田太郎.
- 2) 「中学校・高等学校における割合指導に関する研究」静岡大学教育実践総合センター紀要, No.30, pp.49-58, 2020.3, 熊倉啓之・國宗進・松元新一郎・早川健・近藤裕.
- 3) 「正弦定理・余弦定理・面積公式に関する教材開発-n 角形への拡張-」静岡大学教育実践総合センター紀要, No.30, 2020.3, pp.79-88, 四之宮佳彦・熊倉啓之.
- 4) "Spatial reasoning skills about 2D representations of 3D geometrical shapes in grades 4 to 9", Mathematics Education Research Journal, Springer, Online, 05.2020, Taro Fujita & Yutaka Kondo & Hiroyuki Kumakura & Susumu Kunimune & Keith Jones
- 5) 「海外の先行研究からみた日本の割合指導の特徴」静岡大学教育実践総合センター紀要, No.31, pp.117-126, 2021.3, 熊倉啓之・國宗進・松元新一郎
- 6) 「算数科における空間図形の学習指導の改善-小学校6年生の立方体の見取図の理解」静岡大学教育実践総合センター紀要, No.31, pp.127-136, 2021.03, 竹内淳・熊倉啓之・國宗進・藤田太郎・近藤裕
- 7) 「小学校教員養成段階における大学生の割合の理解に関する調査研究-中学生・高校生の調査結果との比較を通して」静岡大学教育実践総合センター紀要, No.31, pp.137-146, 2021.3, 松元新一郎・熊倉啓之・國宗進

5. 主要な社会活動業績 (2019.4～)

- 1) 熊本市高等学校教育研究会数学会春季講演会講師 (2019.6)
- 2) 第101回全国算数数学教育研究(沖縄)大会高等学校部会講演会講師 (2019.8)
- 3) 石川県教員総合研修センター研修講座・教科指導リーダー養成研修講師 (2019.9)
- 4) 茨城県高等学校教育研究会数学部研修会講師 (2019.11)
- 5) 石川県教科指導リーダー養成・数学的活動の充実をめざす授業づくり研修講師 (2020.9)
- 6) 鳥取県専門研修(中学校数学)講師 (2020.10)

郡 司 賀 透



所属 静岡大学大学院教育学領域
職位・学位 准教授・博士（教育学）
博士課程分野 自然系教科学
担当科目 理科教育論研究 教科開発学原論 教育フィールド調査論
研究テーマ 理科カリキュラム基礎論 理科カリキュラム史研究
理科カリキュラムにおける工業に関する教育内容・教材論

1. これまでの教育研究について

私がこれまで携わってきた研究の一つは、戦後日本の高等学校化学教科書における化学工業教材史です。関連して二つ目は、主として1950年代における日本の経済成長と教育の関係を、理科教育内容・教材論の水準で研究を進めておりその特質を明らかにしようとしています。三つ目が科学的探究及びエンジニアリングデザインプロセスを活用した理科授業・教材研究になります。

2. 博士課程における教育研究について

教科開発学の視点から、専門領域である「理科」を基盤にしつつも、領域の枠に拘泥することなく、児童・生徒をとりまく環境を絶えず意識しながら、現代の学校教育に諸問題に対応する研究を進めています。理科の特定の教育内容・教材の歴史の変遷について、教育環境学的な背景に基づいて指導することが可能です。

3. 担当講義について

「理科教育論研究」では、教科開発学の核心をなす理科カリキュラム開発について、理科の目的論・目標論、理科の学習内容構造、子どもの自然理解の実態、理科教授論及び、科学と社会との関連について包括的な理解を図るとともに、理科における教科開発力の育成を目指します。

「教科開発学原論」では、①理科が基礎を置く自然科学の本質、②日本の理科教育の歴史と現状の理解を通じた理科教育の意義、③理科教育における探究の過程とエンジニアリングデザインプロセスの意義理解を目指します。

「教育フィールド調査論」では、量的及び質的分析の基礎を学んだ後、受講者の研究テーマに即した分析手法について、議論を通して検討します。

4. 主な研究業績（2016年4月～）

- ・郡司賀透 「初等理科教科書におけるSTEM教材の取り扱いに関する研究」 『教科書フォーラム』 2016年10月 17号 pp.2-14
- ・郡司賀透 「理科教科書分析の現代的展開」 大高泉 『理科教育基礎論研究』 協同出版 2017年6月 pp.68-80
- ・郡司賀透 「初等理科カリキュラム構成とその動向」 大高泉・吉田武男 『初等理科教育』 ミネルヴァ書房 2018年7月 pp.31-38
- ・郡司賀透 『理科教育における工業的教材の意義と変遷』 風間書房 2019年2月 252頁
- ・郡司賀透・鬼丸颯都・梶山涼矢・井出祐介・高橋政宏 「中学校理科授業における生徒の自己統制感に関する実践研究」 『静岡大学教育実践総合センター紀要』 2020年3月 30号 pp.254-261

5. 主な社会的活動（現在）

日本理科教育学会（評議員）、日本エネルギー環境教育学会（編集委員）、株式会社アイエイアイミニロボ事業推進室プログラミング教育アドバイザー等々

新 保 淳

所属 静岡大学学術院教育学領域保健体育系列
職位・学位 教授 博士（教育学）
博士課程分野 創造系教科学
担当科目 体育教育論研究、教科開発学セミナー
研究テーマ 身体教育論、授業研究論、体育哲学



1. これまでの教育研究について

静岡大学に着任以来、体育学担当教員として、中でも身体教育に関連する問題領域において、哲学的及び社会学的視点から研究を行ってきました。具体的には、我々の身体を取り巻く自然・社会環境の変化が、身体教育のプロセスにある子どもにとってどのような影響があるのか。またそうした現状を受けて学校体育では、どのような理念のもとにどのような実践していくべきかについて、いくつかの視点の提示を試みました。最近では、これまでに明らかにした「理論知」を実践に生かすための授業カリキュラムの開発とその評価方法の創造に向けて、そのための新たな方法論を探索しつつ持続的に研究を行っています。

2. 博士課程における教育研究について

共同教科開発学専攻にかかわりながら、また本専攻におけるカリキュラム内容の作成を行ってきたという立場から「教科開発学とは？」を問うとともに、この博士課程の「独自性」の探究に取り組んできました。結論から言えば、“これが「教科開発学」だ”とは、未だ確信をもって言い切ることができません。ただ私一人の思い込み以上に、本専攻の構成員全体が集う「教科開発学セミナー」Ⅰ～Ⅲにおける学生の発表内容とそれに対する教員からの質疑応答を通して、あるいは、博士論文の審査等を通して、「教科開発学」について、そしてまたこの博士課程の「独自性」について、さらに探求を深める必要があると思います。そのためにも、本専攻メンバーである教員と学生の風通しをさらに良くしていく必要があるでしょう。一方で私自身も、本専攻のイメージを固めたり壊したりしつつ、残された数年間を今後の博士課程のさらなる発展に向けて、教育研究ともに関わっていきたいと考えています。

3. 担当講義について

【体育教育論研究】

「体育科」における不易を求めることによって、これまでの「体育科」の問題点を明らかにするとともに、今後の方向性について講義および討論を行っています。また、“21世紀における教育および保健体育科像”についても、現状の問題点と現代的課題の克服を目指して、「持続可能な発展」等々をキーワードにしつつ議論を深めたいと考えています。方法論的には、スポーツをする人の「思考」が「社会（環境）」との関係においてどのような影響をうけるのか、またこの関係を考察することによって、自らが主体的にスポーツに関わるためには、どのような「体育授業（環境）」を設定する必要があるのかについて、考えていきたいと思っています。

4. 主要な研究業績（2019.3 ～）

- 1) 「学び」の自己展開力に関する評価方法の研究 2－評価方法の他種目への応用の可能性－、静岡大学教育実践センター紀要、平成 31 年 3 月、第 28 号、pp. 93-106
(共著：山崎朱音、新保 淳)
- 2) 保健体育科における「思考力・判断力・表現力」の評価方法の研究－創作ダンス授業を事例として－、静岡大学教育実践センター紀要、令和 2 年 3 月、第 29 号、pp. 93-106
(共著：山崎朱音、新保 淳、柳伶奈、石貝孝洋)
- 3) 技能系教科における「思考・判断・表現」の評価方法の研究：体育実践を事例として教科開発学論集、令和 2 年 3 月、第 8 号、pp. 153-157
(共著：新保 淳、山崎朱音、鎌塚優子)
- 4) ESD の視点からみた体ほぐし運動の可能性、体育科教育、令和 2 年 5 月号

松 永 泰 弘

所属 静岡大学教育学部
職位・学位 教授 博士（工学）
博士課程分野 創造系教科学
担当科目 技術教育内容論 教科開発学セミナー I
研究テーマ 動くおもちゃ開発と *United by Emotion, Unity in Diversity*



1. これまでの教育研究について

科学技術ものづくり教材の中でも、機械領域の教材開発を行う。おもな教材として、形状記憶合金エンジン・スターリングエンジン・蒸気エンジンカー、受動歩行模型、機械式振子・天賦時計、Automata・Marionette を4つの柱とし、さらに、ひもを移動する模型、回転模型、レーザー加工による組立式模型などの教材を開発。動作原理を探究しながら、新しい道具に挑戦し、ものづくりに熱中する子どもたちの姿、家族や友達に動作原理を説明しながら製作したものを自慢する子どもたちの姿、ものづくりの継続により、困難に立ち向かう子どもたちの姿が出現するような不思議や驚きを伴う教材開発。

2. 博士課程における教育研究について

学習集団における多様性の統一 *Unity in Diversity* について取り組む。子どもたちの意味世界に刺激を与え、想像・感情・知識が絡み合い、発達を促し、WET/SET に基づく動くおもちゃものづくり教材の開発を行う。授業実践を通して、教材の特徴、子どもの変容を明らかにする。動くおもちゃ Gifts の選定とものづくり教材としての開発を行う。年齢に適した教材・道具の使用、喪失体験児童に及ぼす影響について検討する。現実事象と数学的抽象化を往還する数学的活動教材の開発を行う。

3. 担当講義について

【技術教育内容論】最先端の科学技術が作り上げられてきた基礎となる技術、特に機械工学分野の技術に学びながら、ものづくり教材の特徴、教材として用いた授業実践の評価について議論する。

4. 主要な研究業績

- ・安達美佑・松永泰弘：斜面を球・円柱が転がり揺れながら移動するものづくり教材の開発と実践，第11回教科開発学研究会発表論文集，pp. 9-12（2021）
- ・松永泰弘：斜面上であそび・探究する動くおもちゃ教材，第11回教科開発学研究会発表論文集，pp. 13-16（2021）
- ・松永泰弘・安達美佑：ビー玉が転がり斜面を揺れながら移動する木のおもちゃの運動解析，日本産業技術教育学会誌，第63巻，第1号，pp. 13-21（2021）
- ・Y. MATSUNAGA, K. FURUTA, M. ADACHI: Web support for make-play-inquiry activities during long-time closure of school because of COVID-19; 'Unity in Diversity' in learning group by use of moving toys, ICTE 2021, 8 pages (2021)
- ・K. FURUTA, Y. MATSUNAGA: Influence of the Material and Size on the Walking Motion of the Quadrupedal Passive Walking Toy, ICTE 2021, 7 pages (2021)
- ・M. ADACHI, Y. MATSUNAGA: Development of the Rocking Wooden Toy with a Marble/Glass-Ball Going Down a Slope as a Teaching Material, ICTE 2021, 6 pages (2021)
- ・松永泰弘・相良拓海：紙製2足受動歩行模型教材の開発，日本産業技術教育学会誌，第62巻，第4号，pp. 331-338（2020）
- ・松永泰弘・安達美佑：ビー玉を使用し斜面を揺れながら移動する木のおもちゃものづくり教材を用いた保育実践，日本産業技術教育学会誌，第62巻，第2号，pp. 123-132（2020）
- ・古田このみ・松永泰弘：組み立て式オートマタの開発、静岡大学教育実践総合センター紀要、No. 30、pp. 157-164（2020）

5. 主要な社会活動業績

- 1) 科学技術高校、浜松工業高校 SSH、こどもクリエイティブタウン「ま・あ・る」評価委員
- 2) 科学研究費助成 2018-2020、マツダ財団 2018-2019、日教弘助成 2018

小 川 裕 子

所属 静岡大学教育学部
職位・学位 教授 博士（工学）
博士課程分野 創造系教科学
担当科目 教科開発学実践論、家政教育内容論研究
教科開発学セミナーⅠ、Ⅱ、Ⅲ
研究テーマ 住生活学習を中心とした教科開発、家庭科教育



1. これまでの教育研究について

静岡大学教育学部において家庭科教育担当教員として33年が経過しました。この間、前半は出身の専門分野である住居学の研究を継続して「高齢者向け住宅・居住施設の計画に関する基礎的研究」という博士論文をまとめつつ、家庭科教育の教育・研究を進めました。中盤から、「高齢者居住」研究を発展させて福祉教育や家庭科教育の研究に繋げようと試みましたが、思うようには進みませんでした。しかし、この間に家庭科教育に関する卒業研究や修士論文に取り組む学生達の興味・関心に寄り添いつつ、また、周囲の家庭科教育研究者との共同研究を進めながら、自らの定年までの教育・研究をどう進めるか考え、2で述べるような課題を設定しました。

2. 現在の教育・研究について

家庭科教育における住生活学習について実践的に追求したいと考えました。衣食住と並び称されているにも関わらず、（マイホームを建設したり購入する際を除くと）人々の日常的な住生活への関心は高くないのが今日の我が国の大方の姿です。他方で、住まいは私たちの生活の基盤であり、生活の豊かさを決定する大きな要因の一つですが、住生活学習の実践や研究は、家庭科教育の中でも大変遅れているのが現状です。今後、家庭科における食や衣の教材や授業実践の豊富な蓄積を踏まえつつ、さらに本研究科で学べる学習科学等の知見に学びながら、家庭科の住生活学習を中心とした実践的な研究に取り組むことにしました。今年度は静岡大学在籍最後の年でしたが、4に示すようにこれらの研究成果を日本家庭科教育学会誌に発表することが出来ました。

3. 担当講義について

「教科開発学実践論」（必修）

「家政教育内容論研究」（選択）

4. 主要な研究業績（2020.3～）

- (1) 「小学校家庭科の住生活における知識構成型ジグソー法 に実験を取り入れた科学的な理解を深める授業実践 ―室内環境の原理原則と児童の経験則を繋げる活動を通して―」『日本家庭科教育学会誌』、第63巻第3号、2020年11月、pp.122-133、飯野由香利、小川裕子、伊深祥子、金子京子
- (2) 「実践者の視点からの授業づくり―小学校における住環境に関する実験型ジグソー法による授業―」『日本家庭科教育学会誌』、第64巻第1号、2021年5月、伊深祥子、金子京子、飯野由香利、小川裕子 （資料として掲載決定）
- (3) 「中学校家庭科の住生活における知識構成型ジグソー法を取り入れた住空間の整え方に関する学びを深める授業実践―鳥瞰図を用いて住空間の特徴を多角的に捉える学習を通して―」『日本家庭科教育学会誌』、第64巻第1号、2021年5月、飯野由香利、渡邊彩子、小川裕子、伊深祥子、金子京子 （論文として掲載決定）
- (4) 「中学校家庭科住生活授業における生徒同士の対話による学びの実態と課題―パフォーマンス課題と解答用紙として平面図を取り入れた、知識構成型ジグソー法による授業を通して―」『日本家庭科教育学会誌』、第64巻第1号、2021年5月、小川裕子、伊深祥子、飯野由香利、金子京子、堀池美衣 （論文として掲載決定）

5. 主要な社会活動業績

1) 日本家庭科教育学会、監事

2) NPO法人なのはな（幼児教育）理事

伊 藤 文 彦

所属 静岡大学教育学部
職位・学位 教授 学術修士
博士課程分野 創造系教科学
担当科目 表現・鑑賞論 美術教材論研究 教科開発学セミナーⅠⅡⅢ
研究テーマ 美術・デザイン教育方法開発、デザインリテラシー教育論



1. これまでの教育研究について

美術教育の中でもデザイン分野を専門として、デザインの発想法を中心にデザインプロセス全般を対象に研究を行っています。また、創造系の教科の指導者として求められる表現力の研鑽のために、ビジュアルデザインを中心に公的な場面で様々なデザインワークを展開しています。

現代環境において、デザインの領域は多岐に渡っており、コミュニケーション、プロダクト、環境デザイン、イベント・キャンペーン等、現代の私たちの生活とは切り離せない深い関わりをもっています。しかしながらこれまでの美術教育では自己表現や感性などの伝統的な概念を重んじられてきたあまり、美術教育が社会への適合性といった点についてはかならずしも有効な教育になりえていなかったことが問題点としてあげられます。こうした問題意識を背景に、より今日の役割を明確にした横断的な学問としてのデザイン教育を構想するための研究を行っています。

2. 博士課程における教育研究について

本博士課程においては、これまで行ってきたデザインプロセスの構造化およびデザインリテラシー研究を基盤として美術・図画工作科教育の諸問題を明確化し、今後重要度が増してくる表現と鑑賞教育のバランスのとれた芸術教育を学校教育にいかにか定着させるかという課題に取り組みたいと考えています。その際、これまで芸術における感性の問題としてブラックボックス化されてきた部分について、認知科学の知見を援用しながらモデル化することを通して、他の教科との接点を見出しながら、学際的な教科としての美術・デザイン教育を展望するという観点から博士課程での教育研究に関わっていきたいと考えています。

3. 担当講義について

【表現・鑑賞論】

芸術を表現することとそれを鑑賞することは表裏一体の関係であり、常に同時発生的に進行する創造性豊かな思考過程である。この授業では、そういった表現と鑑賞の思考過程を芸術学と認知科学を融合させた学際的な観点で整理し、芸術教育のありかたについて考察するものである。

特に美術・デザインの「リテラシー」について、具体的な作品・製品・イベント等を鑑賞・理解の対象とし、ワークシート作業を含めた実践的な演習も含めながら理解を深める。

【美術教材論研究】

美術・デザイン活動及びその教育について、今日の問題状況や新たな展開について展望する。特に、美術・デザインのもつ特性とその教育の価値について、コミュニケーションやそのリテラシーといった情報概念を軸に考察し、それを応用した教材開発について探求する。

4. 主要な研究業績 (2020.4～)

1) 「デザインの行方」, 『民具・民芸からデザインの未来まで～教育的視点から』 宮脇理監修 学術研究出版 所収, 2020 年 12 月, pp107～119

2) 「agri partners」ロゴマークデザイン, 静岡アグリパートナーズ合同会社, 2020 年 10 月

3) 「JACET 2021 International Convention 広島」ポスターデザイン, JACET, 2020 年 12 月

5. 主要な社会活動業績 (2020.4～)

1) 「新中学校校章等選定事業」, 下田市教育委員会, 下田市, 2020 年 4 月～

2) 「中学生デザイン思考ワークショップ『下田とつながりを感じていられるようなワクワクするしくみを考えよう。』」 未来の下田創造プロジェクト部会, 下田市, 2020 年 10 月

3) 「しずまえ 新ロゴマーク」審査委員, 静岡市農林水産部, 2021 年 1 月～

4) 『若者とお茶』～若者がイメージするお茶とは・ポスターデザインに見るお茶のイメージ考察～ポスタープロジェクト」ふじのくに茶の都ミュージアム, 島田市, 2021 年 2 月

紅 林 秀 治



所属 静岡大学大学院教育学領域 技術教育系列
職位・学位 教授 博士（学校教育学）
博士課程分野 創造系教科学
担当科目 技術教育教材論研究
研究テーマ 技術教育 設計教育 教材開発論

1. これまでの教育研究について

静岡大学に着任して以来、技術科教育法等担当教員として、技術科教育に関する教材、指導法、カリキュラムの開発に関する研究を行っています。これまでに、技術を学ぶ意義を実感させる指導法、設計に関わる思考力やシステム概念の形成過程に関する研究を深めています。

2. 博士課程における教育研究について

本博士課程においては、これまでの教育研究で行ってきたことを基盤としながら、さらに、普通教育としての技術教育の本質や歴史を踏まえた上で、技術リテラシーについて考察します。また、設計力を高めるための指導や教材の在り方についても追究していきたいと考えています。

3. 担当講義について

【技術教育教材論研究】

本講義では、普通教育としての技術教育と専門教育としての技術教育の違いを整理してから、技術教育では欠かすことができない概念である設計について考察します。さらに、設計能力を高めるための教材や教育方法について検討します。検討にあたっては、実際に教材を設計したり製作したりします。

4. 主要な研究業績 (2016.4 ～)

- (1) 小中学校における普通教育としてのプログラミング教育の展開と課題, 情報処理学会, Vol.60 No.3 通巻 648 号, 2019 年, pp.248-252
- (2) 乗車可能な車輪型倒立振り教材の開発, 日本産業技術教育学会誌, 第 61 巻第 4 号, 2019 年, pp.277-286, 山下友也・大村基将・鈴木裕貴・紅林秀治
- (3) 工学設計に基づく中学校技術・家庭科(技術分野)の授業に必要な視点, 教科開発学論集 第 7 号, 2019 年, pp.42-48, 西ヶ谷浩史・紅林秀治
- (4) 簡易手指動作分析システムの教育的活動に関する検討, 教科開発学論集 第 8 号, 2020 年, pp.83-92, 青木麟太郎・紅林秀治
- (5) 金属パイプを利用した自立式ハンモック教材の開発, 日本産業技術教育学会誌 第 62 巻第 2 号, 2020 年, pp.103-112, 西ヶ谷浩史・紅林秀治
- (6) エンジニアの視点を獲得するための工学設計の手法を取り入れた中学校技術・家庭科(技術分野)の学習, 日本産業技術教育学会誌, 第 62 巻, 第 3 号, 2020 年, pp.267-275 西ヶ谷 浩史・紅林 秀治
- (7) 技術科教育におけるプロジェクトマネジメントに基づくカリキュラムの提案, 日本産業技術教育学会誌, 第 62 巻, 第 4 号, 2020 年, pp.315-322, 室伏春樹・岡本駿・紅林 秀治
- (8) 中等教育プログラムに整合した LED ランタン製作教材の開発の試み, 静岡大学教育学部研究報告. 教科教育学篇 52 巻, 2020 年, pp.83-98, 青木麟太郎・紅林秀治
- (9) ドライバ操作における手指動作の大学生と中学生の比較, 日本産業技術教育学会誌, 第 63 巻, 第 1 号, 2021 年, pp.1-11, 青木 麟太郎・紅林 秀治

5. 主要な社会活動業績 (2015.4～)

- (1) 教育研究会(藤枝市, 焼津市, 島田市, 浜松市) 講師
- (2) 静岡県教職員組合 教育研究集会 技術科教育分科会 講師
- (3) 掛川市教育情報化推進基本計画策定委員会 委員長

杉 山 康 司

所属 静岡大学教育学部保健体育講座
職位・学位 教授 博士（スポーツ健康科学）
博士課程分野 創造系教科学
担当科目 教科開発学原論、体育・課外活動教材論研究
研究テーマ 運動生理学、体力科学、トレーニング科学



1. これまでの教育研究について

保健体育の教科専門である運動生理学をメインに体力科学的、スポーツ科学的な研究を行っています。特に人が行う各種運動およびスポーツについてエネルギー消費量の経済性や骨格筋活動について評価し、その結果を基に運動指導に向けたプログラムや指針について検討しています。対象者は乳幼児から高齢者まで幅広くテーマを持ちながら活動しております。

2. 博士課程における教育研究について

これまで、保健体育の教科としてだけではなく生涯にわたるスポーツ教育に目を向けて研究を行ってきました。特に運動生理学は客観的データの取得を主とした自然科学系の分野であり、学校教育における教科教育のように授業そのものの方法について知見を纏め上げていくフィールドとは異なっています。しかし、教科教育は基礎研究、つまり教科専門の知見を土台に築かれており、保健体育分野でも重要な位置づけであります。博士課程では保健体育において教科専門の知や手法を直接的に教科教育に活かす新たな教科開発学への挑戦が必要であると考えています。

3. 担当講義について

【教科開発学実践論】

さまざまな教科で教科専門と教科教育についてどのような連携があるのかなどを模索し、教科開発学専攻での学位の特色と人材育成に向けた討論をしたいと考えています。教科開発学実践論は受講生の皆様が取り組んでいる博論の進捗状況を拝見させていただくと同時に途中経過や克服課題について意見交換をする場です。他教科との共通点や相違点、他教科の教師も知るべき保健体育の知識から受講生の皆様の研究課題について意見や助言を述べたいと思います。

【体育・課外活動教材論研究】

教科開発学原論において一部紹介した内容を基に受講生の皆様が直面している研究課題と照らし合わせながら、さらに一步深めた内容にしたいと思います。運動生理学やスポーツ科学という分野で得られてきた研究成果をいくつかのトピックスとの研究手法についての共通点や相違点について意見を交わし、実際の研究データに触れながらの論文抄読から、常に学校教育に応用する立場で討論してみたいと思います。保健体育教科専門の一つである運動生理学分野からみた創造教科学を考えていきます。

4. 主要な研究業績（2013.4 ～）

「Relationships between physical fitness and body mass index in 11- and 12- year-old New Zealand and Japanese school children」: 教科開発学論集 2013 1 195-206, [Sugiyama K](#) and Michael J. Hamlin 、保健体育教材としてのポスチュアウォーキングの可能性～エキスパートポスチュアウォーカーの筋活動およびビギナーが示す運動強度から～」ウォーキング研究, 2016, 20, 21-27, [杉山康司](#)
他、「Blow Rifle: A Healthy New Sport」Sport Exerc Med Open J. 2017; 3(2): 46-52. [Sugiyama K](#)
他、「ノルディックウォーキング、ランニングにするとどうなる?～ノルディックランニングの生理学的応答～」ウォーキング研究 21, 2018, 17-25、[杉山康司](#)、他など

5. 主要な社会活動業績

日本体力医学会会員 （評議員 平成 14 年 10 月～現在）、日本スポーツ少年団指導育成部会部会員、静岡県教育委員会スポーツ推進審議会委員他

村 上 陽 子



所属 静岡大学教育学部家政教育講座
職位・学位 教授 博士（学術）
博士課程分野 創造系教科学
担当科目 家庭科教材論研究
研究テーマ 食文化、食品物性学、食品色彩学、家庭科におけるものづくり、教科連携

1. これまでの教育研究について

食品学・栄養学・食品衛生学・家庭科教育法等の担当教員として、食育や家庭科教育に関する教材開発、教科連携に関する研究を行っています。食品については、各種栄養素の成分組成や調理加工による変化、食品のもつ物理特性（硬さ、凝集性、付着性）とともに、これら物理特性が食嗜好性に及ぼす影響について研究しています。また、和菓子を中心として食品の色彩が食嗜好性に及ぼす影響について分析するとともに、経験的に行われてきた調製方法を理論的に分析するなど、我が国の食文化について科学的・文化的な視点から研究を行っています。最近では、小・中学校における給食指導や食に関する指導などについても研究を行っています。これら研究を通して得られた成果については教材化し、幼稚園をはじめ、小・中・高等学校において実践を行っています。教育分野においては、家庭科における食育、および、ものづくりの課題を明らかにしつつ、これからの家庭科における新しい教材を提案しています。

2. 博士課程における教育研究について

食品における物理的特性や化学的特性、官能特性などを科学的手法・文化的手法を用いて検討していきます。また、家庭科における食品学や栄養学、食品衛生学の意義について、多様な視点から考察できる資質・能力の育成を行っていきたいと考えています。教科連携については、食育など生活に関わる現代的課題やものづくりを核として教科連携モデルを考案し、授業実践していきたいと考えています。

3. 担当講義について

【教科開発学原論】

家庭科の指導内容について、①小・中・高等学校の家庭科の学習における課題、②家庭科教育に必要な視点、③家庭科の知識・技能の定着と多角的視点の育成を目指した教材・指導法について分析・考察します。

4. 主要な研究業績（2020, 2021）

- 1) 米の搗精度が麦芽糖化飴（米飴）の糖化および食嗜好性に及ぼす影響 ―玄米および有色米に着目して―、静岡大学教育実践総合センター紀要、30、175-184、村上陽子（2020）
- 2) 打ち物「和三盆」の物理特性および食嗜好性に及ぼす副材料の影響 ―ネギ水の水飴に着目して―、日本調理科学会誌、村上陽子（2021）
- 3) 特別支援学校（知的）における伝統文化を題材にした教科横断的な授業実践―和菓子（練り切り）に着目して―、教科開発学論集、9、村上陽子、高橋智子（2021）
- 4) 高等学校・家庭科に置けるキャリア教育のあり方（第一報）―子育て中の父母に対する質問紙調査から―、静岡大学教育学部研究報告 教科教育学篇、52、124-147、勝山郁美、村上陽子（2020）
- 5) 米の品種が米飴の糖化に及ぼす影響 ―食文化継承のための教材作成を目指して―、静岡大学教育実践総合センター紀要、31、208-217、村上陽子（2021）

5. 主要な社会活動業績

- 1) コロナ禍のマスク不足時に、縫わずに簡単に作れるマスクを開発し、静大HPや報道関係等を通じて情報提供を行った。
 - ・静岡大学教育学部：コーヒーフイルタを使った簡単マスクの作り方（2020/4/6）
<http://www.ed.shizuoka.ac.jp/news/コーヒーフイルタを使った簡単マスクの作り方/>
 - ・「裁縫必要なし コーヒーろ紙でマスク」、中日新聞（2020/4/9 掲載） 他多数
- 2) 静岡県教育研究会技術・家庭科教育研究部夏期研究大会 助言者、2020年（磐田市、web）

長谷川 慎

所属 静岡大学教育学部音楽教育講座
職位・学位 准教授 修士（音楽）
博士課程分野 創造系教科学
担当科目 表現・鑑賞論
研究テーマ 音楽教育学、日本音楽の指導法、和楽器（箏・三味線・胡弓）演奏法、地歌箏曲総論、地歌箏曲の楽器の変遷



1. これまでの教育研究について

地歌箏曲演奏家としての経験から音楽科教育の今日的課題の一つである「日本音楽の指導」に関して指導法、教材開発等を研究している。「体感する日本音楽」をモットーに学生指導を行い、伝統音楽の表現と鑑賞活動に取り組むことで、深奥な日本音楽の良さを体感し他者にその魅力を語れるような学生を育てることを目指している。

2. 博士課程における教育研究について

博士課程においては、「表現・鑑賞論」の授業を伊藤文彦教員と分担で担当する。これまでの音楽科教育における日本音楽指導について俯瞰し、問題点を浮き彫りにしながら今後の指導のあり方について、学生諸君と考えていきたいと考えている。先人が育み伝えてきた音楽でありながら、自らの言葉として語れる教員が少ない現状を改善し、子どもたちにどのように指導するかを考えるのは教科教育に携わる人間の使命の一つである。教員と学生双方が経験を生かして日本学の指導、教材開発について考えていきたい。

3. 担当講義について

【表現・鑑賞論】

芸術は存在そのものが教育であると言える。そして、芸術を表現することとそれを鑑賞することは表裏一体の関係であり、常に同時発生的に進行する創造性豊かな思考過程である。この授業では、そういった表現と鑑賞の思考過程を芸術学と認知科学を融合させた学際的な観点で整理し、芸術教育のありかたについて考察するものである。音楽学概論、音楽教育学概論、音楽鑑賞教育論の視点から教科開発学における音楽科教育を探究する。

4. 主要な研究業績（2019.1～）

- 1) 本多佐保美編著「第V章 箏（箏曲）の学習」『日本音楽を学校でどう教えるか』、開成出版、pp. 44-47、2020
日本音楽の教育と研究をつなぐ会編「箏曲」『唱歌で学ぶ日本音楽』、音楽之友社、2019
- 2) 齊藤忠彦／菅裕編著「和楽器の指導」『新版 中学校・高等学校教員養成課程 音楽科教育法』、教育芸術社、pp. 190-191、2019
- 3) 有本真紀、阪井恵、津田正之編著「II 小学校音楽科の目標と内容 「A 表現」器楽分野 (2) 指導のポイント 「和楽器」」『教員養成課程小学校音楽科教育法新版教員養成課程小学校音楽科教育法』、教育芸術社、pp. 34-37、2019
- 4) 長谷川慎・志民一成「音楽授業における歌唱モデル構築のための伝統的な歌唱を稽古する子どもの歌い方の分析（1）」、静岡大学教育実践総合センター紀要、29/29 pp. 100-107、2019
- 5) 笹野恵理子編著「第Ⅲ部 1 多様な音楽文化の諸相と音楽教育「日本の音楽」」『初等音楽科教育』、ミネルヴァ書房、p. 103、2018

5. 主要な社会活動業績（2018.4～）

- 1) 静岡県総合教育センター主催音楽の授業づくり研修会講師「～口唱歌を用いた和楽器の指導～」（2017年10月）
- 2) 文化庁主催令和元年度伝統音楽指導者等研修会講師（2019年7～8月）
- 3) 日本芸術文化振興会あぜくらの集いにおける講演「三味線の響き～古態楽器の聴き比べ～」（2019年5月）
- 4) 地歌箏曲研究会の開催「第2回古態の楽器による地歌の会」東京藝術大学第1ホール（2019年3月）

VIII. 諸資料

共同教科開発学専攻・授業カレンダー（2020年度）

表中の記号の説明・

※：必修科目、基：基礎科目、応：応用科目
環：教育環境系分野科目、人：人文社会科学分野科目
自：自然系科学分野科目、創：創造系科学分野科目

前期：愛知教育大学

		4月5日	4月11日	4月12日	4月18日	4月19日	4月25日	4月26日	5月2日	5月3日	5月4日	5月5日	5月6日	5月9日	5月10日	5月16日	5月17日	5月23日	5月24日	5月30日	5月31日	6月6日	6月7日	6月13日	6月14日	6月20日	6月21日	6月27日	6月28日	7月4日	7月5日	7月11日	7月12日	7月18日	7月19日	7月25日	7月26日	8月1日	8月2日	8月8日	8月9日	8月15日	8月16日	8月22日	8月23日	8月29日	8月30日
		日	土	日	土	日	土	日	土	日	月	火	水	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日
		A週 基礎科目（6週）														B週 分野科目（開講8週）														C週 補講および集中講義、セミナー																	
1限 4限	合同ガイダンス（会場・愛教大）	※基・教科開発学原論①（愛知）	※基・文化資源活用論②（愛知）	※基・教科開発学原論③（静岡）									※基・教科開発学原論④（静岡）	静大・停電	静大・停電	静大・停電	環・石川①	人・中野①	人・高橋①	人・伊藤①	環・石川②	人・中野②	人・高橋②	人・伊藤②	環・石川③	人・中野③	人・高橋③	人・伊藤③	環・石川④	人・中野④	人・高橋④	人・伊藤④	博士論文最終試験	愛教大・オープンキャンパス	愛教大・オープンキャンパス	静大・オープンキャンパス（予定）								応・教科開発学セミナーⅢ（会場・静大）			

前期：静岡大学

4月5日	4月11日	4月12日	4月18日	4月19日	4月25日	4月26日	5月2日	5月3日	5月4日	5月5日	5月6日	5月9日	5月10日	5月16日	5月17日	5月23日	5月24日	5月30日	5月31日	6月6日	6月7日	6月13日	6月14日	6月20日	6月21日	6月27日	6月28日	7月4日	7月5日	7月11日	7月12日	7月18日	7月19日	7月25日	7月26日	8月1日	8月2日	8月8日	8月9日	8月15日	8月16日	8月22日	8月23日	8月29日	8月30日	
日	土	日	土	日	土	日	土	日	月			土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	
	A週 基礎科目（6週）														B週 分野科目（開講8週）														C週 補講および集中講義、セミナー																	
1限 5限 4限	合同ガイダンス（会場・愛教大）													静大・停電		静大・停電			環・村越①	人・黒川①				環・村越②	人・黒川②		環・村越③	人・黒川③				環・村越④	人・白畑④	創・伊藤新保村上紅林④	博士論文最終試験	愛教大・オープンキャンパス	愛教大・オープンキャンパス	静大・オープンキャンパス（予定）							応・教科開発学セミナーⅢ（会場・静大）	
																			自・郡司①	創・伊藤新保村上紅林①	人・白畑①				自・郡司②	創・伊藤新保村上紅林②	人・黒川②		自・郡司③	創・伊藤新保村上紅林③	人・白畑③															

注・開講の原則

- ① 授業は原則として1日4コマで開講するため、1単位は2日、2単位は4日間の授業開講が必要である
- ② 基礎科目はA週またはD週で集中授業として開講するC週、F週で開講することも可能
- ③ 分野科目は原則としてB週とE週で開講する
開講する曜日は、土・日曜日及び祝日のいずれかとし、第1週目開始か、第2週目開始を選択する
- ④ C週とF週は補講期間であるが、基礎科目、あるいは分野科目の集中授業を置くこともできる
- ④ 教科開発学セミナーⅠおよびⅡはF週で開講し、セミナーⅢはC週で開講する

共同教科開発学専攻・授業カレンダー（2020年度）

表中の記号の説明・

※：必修科目、基：基礎科目、応：応用科目
環：教育環境系分野科目、人：人文社会系教科学分野科目
自：自然系教科学分野科目、創：創造系教科学分野科目

後期：愛知教育大学

10月3日	10月4日	10月10日	10月11日	10月17日	10月18日	10月24日	10月25日	10月31日	11月1日	11月7日	11月8日	11月14日	11月15日	11月21日	11月22日	11月28日	11月29日	12月5日	12月6日	12月12日	12月13日	12月19日	12月20日	12月26日	12月27日	1月2日	1月3日	1月9日	1月10日	1月16日	1月17日	1月23日	1月24日	1月30日	1月31日	2月6日	2月7日	2月13日	2月14日	2月20日	2月21日		
土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日
D週 基礎科目（開講4週）								E週 分野科目（開講8週）																		F週 補講および集中講義、セミナー																	
※基・教科開発学実践論①（合同）	※基・教科開発学実践論②（合同）	基・教育評価実証方法論①	基・教育評価実証方法論②	基・科学技術活用論①	基・科学技術活用論②	愛教大・総合型選抜入試	入学試験（会場・愛教大）	入学試験予備日	愛教大・大学院後期入試	愛教大・大学院後期入試	環・竹川①	環・石田①	環・新井①	環・竹川②	環・石田②	愛教大・学校推薦型選抜入試	環・新井②	環・竹川③	環・石田③	環・新井③	環・竹川④	環・石田④	年始休業	年始休業	環・新井④	大学入学共通テスト	大学入学共通テスト	博士論文最終試験予定			愛教大・大学院2次試験			※応・教科開発学セミナーⅠ・Ⅱ（会場・愛教大）	※応・教科開発学セミナーⅠ・Ⅱ（会場・愛教大）								
1限～4限											人・丹藤①	自・小谷①	自・稲毛①	自・岩山①	自・稲毛②	自・小谷②	自・岩山②	自・稲毛③	自・小谷③	自・岩山③	自・稲毛④	自・小谷④			自・岩山④																		

後期：静岡大学

	10月3日	10月4日	10月10日	10月11日	10月17日	10月18日	10月24日	10月25日	10月31日	11月1日	11月7日	11月8日	11月14日	11月15日	11月21日	11月22日	11月28日	11月29日	12月5日	12月6日	12月12日	12月13日	12月19日	12月20日	12月26日	12月27日	1月2日	1月3日	1月9日	1月10日	1月16日	1月17日	1月23日	1月24日	1月30日	1月31日	2月6日	2月7日	2月13日	2月14日	2月20日	2月21日	
	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	土	日	
	D週 基礎科目（開講4週）								E週 分野科目（開講8週）																F週 補講および集中講義、セミナー																		
1 限 ～ 4 限							愛教大・総合型選抜入試		入学試験（会場・愛教大）	入学試験予備日	愛教大・大学院後期入試	愛教大・大学院後期入試	環・香野①	愛教大・ホームカミングデー予定		環・香野②		愛教大・学校推薦型選抜入試	環・香野③					環・香野④		年始休業	年始休業		人・坂口④	自・小南④		創・小川④		大学入学共通テスト	大学入学共通テスト	博士論文最終試験予定		愛教大・大学院2次試験		※応・教科開発学セミナーⅠ・Ⅱ（会場・愛教大）	※応・教科開発学セミナーⅠ・Ⅱ（会場・愛教大）		
														自・熊倉①		自・熊倉②			自・熊倉③					自・熊倉④																			

共同教科開発学専攻 前期・授業アンケート（新入学生用）

共同教科開発学専攻学務委員会

共同教科開発学専攻では、大学院生（新入学生）の皆さんを対象として、授業等に関するアンケートを実施し、本専攻の今後の改善に活かそうと考えています。ぜひ、ご協力ください。

なお、アンケートは無記名です。また、アンケートの集計は事務担当の方が行い、授業を担当する教員がアンケートに書かれた内容を直接見ることはありません。率直なご意見をお書きください。

1. 所属大学について いずれか一方に○をつけてください。

() 愛知教育大学 () 静岡大学

2. 前期に受講した授業の内容、授業の方法や形式（履修申請の時期や方法、授業時間割、授業時間数、テレビ会議システム／オンラインを用いた授業形式、など）について、ご意見やご要望がありましたら、自由にご記入ください。

3. 研究指導や学位取得、学生生活へのサポート、その他本専攻全般について、ご意見やご要望がありましたら、自由にご記入ください。

前期・授業アンケート（新入生用）結果と回答

過日は表題のアンケートにご協力いただき、ありがとうございました。短期間でのお願いだったにも関わらず、全員の皆様から回答を提出していただきました。深くお礼申し上げます。

いただいたご意見等に対して、以下のとおり回答いたします。類似した内容のご意見等はまとめて記載しています。ご了承ください。

お寄せいただいたご意見、ご要望を踏まえ、授業や指導体制のさらなる充実を図っていく所存です。

質問1：前期に受講した授業の内容、授業の方法や形式（履修申請の時期や方法、授業時間割、授業時間数、テレビ会議システム／オンラインを用いた授業形式、など）について、ご意見やご要望がありましたら、自由にご記入ください。

■テレビ会議システム／オンライン授業について

- ・オンライン授業は大学への移動時間がなくなり、感染面の心配もなく、かなり助かった。今後も可能な限りオンラインによる授業の実施を希望する。様々なアプリケーションを使ってみることができ、それも含めて良い経験だった。ただ、長時間に渡ってオンラインでの授業を受講すると非常に疲労感を感じた。（6名）
- ・対面に勝るものはないので、できるだけ対面で授業を実施してほしい。対面での授業は充実したものが多かった。オンライン授業で先生方が作った教材を直接見られないのは残念だった。メールを送って相互の対話をしていく授業があったが、難しかった。テレビ会議システムは相手校のプレゼンテーションの画像が見にくかった。（4名）

回答：オンライン授業については、新型コロナウイルスの感染拡大の状況、教育効果、利便性などを勘案しながら引き続き検討していきます。

■授業の内容、形式について

- ・受講生の研究に即した内容で授業を行って下さる先生が複数いらっしゃり、大変ありがたく、参考になった。
- ・事前課題、資料の中で、実際の授業に使わないものがあった。
- ・事前課題では「教科開発学の視点で」とあったが、実際の授業は研究計画の発表になっていたりなど、課題と内容がズレている場合があった。

回答：授業の内容、形式については、受講生からの意見を踏まえ、引き続き適切なものにしていきます。

■接続方法、事前のアナウンスについて

- ・日程変更や授業形式の連絡が直前のことが多く、心配することが多かった。(3名)
- ・テレビ会議システムの接続方法を事前に丁寧に教えてほしい。
- ・愛教大の Teams にログインできず困った。その際の担当教員の対応にもがっかりした(「私は悪くない、ログインできない方が悪い」など)。愛教大だけの受講者ではないことを考慮して欲しかった。
- ・Office365 の連絡(静大 ID) が直前で、Teams に参加できないことがあった。早めにいろいろなことを連絡してほしい。仕事をしている関係で、日中はメールを確認できない。

回答：授業の実施方法や実際の接続方法のアナウンスが直前になってしまったこととお詫びいたします。今後はできる限り早めに連絡するよう努めます。

■その他

- ・履修申請について、来年度からも紙媒体ではなく Excel での提出にしてほしい。
- ・仕事と学業を並行して行っているため、夏休みなどの集中講義を増やしていただけるとありがたい。

回答：履修申請の方法については検討いたします。夏休み中の集中講義を増やすことについては要望として承っております。

質問2. 研究指導や学位取得、学生生活へのサポート、その他本専攻全般について、ご意見やご要望がありましたら、自由にご記入ください。

- ・「論文を書くことが一番大切」と最初に言われたが、授業の課題が結構あり、仕事、家庭、論文、授業とやることが多くあり、論文への時間を割くことがなかなか難しかった。
- ・ガイダンスが十分ではなかったため、いろいろな点でわからないことが多く苦労した。保険については加入が遅れてしまった。
- ・今年度のシラバスといいながら、アップデートされていなかった。学生に配布するのであれば、組織として確認すべき事項かと思う。

回答：授業の課題の量、ガイダンスのあり方については、より適切なものになるよう見直していきます。シラバスのアップデートについては確認体制を整えたいと思います。

以上

共同教科開発学専攻 授業アンケート（全学年用）

共同教科開発学専攻学務委員会

共同教科開発学専攻では、院生の皆さんを対象として授業等に関するアンケートを実施し、本専攻の今後の改善に活かそうと考えています。

アンケートは無記名です。また、アンケートの集計は事務担当の方が行い、授業を担当する教員がアンケートに書かれた内容を直接見ることはありません。率直なご意見をお書きください。

なお、1年生の皆さんには前期にも同様のアンケートを実施していますので、後期の授業等についてご回答ください。

ご協力のほど、よろしくお願いいたします。

1. 所属大学について いずれか一方に○をつけてください。

() 愛知教育大学 () 静岡大学

2. 本年度に受講した授業の内容、授業の方法や形式（履修申請の時期や方法、授業時間割、授業時間数、テレビ会議システム／オンラインを用いた授業形式、など）について、ご意見やご要望がありましたら、自由にご記入ください。

3. 研究指導や学位取得、学生生活へのサポート、その他本専攻全般について、ご意見やご要望がありましたら、自由にご記入ください。

2020年度授業アンケート（全学年用）結果と回答

過日は標題のアンケートにご協力いただき、ありがとうございました。いただいたご意見等に対して、以下のとおり回答いたします。類似した内容のご意見等はまとめて記載しています。ご了承ください。

お寄せいただいたご意見、ご要望を踏まえ、授業や指導体制のさらなる充実を図っていく所存です。

質問 1: 本年度に受講した授業の内容、授業の方法や形式（履修申請の時期や方法、授業時間割、授業時間数、テレビ会議システム／オンラインを用いた授業形式、など）について、ご意見やご要望がありましたら、自由にご記入ください。

- ・対面（テレビ会議システム利用）の授業も、オンラインの授業も、ご担当の先生方のご尽力で、有意義なものとなっておりました。次年度もこの状況に劇的な変化は無いと思われるので、お手数をおかけしますが、ご準備をお願いいたします。個人的には、オンラインの授業で移動のコスト（時間・お金）がかからず助かりました。オンラインに不慣れな最初の頃は、発言に躊躇する場合もありましたが、他の会議などで回数をこなし、オンラインに慣れてくると、画面表示も細かいところまで見られて、便利であったと思います。対面でしかできない部分は仕方ないのですが、オンラインでの実施は助かります。
- ・オンラインでの授業や発表は事前の連絡がよくされていて、問題なく参加できています。
- ・テレビ会議システム、オンライン授業については、大学までの往復の時間短縮にもなり、非常に良かった。
- ・オンライン授業は移動や身支度の時間を省くことができて良かったです。ただ時に起きる見えなくなる聞こえにくくなる等のトラブルは残念でした。
- ・Zoom での対話形式での講義は、じっくりと対話ができよかった半面、なぜか印象が薄く、特にご教授いただいた先生方の人となりや深みのインパクトはやはり直接もしくは大画面テレビによる方が今後の発展を考えるうえで重要かと思いました。
- ・履修申請の時期や方法は良かったです。授業時間割については履修しやすかったです。授業時間数については、多く感じました。普段の業務と研究と授業の両立は大変でした。
- ・受講者の研究内容に照らした授業内容を取り扱って下さった授業があり、非常に参考になりました。
- ・特に意見などはありません。有意義な学修の機会をいただいております。

回答：オンライン授業については、新型コロナウイルスの感染拡大の状況、教育効果、利便性などを勘案しながら引き続き利用を検討していきます。本年度は教員側もオンライン授業に不慣れな部分がありましたので、操作方法に習熟していきたいと思います。授業の内容や課題の量については、皆さんからの意見を踏まえつつ、より適切なものになるよう見直していきます。

質問 2. 研究指導や学位取得、学生生活へのサポート、その他本専攻全般について、ご意見やご要望がありましたら、自由にご記入ください。

- ・全般的にメール連絡が遅いと感じました。私が 1 年次で、初めてのことで無知な部分があったかと思いますが。例えば、1 月 24 日の博士論文最終試験の案内は、1 月 21 日 18:46 のメールで来ました。そのときに初めて知ったので、予定が合わず、参加することができませんでした。年間予定で決まっていたことなのかもしれませんが、もう少し早く連絡を頂ければ、調整し、参加できたと思います。
- ・学位取得にむけた具体的な指導にまで手が届かず、3 年の修了となりました。今後について、担当の先生にはご負担をかけることを想うと、学位取得に関するタイムスケジュールの作成が困難であるが見通しが持てたらよかったと思います。
- ・修士まで教育学研究科ではなかったため、教育学の論文に関する知識がなく苦勞しています。教育学で利用される統計処理や、質問紙の作り方など、基本的な知識を身につける機会をいただきたいと感じます。
- ・静大院生室についてです。①水道の水が出にくい、②雑紙の処分方法。この 2 点について改善もしくは対処がわかるようにしていただけたら幸いです。
- ・特にありません（3 名）

回答：諸連絡がしばしば直前になってしまったことをお詫びします。できる限り早めに連絡を流すよう気をつけていきます。学位取得のスケジュール作成や研究方法の習得については、指導教員と連絡を密に取りながら進めていただければと思います。万一、何らかの事情で指導教員と連絡を取りづらい場合には、事務担当者に申し出てください。静大院生室の件については対応します。皆さんの研究生活が引き続き充実したものとなるよう願っています。

回答者数： 愛教大籍 4 名、静大籍 3 名

以上

平成30年度～令和2年度 共同教科開発学専攻・開設授業の履修状況(3年間) その1

前期: A期間(4月～5月) B期間(6月～7月) C期間(7月～8月)
後期: D期間(10月) E期間(11月～1月) F期間(1月～2月)

愛知教育大学・静岡大学 合同開講科目				平成30年度 集計		令和元年度 集計		令和2年度集計	
共同専攻 科目	授業科目名	単位	担 当 教 員	曜日・時限・期 間	受 講 者	曜日・時限・期 間	受 講 者	曜日・時限・期 間	受 講 者
基礎 科目	教科開発学原論	a 2	石川 恭 野平 慎二 中野 真志 高橋 美由紀 黒川 みどり 小南 陽亮 杉山 康司 村上 陽子	A期間 4/15(日) 4/22(日) 4/29(日) ★遠隔	愛教大D1 5名 静岡大D1 7名	A期間 4/14(日) 4/21(日) 4/28(日) 5/6(月) ★遠隔	愛教大D1 7名 静岡大D1 4名	A期間 4/11(土) 4/18(土) 5/9(土) 5/17(日) ★遠隔	愛教大D1 4名 静岡大D1 5名 静岡大D2 1名
	教科開発学実践論	a 1	稲葉 みどり 倉本 哲男 小川 裕子 新保 淳 鎌塚 優子	D期間 10/6(土) 10/7(日) ★遠隔	愛教大D2 1名 愛教大D1 5名 静岡大D1 7名	D期間 10/5(土) 10/6(日) ★遠隔	愛教大D2 1名 愛教大D1 1名 静岡大D1 5名	D期間 10/3(土) 10/4(日) ★遠隔	愛教大D1 4名 愛教大D2 1名 静岡大D1 5名 静岡大D2 1名
応用 科目	教科開発学セミナーⅠ	b 2	全教員	F期間 2/16(土) 2/17(日) ●愛教大	愛教大D1 5名 静岡大D2 1名 静岡大D1 7名	F期間 2/15(土) 2/16(日) ●静岡大	愛教大D1 5名 静岡大D2 1名 静岡大D1 7名	F期間 2/13(土) 2/14(日) ●静岡大	愛教大D1 4名 静岡大D1 4名 静岡大D2 1名
	教科開発学セミナーⅡ	b 2	全教員	F期間 2/16(土) 2/17(日) ●愛教大	愛教大D2 5名 静岡大D3 4名 静岡大D2 3名	F期間 2/15(土) 2/16(日) ●静岡大	愛教大D3 1名 愛教大D2 4名 静岡大D3 2名 静岡大D2 7名	F期間 2/13(土) 2/14(日) ●静岡大	愛教大D2 5名 静岡大D2 3名 静岡大D3 1名
	教科開発学セミナーⅢ	b 2	全教員	C期間 8/26(日) ●静岡大	愛教大D3 2名 静岡大D3 1名	C期間 8/25(日) ●愛教大	愛教大D3 2名 静岡大D3 2名 静岡大D2 1名	C期間 8/23(日) ●静岡大	愛教大D3 2名 静岡大D3 2名

平成30年度～令和2年度 共同教科開発学専攻・開設授業の履修状況(3年間) その2

前期: A期間(4月～5月) B期間(6月～7月) C期間(7月～8月)

後期: D期間(10月) E期間(11月～1月) F期間(1月～2月)

愛知教育大学開講科目				平成30年度 集計		令和元年度 集計		令和2年度 集計	
共同専攻 科目	授業科目名	単位	担 当 教 員	曜日・時限・期 間	受 講 者	曜日・時限・期 間	受 講 者	曜日・時限・期 間	受 講 者
基礎 科目	文化資源活用論	a 1	野地 恒有 伊藤 貴啓 丹藤 博文	A期間 4/28(土) 5/12(土)	愛教大D2 1名 愛教大D1 3名 静岡大D1 1名	A期間 4/27(土) 5/11(土)	愛教大D1 3名 静岡大D3 1名	A期間 4/12(日) 4/19(日)	静岡大D2 1名
	科学技術活用論	a 1	岩山 勉 稲毛 正彦 飯島 康之	D期間 10/27(土) 10/28(日)	愛教大D1 2名 静岡大D1 2名	D期間 10/26(土) 10/27(日)	愛教大D1 3名 静岡大D1 2名	D期間 10/17(土) 10/18(日)	愛教大D1 2名 静岡大D1 1名 静岡大D2 1名
	教育評価実証方法論	a 1	古田 真司 石田 靖彦	D期間 10/20(土) 10/21(日)	愛教大D2 2名 愛教大D1 5名 静岡大D1 2名	D期間 10/19(土) 10/20(日)	愛教大D3 2名 愛教大D2 1名 愛教大D1 6名 静岡大D2 1名	D期間 10/10(土) 10/11(日)	愛教大D3 1名
分野 科目 (選択科目)	遊び文化環境論研究	a 2	石川 恭	E期間 日曜日 隔週	愛教大D2 1名 静岡大D1 1名	B期間 日曜日 隔週	愛教大D3 2名 愛教大D1 1名 静岡大D3 1名	B期間 土曜日 隔週	静岡大D1 1名 静岡大D3 2名
	教育経営臨床論研究	a 2	倉本 哲男	E期間 土曜日 隔週	愛教大D2 1名	E期間 土曜日 隔週	愛教大D1 5名 愛教大D2 1名		
	学校適応論研究	a 2	石田 靖彦	E期間 日曜日 隔週	愛教大D2 2名 愛教大D1 1名 静岡大D1 1名	E期間 土曜日 隔週	愛教大D1 2名	E期間 日曜日 隔週	
	教育哲学・思想論研究	a 2	野平 慎二	B期間 土曜日 隔週	愛教大D1 3名 静岡大D1 1名	B期間 日曜日 隔週	愛教大D1 4名 静岡大D2 1名 静岡大D1 1名	B期間 土曜日 隔週	静岡大D3 1名
	保育・幼児教育学研究	a 2	新井 美保子					E期間 日曜日 隔週	愛教大D1 1名 愛教大D2 1名 愛教大D3 1名
	教育方法・内容論研究	a 2	竹川 慎哉			E期間 日曜日 隔週	愛教大D1 3名	E期間 日曜日 隔週	
	言語教育内容論研究	a 2	稲葉 みどり	E期間 日曜日 隔週	愛教大D1 1名 静岡大D2 1名 静岡大D1 1名	E期間 日曜日 隔週	愛教大D3 1名 静岡大D1 1名	E期間 日曜日 隔週	静岡大D1 1名 静岡大D3 1名
	民俗学教材論研究	a 2	野地 恒有	B期間 土曜日 隔週	愛教大D1 1名 静岡大D1 3名	B期間 土曜日 隔週			
	地理学教材論研究	a 2	伊藤 貴啓	B期間 土曜日 隔週	静岡大D2 1名 静岡大D1 1名	B期間 日曜日 隔週	静岡大D1 1名 静岡大D2 1名 静岡大D1 1名	B期間 土曜日 隔週	
	国語科教育教材論研究	a 2	丹藤 博文	E期間 土曜日 隔週	静岡大D1 1名	E期間 日曜日 隔週	愛教大D1 1名	E期間 土曜日 隔週	
	生活科教育内容論研究	a 2	中野 真志	E期間 土曜日・ 隔週	愛教大D2 1名 愛教大D1 1名 静岡大D1 2名	E期間 土曜日 隔週	愛教大D1 1名 静岡大D3 1名	B期間 土曜日 隔週	愛教大D1 2名 静岡大D1 1名
	小学校英語教育研究	a 2	高橋 美由紀	B期間 日曜日 隔週	愛教大D2 1名				
	外国語教育内容論研究	a 2	高橋 美由紀			B期間 土曜日 隔週	愛教大D1 2名	B期間 日曜日 隔週	静岡大D3 1名
	数学教材論研究	a 2	飯島 康之	B期間 日曜日 隔週	愛教大D1 2名	B期間 土曜日 隔週	愛教大D1 1名 静岡大D1 2名	B期間 日曜日 隔週	愛教大D1 1名 愛教大D2 1名
	物理教材論研究	a 2	岩山 勉	E期間 日曜日 隔週	愛教大D1 2名	E期間 土曜日 隔週	愛教大D1 1名	E期間 日曜日 隔週	愛教大D1 2名
	理科教育内容論研究	a 2	稲毛 正彦	E期間 土曜日 隔週	愛教大D1 2名	E期間 日曜日 隔週	愛教大D1 1名	E期間 土曜日 隔週	愛教大D1 1名
	数学教育内容論研究	a 2	小谷 健司	E期間 土曜日 隔週	愛教大D1 2名	E期間 日曜日 隔週	愛教大D1 1名 静岡大D1 1名	E期間 日曜日 隔週	愛教大D1 1名
教科 開発 学系	保健教育内容論研究	a 2	古田 真司	B期間 日曜日 隔週	愛教大D3 1名 愛教大D1 1名 静岡大D1 1名	B期間 土曜日 隔週	愛教大D2 1名 愛教大D1 1名 静岡大D2 1名	B期間 日曜日 隔週	愛教大D2 1名 静岡大D2 1名

平成30年度～令和2年度 共同教科開発学専攻・開設授業の履修状況(3年間) その3

前期: A期間(4月～5月) B期間(6月～7月) C期間(7月～8月)

後期: D期間(10月) E期間(11月～1月) F期間(1月～2月)

静岡大学開講科目				平成30年度 集計		令和元年度 集計		令和2年度 集計	
共同専攻 科目	授業科目名	単位	担 当 教 員	曜日・時限・期 間	受 講 者	曜日・時限・期 間	受 講 者	曜日・時限・ 期間	受 講 者
基礎 科目	選択科目								
	教育プログラム開発論	a 1	村山 功	A期間 4/14(土) 4/28(土)	愛教大D1 1名 静岡大D1 2名	A期間 5/12(土) 5/19(土)	愛教大D2 1名 愛教大D1 2名 静岡大D2 3名 静岡大D1 3名	A期間 4/26(日) 4/27(月) オンデマンド	愛教大D1 2名 愛教大D3 1名 静岡大D1 3名 静岡大D2 1名 静岡大D3 1名
	表現・鑑賞論	a 1	伊藤 文彦 北山 敦康 長谷川 慎	D期間 10/20(土) 10/27(土)	愛教大D1 1名 静岡大D3 1名 静岡大D1 1名	D期間 10/12(土) 10/26(土)	愛教大D1 2名 静岡大D2 3名	D期間	
	教育フィールド調査論	a 1	村越 真	A期間 4/30(月) 5/6(日)	愛教大D1 3名 静岡大D2 1名 静岡大D1 3名	A期間 4/20(土) 5/4(土)	愛教大D3 1名 愛教大D1 1名 静岡大D1 4名	7/26(日) 8/2(日) 8/9(日)	愛教大D1 1名 愛教大D2 3名 愛教大D3 1名 静岡大D1 5名 静岡大D2 1名 静岡大D3 1名
分野科目(選択科目)	教育プレゼンテーション論	a 1	白畑 知彦 小南 陽亮	E期間 変形 11/25(日) 1/5(土)	愛教大D2 1名 愛教大D1 1名 静岡大D1 1名	E期間 変形 11/24(日) 1/4(土)	愛教大D2 1名 愛教大D1 3名 静岡大D1 3名	E期間 変形 11/7(土) 1/9(土)	愛教大D2 2名 静岡大D1 4名
	学校危機管理論研究	a 2	村越 真	E期間 日曜日 隔週	愛教大D3 1名 愛教大D1 1名 静岡大D1 1名	E期間 日曜日 隔週	愛教大D3 1名 愛教大D2 1名 愛教大D1 1名 静岡大D1 1名	B期間 土曜日 隔週	愛教大D1 1名 静岡大D1 2名
	教育工学論研究	a 2	村山 功	B期間 日曜日 隔週	静岡大D3 1名 静岡大D2 1名 静岡大D1 1名	B期間 日曜日 隔週	愛教大D1 1名 静岡大D1 3名		
	身体運動指導論研究	a 2	吉田 和人	E期間 日曜日 隔週	静岡大D1 1名	E期間 日曜日 隔週	静岡大D2 1名 静岡大D1 1名		
	養護実践教育学論研究	a 2	鎌塚 優子	E期間 日曜日 隔週	静岡大D1 1名	E期間 日曜日 隔週	愛教大D1 1名 静岡大D2 3名 静岡大D1 1名		
	特別支援教育学研究	a 2	香野 毅			E期間 日曜日 隔週		E期間 土曜日 隔週	静岡大D1 1名
	情報教育研究	a 2	塩田 真吾				静岡大D1 1名		
	外国語教育論研究	a 2	白畑 知彦	B期間 土曜日 隔週	静岡大D1 1名	B期間 土曜日 隔週	静岡大D1 1名	B期間 土曜日 隔週	静岡大D1 1名 静岡大D3 1名
	歴史教材論研究	a 2	黒川 みどり	B期間 日曜日 隔週	愛教大D2 1名 静岡大D1 1名	B期間 土曜日 隔週		B期間 日曜日 隔週	愛教大D2 1名
	国語教育論研究	a 2	坂口 京子	B期間 日曜日 隔週		B期間 日曜日 隔週		B期間 土曜日 隔週	愛教大D1 1名 愛教大D3 1名 静岡大D2 1名
	数学教育論研究	a 2	熊倉 啓之	E期間 土曜日 隔週	静岡大D1 1名	E期間 土曜日 隔週	静岡大D1 1名	E期間 土曜日 隔週	
	生物教育内容論研究	a 2	小南 陽亮	E期間 土曜日 隔週		E期間 土曜日 隔週	静岡大D2 1名	E期間 土曜日 隔週	
	理科教育論研究	a 2	丹沢 哲郎 郡司 賀透	B期間 土曜日 隔週		B期間 日曜日 隔週	愛教大D2 1名 愛教大D1 1名 静岡大D2 1名	B期間 日曜日 隔週	
	美術教材論研究	a 2	伊藤 文彦	B期間 土曜日 隔週		B期間 土曜日 隔週		B期間 土曜日 隔週	
	体育教育論研究	a 2	新保 淳	C期間 日曜日 隔週	静岡大D1 3名	B期間 土曜日 隔週	愛教大D1 1名	B期間 土曜日 隔週	静岡大D1 1名 静岡大D2 1名
	技術教育内容論研究	a 2	松永 泰弘	B期間 日曜日 隔週		B期間 日曜日 隔週		B期間 土曜日 隔週	静岡大D1 1名
	家政教育内容論研究	a 2	小川 裕子	E期間 日曜日 隔週	愛教大D2 1名 愛教大D1 1名	E期間 日曜日 隔週		E期間 土曜日 隔週	
	技術教育教材論研究	a 2	紅林 秀治	B期間 土曜日 隔週	静岡大D1 1名	B期間 土曜日 隔週	静岡大D1 1名	B期間 土曜日 隔週	愛教大D1 1名 愛教大D2 1名 静岡大D3 1名
	体育・課外活動教材論研究	a 2	杉山 康司	B期間 土曜日 隔週	愛教大D2 1名 静岡大D1 1名	B期間 日曜日 隔週	愛教大D1 1名		静岡大D2 1名
	家庭科教材論研究	a 2	村上 陽子	B期間 土曜日 隔週		B期間 土曜日 隔週		B期間 土曜日 隔週	静岡大D2 1名

教科開発学論集 第9号(2021)掲載論文一覧

【 論 文 】

障害のある子どもたちの新たな学び場としての放課後等デイサービス……………	香 野 毅……………1
サービス・ラーニングコーディネーターによる事前学習指導が大学生の学習成果に及ぼす影響… ーリフレクションシートによる分析ー	馬 場 洸 志……………11
物語文における4歳児・5歳児の発達に見られる特徴…………… ーFrog Storyの分析からー	稲 葉 みどり……………22
外国語教育・音楽教育における「英語の歌」の指導…………… ー教科間の連携と「音韻構造」に焦点をあててー	高 橋 美由紀……………32 河 合 紳 和 澤 田 育 子 柳 喜 和
探究活動「新たな課題を発見する経験」に向けた教材…………… ー理数探究でカーボン・ペーパーを電気抵抗の教材として活用した実践からー	大久保 博 和……………43 新鶴田 道 也 岩 山 勉
特別支援学校（知的）における伝統文化を題材にした教科横断的な授業実践…………… ー和菓子（練り切り）に着目してー	村 上 陽 子……………54 高 橋 智 子
特別支援学校（知的）における伝統文化を題材にした教科横断的な授業実践…………… ー日本の美術作品（屏風）に着目してー	高 橋 智 子……………68 村 上 陽 子
小学生の体力テストからみる生まれ期およびスポーツ活動が及ぼす体力差……………	橋 詰 ゆ り……………83 牧 野 ユリアン 長 津 恒 輝 土 屋 亮 太 鈴 木 健 杉 山 康 司
ドライバ操作時の押圧力測定装置の開発と……………	青 木 麟太郎……………93 紅 林 秀 治
高等学校の音楽教師の歌唱指導に関する調査研究……………	澤 田 育 子……………103
【 研 究 ノ ー ト ・ 資 料 】	
大学におけるランニング学習の意義に関する一試論…………… ー3大学の授業実践を手掛かりとしてー	二 見 隆 亮……………112
【 付 録 】	
愛知教育大学大学院・静岡大学大学院教育学研究科 共同教科開発学専攻紀要発行要項……………	123
『教科開発学論集』投稿要領……………	125

愛知教育大学・静岡大学教育学研究科
(後期3年博士課程)
共同教科開発学専攻 2020年度報告書
ROAD 第9号

印刷：令和3年3月31日
発行：国立大学法人愛知教育大学
国立大学法人静岡大学
編集：愛知教育大学・静岡大学教育学研究科
ISSN 2187-7319

愛知教育大学・静岡大学教育学研究科（後期 3 年博士課程）共同教科開発学専攻 2020 年度報告書
[ROAD]

ROAD

第9号 令和3年3月発行